
リリカルガイバー

苦朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルガイバー

【Nコード】

N7431J

【作者名】

苦朗

【あらすじ】

様々な人の想いが重なり世界を形作り、無限の可能性に満ちている。

偶然手に入れたユニットと呼ばれた力に運命を大きく変えられた平凡な高校生、深町晶君と魔法と呼ばれた力を偶然手に入れた平凡な小学三年生である私、高町なのは。

二つの偶然と二つの異なる力・・・そして本来交わるはずの無かった二つの物語。

これは、そんな二つが出会った奇跡のお話。

リリカルガイバー始まります・・・
*現在、StrikerS編です。

0話 未熟な始まり

様々な人の想いが重なり世界を形作り、決して交わらず、無限に広がる。

ここは、そんな世界と世界の狭間にある何者も存在せず、何も無い場所。

みんなは無事だろうか？ 最後の瞬間、遺跡が僕の意味に答えてみんなを何処かへ転移させてくれたけど……

つい最近まではそうだった。

それにしても、僕はどうなってるんだ

何も感じないし、体の感覚がひどくあやふやだ

それは、巨大な繭。

これが、死つてもものなのかな？

虫の物にしては大きすぎ、そのサイズは大人が一人楽に入るほどだった。

でも、生きているならもっと強く……皆を守るぐらい強くならないと

だが、いつまでたっても繭は開くことはなく……

じゃないと、アルカンフェル 奴に勝てない

そして、現れた時と同じように突然姿を消した。

リリカルガイバー 第0話

第97管理外世界 現地呼称『地球』

海鳴市

この都市はどこにでもある地方都市・・・などではなく、自然が豊かに残された海や山があり、温泉ありつと観光事業にはとても恵まれた都市である。

だが、自然が多いということ人の目が届かぬ場所も多くあるということ。

「はッ！」

ガッ

「・・・」

「せいッ！ふん！りゃあああ！！」

「・・・ッ・・・！！・・・ッ！」

夜中、普通の人ならまず立ち居いらぬような暗闇の山中、二人分の息遣いがと金属と金属がぶつかり合う音が響く。

どちらにも真剣を持ち、まるで殺し合うかのような気迫だった。

片方の年若い男の方が果敢に挑み、もう一人の男が一方的に攻められ防戦しているように見える。

だが、実際には年若い男、高町恭矢がもう一人の男、父であり彼の師でもある高町士郎に押されていた。

攻め手を休めれば勝負がすぐに着くそんな状態だった。

そんなやり取りが幾分か過ぎた頃どちらからとも無く刃を引き、場の緊張感も薄れた。

「恭矢、今日はここまでにしよう、母さんたちが待ってる」

「了解と父さん・・・それで今日も勝負する？」

「当たり前だ。ルールはいつもと同じ先に家に着いたほうが勝ち・・・」

「・・・敗者は潔く夕飯のおかず一品を明け渡す。だろ？ 昨日に

続き今日の分も俺がもらうからな。父さん」

「囁るな、今日はお前に煮え湯を飲ませてやる」

そういうや否やいつせいにその場を駆け出す。

乱雑に木々を避けまだ何十キロと先の我が家に向け走っていく。

その速度は、どちらもマラソンのオリンピック選手として出てもおかしくない所か優勝するであろうものだった。

どちらにも、昼間は人気の喫茶店のマスターや普通の大学生をしているのにつである。

「親父、だんだん息あがってきてるじゃないか？」

「はっ・・・お前のほうこそスピードが落ちてるんじゃないのか」

こんな挑発を幾度続けただろうか？

一般人にはまだまだの距離だが二人の足ならばまもなく山中を抜け、街道に出るそんな場所に差し掛かったとき二人の足が急に止め一箇所に集まる。

夜目の利く二人が何か異物を発見したからだった。

「・・・父さん、行きはこんなあった？ もしくは知らない間に道を間違えた？」

「どちらも、NOだ。だが奇妙だな」

二人の足元には、土郎の末娘と同じ年ぐらいの男の子が全裸で寝ているのである。

「靴を履いていないのに、足に傷や砂がついてない」

「それに、周囲に俺たち以外の足跡もない・・・だろ？」

「ああ」

前日に雨が降って足場が泥になっている訳でもないのに二人にはそれが分かるようだった。

「まるで、ここに突然降って来た見たな様子だな・・・」

「・・・それで、どうするの父さん？ 外傷もないようだし警察を呼ぶ？ それとも・・・」

「・・・このまま連れ帰ろうと思うんだが、どう思う？」

「かまわないさ。でも・・・なのはたちに危害を加えるような奴なら・・・」

「ああ、それでいい」

二人の間で何かの取り決めが為された後、士郎のシャツを着せ、恭矢が背負い帰路へと戻ったのだった。

つづく

0話 未熟な始まり（後書き）

初めまして、苦朗といます。

主人公の性格が原作と変わり、拙い文、遅い連載（空いた時間にちまちま書くので）になるかもしれませんが最後までお付き合いしてくれるとうれしいです。

4 / 1 0 修正

未熟なもう一つの姿

木々の生い茂る普段は散歩や近道として使う公園の林道。そこで金髪の少年は落した物を探していた。

数は21、形状は宝石のような石。

今までに見つけられたのは1つだけで、つい先ほど追いかけていた石にも逃げられてしまった。

だが、彼は傷つき疲れ果てすでに追う力を残していない。

だから、呼びかけることにした。

『たすけて下さい。僕の声を』と……

少年と同じ力を持つ誰かにのみ聞こえるように。

リリカルガイバー 1話 未熟なもう一つの姿

SIDE なのは

私は、聖祥大付属小学校 3年生高町なのはっています。

突然ですが、つい2ヶ月ほど前、私に新しいお兄ちゃんが出来ました。

名前は、深町晶君。

お兄ちゃんといつても、同年なので私はそう呼んでいます。

お父さん達が夜稽古で山に行ったときに晶君を発見し、警察に捜索届けを出されていないということで発見者である家で預かることになりました。

ただ、お兄ちゃんとお父さんは最初、晶君と真剣な様子でお話をしていたのを何度か見ました。

時々、すずかちゃんのお姉さんの忍さんも交えているときもあります。

でも、私が近づくと話題を変えてしまうのでく頭を撫でながら

「・・・あれは、僕の今後についてみんなで話してたんだ。なのはちゃんが気にすることじゃないよ」

と言っていました。が、釈然としないものを感じましたが、今では晶君も立派な家族の一員です。

それと私が、3年生に進級すると同時に晶君も学校に通う事になりました。

クラスは同じで家でも学校でも一緒にいられて私はうれしいです。ただ、晶君は最初学校に通う事をお父さんたちに言われたらすごく慌てていて、なぜか「何で今更・・・」とか「どんな罰ゲームだよ・・・」とか顔を真っ赤にして咳いているのを見ました。

そして、転校した日は一日中顔を真っ赤にしていたのを覚えていません。

緊張してたのかな？

また、あらかじめアリスちゃんとすずかちゃんには紹介しておきました。

すずかちゃんとは、すでに知り合いだったみたいですが仲良くなっただけ、アリスちゃんはなぜか晶君のことが気に入らないと言っています。

理由を聞いたら

「同い年なのに私たちを年下の子供みたいに接するんだもの」

とっていました。

その事を言われた晶君はただ苦笑いをしていました。

晶君の方が誕生日が早いからじゃないのかな？

って私は思っただけけど違うのかな？

でも、アリサちゃんはなんだかんだ言っても晶君を避けたりしません、本当によかったです。

そして、晶君がクラスに馴染んできた今日この頃のことです。

あの不思議な夢を見たのは……

内容は、何処かの林の中のイメージが流れて初めて聞く男の子の声で「たすけて」って言っているんです。

その時は、ただの夢だと思っていただけで塾に行く近道をアリサちゃんに案内してもらっていたら、夢に 出てきた景色とそっくりの場所が目の前に現れてそこでケガをしたフェレットを見つけました。獣医さんに見せたら幸いそれほどひどいケガじゃ無いと言っていました。あのコのことがとても気になります。

塾が終わってすぐかちゃんとアリサちゃんそれと私の3人でどこで引き取るか相談したけど、二人のお家には犬さんやネコさんがいっぱいいるのでだめだし、私のお家も食べ物商売だからっというこゝとで纏まりませんでした。

二人と別れた後も一人でうんうん悩んでいたらお家の前にいつの間にか着いています。

うんうんどうしたら……そうだッ 晶君にも相談してみよ

「おかーさん、ただいま。晶君はあ？」

「おかえり、なのは。晶君ならいつものランニングよ、時間的にそろそろ「ただいまハア〜ハア〜帰りましたハア〜ハア〜ハア〜」あら、ちょうど来たみたいよ」

「ありがと〜、お母さん」

私は、机の上に用意されてたお水とタオルを持って晶君のお出向かいに行きました。

そこでは、扉の開いた玄関の前で汗をグツシヨリ掻いてへたり込んでいた姿が見えます。

「はい、タオルとお水だよ、晶君」

「ハア〜ハア〜ハア〜ありがとうございます。んぐ…んぐ…」

晶君は、コップのお水を一気に飲み干して息を整え始めます。

いつも、どうしてこんなに必死に走ってるんだろう？

ランニングから帰った晶君は、いつもバテバテでしばらく立ち上がるのが困難になるほです。

そんな晶君をお出迎えするのが最近私の習慣になりました。

「フ〜…いつもありがとね、なのはちゃん」

「どういたしましてだよ…」

「…何か悩み事？なのはちゃん」

「え？ どうしてわかったの？」

「いや、なんとなくそんな顔してたから…僕でよければ相談に乗るけど？」

「ありがと…あのね今日塾に行く途中で、アリサちゃんたちと公園を通ってたらケガしたフェレットさんを見つけたの」

「へえー、この辺りに野生でいるわけもないし誰かのペットが逃げ出したのかな？」

「たぶんそうだと思うの、首輪の変わりにきれいな石のついたペンダントをつけてたから。それでね、明日獣医さんの所から引き取らなきゃいけないんだけど、アリサちゃんのお家は犬さんを飼ってるしすずかちゃんのお家は…」

「ああ、猫だらけだって前言ってたね彼女、それでどうしようって？」

「うん、家は食べ物商売だからダメだし、どうしようって……」
「まあ、居候の僕が大きいことと言えることじゃないけど……」

そう一言、言ってから晶君は自分の考えを口にします。

そんなこと気にしなくていいと思うんだけどな、お母さんもこのまま正式に家に迎えようかなんて言ってたし……

「……飲食店を経営してるって言っても店舗と住居を兼用してるわけじゃないし、なのはちゃんが一生懸命お願いすれば土郎さん達のことだから許可してくれると思うけど？」

「そうかなあ？」

「許可が下りたら自分で世話するつもりなんでしょ、なのはちゃん？それなら、僕も手伝うからって一緒をお願いしようか？」

「本当？ ありがとう、晶君！」

私は、うれしくて思わず晶君に抱きついてしまいました。
今思うと、ちょっと恥ずかしいです。

「コラコラ、まだお礼を言うのは早いでしょ？」

「あ、そうだね、だったら、今すぐ「待った」え？」

「土郎さんたちに言う前に、味方を増やそう」

「味方って？」

「桃子さんだよ。あの人を味方に引き込めばほぼ確実になるよ」

「そっかお父さん、お母さんに弱いから」

「心強い味方になるでしょ？」

「うん」

「じゃ少し待っていてくれる？部屋に行って着替えてくるから」

この後、晶君と一緒にお母さんを味方にすることに成功して挑んだ決戦《夕飯》に見事勝利しました。

そして、今そのことをアリサちゃんたちにメールしています。

「　　つと言っわけで家で預かる事ができる様になりました。明日、学校帰りに4人で迎えに行こうね？　な・の・ほつと送信！」

本当に、晶君に相談してよかった。私だけだったら、うまく説得『聞こえますか？』えっ？

S I D E 晶

『　　助け　　ださい！危険が、危　　こまで……………』

……………今のノイズ交じりの声はいつたい？

ガラガラ

ん？今の音は、外戸か？

僕は、窓から外を覗き見ると家の前を走り去る小さな後姿を見つけた。

あれは……………なのはちゃん？どうして、こんな時間に……………ッまさかさっきの音が聞こえたのか！？

ノイズ交じりの声が聞こえてすぐのことで偶然にしてはタイミングが良すぎてそう勘繰ってしまう。

そこで、なのはちゃんを追いかけるべく僕も急いで着替えて出かける。

途中、玄関の前になのはちゃんを追おとしている恭也さんと土郎さんがいたが、僕が追いかけると言い飛び出していった。

「くっそ！どこに行っただんだ！？」

だが、そのわずかな遅れがなのはちゃんの姿を見失わせるには十分だった。

どうする？あの声は、危険がつか言ってたし、あの子が行きそうな場所……そうだ、動物病院！

僕は、夕方彼女と話していたフェレットのことを思い出し走りだす。

他に思いつく所の無かった僕は、間違っていたらどうしようと思いながらも縋る様な思いだった。

途中、周りから犬や猫の声はともかく、遠くから聞こえる車の音も消え人の気配も無くなりまるでゴーストタウンの様になっていたり、空に向かって桃色の光が上っていたりつと不安が大きくなる要素がどん どん増えていったが、それは危惧に終わったようだ。

服は、家を出ていた時と変わっていたが元気な姿のなのはちゃんを見つけたからである。

でも、僕は彼女の今置かれている状況に気づいていなかった。

「おい、なのはちゃん」

「晶君！？」

「って危ない！」

「え？ きゃー！？」

彼女は、近づいてくる僕に驚きこちらに気を向けたのがいけなかった。

上空から襲い掛かろうとする何かに反応するのが遅れてしまったからである。

僕は、走りながら秘密にしていたことも忘れあの名を呼んでいた。

僕の運命を大きく変え……

「ガ」

争いの日々に踏み込むことになった原因

「イ」

でも、身近な人たちを何度も危機から救った力の名を！

「バーツ！」

僕は、勢いそのままに黒い影のような襲撃者にタツクルして弾き飛ばす。

「……」

「え、何？ どういうこと？ 晶君も変身って？」

「……無事みたいで良かったよ」

晶君『も』？ どういうことだ？

なのはちゃんの言葉に可笑しな部分があったけど、襲撃者の方を向いたままそう返す。

彼女は驚いた様子だが、それは仕方が無いことだろう。

何せ今の僕は、身長が土郎さんや恭也さんと同じぐらいになりその全身を青みがかった緑色の強靱な外殻に覆われているのだから。

「とにかく、なのはちゃんは僕がアレを如何にかするまで物陰に隠れていてッ」

「ちよ、晶君！？」

僕は、なのはちゃんにそれだけ言つとアスファルトを砕きながら
一気に立ち上がるうとする襲撃者いや獣化兵もどきに近づぐ。^{ソアノイド}

さっきのタツクルのとき、まるでゼリーやこんにやくみたいな感触
だった・・・だったら！

僕は、肘の突起が1メートルほどに伸張し形成された高周波ソー
ドで斬りつける、だが・・・

ザンツ

「グオオオオオオ！？」

「・・・クツ、なんて再生が早い！」

「ゴオオオオオオ！」

ドゴンツ

「チイ！」

斬撃で出来た傷口は、瞬く間に再生し反撃をしてくる。

僕は、それを避けながらヘッドセンサーから得た情報も織り込み
ながら次の手を考えていた。

打撃も斬撃もダメ・・・そうなるとヘッドビームや重圧砲も効果は薄
いだろうし・・・待てよ？アレならいけるかもツ^{プレッシャーカノン}

僕は、今までの戦闘の中で使えそうな攻撃を見つけ出す。

かつて自らを液化化して大地と融合して攻撃してきた損種実験体^{ロストタンパーズ}
を倒したときに使った攻撃を・・・

相変わらず続く怪物の体当たりを避け、地面の当たった瞬間僕は
行動を開始する。

「ゴオオオオオオ！」

た。

「すみません、僕の話聞いてください！」

「あ、ああ」

「……………」

僕は、真剣な様子だったので驚きながらもフェレットに耳を傾けることにする。

なのはちゃんは、それをただ黙って見つめていた。

つづく

未熟なもう一つの姿（後書き）

散々悩んだ挙これになりました

4 / 1 0 修正

未熟な葛藤

『ガイバー』

人類の創造主たる降臨者^{ウリナス}たちの言葉で規格外品という意味の言葉。接触した生物を融合・強化する「強殖生物」とそれを制御する「^{コントロールメタル}制御装置」で構成されている強殖装甲を装備（以後殖装）した人間の総称。

圧倒的な戦闘能力を持ち降臨者の精神支配を受けつけない事が発覚したことで降臨者たちにとっては、そうなる因子を持つ人類全体を指す。

さまざまな武装を内蔵し、殖装する人間によってその性能や姿形が変わり、深町晶（ガイバー？）の様に装甲の厚い防御重視の青いガイバーもいれば、巻島顎人（ガイバー？）のように攻撃重視の黒いガイバーもいる。

（瀬川哲郎の手記より）

リリカルガイバー 2話 未熟な葛藤

SIDE なのは

その戦闘は、まさに圧倒的でした。

私は、ただ逃げ回ることしか出来なかったのに晶君はあつという間にあの怪獣を倒してしまいます。

……いえ、『殺してしまいました』、何のためらいもなく。

正直、気を抜くとへたり込みそうです。

怪獣がいた場所から宝石を拾っている晶君に近づき、彼とフェレットさんが会話している今もそれは変わりません。

ダメ……

「なのはちゃん」

……どうしよう

「なのはちゃんツ!!」

「え?ツ……」

「そっか、そう……だよ、普通は怖いよね?こんな姿や力を持った僕の事……ごめんね」

「あ」

強い口調で晶君に呼ばれた時、まだ心の準備が出来てなくて心配そうに手を差し出してくれた晶君を思わず体が避けてしまう。

その様子の私を見て、マスクで顔は見えなかったけど声が悲しそうでした。

「でも、ちょっとだけ我慢してくれないかな?」
え?

「そしたら、君の前に二度と姿を見せないから……」
そんなの……ヤダよ……

「もちろん、あの家からも出て行くよ」
行っちゃダメエ!

「だから、少し力「待って!」え?」

「フェレットさんが言うにはさつき怪獣は生き物じゃないらしいけどそれでも晶君は何のためらいも無く殺しちゃった……」

「……」

「正直に言うとな、あの時の晶君は怖かったよ?」
「だったら」でも!……でもね、それより怖かったのは私の知ってる晶君が、「あ

りがとう」って笑いながら言ってくれたり、やさしく頭を撫でて褒めてくれたりしたあの晶君が消えちゃったみたいで怖かったの！まだ出会ってそんなに経ってないから全部知ってるって訳じゃないけどそう思ったの・・・だから、これだけは教えて、そうしたら私は怖くなくなるから」

「・・・普通はさ。怖がって拒絶すると思うんだ・・・たぶん昔の僕もそうしたと思う。だからありがとう、そんなふうには、父さんたちみたいに思ってくれて。それで、何を答えればいいの？」

「あのね、今の晶君は私の知ってる晶君と何も変わってないよね？」「僕は僕だよ。この姿だと多少高揚感が高まっているけど、なのはちやんの知ってる僕と変わったつもりはないよ」

「うん！・・・でも、もう家を出てくとか言っちゃヤダよ？でないと私泣いちゃうから」

「あー、それはまずいね。僕が士郎さんたちに殺されそうだし」

「それは、言いつぎだよお」

「・・・冗談で済めばいいけど」

「え？」

「あの、そろそろこっちに戻ってほしいんですけど・・・」

「ッそうだった！」

「どうしたの、晶君？」

そんなとき、フェレットさんが申し訳なさそうに話しかけてきました。

ただ、その前に晶君が小さい声で何かを言っていた様な気がします。

そしたら、何かを思い出したように晶君は緊張を含んだ声を出して話し始めたの。

「なのはちゃん、このフェレット君からこの石の暴走を止める方法を教えてもらってたって本当？」

「え、でも晶君が如何にかしたんじゃないの？」

「いや、僕が出来たのは一時的に元の姿に戻しただけで時間が経てばまた暴走するらしいんだ」

「ふえーじゃあ、どうすれば・・・」

「そこで、さっきの話に戻ってなのはちゃんに止めてほしいんだ」

「え、だ、だってさっきの呪文まるで、アニメの魔法少女のみたいだったよ」

「どうなのそれは？」

「それが、さっき彼女の心に浮かんだ言葉なら間違いないです」

「らしいよ、なのはちゃん。お願いできるかな」

正直、自信ないけどまたあんなのが暴れちゃったりはまずいし・・・

「・・・うん、やってみるよ。でも、後で晶君のこともって教えて

ね？」

「うん」

私は、頬を叩いて気合を入れてから杖を握り締めます。

「いくよー！」

【Sealing mode】

「リリカル・・・マジカル！」

【Set up】

「封印すべき忌わしき器の名はジュエルシード！」

「ジュエルシードシリアル21・・・」

【Standby ready】

「封印！」

【Sealing】

見た目には、宝石の表面に????って浮かび上がった以外何も変化はありませんでした。

でも、あの宝石から感じたいやな感じは消えています。

そして、ジュエルシードは杖の宝石に独りでに吸い込まれていき私の服と杖は元の状態に戻っていました。

辺りもいつの間にか車の音が遠くから聞こえてきます。

「……………えーっと、これで終わり？」

「はい、ジュエルシードは確かに封印されまし……た」
ドサツ

「えっ大丈夫!？」

フレットさんはそれだけ言うと倒れてしまいました。

それを晶君が私より先に拾い上げて容態を教えてくださいます。

「大丈夫だよ……気を失っただけのようだから」

「よかつた……でもお」

「……………確かにこのままここにいるのはまずいね……………ところでなのはちゃんは、ジエットコースターとかって大丈夫？」

「え? うん別に苦手じゃないけど何で今そんな事聞くの?」

「……………こつという訳だからッ」

「ふええええええ!」

晶君がそういうと私を抱えてお空の上になりました。

カエルやバツタみたいにピョンピョンと屋根や電信棒の上を飛んでいます。

「あゝ、なるべく声は出さないでほしいんだけど」

「むり〜っ!」

「じゃあ、目を瞑って何も見ない様にして」

「(コクコク)」

「……………とりあえず、人がいないところまで行くからね」

「・・・ツ・・・ツ・・・」

私はその指示に従い目を瞑り手近な物、晶君の首にしがみ付いて重力に引かれる感じと声を我慢していきました。

S I D E ユーノ

僕が目を覚ましたら、人気のない何処かの公園のベンチに寝かされていました。

どうやら安心して気を失ってたみたいです。

そして、今僕の目の前では起こっている事を簡潔に言います。

変身してジュエルシードを倒したシヨウウって呼ばれてた男の子がなのはって呼ばれてた女の子の前で正座させられて彼女にお説教を受けています。

「怖かった」とか「ヒドイ！」とか「いきなりあんなこととして！」とか聞こえてきました。

推測するに彼が何かをして彼女を怒らせたみたいで、それに対して彼も反省しているようです。

僕は、説教が終わった頃を見計らって話しかけ自己紹介し晶（二人には呼び捨てでいいと言われた）に促されて簡単にだけ（明日改めて詳しく話すと付け加えて）事情を説明しました。

そして、僕も気になつた魔力もなしにすごい力を発揮していた晶が説明してくれました。

彼は平行世界から来た次元漂流者だということ、あの力は一種の生体強化装甲であると説明してくれます。

ただ、晶が力を手にいれたときの事を聞いたのはが誤解してしまい。

「ふえええええええ！ユ、ユーノ君ツじゃあ私も悪い人たちに追わ

れるようになるの!？」

「い、いえ大丈夫です、時空管理局は悪い組織ではないですし罪の無い人を追うこともありません」

「そうなんだ、よかった」

なんて場面もありました。

ただ、時空管理局の名前を聞いたときの晶が苦い物を口にしたような顔をしたのがやけに記憶に残っています。

でも、まだこの続きがありました。

「さて、なのはちゃん。土郎さんたちが心配してるから家に帰ろう・・・と言いたい所だけど、少し言いたい事がある」

「え？」

パンツ

なのはは、何が起こったかのわからない様子で叩かれた頬を押さえています。

「・・・君は、自分がどれだけ軽率な事をしたかわかっているのかい？あの時のユーノの念話には、危険がって言ってただろ？」

「・・・」

「君が彼の声を聞いて助けたいと思うのは良い事だと思うよ？でも、だからって君が危険に飛び込むのはおかしいだろ？その時君はまだ何の力も無い子供だったんだから」

「・・・ふえ・・・うえええーんっ」

巻き込んだ張本人の僕としては、申し訳ないばかりです。

「・・・叩いてごめんね、なのはちゃん・・・でも、心配したんだよ？」

「ご、ごめん．．．な．さい．．．心配かけて．．．」

「いいよ、無事だったんだから。まあ、僕が来たときのことは、声をかけたのが原因だったけど、もう危険な事に勝手に飛び込むのはやめてよ？」

「うん．．．．．ありがとうございます、注意してくれて。次からはなるべく気を付けるね」

「次が無い事を祈るばかりだけど．．．．．さ、今度は本当に帰ろう。士郎さんや恭也さんたちに怒られに．．．」

「お父さんたち、私が出たの気づいてたの!？」

「僕の場合、ユーノの念話が少しだけ聞こえた時に外戸の開閉の音が聞こえて君の姿を見つけたけど、僕が気づけたぐらいなもの、あの人たちが気づかないわけ無いだろ？僕が家を飛び出す時、君を追いかけようとしてたのを「僕が追いかけます」って言って止めたんだから」

「ふえええ．．．．．もしかして、すごく怒ってた？」

「さあ？ でも、雷は落ちるだろうね．．．間違いない」

「どうしようお!？」

「それと、魔法の事を話すかどうかは、なのはちゃんに任せるよ」

なのはの絶叫が轟く中晶は、そう呟いています。

そして、急いでお家に帰った二人に待っていたのは、案の定なのはのお父さんたちから一発雷が落ちましたがすぐに許してもらえませんでした、よかったです。

ただ、なのはは魔法の事を結局、何も言いませんでした。

その後、なのはは自分の部屋に戻って就寝しましたが、僕は現在隣接された道場の真ん中で晶、恭也さん、士郎さんに囲まれてなのはに明日改めて言うと言っていた説明をしています。

「．．．．．なるほど、ユーノ君だったね、君のやったことは中々できる事ではない。偉い事だと思う」

「ありがとうございます」

「だが、無謀でもある。一人でできることなんてたかが知れてる。現になのはと晶君を巻き込む事になったわけだし」

「……すみません」

僕は、土郎さんの言葉に何も言い返せずただ謝る事しかできなかった。

「……それで、そのジュエルシールド相手には俺たちじゃ本当に役に立たないのか？」

「今回に限って言えばそうです。斬撃も打撃も効果が認められない相手に剣士である恭也さんたちでは……それに相手はコンクリートの壁を砕くほどの力がありました。ガイバーに守られた僕ならともかく、いくら鍛えるいっても生身では怪我すめばいいですが最悪死にます」

「そうか……ユーノ、後の相手も同じようなモノばかりなのか？」

「わかりません……その可能性もありますし、現地生物を取り込んだり、天候を操作したりと色々と考えられますから」

「つまり、現状分かっている範囲で対向できるのはなのは、次点で晶君そして力が回復したらそこにユーノ君も加わると……」

「父さん、なのはの奴がこの話を聞いたらおそらくユーノを手伝おうとするぞ」

「確かに、なのはちゃんはその気になつてたみたいです」

「そのぐらいわかってる……親としては賛成できないがこのまま放置する事もできる問題でないし……」

「……申し訳ありません、僕があんな物を見つけなければ……」

その時の僕の胸には後悔の念でいっぱいだったけど、晶がそんな僕を励ましてくれたんだ。

「ユーノ君、話を聞く限り君に責任はないさ。お前は、自分に任せられた仕事を果たしたただけだ。責任があるとしたら事故の当事者たちだろ？加害者がいたのかわからないけど」

「でも・・・」

「でもじゃないだろ。君はそれでも責任を感じてどうにかしようとしてここに来たんだから・・・まあ、やり方を間違えてしまったかもしれないけどさ」

「・・・晶、ありがとう・・・それと、僕の事はユーノって呼んでくれない？」

「いいの？」

「うん」

何も言わず晶は僕の頭を撫でてくれた後、まだ相談しあってる土郎さんたちに提案を出しました。

「・・・しかし、あと20個もあるのかどうしたものか・・・」

「・・・土郎さん、恭也さんだったらこんなのは、どうですか？」

・
・
・
・

「・・・では、そういうことで。だが、ユーノ君と晶君は、なのはに私たちが魔法の事を知っている事を漏らさないように。自分から打ち明けてもらいたいからね」

「はい」

「では、もう遅い二人はもう寝なさい」

士郎さんのその言葉でこの場は解散となりました。
でも、晶と二人で道場を出て行くとしたのを恭也さんが呼び止めます。

「……ユーノ、ちょっと待て」

「なんですか？」

「一つ言っておくことがある。なのはに手を出すなよ？もし出したら……」

「……出したら？（ゴクツ）」

「その日は、おいしいフェレット鍋になるかもなあ。材料は、活きのいい奴が身近にいるからな」

「ヒイツ了解です!!」

その時の恭也さんの迫力と表情、とても冗談を言ってるものではないかもしれません。

晶も似たような事を最初に言われたと言っています。

「……今夜、夢に出てこないといいけど……」

それと、晶の部屋で僕は生活する事となりました。

さすがに、こんな姿してるけど女の子と同じ部屋で寝泊りするの

……ね。それに……

僕もまだ死にたくありませんから。

寝床は、なのはが寝る前に用意しておいてくれたようでそれを運び込みました。

ふあああ、そろそろ寝ないと。明日はなのはにいろいろ話さなきゃ

いけないし……

「お休み……晶」

「ああお休み、ユーノ」

そして、僕は夢の中へと落ちていきませんが、疲労のため深い眠りに落ちていた僕たちは知る由もありませんでした。

この夜、すぐ近くでジュエルシードが発動した事に……
でも、僕たちがその事を知るのはもう少し先の事です。

つづく

未熟な葛藤（後書き）

4 / 10 修正

未熟な出会い

SIDE 士郎

喫茶翠屋。

自慢ではないが洋菓子類の販売も行っており、店の雰囲気や味には定評がある人気店だ。

つまり、自然と人が集まるこの店は、情報収集には打ってつけ場所なのである。

そして、ここにもそれを行っていた男一人……つまり私だ。

「ありがとうございます！」

チリン チリン

「ふう〜……ちょっとすまないが奥に行つて来るよ」

「はい、わかりました、店長」

俺は、客を送り出すと近くのバイトの店員に一言告げて厨房に入つていった。

さてと、さっきのお客から聞いた情報を晶に送るか……

理由は簡単だ。

昨日の晶の案で私たちは、なのには秘密で裏方、ジュエルシードらしき石の目撃情報を客からそれとなく聞き出したからである。

……学校が終わるまで、あと1時間30分ぐらいか……それまで発動しなければいいが……

送信終了の表示が出ると携帯を閉じ、そんな事を思いながら私は

店に戻っていった。

リリカルガイバー 3話 未熟な出会い

SIDE 晶

さつき土郎さんからメールが届いた。

昨日の今日だったけど、見てみると予想通りジュエルシードの情報である。

学校が終わって、ユーノから詳しい事情を聞いたのはちゃんし
だいか。

もし、なのはちゃんが嫌がっても仕方がないだろう、彼女は元々
荒事が好きではないのだから。

その事についてもユーノにあらかじめ言っておいた。

もし、ユーノの回復が間に合わない時は、破壊すると……

だが、できることならそれはしたくはなかった。

ジュエルシードのエネルギーが四方にあふれでて何か起こるかも
しれないという事もあるが……

……ソニックバスターや高周波ソードで可能ならいいけど、もし
ダメだった場合、胸部粒子砲×カスマツシャーを使うしかないか……でも、スマ
ツシャーは、目立つからこの世界にもクロノス、もしくはそれに類
する組織があるならこの街に調査のために現れかねない。そしたら・

……

僕の脳裏には、最悪の場合の光景が思い出されていた。
竹代町脱出のさいに起こった何も知らない一般人が獣化して襲っ
てきた光景が……

この街で、あれをもう一度起こしたくはないけど、そうすると今度
はなのはちゃんを巻き込んで行動しなければいけないし……

僕は悩み続ける。

でも、この悩みに答えが無いのもわかっていった。

僕になのはちゃんを強制的に非日常の世界に引き摺り込むつもり
が無いのだから。

僕みたいな思いをなのはちゃんにはしてほしくないな

それでも、僕はその日、学校が終わり彼女の答えを聞くまで悩む
事をやめなかった。

例え彼女の答えに想像がついたとしても……

S I D E なのは

学校が終わりみんなで帰ろうとしたら、晶君が私を人の居ない所
に引っ張っていきます。

訳を話してくれないので何がなんだかわかりません。

どうしたんだろ？

階段の陰に隠れると私にジュエルシード集めの事を尋ねてきまし
た。

「・・・時間が無いから手短に言うけど、なのはちゃんはユーノを手伝うの?」

「うん、そのつもりだよ? 晶君に昨日ああ言われたけど、私に助けをあげられる力があって困ってる人がいるなら迷っちゃいけないって・・・これお父さんの教えだよ」

「そう・・・意味は変わらないんだね? 危険かも知れないのに・・・」

「うん、ごめんね晶君。また心配かけちゃうね」
「・・・」

私の答えに晶君は、いい顔をやっぱりしていません。

昨日、あんなに心配かけて申し訳ないかったけど、私の意思は変わりませんでした。

「・・・はぁー・・・わかった、だったらなのはちゃんの事は僕が守るよ」

「え?(カァー)」

「もともと、僕はユーノを手伝うつもりだったけどこうなったら・・・ってどうしたの? 顔を赤くして」

「う、うんうん、何でもないよ」

「そう? とりあえず君は僕が守るからね」

「はい・・・」

晶君が、真剣な顔で私を守るって言うてくれた瞬間なぜだか私の胸がドキドキして、顔が熱くなっちゃたんです。

ふえええええ、どうしたの私!? 晶君の顔、正面から見えないよお。でも、晶君の真剣な顔って、何か凛々しいな・・・

そんな事を考えていた私は、晶君に顔を見せない様に「はい……」
って答える事しかできませんでした。
そして、私が落ちついてきた頃の事です。

「ユーノに家から向けだせるようなら、今すぐ山の上の神社に向かう様に伝えて、僕たちもすぐ向かうから」

「え？どうして？」

「え〜と……友達、そう友達が言ってたんだ！あの神社にジュエルシードみたいなきれいな石を見たって、闇雲に探すよりとりあえずそこに行ってみよう思ったんだ！」

「そうなんだ、じゃあ急いで伝えるね」

「うん、もしかしたら発動前に封印できるかもしれないから」

晶君は、なぜか自分に言い聞かせるように一気にそうまくし立てます。

私はどうしたんだろ？って思ったけど、念話の出来ない晶君に変わってユーノ君に伝えました。

そしたら、ユーノ君も急いで向かうって言っています。

それと、念話を音飛びとノイズ交じりの聞き取りしか出来ない晶君のために、近い内にユーノ君がどうにかすると言っていました。

晶君だけ念話出来ないってさびしいもんね

私たちは急いで教室に戻るとアリサちゃんたちが待っていてくれましたが、晶君が二人で寄る所があるからって二人には先に帰ってもらいました。

途中、ユーノ君とも合流できて私たちは今、境内にいます。

「確かに、まだ発動してないようだけどこの広さを探すのは……」
「うん、ここに来たらジュエルシードがここにあるってのは感じた

「ただけど正確な場所まではわからないよお」

「だったら僕に任せて！」

「え？」

「ガイバーっ！」

「にや、どうしたの晶君！？ガイバーになったりして」

「それはね、ガイバーの頭部に二つの瘤みたいのがあるでしょ？これが、センサーになってて辺りの事を詳しく調べられるんだ、だから……こつちだよ」

ふえー、ガイバーってそんな力もあるんだあ

私たちは、晶君に案内されるままついていくと本殿の下辺りにジュエルシードがありました。

しかもまだ発動していない状態です。

でも、突然晶君が声を上げました。

「つまずい、人がもうすぐここに来るよ！」

「それって本当、晶君？」

「うん、ヘッドセンサーに反応があつたんだ。あと1、2分くらいで着くと思うよ」

「なのは、早くレイジングハートを起動させて！」

「えっと、起動って何だっけ？」

「えッ？」

私の答えに二人とも固まっちゃいます。

気を取り直したユーノ君が私の肩に上ってきて出だしの呪文を言ってくれますが……

「我、使命を受けしから始まる起動パスワードだよ！」

「え~~~~~！あんな長いの覚えてないよ〜」

「もう時間が無いよ！とりあえず僕は殖装を解くからね」

晶君が、警告してくれますが私とユーノ君はあわあわしています。その時、私の手からピンクの光があふれてきました。

【Standby ready】

「レイジングハート？」

【Setup】

すると私の手には、杖の姿になったレイジングハートがありました。

ユーノ君は、このことに驚いているようですが時間が無い今、かまっていられません。

「レイジングハート、お願いね」

【All right】

私の声に応えてくれたレイジングハートは、封印形態になってくれました。

そして、そのまま未発動のジュエルシードに向けます。

【Standby ready】

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル16・・・封印！」

【Sealing】

そして、封印したジュエルシードを取り込んだレイジングハートが元の宝石に戻ったすぐあとに晶君が言ってたいたように女の人が犬を連れて境内にやってきました。

私たちは、そそくさとあいさつだけしてその場を後にします。

後に残ったのは、晶君が変身した時にできた地面の窪みと散歩の

お姉さんたちだけでした。

よかった〜、間に合って

もしあの人が境内に着く前に終わったことと未発動のまま封印できた事。

この二重の意味でそう思いました。

Side out

晶たちが帰宅に頃、商店街の一角に異質な一団が歩いていた。

その構成は、青毛の大型犬？を先頭に車椅子の少女と籠を持った気の強そうな少女、そして車椅子を押すこの一団で年長と思われる女性と最後尾の大学生ぐらいの凛々しい女性である。

それだけだったら、姉妹がペットの散歩がてらに買い物に来たと思うのだが、その雰囲気がこの場では異質だった。

車椅子の少女を要人か何かのように警護するSPに見えているからである。

「せやから、ただの買出しや言つたやろ？そんなに警戒せんでも・・・」

「それは、出来ません。我らは主を守る騎士。いつ如何なる時も、おそばに御使えし御身を」

「それがアカン言うとするんや。この世界は、みんなが今までいた所とは、違つてそんなに危ない。せやから、みんなにはみんなの時間を過ごしてほしい言つたやろ？」

「だったら、問題ないですよ、はやてちゃん。私たちがこうしていたいんですから、ねっシグナム？」

「ああそうだな、シヤマル」

「そうだぜ、はやて。私ははやてと一緒にいて楽しんだ」

「ヴィータ」

「(コク)」

「ザフィーラまで……」

大型犬も、振り返って言葉がわかるように車椅子の少女、はやてに頷きます。

「はぁぁー……まあこっちでの生活になれるまでじゃあないか……」

全員が、同じように返答したのを見たはやては、あきらめの言葉を言っていますが、内心ではうれしくてしょうがなかった。

初めて出来た家族がいつも一緒に居てくれると言ってくれたのだから……

顔が笑顔になるのを抑えられぬまま前を見ると見知った姿が彼女の目に入ってきた。

「あつ晶君や」

「知り合いですか、はやてちゃん？」

「そうや、私の初めての友達や。ちよつと話してつてもええか？」

「いいですよ、ねっみんな」

シヤマルが他の面々に問うと異論は出ずそちらに移動を開始した。封印帰りの晶もはやてに気づいたようで手を振っている。

「やあ、はやてちゃん。こんにちは……ところでそちらの人たちは？」

「ああ、こつちからザフィーラ、シヤマル、シグナムそして、この子がヴィータや。先日から一緒に暮らすようになった親戚の人なんや」
「そうなんだ、よかったね・・・えっと、僕は深町晶って言います。一応、はやてちゃんとは、友人をしています」

それに対し、それぞれが目礼などで返答していた。

「・・・それで、今日はみんなで夕飯の買出し？」

「せやで、その帰りや・・・そういう晶君は、デートの帰りなんか？」

「ち、違うよ！ほら前に言ったことあるでしょ？ 今お世話になってる家のなのはちゃん」

「ああ、その子がそうなんや」

「・・・晶君、この子誰なのかな？」

今まで置いてきぼりだったなのはが、晶の袖を引いて尋ねた。

「あ、この子は、八神はやてちゃん。」

「八神はやてです。よろしゅうな。晶君とは図書館で知りあったんや」

「あ、私、高町なのはっていいいます。友達はみんなは、なのはって呼ぶよ」

「じゃあ、なのはちゃんって呼んでええ？」

「うん！」

こうして、はやては新しい友達を得ることとなる。

だが、この出会が元で後々にあんな事になるとは、このとき誰も考えもしていなかった。

UJU

未熟な出会い（後書き）

4 / 10 修正

未熟な休日 午前

SIDE ユーノ

やっぱり、夜の学校って何か不気味だよ。

でも、晶がクラスの子から聞いた夜にだけ現れる噂の怪物がジュエルシードかもしれないし……

実際に塾の帰りに近くを通ったらが何かの鳴き声が学校から聞こえたって子もいたわけだし。

ただ、夜だけにしか現れないってどうしてなんだろう？

「キイイイー！」

「気をつけて二人とも！こいつは、現地生物を取り込んでるよ」

「ああユーノ、わかった。でもなるほどね……これなら夜にしか現れなかったのにも納得ができるよ」

「そうだね……現地生物ってコウモリみたいだからね」

なのはたちは、取り込んだ現地生物に心当たりがあるみたいだ。

「じゃあ、前に言ったとおり僕が大人しくさせるからなのはちゃんは、後ろでいつでも封印できるようにしてて」

「うん。晶君、気をつけてね」

「わかってるよ……ユーノは、なのはちゃんをいざって時はサポートしてあげて」

「わかった、がんばって晶」

「ああ」

晶は、フワツて予備動作なし宙に浮かび始めて上空を旋回しているジュエルシードに接近していく。

グラビティ・コントロール
腰の重力制御球の事を聞いてはいたけど実際目の前でされるとやっぱり驚くよ

ーーーーーッ

「な、なにこれえ！？頭が痛いよ、ユーノ君」

「な、なのはもなの！？でも、突然何でこんな事が・・・」

これじゃ、立ってるのもつらいよ。

なのはも僕と同じみたいに屈んで耳を押さえてるよ・・・ってそういえば晶の方には、影響してないかな？

リリカルガイバー 4話 未熟な休日 午前

SIDE 晶

あまり経験の無い空中戦だからうまく出来ればいいけど

ーーーーーッ

「これって、超音波？・・・あいつか！」

ヘッドセンサーが教えてくれた発生源は、あのコウモリの怪物。

ジュエルシードの力で本来持ってた能力が強化されたみたいだけど・

・

「クツ・・・これじゃあガイバーの超感覚が逆に仇に・・・」

ヘッドビームで攻撃をしてもこの超音波攻撃の弊害で狙いがうま

く定まらずたやすく避けられてしまつ。

当たらないっ

「キイキイツキイー」

奴は、まるであざ笑うかのように鳴くとさらに超音波を強めてきた。

「……………ツッ!!」

「ぐあつ……さらに強くッ」

このままじゃ………ッ今度は、直接攻撃か!?

超音波を発しながら足の爪で僕に向け襲い掛かってくる。

でも、慢性的に続くこの頭痛で僕はまともな回避ができず左肩からわき腹までをすれ違いざまにくらってしまつ。

幸いな事に装甲を破るだけの力は無いみたいだけど……

どうすれば……これじゃあいい的だ……待てよ?超音波も言ってみれば振動だよな。ならソニックバスターを応用するばどうにかなるかも

奴は、相変わらず執拗に攻撃を仕掛けてくるが装甲に阻まれて有効打を与えられないことに苛立ったようだ。

「ギイイ!」

「……………」

奴は、その鋭く大きな牙を剥きさらに上空から勢いを付けて襲い掛かるうとしている。

今度は、僕を噛み砕くつもりのようにだ。

僕は、徐々に近づいてくるのを見ながらも動かさずバイブレーション・グローウ口部金属球のチ

ューニングを急ぐ。

ヘッドビームを連射して少しでも、接触の時間を遅らせた。

「キイー」

「……」

やはり、全てを避けられたが目論み道理、時間は稼げた！ これで・

僕は、さっそく奴の超音波と逆位相の振動波を発射した。

「……………」

「……………」

ガギツ

「キイ!？」

「ふうー、やっと捕まえた。後は……」

大口を開けて突っ込んできた奴の攻撃を僕は今右腕で受け逃げられないように左腕では羽を握り締めている。

奴の方は、啞えさせた腕をガジガジと噛り付いており、羽をさらに強く握ると悲痛な鳴き声を上げていた。

もちろん、装甲に守られた僕の右腕は傷一つついていない。

「ギイーギイー!」

「……うん、このまま地上に落とすか」

飛ぶための重力制御を止めると僕たちは、地球の重力に引かれてそのまま自由落下を始めた。

後は、地面に当たる少し前に手を離して急制動を掛けて一発殴って気絶させれば

僕は、どんどん近づいてくる地面を見つめながらそんな事を考えていた。

SIDE なのは

うー、晶君が飛んでっいたら私たち突然、原因不明の頭痛に悩まされるようになりました。

しかも、どんどんひどくなって行って立ってるのも辛くなってきたんです。

これってもしかして、あのコウモリの怪獣が何かしてるのかなって思ったんだけど、私にできることは何もありません。

でも、頭痛が治まったと思ったら怪獣の悲鳴みたいな鳴き声が聞こえてきます。

『ユーノ、なのはちゃん。今からこいつを抑えたままその近くに落ちていくから一応そこから離れてて』

「え？」

「なのは、早く！」

「うん」

晶君からの念話に私は、すぐに反応できなかつたけどユーノ君が私を呼んでくれたおかげで動き出す事ができました。

ある程度離れると私たちはそろって上を仰ぎ見ると晶君たちが揉み合いながら落ちてきました。

ドサッ

「キィ」

ドガッ

「ギイ!？」

「・・・なのはちゃん、こいつが気絶してるうちに封印をお願い」
「う、うん」

ふえー、すごく大きな牙だよ。あんなのに噛まれたら私なんて・・・
うんうん、晶君は気絶してるって言ってるし早くしなきゃ

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル20・・・封印!」

【Sealing】

「ギイイイイイイッ」

封印が終わってすぐにレイジングハートを待機状態に戻していると、晶君の方も殖装を解いてこちらに歩いてきています。

封印しかしてないのに今日はいつも以上に疲れたよー

「お疲れ、なのは」

「うん、ありがとユーノ君。晶君もお疲れー」

「なのはちゃんもお疲れ・・・ってだいぶお疲れみたいだね」

「うん、今日も何かすごく疲れたの」

「そっか・・・ユーノ、明日一日ジュエルシード探し休めないかな? ちょうど今回のが今持つてる最後の噂話だったし」

「・・・うん、僕もそれが良いんじゃないかなって思ってたんだ。

なのはも覚えたての魔法でこれまで頑張ってくれたし、一日ぐらいゆっくりしてもらおうのも」

「本当?ありがと、二人とも」

晶君たちの提案は、私にとってうれしいものでした。

手伝うと言った手前私から休みたいとは言い出せなかったんです。

これで、明日のみんなとの約束が終わった後は、寝てられるよー

「そっだ、なのはちゃん」

「どっしたの、晶君?」

「疲れてるんだったら、家まで負ぶっていいんか？」

「私、自分であるけ……る……よ……」

あれ？なんで地面が近づいてくるの……

「おっと、倒れそうになるぐらいなら、無理する事ないのに」

そっか、私晶君に抱きとめられたんだ

「あり……が……とう」

「いいから、やっぱり負ぶっていくよ」

「うん……ごめん……ね。戦ってた晶君も疲れてるのに迷惑掛けて」

「別に、僕は慣れたからね……それより、少しでも寝ておきなよ。

明日は、約束があるんだし今みたいな所、見せられないだろ？家に

着いたら起こしてあげるから」

「じゃ……あ、お願……いね……晶……く……ん」

「おやすみ、なのはちゃん」

「おやすみ、なのは」

二人……とも、おやすみ……な……さ……い……

.....

「なのは、起きなよ」

んん……うるさいよお

「……今日は日曜だから、お寝坊させてよお」

「なのは……」

……

「な……のは……」

……

「……だ　ノ？起き　い？」

「だ よ 起 な」

「・・・静かになったよ・・・」

ユサユサ

「朝だよ、なのはちゃん」

「・・・。。。。。。うう。。。。。。また？」

「。。。。。。今日は日曜だから良いでしょお？」

「ダメだよ、今日は約束があるでしょ？」

「。。。。。。やく。。。。。。そ。。。。。。く！」

「そうだった今日は、みんなとの約束があつたんだよ。今何時!？」

「おはようなのはちゃん、急げばまだ間に合うよ」

「おはよう、なのは。よく寝てたね」

「おはよう、晶君、ユーノ君。。。。。。って何でお日様が出るのー

!？」

え？ どういうことなのこれって？

「昨日起こしても、全然起きなかつたんだよ、なのはは」

「そうだよ、僕らがいくら声を掛けてもダメだったからそのままベ

ツトに運んだ」

「。。。。。。ねえ、二人ともどうして私パジャマになってるのかな

?まさか。。。。。。」

「違うよ、ねえ晶!僕たちじゃないよねっ」

「そうだよ!もちろん美由紀さんに頼んだんだから僕たちは何も見

てないし、何もしてないよっ」

「そっか、よかったー」

ほっ。。。。。。晶君に私の裸見られてたら恥ずかしすぎて死んじゃいそう

だよ

その後、時間が差し迫ってる事思い出して慌てて私とユーノ君は川原へ、晶君ははやてちゃんたちの家に出かけていきました。

今日は、はやてが待ちに待った約束に日だ。

はやては、約束してからずっとこの日を楽しみにしてたんだぜ。

なのに晶の奴、遅刻してきやがって！

まあ、はやてが許したからあたしも矛を収めたけどよ……

とにかく、予定の時間より少し遅れたけどあたしたちは川原でやるさつかーの試合の応援に向かった……っていうのは口実で、本当の目的は高町と晶の友達、アリサとすずかに会いに行くんだ。

二人を通して、はやてはメールでしばらくやり取りはしてたけど、実際に会うのは今日が初めてだ。

あいつらが、友達の少ないはやてのことを考えて提案してくれた。はやては、そのことを本当にうれしそうにしてたんだ。

これに関してあいつらには感謝しなくちゃな、うん

それで今は、自己紹介も終わってそれぞれ分かれて話をしてるんだ。

はやてとザフィーラは、すずかとアリサと一緒にいる。

3人は、ザフィーラを囲んで何か話してるみたいだ。

「この仔、なんて犬種なの、はやて？私も犬飼ってるけど、この仔みたいな犬聞いたこと無いんだけど」

「えーと、ザフィーラは……そう雑種やつ雑種やから聞いたことないんとちゃうの？」

「へえー雑種か……だからか……」

「それにしても大きな犬だね、はやてちゃん。この仔なら私ぐらい乗せても走れるんじゃないかな？」

「せやったら、乗ってみる、すずかちゃん？ええか、ザフィーラ？」
「（コクッ）」

「この仔、はやてちゃんの言葉ちゃんと理解してる。賢いんだね、ザフィーラって」

「そうそう、えらいぞーザフィーラ」

アリサの奴、ザフィーラを撫で回してやがる。

まあ、人の姿にもなれるし言葉も話せるから当たり前だけどよ。しかしアイツ尻尾をあんなに振って・・・そんなに気持ち良いのか？

一方シャマルの奴は、ガキの応援に来てる親たちと世間話してる、最近目覚めたアイツの趣味だつてよ。

そんで、あたしは晶と高町、二人のペットのユーノっていうフェレットと一緒にいる。

さつきからあたしはこの小動物を弄り回してるんだ。

「ヴィータちゃん、そんなにユーノのこと気に入ったの？」

「ん？まあな、こいつの手触り中々気持ち良いんだぜ？晶もやってみるよ」

「いや、君がそのまま続けてあげなよ。ユーノもその方が良かったろうし」

「そうか？じゃあ・・・ほぐらほら！どうだユーノ、気持ちいいか？」

「キユキユイ」

「そうかそうか気持ちいいかってどうしたんだ、ええと・・・高町なんとか？」

「ひどいよお、もう何度も会ってるのにまだ私の名前覚えてくれないの！？なの・の・は、なのはだよ。今度こそちゃんと覚えてね？」

「お前の名前覚えにくいんだよ・・・なのは、高町なの・の・は・・・」

よし今度こそ大丈夫だ………たぶん

「ちよ、たぶんって……」

「それより、何見てたんだよってシグナムとなのはの父ちゃんじゃんか」

「あ、うんお父さんと何話してるのかなって」

「なのはちゃん、珍しいよね？ 士郎さんがあんなに困った顔してるなんて……」

「うん」

「……ああ、あれは、たぶんアイツの病気だな。強い奴を見つけると戦いたくなるっていうな。あの人、何か武術やってるだろ？」

「うん士郎さんは、剣術やってるから強いけど、よく見ただけじゃなかったね」

「シグナムも剣術やってるからな、足運びとかで嗅ぎつけたんだたぶん。実際あのおっちゃんのは、なかなかのもんだからな」

「ありゃあ、相当な数の修羅場を潜って来てるんじゃないか、あのおっちゃん？」

「そういうのがわかるってことは、ヴィータちゃんも何かやってるの？」

「ん？ああ、あたしも心得があるからな、そういうお前らはどうなんだよ？」

「にやはは、私は運動は苦手だからそういうのは全然」
「僕も特に何も習ってないかな」

「ふん」

こんな感じの様子を試合が始まるまでに続いたんだ。

つづく

未熟な休日 午前（後書き）

戦闘シーンは、やっぱり苦手です。

今回は、原作ではない武装の使い方も出してみましたがちやんとどんな戦闘だったか伝わったかな？って不安です。

それと、次回から少し投稿スピードが落ちるかもしれません。

3 / 13 誤字修正

4 / 10 修正

未熟な休日 午後

リリカルガイバー 5話 未熟な休日 午後

SIDE ザファイラ

サッカーといったか。

事前に深町達に聞いたところでは、ただの球蹴り遊びぐらいの認識だった。

だが、実際に見てみるとソレが誤りだった事がわかる。子供らが熱中するのも頷けるものだ。

実際、ほとんど興味なさげに眺めていたヴィータも試合の終わりがごろには、夢中になって応援していたことから伺える。

私は、盾の守護獣、ザファイラ。

主と仲間のシグナムたちをあらゆるモノから守るのが我が使命。

だが、今の主、八神はやては、蒐集をせず我らも道具と用いずに家族として迎え入れてくれた変わり者。

我らは、そんな主が好きだ。

今の暮らしには、幸せすら感じている。

この幸せが長く続くことを我らは願っている。

「こら、ザファイラ。何サッカーボールを物欲しそうに見てるのよ？だめよ試合の邪魔しちゃ」

別に、そんな事を考えてたわけではないのだぞ、アリサ嬢。だがとりあえず返事をしておかねば

「ウオン」

「よしよし、ほんと賢いわねあんたは。後でこ褒美上げるからね？」

むっ、それなら肉を所望したい、アリサ嬢つと、言葉で伝えられれば良いのだが……

SIDE はやて

サッカーの試合は、なのはちゃんのお父さんがコーチ兼オーナーをしているチームが勝ったんや。

そのお祝いに街で人気の喫茶翠屋を全員に奢ってくれる言うたんよ、太っ腹やね。

このお店の店長がなのはちゃんのお父さんだつて聞いたあの時は、驚いたわ。

ただ、店内はチームの人達でいっぱいになったから私らみんなは、今外のオープンテラスでお茶しとる所や。

「ほらザフィーラ、約束のご褒美だよ」

「ウオン」

「アリサちゃん、ザフィーラ君には、お肉とかの方がいいんじゃない？」

「そう？ザフィーラもおいしそうに食べてるから良いじゃない」

「はやてちゃん、大丈夫かな？」

「あははは、きつと大丈夫やてなのはちゃん。嫌ならザフィーラも口にせんから良いんとちゃうかな」

確かにこのケーキすごくおいしいけど……ザフィーラは甘い物好きなんかな？ 家に帰ったら聞いてみよ

「そうだけ、ここのケーキすっぱうまいんだ、こいつも満足してるよ。ま、まあ、はやての作ってくれたもんの方があたしは好きだけだよ」

「ありがとな、ヴィータ」

そう言ってくれると、ほんまうれしいわ

私が、ヴィータの頭撫でると気持ちよさそうにこの子目を細め
つたわ。

一方隣のテーブルのシグナムとシャルたちはというと・・・

「・・・・・・・・シャルの作る物とは、天と地ほども差があるな。い
や比べるのも失礼か？」

「ちょ、シグナム！そこまで言いますか？」

「シャルさんの料理ってそんなにすごいんですか？」

あ、ウェイターしとった晶君がみんなのお茶の御代わりを持って
店内から戻ってきたようやな。

「うむ、なんと言うか微妙な味なのだ、深町」

「微妙・・・ですか」

「塩と砂糖を間違えるのなんぞ常識でな、口で表現するのが難しい
のだ。だから微妙としか言えん」

「・・・・・・・・いいでよ〜っだ。どーせ私は、ダメダメですからあ・
・」

あゝあ、シャルが落ちこんでもうてテーブルに「」の字書き始
めとるわ

「へえ〜、シャルさんって家事が上手そう感じなのに・・・・・・・・」

「しょーくん、それ以上何も言わないでえ〜」

「ご、ごめんなさい。でも、練習すればおいしいもの作れるように
なりますよ、きつと」

「そうかな〜？本当にそう思う？」

「はい、僕も最初は上手く出来なかったけど、何度も作ってる内に
うまくなつていったんです。だから、大丈夫ですよ！」

「ありがとう、晶君！私にそう言ってくれたのはやてちゃんだけだ
つたの。あとのみんなは、無駄だって言うけど私頑張ってみるね！」

「はい、頑張ってください・・・・・・・・そういえばシグナムさんって

料理出きるんですか？」

「いや作ったことが無いのでわからんのだ」

「そうなんですか」

うん、シグナムの料理か・・・気になるなあ。今度作ってもら
うんのもええかもな

隣から聞こえてきた話題に私は、密かにそう考えとった。

こんな感じで話しとつたらあつという間に時間が過ぎてつてもう
お開きの時間になったんや。

楽しい時間いうんは、本当に短う感じるわ

「じゃあ、今日はおおきにな晶君、なのはちゃん。それにアリサち
やんとすずかちゃんも」

「また、みんなで遊ぼうね、はやてちゃん！」

「そうやね、なのはちゃん」

「はやてちゃん達車とかに気をつけて帰ってね？」

「晶君は心配性やね。でも私らには、ザフィーラがおるから大丈夫
や」

「そつか・・・がんばって、ご主人様を守るんだぞ、ザフィーラ」

「がんばってね、ザフィーラ君」

「ウォーン！」

アリサちゃんとすずかちゃんの言葉に「任せろ！」ってきつと返
事したんやなザフィーラは。

その後、みんなと別れて私らは家への帰路についたんや。

ちなみに、ヴィータの手には晶君から遅刻したお詫びにつて渡さ
れた翠屋のシュークリームが5個入った箱がある。

もしかして、このためにさつきお店でウェイターしとつたんかな？
そこまで気にせんでよかつたのに・・・でもおおきにな晶君

SIDE ユーノ

みんなが帰って行った後、僕達も家に一度帰ってきたんだ。

理由は、ふらふらになってるなのはを送るため、そしてもうひとつは……

「……ほら、なのは寝るなら着替えなよ」

「うん……」

「ってなのはちゃん、僕達まだ部屋にいるよ!？」

「……」

寝ぼけてるなのはが着替え始めたので、僕達は慌てて後ろを向いたんだ。

も、もちろん僕達は何も見てないよ？

服を脱ぎ始めてすぐに後ろを向いたからね。

とにかく、ベットに倒れ込む音を聞いて少し待ってから振り返って晶は、なのはにタオルケットを被せた後脱ぎ散らかした服を畳み始めて、その間に僕はレイジングハートをなのはから取ったんだ。

「ユーノ、そっちの準備は終わった？」

「うん。行こう、晶」

「そうだね、発動する前に封印できればなのはちゃんも目を覚まさないだろうし」

僕達の目的は、先ほど見つけたジュエルシードをなのはには内緒で封印する事。

あの時、なのはの様子少し変だったけど何も言わなかったって

ことは気のせいだと思ったのかもね。

僕の魔力もだいたい回復してきたから封印するだけなら可能だから晶に「ゆっくり休んでもらうためになのはには知らせずに封印しようよ」って提案したんだ。

そしたら、晶も賛成してくれて今、現地に向かっている。

ジュエルシードを持ってたサッカー選手の子の住所は、あらかじめ士郎さんに聞いておいたんだ。

だから僕達は、急いで向かってたんだけど……

「！晶、発動しちゃったみたいだよ！」

「みたいだね。町中にでつかい木が何本も……ユーノ結界は張れる？」

「無理だよ。ここで結界を使ったら封印できなくなる」

「そっか……とりあえず人目の無い何処か見晴らしのいい……あのビルの屋上に！」

「うん」

非常階段を急いで駆け上がってビルの屋上で被害の全体像を目にした。

晶は、すぐに殖装して強化された視力やヘッドセンサーを使って辺りを探査している。

「……どう、晶？」

「……ジュエルシードの位置は、わからないけど枝に引っかかる人たちがいるみたい。幸い見える範囲ではみんな気絶してるみたいだからあのままパニックになって墜落することもないよ」

あの大木が成長する時に運悪く巻き込まれちゃった人たちたちみたいだ。

「じゃあ、早くジュエルシードの位置を確かめて封印しないと！」
「いやそれなんだけどさ・・・あの大木って封印したら当然消えるよね？」

「そんなこと当たり前じゃないか」

晶は一体何が言いたいんだ？

「だったら、ビデオを巻き戻すみたいに消えてくれればいいんだけど・・・」

・・・あ！ 突然あの木が消えたら巻き込まれた人たちが落ちちやうんだ

「そっか、どうなるか分からないから先にあの人たちを助けなきゃってことだね？」

「そ、今のところあれ以上何も起こってないようだしそうした方がいいと思うんだ」

「やっぱ、晶は頼りになるな。僕だけだったらどうなってたか・・・」

「僕は、救助しながらジュエルシードの位置を探すからユーノはここで待機していて」

「うん・・・ごめんね、手伝えなくて」

「今できる最善がこれなんだから仕方ないさ。あと、なのはちゃんのことだけど・・・」

「わかってる。発動した以上目を覚ましてこっちに向かってるっでしょ？この場所に来るとは限らないけど、見つけたら状況を説明しておくよ」

「うん、よろしく・・・じゃあ、行くよ」

「がんばって、晶」

晶が手すりを越えて救助に向かっていく姿を僕はここで見送る。

晶は、ああ言ってくれたけど何も出来ない自分にやっぱり齒痒いよ・・・

僕がそんな事を思っていたら、階段を駆け上ってくる音が耳に入ってきた。

「ユーノ君!」

「なのは!? どうして、ここに・・・」
さつき晶が飛び出してた所を見られたのかな?

でも僕は、そんな事を気にするよりも今僕ができることをするた
めになのはの元に向かった。

SIDE ヴィータ

なのはたちと別れた後、あたし達はずいぶん夕食の買出しをして
家に帰る途中だった。

「このシュークリーム楽しみやな、ヴィータ?」

「うん、晶の奴も気がツシグナム!」

「ああ、分かってる!」

あたし達が魔力を感じ取った後、街のいたるところから木が生え
始め瞬く間に巨木へと成長していく。

その過程で人が引つかかっているのが見えた。

くそっ、どこのどいつだ!? 結界も張らずにこんな事した馬鹿は!

「シグナム、何が起こったんや?」

「何者かが、魔法もしくはロストログアを使用したものか・・・」
「

「何のためにそないな事したや・・・でも、そんな事考えるんは後
で出来る。みんな、巻き込まれた人たち助けたってくれへん?」

はやての言葉にあたしら全員顔が強張ってたと思う。
だからあたしらを代表してシグナムが無表情ではやてに尋ねたんだ。

「……それは、御命令ですか、主はやて？」
頼むはやて、違うって言うてくれ！

他のやつ等も同じ思いだったと思う。

「何言つとんのや？私から家族へのお願いや。だからいやならいや言うてええんよ？」

「フ……なら聞かないわけにはいきませんね。ですが、何が起こるかわからないのでザフィーラとシヤマルは残します。いくぞ、ヴィータ！」

「ああ、やってやる。誰かは知らないねえけど、見つけたらあたしらにちよっかい掛けた事後悔させてやる！！それに……」

あたしの視線の先には、さっきの騒動で落として潰れた箱。
中身はたぶんぐちゃぐちゃだ。

「シユークリームの敵討ちだ！」

「……いや、別に食べ物程度でそこまで……」

「何言つとんのや、ザフィーラ！ 食べ物の恨みはすごいんですよ！」

「そうですよ、甘い物に対する女の子の思い入れは強いんです」

ザフィーラの奴、何にも分かってねえな

はやてとシヤマルに怒られてるザフィーラをおいといてあたしとシグナムは、騎士服を纏って巻き込まれた奴らを二手に分かれて助けに向かったんだ。

3人ぐらい助けてビルの上へ降ろしたところこっちに向かってくる奴をあたしは見つけた。

この街であたし以外の魔導師なんて知らねえんだ。

だから、あたしがアイツを犯人だって考えるのにもそんなに時間はかからなかった。

「いくぞ、グラーファイゼン！カートリッジロードッ！！」

【Explosion】

「ぶっ潰す！」

あたしは、意気込んで奴に向かっていったんだ。

SIDE 晶

ユーノと別れた僕は、とりあえず一番近い木に向かっていた。そうしたら、突然4方向から同時に鉄球が襲ってきたんだ。

敵！？

僕はヘッドビームで迎撃をし、高速かつガスターの生体ミサイルのように緩やかではあるけどホーミングして避けていく目標を全弾打ち落とす事に成功した。

「いったいどこから……」ラケーテン 「ッ後ろ！？」

「ハンマー！！！」

「ってヴィータちゃん！？」

「なんで、あたしの名前知ってたでめえ！」

僕は、襲撃者、ヴィータちゃんの一撃を両手でハンマーの柄を掴んで受け止めている。

反対側のロケット推進の力もあるだろうけど、すごい力。それに戦いなれしてる。どういうことだ？

「この受け止めんな！このっ」

「ちょ、スカートでハイキックはまずいよ！？」

ヴィータちゃんは、僕の側頭部にハイキックを決めてくるが・・・

「イッテっ！？」

「大丈夫？」

「ああ・・・じゃねえー！！この良くもやりやがったな！」

「いや僕は、何もしてな「うつせー！」・・・」

「大体何が目的でこんなことしやがった！あたしらへの復讐か？」

「え、復讐って何のこと？僕らはただ暴走したジュエルシードを封印しようとしてるだけだよ？」

「はあ？じゃあお前がやったわけじゃないのかよ」

「そっだよ」

「だったら、お前誰だ？名乗れよ。あたしの事も知ってるみたいだしよ」

ああそっか、この姿じゃ想像つかないか・・・

「僕は、この姿だと分からないだろうけど、僕だよ。深町晶。今日、みんなでサッカーの試合応援に行ったでしょ？」

「な、お前晶なのか！？・・・でも試合のことも知ってるみたいだし・・・」

ヴィータちゃんは、やっぱり驚いたみたいだけど、その後のいくつかの質問に答えると納得してくれたみたいだった。

これで、戦わなくてすむかな・・・

『晶！なのはが来たよ』

そんな時だった、ユーノから念話が来たのは。

内容は、案の定やってきたなのはちゃんの変身して今探査魔法を放つたらしい。

現に僕達の上空を桃色の魔法光を放つ帯がいくつも飛んでいくのが見える、これがそうみたいだった。

『ちよ、なのは！話を聞いて！』

『どうした、ユーノ？』

『それが、そのまま待ってって言ったたら今から封印するって聞かないんだ！』

『なっ……』

「おい晶、どうなってんだよ。この魔法お前の仲間がやったのか？」

「ヴィータちゃんごめん、今立て込んでるんだ少し待って」

「……わかったよ」

「ほんとごめん」

『それで、ユーノどうなったんだ！？』

『なのは、遠距離魔法を使うみたい！』

そして、その魔法が放たれたようだった。

しかも、射線にはヴィータちゃんがいる。

「ッ！」

ヴィータちゃんは、まだ気づいてないみたいだ、だったら……！

「何すんだしょ」

ごめん、ヴィータちゃん。あとで謝るから

ヴィータちゃんを突き飛ばして射線からはずす事ができたけど代わりに僕が魔法にのまれた。

グッこれは、ヴァモアの生体レーザー以上だ。長時間照射されたら

まずいッ

実際はほんの少しの時間だっただろうけど受けていた僕には、数秒がすごく長く感じた。

「……どンドン、向かってくる魔力が減ってきてる……これならもうすぐ」

「晶！大丈夫か!？」

「あ……うん、背中を受けたのが良かったみたい。心配かけちゃったね」

「そこで、待ってる！シヤマルを呼んでくるから」

「大丈夫だよ。この程度ならほつといても治るから」

「何言ってるんだ!? 背中が爛れてんだぞ!」

「そっか、装甲が融解したのか……」

「本当に大丈夫だって、今の姿ならこの程度はダメージにならないから。ほらっ」

僕は、何とも無いと見せるために動いてみせる。

「ヴィーちゃんはまだ心配そうに見てるけどとりあえずは、大丈夫だって思ってくれたみたいだ。」

「晶君！ごめんね!! ケガしてない!? ねえ、返事してよ!!!」

「なのは、落ち着いてよ!」

「そっだよ、なのはちゃん。まずは落ち着いて」

「晶君！ごめんね。ユーノ君の話聞かずに勝手なことした上、晶君をダイバインバスターで撃っちゃって……」

「僕は大丈夫だから。でも、今度からはちゃんとユーノの話最後まで聞いてほしいよ」

「聞くよ、だから私のこと嫌いにならないで!」

「ならないよ」

なのはちゃんが泣きながらそう言ってきたけど、とにかく落ち着かせてそのままそこで待ってて言って置いてたんだ。

さて、次はヴィータちゃんへの弁解をしないと・・・

「おい、晶。さっきの砲撃お前の仲間か？どういうことだよ。あたしを狙ってくるなんて・・・」

「ジュエルシードを封印するためだったみたい。偶然その射線上にヴィータちゃんが居てそのことに気付かなかっただけらしいんだ。ごめん、謝るよ」

「・・・頭上げろよ、お前はあたしを身を挺して庇ってくれたんだその言葉信じるよ。でも、そいつに文句言ってるから会わせるよ？それで、そいつの名前は？」

「なのはちゃんだよ」

「なのは！？アイツ魔導師だったのか」

「うん、一週間ぐらい前になったばかりだけどね」

その後は、ヴィータちゃんから事情を聞いてから協力して巻き込まれた人たちを助けたんだ。

それからなのはちゃんがジュエルシードを封印して事なきを得た。ヴィータちゃんとシグナムさんには、明日改めて説明をするってことで今日はお引取り願ったんだ。

そして、今このビルの屋上には僕となのはちゃん、ユーノの3人が残っている。

「・・・ごめんなさい」

「さっき謝ってくれたからいいよ、なのはちゃん。でも、どうしてユーノの話聞いてくれなかったの？」

「・・・私の所為だから。ほんとは私気付いてたの、あの子が持つてること。でも気のせいだと思って思っちゃったんだ」

「それだったら、僕だって気付いてたよ。でも、今日はなのはを休ませてあげたくて・・・それでなのはを家に送ってから僕達だけで封印しに行こうって僕が晶に提案したんだ・・・だから、僕の所為だよ」

「うんうん、ユーノ君たちは私のためにそうしてくれたんでしょ？」

「やっぱり私の」

「はい、そこまで」

「晶君？/晶？」

いつまでも進展がなさそうな会話を止めて僕は話し始めた。

「つまり、僕達3人が悪いってことだよ。なのはちゃんは気付いてたけど気のせいだって思った事、ユーノと僕はなのはちゃんに黙って行動した事それぞれ相談してればこんな事にならなかつたんだよ、そうだろう？」

二人とも無言だけど頷いてくれる。

「だったらさ、二度と繰り返さないようにお互い何か気になる事があつたら話し合おうよ」

「うん」「うん」

その後改めてお互い謝ってこの話は終わった。

あと、あの事を話しておかなくちゃ

「ねえ晶君、どうして殖装解かないの？」

「そういえば、いつもならすぐ解いてるのに」

「これから話す事に必要だからだよ」

そして、僕はさっきの魔法で気付いた事を二人に打ち明けた。

非殺傷設定は、物理破壊を伴わない魔力衝撃で、敵を死傷させずに攻撃することだが、柔らかい部分を傷付けることもあるとユーノからは聞いていた。

でも、今回の事で分かった非殺傷設定の欠点、僕のようにリンクーコアを持たない人間には十分殺傷能力を有している事。

証拠として、背中の装甲が融解しているところを見せながらの説明。

なのはちゃんもユーノも顔色があんまり良くない。

自分が振るつてる力が例え設定してあっても簡単に人を殺せるって事を確認したようなものだからだ。

「・・・じゃあ、どうすればいいの？私は、魔法を使わない方がいいのかな」

「なのは・・・」
「そういうことじゃないよ、要は自分の力の程を知っていればいいんだ」

「そんなことでいいのかな・・・」

僕の言葉を聞いてなのはちゃんは、僕の言った事の重要性に気づいてないみたいだ。

なら、実演して見せるか

「ねえ、僕と握手しようか」

「え、どうして急に？」

「いいから」

「・・・うん」

「どっ、痛いかい？」

「ぜんぜん、ゴツゴツしてるけど痛くないよ」

「じゃあ・・・この石を握ってみて」

僕は、近くに転がっていたのはちゃんの手握り程度の石を渡しながら言った。

「?・・・やってみたよ」

「握り潰せた?」

「そんなのできる訳無いよ!」

「まあ、そうだね。じゃあそれを僕に渡して」

「はい」

僕は、渡された石を軽く握った。

するとなのはちゃんの時とは違い簡単に潰れてしまう。

それを彼女に見せると・・・

「すごい、あんなに硬かったのに砕けちゃった」

「ガイバーのままでも軽く握るだけでこうなるんだ。つまりこういうことだよ」

「?」

「ありや、まだわかってないか」

「だから、最初なのはちゃんと握手したとき元の姿の時の感じで握ってたらなのはちゃんの手が潰れてたって事だよ」

「あ・・・」

「僕は、ガイバーの力の程をある程度知ってるから注意してさっきは握ったの。魔法も同じようにどれだけの力か知ってれば使うとき加減ができるだろ?」

「うん」

「あと、忘れちゃいけないのが非殺傷設定でもやり方しだいで相手の魔導師を殺せるってのも忘れちゃダメだよ?」

「・・・そうだね」

「さ、今日はここまでにして帰ろうか、二人とも」

「・・・うん」

なんか先生の真似事ばいことしちゃったな・・・でも、そのことをちゃんと知っておかないといつか後悔するかもしれない・・・

そして僕達は、夕暮れの中3人で荒れた街の中を歩いてゆく。

自分達の失敗の結果を記憶に焼き付けながらの苦い帰路だった。

つづく

未熟な休日 午後（後書き）

このペースをいつまで維持できるかな・・・
4 / 10 修正

未熟な迷子

Side ユーノ

昨日、ジュエルシードが街を破壊した日の夜。

僕達は、ビルの上で晶が提案したように相談をしていた。

そして、今は明日のはやてさんたちへの説明の話題である。

なのはもはやてさんたちへの説明に来ると言ったが、晶はそれを却下し逆に4日間休むように彼女に伝えていた。

ジュエルシードを封印したことでさらに疲労が溜まったからである。

「晶君、ユーノ君！そんな事したらまた今日みたいなことが起こっちゃうんだよ?!」

「僕とユーノは、ジュエルシード集め自体をやらないうって言った訳じゃないよ」

「じゃあ、どういうこと?」

「今日、またジュエルシードを封印した事でなのはちゃんはさらに疲労を蓄積しただろ?」

「うん・・・」

「その疲労が回復するまでなのはちゃんには休んでもらうって言うてるんだ。その間は、僕とユーノだけで続ける」

「でも!」

「でも、じゃないよ。大事な時に一昨日みたいに倒れたらどうするんだよ!」

「あつ・・・」

「ケガした後じゃ遅いんだよ?だから、せめて1週いや4日間だけでも休んでよ、なのはちゃん」

「そうだよ、なのは。僕達は、別にもう手伝わないでって言うてる

訳じゃないんだ。疲れを取って万全の状態になってほしいだけなんだよ」

「……………二人ともごめんなさい」

これがあの日の夜、話し合った光景の一部だよ。

他には、それぞれの現段階での魔法や能力の確認も行ったんだ。

晶も今まではなのはには話していなかったガイバーの事を少し話しておくことにしてみた。

とりあえずこれで、今まで以上にお互いをサポートし易くなるだろうなって僕は思ったんだ。

リリカルガイバー 6話 未熟な迷子

Side 晶

今日は、なのはちゃんたちとは別行動。

二人は、すずかちゃんの家にお呼ばれだ。

一応彼女からお誘いを受けたが女の子だらけのお茶会に男の僕が行くのも変だからとお断りさせてもらった。

それに、先のテストで大部分がアリサちゃん以上の成績だったので、彼女から睨まれているというのも理由の一つである。

まあ、私立小学校だからって小学生レベルの問題で最近まで現役高校生だった身としては、負けるわけには……ね

そして、今日の僕は、なのはちゃんたちが帰ってくる夕方まで暇を持って余し街へと繰り出していた。

「うーん、最近はユーノの手伝いでほとんど2人と一緒だったからな、何をしたらいいか・・・ザフィーラさんとの稽古は、夕方からだしそれまでどうするかな」

そう呟きながら僕は、3日前の事を思い出していた。

・ ・ ・

殖装した僕は今、ユーノの張った封時結界内の海鳴市上空でシグナムさんと向かい合っていた。

ヘッドビームと重圧砲プレッシャーカノン（低威力版）の試し撃ち（バリアジャケットにどれぐらいの効果があるか）の的にした騎士服の裾が焦げている（数箇所は拳大に穴が開いている）（魔導師を殺さない程度の加減に加減に失敗）が一箇所だけ窪んでいる（成功）以外シグナムさんは無傷だ。

一方の僕は、ガイバーの装甲にいくつもの浅いキズを着けている。そんな様子に構えを解いたシグナムさんはあきれた様に口を開いた。

「・・・聞いていた通り、ガイバーとは呆れた硬さと能力だな。

だが、動きが素人では宝の持ち腐れだ」

「だから、こうして訓練を着けて貰っているんですよ」

「フツそうだったな」

こうなったの訳は、あのサッカーの試合があった翌日、学校が終わった後に約束どおりはやてちゃんたちにユーノと二人で説明に行った時の事だ。

説明は滞りなく終わり理解も得る事ができ、さらにはやてちゃん

たちの事情も聞けた。

はやてちゃんがジュエルシードを街で拾った日に発動してシグナムさんたちが『闇の書』って言う昔からこの家にあったロストロギアから目覚めたらしい。

しかも、発動した日が僕達がユーノと始めてあつた日の夜だったらしく、その事に気づけなかったユーノは結構ショックを受けいたようだ。

それで譲ってもらつたために交渉したんだけど、今持つてるジュエルシードをいくつか蒐集させてくれるならつてことと時空管理局には通報しない事が条件に出された。

本当はただで返すとはやてが言ってくれたけど、シグナムさんが交換条件としてそれを提示してきたからである。

僕は、その程度ならと思つたけど、ユーノは通報に関して悩んでるみたい。

まあ、まじめなユーノには難しい問題なんだろう。

地球で言えば警察のようなものである管理局を騙すのだから。

それに2つ目の条件の理由を彼女たちに尋ねたら、今までの主の命令で何度か管理局と戦つた事があり知られるとこの世界ではやてちゃんと静かに暮らせなくなるかららしい。

今シグナムさんたちは、戦う事もなく幸せに暮らしている。

結局ユーノは、散々悩んだ上でこの条件に承諾し

「あなたたちの今の幸せを壊したくなかつたしはやてさんがそんな事を望むような子に見えなかつたから」と最後に付け加えた。

それから、シグナムさんたちは表立つての協力は出来ないが、災いの種になりかねないジュエルシードは見つけたら封印して僕たちに渡してくれるって言うてくれる。

僕たちとしては、もう戦う必要の無いこの人たちがそう言うてくれただけでもありがたいのに、さらに素人に毛が生えた程度の僕に訓練を付けてくれると言ってくれた。

元の世界に戻つたときの事を考えると僕としてもありがたい申し

出である。

士郎さんたちには、断られたから今までランニングなどをしていただから。

そして、なのはちゃんも復帰する5日後に一度手合わせする約束をしてシグナムさんと僕は戦っていたというわけである。

「深町は、剣を使う私より拳を武器にするザフィーラに体術を教わった方がいいな」

「ザフィーラさんにですか？でも、狼に体術って……」

「ああ、そういえばお前たちはまだ知らないのか。あいつは、人型になる事もできるぞ」

「そうなんですか」

「その気があるならあいつに頼んでみる」

「はい、ありがとうございます」

「礼はいい。お前たちが失敗すれば主にも危害が加わる可能性があるのだから。言ってみればお前たちを利用してはいるようなものだ」

「それでも、ありがとうございます」

「……勝手にすればいい」

そっぽを向いたシグナムさんは、近くのビルの屋上ではやてちゃんたちと観戦していたのはちゃんたちに目を移していた。

・
・
・

僕は、腕を組んで頭を捻っていたときだった。

前への意識がそぞろになって僕が顔が何かやわらかい物に当たってしまったんだ。

「誰だい！？人のお尻をさわったのはッ」

「え？お尻・・・ごめんなさい、本当にごめんなさい！」
あわわわ、この人のお尻に顔が！？」

僕がぶつかつたのは、赤毛の長い髪をしたなぜか獣っぽいきれいな女の人だった。

Side ???

私のお尻に何か柔らかい物があたった。

これが噂に聞いた痴漢かと思つて振り返ると誰も居ない。

かと思えば聞こえてくる謝罪の声は、下から子供の声で聞こえてきた。

「何だ、子供だったのかい。悪戯すんじゃないよ」

「ごめんなさい！ほんとーにごめんなさい。考え事してて前を良く見てなかつたんです」

「ああ、もういいからあっち行きな。わたしや今あの子を探してて忙しいんだ」

こっちは、ちょっと目を放した隙に（精肉店のガラスケースの肉の塊に目を奪われていたとも言つ）フェイトがはぐれて心配だったので「誰か、探してるんですか？」

「あんたにや関係・・・あんたこの街の子かい？」

「はい」

この子使えるかもしれないね

「さっきのお詫びにというわけではありませんけど、お手伝いしましょうか？」

「・・・だったら頼めるかい」

「はい。それで探してる人の特徴は？」

これでフェイトを早く見つけられればいいんだけどね

Side フェイト

今日、始めてきた街の下見にアルフと一緒に出かけたんだけど、いつの間にか後ろを歩いてたのに彼女が消えていました。急いで、来た道を戻って探したけど全然見つからないよ。

アルフ、どこ行っちゃったの？

かれこれ一時間近く歩き回ったり勇気を出して知らない人に聞いてみたけど知らないって……

しかも、道が分からなくなっちゃったしどうしよう

魔法を使うわけにもいかず私は、公園のベンチに座って途方にくれていました。

「……アルフ」

「あのもしかして君が、フェイトちゃん？」

「え？そうですけど……」

「僕は、深町晶。アルフさんに頼まれて迷子になった君を探してたんだ」

彼は、ここに来るまで出来事を話してくれました。でも、出会いのことは衝撃でした。

この世界に降り立つ前にした事前調査で女性の敵を知りました。こ、この子が、あの痴漢なのかな？

って思つて後ずさつちやいましたけど、理由を最後まで聞いてなおかつ彼の顔が嘘をついてるように見えなかつたのでとりあえず信じてみようと思ひました。

私が警戒を解いたのが分かつたのか彼は安堵の表情を浮かべます。そして、私に手を差し出してこう言いました。

「それじゃあ、アルフさんのところに案内するね」

「?・・・どうして手を出してるんですか?」

「今日は休日で人が多いから、まらはぐれたら大変だろ?」

「はい、それは確かに」

「だから、手を繋いでいけばはぐれる事ないからね」

私の手は、恐る恐るその手を握りました。

「さ、ちよつと急ぐよ。アルフさんと約束した集合時間まで後ちよつとしかないから」

「・・・はい」

恐る恐る手を掴んだ私は、彼に引かれるままアルフの待つ場所へと走つていきました。

そして、いくらか走つた後どうやら到着したみたい。

私の視界にアルフが映つたからです。

「フェイト！心配したんだよ。怪我して無いかい?」

「大丈夫だよ、アルフ。怪我とかしてないから落ち着いてよ」

「よかつたですね、アルフさん、フェイトちゃん」

「あんたに感謝しないといけないね。ありがとよ、深町」

「ありがと、深町君」

お礼を言われた彼は、照れたように頬を掻いている。

「いえ、お礼を言われる様な事でも無いですよ。あつよかったら、この街を案内しましょうか？」

「……どうする、フェイト？ やっぱり、現地の人に案内してもらった方がいいんじゃないかい」

アルフの言う事にも一理あるけど、途中で目的の物を見つけた時の事を考えると……

「……あの邪魔するみたいですけど、相談にまだ時間かかりそうですね、アルフさん？」

「かかるから、もう少し待ってておくれ」

「わかりました……」

深町君とアルフのそんな会話を聞きながらも悩んでいました。

そんな時でした、お腹からクウーって音が聞こえてきたのは。

あう、そういえばお昼食べて無かったよ……もしかして彼に聞こえちゃったかな？

恥ずかしさを堪えて彼のほうを向くとそこには誰も居ませんでした。

「……あれ深町君は？」

「そういえば、いつの間にか居なくなってるね。自分から言い出した癖にどこ行ったんだか！」

「いいよ別に。私たちには居てくれない方が都合だよ」

「フェイト……」

私はそう答えながらも、なぜか寂しく感じていました。

始めて同じ年くらいの子と話したからなのかな……

「……さ、行こうアルフ」

「わかったよ……」

その場を離れようと歩き出し始めます。

「……………」

「……本当に良かったのかい、フェイト？待ってたら戻ってきたかもしれないよ」

「……………」アルフさん、フェイトちゃん待ってよ！」「え？」

私がアルフに答えようとした時それを打ち消すかのような声に驚き振り返ると、紙袋を持った深町君が私たちを追いかけてきました。

S I D E 晶

まだ相談に時間がかかると聞いたときにフェイトちゃんのお腹からクウーってかわいらしい音が聞こえてきます。

腹がすいてるのかな？確かこの近くに前なのはちゃんが言ったおいしい焼きのお店があったような……

時間もまだあるようだしそこで買ってこようと思い邪魔をしないように黙ってそこを離れました。

お店は、昼時を過ぎていたからか空いています。

それで、すぐに入れて戻ってみると遠ざかっていく二人の後姿が眼に入りました。

あちゃー……………何も、言わず離れちゃったから怒っちゃったかな？

そう思って僕は、追いかけて二人に声をかけます。
すると、フェイトちゃんは驚いた表情を浮かべていました。

「・・・私たちがいつまでも答ええないから呆れて帰っちゃったんじゃないかったの？」

「僕から言い出したのにそんなことする分けないよ。ただ、フェイトちゃんお腹空いてたみたいだったからこれ買いに行ってたんだ」

紙袋を開けて中からたい焼きを出しながら答えました。

なぜか、フェイトちゃんは、僕の言葉を聞くと顔を赤らめています。

お腹の音を聞かれて恥ずかしかったのかな？

そんなフェイトちゃんの代わりにアルフさんが怒ったように僕に尋ねてきました。

「・・・だったら、どうして黙って離れたんだい？」

「いや、続けて相談の邪魔しちゃう悪いかなって思ったんで・・・いけませんでした？」

「当たり前だろ！そのせいでフェイトが悲しんでたんだよ」

「え、そうなんですか？・・・あのフェイトちゃんごめんね、勝手に居なくなつて。一言言っていけばよかったのに」

「あ、あの、別にいいです。私たちの早とちりだったみたいですし・・・」

その後、仲直りした僕達は、一緒に買ってきたたい焼きを食べた。フェイトちゃんは、小さな口で一口齧ると甘くておいしいって顔をほころばせて言ってくれる。

アルフさんも、おいしいって言いながら豪快に大きく齧っていた

んだ。

フェイトちゃんは、少食のようで一尾しか食べず、結局アルフさんがほとんど食べてしまった。

それで、案内の方も2人から改めてお願いされて、なのはちゃんに2ヶ月前にしてもらったように行ったよ。

「……え〜と、こんな所かな。他にいきたい所ある？」

「大丈夫これで十分だよ。ありがとう……これでお別れだね」

「？別に街であつたら声を掛けてくれても良いんだよ。僕も見たらそうするから」

「……いいの？私なんか声が掛けたりして」

「なんかって変なこと言うね。僕達もう友達でしょ？……もしかして、僕の勘違いかな？」

「友達……私が……」

「どうしたの？やっぱいやだった？」

「そうじゃないの！……友達できるの初めてだったから……あ、あのっ晶って呼んじゃダメかな？」

「別にいいよ。友達はみんな呼んでるから」

「うん……晶、ありがとう」

「……かわいい」

「えっ？」

「かわいい笑顔だなんて……」

「はう……またね、晶！！」

「あっ……フェイトちゃん」

フェイトちゃんは、真っ赤になって早口にお別れを言って走って行っちゃった。

アルフさんも、目礼してその後を追っていく。

ちなみに、次に会った時アルフさんがいつの間にか僕の事を呼び捨てにするようになっていたのには驚いたよ。

でも、あんな形で再会することになるとはこのとき想像すらして
ませんでした。

じじく

未熟な迷子（後書き）

4 / 4 修正

4 / 1 0 修正

未熟な迷子 裏

リリカルガイバー 7話 未熟な迷子 裏

Side ユーノ

「親愛なる友 深町晶へ

君がこの手紙を読んでいるということは、僕はもうそこには居ないでしょう。

僕は、これから死地へと旅立ちます。

全部終わったら君が元の世界に帰る方法を探す約束だったけど、それを果せなくてごめんね。

その代わりに、封印したジュエルシードを持って行って下さい。

元々、ジュエルシードは使用者の願いをかなえるロストロギア。

発動が不安定で危険な物だけど、正しく発動させる方法を見つければ君の願いを叶えてくれるはずですよ。

どうしても、帰る方法が見つからなかったら使用を考えてみてください。

さい。

それでは、お元気で。

君の終生の友 ユーノ・スクライアより
P S いつか君がスクライア一族に会ったのなら、みんなにユーノは立派に生き、そして最後まで使命に従順したと伝えてください。」

僕は、前足二本で持っていた鉛筆を置き今書いていたメモ用紙を眺めた。

ふうー、こんなところかな。ちょっと大きさに書きちゃったけどいいよね？遺書みたいなものだし

「ユーノ君、準備できたよ！」

なのはが晶と僕の部屋のドアを開けて入って来る。
僕は、なのはがドアを閉めたのを確認してから答えた。

「うん、僕も今出来たところだよ、なのは」

「……すずかちゃんのところ遊びに行くのに何の準備をしたの、ユーノ君？」

「うん……晶への手紙かな」

「ふーん」

「準備できたか、なのはッ。もうすぐバスの時間だぞ」

「はい。今行くから待ってて、お兄ちゃん」

下から恭也さんの声が聞こえてくる。

僕達が向かうのは月村邸。

通称、猫屋敷だ。

僕を狙う狩人が何匹もいる場所。

前に晶と恭也さんに連れられていった時のことを僕は生涯忘れられないだろう。

猫に追い掛け回されたあのサバイバルレースを……

どうか今日一日無事でいられますように！

Side 恭也

ユーノの奴、やっぱり前のことを引きずってるのか

哀愁を漂わせ何処からかドナドナが聞こえてきそうな雰囲気をもし出すユーノを俺は、隣の座席から眺めていた。

あれは、ついこの間の事だ。

ジュエルシード探しの件で俺が仲介して忍に晶とユーノが協力を頼みに行ったときあいつは死にそうな目にあつた。

犯人は、すずかちゃんが世話をしている猫たち。

ユーノを見た猫たちが一斉にアイツに襲い掛かったのだ。

猫の大群が一匹のねずみ（ユーノ）を廻る狩りの光景は、見ていて壮観だったな。

しかも、全員目が殺ルって書いてあつたし。

忍たちが猫たちにやめる様に言っただけど聞きやしない。

結局、追い詰められて脂汗流してた所をノエルに助けられて猫たちを部屋から閉め出して騒ぎが収めたっけな。

だからまあ、トラウマになつて行きたがらないのも仕方が無いか

でも、今回は前の時と違ってすずかちゃんがいる。

彼女の言葉なら猫たちも無碍には出来ないだろうから大丈夫だろう。

そんなことを考えながら、なのはの肩でぶるぶる振るえながら耐えているユーノを眺めていた。

Side なのは

なぜかユーノ君は、すずかちゃん家に行くのを嫌がつてたの。

でも、アリサちゃんやすずかちゃんがユーノ君が来るの楽しみにしてるって言ったら、行くって言い出したけどどうしたのかな。

しかもお兄ちゃんは、こつちを見てなぜか笑いを堪えてるみたい、失礼だなあ。

そんなこんなしてるうちに、私たちは月村邸に着いたの。

ちなみにお兄ちゃんは、すぐに忍さんと2人で部屋に籠っちゃいました。

先に着いてたアリサちゃんとはやてちゃんたちで、もうお茶会を始めてるみたい。

大人の猫さんたちは、やっぱりザフィーラさんを怖がってるからか近づかないの。

でも、怖いもの知らずの子猫たちはザフィーラさんにちょっかいをかけて遊んでる。

まあ、ザフィーラさんもされるがままにしてるから問題ないけどね。

そういえば猫さんたち、ユーノ君の姿見ながらうずうずして私の足をうろろろしてる。

ユーノ君もそんな猫さんたち見て怯えるみたいに私にしがみ付いてるよ。

ノエルさんが来て何かすずかちゃんに伝えてたの。そしたら、すずかちゃんが猫さんたちにダメって言ったたら大人しくなったよ。

ユーノ君も安堵のため息ついてる。

「キユイイ」

「おはよ、なのは」

「おはようさん、なのはちゃんにユーノ君」

「おはよう、なのはちゃん」

「みんな、おはよう」

「それと、ユーノ君ごめんね？家の仔たちが君を狙ってたみたいで」「キユウ」

謝罪を聞いたユーノ君は、すずかちゃんのところに行って気にしないでって伝えるみたいに顔を舐めたの。

すずかちゃんにもそれが伝わったみたいでした。

「それにしても、ほんまに晶君来んのやね。氣い変わってくるかも
って私期待しとったのに……」

「あんな奴来なくて清々するじゃない、はやて」

「アリサちゃん酷いよ。友達に向かって清々するだなんて……」

「何や、アリサちゃんもしかして晶君、氣にしとるんか？」

「なっ……何言つてのんよ、はやて！」

「嫌よ嫌よも好きの内言うからなあ」

「失礼な事言わないでよ！私はただ氣に入らない奴が来なくてよか
ったって」

「せやったら、どうして氣に入らんの？晶君優しくてええ人やん」

「それは……アイツ私たちのこと年下の妹か何かみたい扱
うのよ」

「確かに、晶君ってなんかお兄ちゃんみたいだよ」

「でしょ、なのは」

「でもそれって、晶君の方が私たちより誕生日早いからじゃないか
な？」

「何言つてんのよ、すずか。同じ学年なんだからそんな意味ない
じゃない」

「でも、そういう風に晶君が感じ取るならしょうがないちゃうん？」

「はやてちゃんの意見に私もすずかちゃんも同意するように頷いた
の。」

「でも、アリサちゃんはそれが納得いかないみたい。」

「だからって、対等に扱われないのが氣に入らないのよ！そういう
はやてこそ、さっきの『も』ってどういう意味なのよ？」

「私？私は晶君好きや」

「今胸がチクツて……」

「へえ、素直じゃないの」

「別に恥ずかしがる事ないやんか。友達を好き言っておかしいん？
・・・まあ、今は友達としてやけどな」
「・・・今のなんだったんだろ？」

最後のはやてちゃんの眩きは、小さくて何を言っていた聞き取れ
ませんでした。

もしかして、病気？・・・でも、すぐに治まったしきつと大丈夫
だよな

「・・・なのはちゃん、どうしたの？」

「そうよ、なのは」

「どっか痛いんか、なのはちゃん？」

この前3人で何かあったら相談するって決めたけど、2人にはな
ぜか話しちゃいけないことのように思えます。

とりあえず、また痛むようならお母さんに相談してみよう

って結論付けてみんなに答えました。

「違うよ！ただ・・・ヴィータちゃんたちいないなって思って」

「ああ、なのは遅れて来たからまだ聞いてなかったけ、今日来たの
はザフィーラとシャマルさんだけだったこと」

「そうなの、はやてちゃん？」

「うん。ヴィータは、老人会のおじいちゃんたちにゲートボール教
えてもらうとるんよ」

「へえー」

「そんでな、シグナムは近所の剣道道場に・・・アレって道場破
りってことになるんかな？」

「・・・道場破り！？」

「はやてそんなこと私達も聞いてないわよ！？」

「ま、待ってえな！そないに興奮せんといて。確かに言葉が悪かったわ、ちゃんと説明するっ」

「いいわ、聞いてあげる」

「シグナムがその道場に猛者がいる気がする言うとったんや。それを確かめに行く言うてたんよ」

「だったら最初からそう言いなさいよ」

「せやけど・・・シグナムやからなあ、きつと試合申し込んで結局道場破りみたいな事しとるかもって思ったんや」

海鳴市 同時刻某道場にて

「クチュン」

「なんじゃ、お主風邪か？ならこんな事しとらんで家で寝ておらんか！」

「いえ私は、風邪などでは・・・とにかく、どうか手合せを！」

はやての予想通り、道場主のじいさんに土下座までして頼み込んでいましたとさ。

「なあんだそういうことか・・・って対して変わってないじゃない！！」

「はは、そりゃそうやな」

「いや、そこ笑うところじゃないから・・・」

笑ってるはやてちゃんに呆れながらアリサちゃんがそう突っ込んでいます。

私とすずかちゃんは、啞然としていました。

と、とにかく、話題を変えなくちゃ！

「そ、そういえば、今日シヤマルさんの姿、私まだ見てないけど何処にいるのかな？」

「えっとシヤマルさんね、家のファリンと一緒になの」

「ファリンさんと？」

「うん、2人とも初めて会ったはずなんだけど・・・」

「そうそう、なんか2人ともすごく意気投合しちゃったのよね」

アリサちゃんが、その様子を思い出しながら答えてくれました。

「シヤマルはドジツ子やからなあ、ファリンさんもドジツ子らしいし、案外ドジツ子ってことをお互い一目見て感じとったんとちゃうん？」

「あっきつとそれだよ、はやて。ほら、類は友を呼ぶって諺もあるしよ」

「じゃあ、今はお互いの苦労話でもしとるかもな」

「あはははは」

「・・・・・・・・・・」

はやてちゃんとアリサちゃんは、笑い出してしまいます。

私とすずかちゃんは、こっちを見てる2人に気づいていてそれどころじゃありません。

「って、シヤマルやないか」

「ファリンさんも・・・今の聞いてた？」

「・・・・はやてちゃんにありさちゃん、笑うなんてひどいです」「そうです、お2人とも。確かに私たちはドジばかりですけど、好きでしてるんじゃないんですよ」

「そうです。さっきだってファリンちゃんとどうしたらドジしないか話しあったのに・・・」

シャマルさんもフアリンさんも涙目で怒っています。

はやてちゃんたちは、慌てて謝っていますけど取り合ってくれませんか。

しばらくの間、2人の謝る声が庭園に響いていました。

私とすずかちゃんは、協力してシャマルさんたちを宥めにはいりません。

少し時間がかかったけど、みんな仲良しさんに戻ることが出来ました。

よかったー、このまま拗れちゃわなくて喧嘩別れしなくて

この喧嘩に思いの外、時間を取られてしまっていてお茶会は、そのあと少ししたら終わってしまいました。

ちなみにこの後の予定は、はやてちゃんのお家で晶君がザフィーラさんに稽古付けてもらってからジュエルシード探しをします。

でも晶君、稽古終わってからそんな体力残ってるのかな？

未封印ジュエルシード 残り14個

つづく

未熟な迷子 裏（後書き）

今、なのはが持っているジュエルシード7個という設定です。

2〜3話でN0・21とN0・16、3〜4話の間でN0・20とN0・14とN0・13、4〜6話でN0・10とN0・11となっっています。

4/10修正

未熟な旅行

リリカルガイバー 8話 未熟な旅行

Side ザファイラ

深町に稽古を付けるようになってから数日。

初めは、私の拳撃をただ受け続けるばかりであった。

だがこの頃、それに少し変化がおきている。。

揮われる拳に少しずつ反応し始めたのだ。

ただし、反応するだけで体が付いてきていないので避けるまでにはいたっていないが、この様子だとその内できるようになるだろう。

だから、最近では、フェイントも織り交ぜて攻撃するようになっている。

「まだたまにフェイントに引っかかっているが、明確な目標がある分、お前の上達は早いように思えるな」

「ありがとうございます」

「さて今日は、これで終わりだ」

「はい・・・あ、そうでした今度の連休のことなんですけど・・・」

深町の話では、次の休日に高町家、月村家の面々とアリサ嬢が合
同で旅行に行くらしい。

その旅行へ我らも行かないかとの誘いであった。

だが、我一人では返事出来ず、後日改めて返事すると言う事になった。

その話を夕餉時に主たちに話すと参加が決まる。

温泉というものを知らぬシグナムとシャマルに主とヴィータ（おそらく最近ヴィータが通うようになった老人会のご老人方にも聞

いたのだろう」が熱心に説明している。

その傍ら、我は一人留守番をする心積もりだった。

スクライアのような小動物の姿ならともかく我のような狼の姿では、旅館や他の客に迷惑がかかるだろうと思っていたからだ。

「そういうわけで、旅行には主とシグナムたちだけで御行きください」

「ザフィーラだけ置いて行けるかい！それに人間モードで耳と尻尾を隠して参加すればええだけのことやろが」

「さすが、はやて！だったら、明日ぐらいにこいつの服買いに行かねえと」

「そうやなヴィータ。それに1泊2日らしいし旅行鞆も買わなあかな」

この日、主たちは旅行の話に花を咲かせていた。

そして、瞬く間に時が流れ今我は、バニングス家の執事である鮫島殿の運転する小型バスに乗っている。

「じゃあ、次は私とすすか、なのはのトリオ」

「曲名は、『LEVEL5』」

「『judge light』ですっ」

「がんばりー3人とも！」

「はやて、はやて。次あたしと一緒に歌おうぜ」

「それええな、ヴィータ。じゃあ曲目は……」

「これなんか良いんじゃないですか？」

「シヤマル？……そうやね、この『謳つ丘』ならヴィータがこ

の前やつとつたRPGゲームの主題歌やし」

「サンキュー、シヤマル。この曲なら歌詞見なくても歌えるぜ」

「いえいえ」

シャマルは、そう言いながら主たちの後ろの席に戻っていった。
ふむ、次は主たちが歌うのか……

とうとうに気になり偶然、相席する事となった隣の女性に尋ねた。

「ノエル殿は、歌わないのですか？」

「いえ、私は……」

「そうですか……」

このあと、旅館に到着するまで彼女と会話らしい会話をする事はなかった。

Side アルフ

あたしは今、紙袋を手にフェイトの待つ場所へと走っていた。

ここは、街から離れた旅館の近くの森の中。

あたしらは、ここにジュエルシードを探しに来ている。

そして、あたしは買出しの帰りって訳だ。

「おかえり、アルフ」

「ただいま、フェイト。どうだい、見つかりそうかい？」

「うんうん、もう少しかかりそう。でも、今夜には捕獲できそうだよ」

「そうかい、さすがはあたしのご主人様……だったら、ちょっと休憩しようよ」

「もうちょっとだけ、がんばるからアルフだけ先にしてて」

「はあ〜」

まだ一つも手に入れてないから焦ってるんだろうね……こうなっ

たら秘密兵器を投入しないとね

あたしは、紙袋の中からまだほのかに暖かいたい焼きを取り出した。

これは、あの日晶と一緒に食べてからフェイトの好物になったんだよ。

あたしが用意する食事には、手を着けないのにたい焼きだけはしっかり食べるんだ。

栄養が偏るのは分かってるけど、何も食べないよりはましだっことでよくだい焼きを買ってくる。

そのおかげか、顔色も断食してた頃より心なしか良くなっているように思うよ。

「ほらフェイト、たい焼きもあるから食べようよ。さめるとおいしくないよ」

「・・・・・・・・わかったよ」

木の上から降りてきたフェイトにあたしは、紙袋を渡したんだ。そして、たい焼きを1コ取り出してモフモフと食べ始めたんだよ。でも、すぐにあたしがたい焼きを持ってない事に気づいたんだ。

「アルフは、食べないの？」

「いや、あたしにはこのドックフードがあるからね、全部お食べよ」

「うん」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

しばらく、お互い無言で食べてたんだけどフェイトのほづから話しかけてきたんだ。

「……アルフ、別に私に付き合わなくても良かったんだよ？
今からでも、近くの旅館に……」
「いいやあたしはフェイトの近くに居るよ」
「……そう、ありがとうアルフ」
「お礼なんて、いいよ。だってあたしはフェイトの使い魔なんだからね」

そして、もうしばらく休憩をしてからフェイトは探索を再開したよ。

あたしは、フェイトの近くに寄り添ってその様子をずっと見守っていたんだ。

Side アリサ

初めてザフィーラさんと会った時驚いたわ。

だって、犬のザフィーラと同じ名前だったんだもの。

でも、理由を聞いたらまあ納得できたけどね。

なんでもザフィーラさんは、元々シグナムさんたちと同じようにはやての親戚の人と一緒に暮らす予定だったんだけど、一年のほとんどもをNPOの活動で海外を回ってるんだって。

それで、自分の留守の間はやてたちを守る存在として、自分と同じ名前を付けた犬をはやてにプレゼントしたらいいんだよね。

今回の旅行とはやてたちの様子を見に一時帰国したザフィーラさんが、偶然重なって急遽参加が決まったってわけなのよ。

それにしても。犬のザフィーラとこの人が一緒にいる時どう呼べばいいんだろ？

話は変わるけど、旅館についた私たちはさっそく温泉に入る事に

したの。

だけど、晶の所為で私は今とっても不機嫌です。

あいつ、ユーノを渡さなかったのよ！せっかく洗ってあげようと思っただのに

しかも、晶だけじゃなくて、恭也さんやザフィーラさんも味方につけてたんです。

それに、その2人もすごい気迫で反対してたのよね。

何でフェレット一匹にあんなに必死になんてたんだろう・・・

「ひあつ!？ はやてやめなさいよ!？」

「ええやんかアリサちゃん。へるもんやなしに」

「ひゃあああああつ!？ このつだったら仕返しよ!!」

私は、やるのは良いけどやられるのは嫌なのよ!

「ツシグナム撤退や!」

「シグナムさんツなんではやてに協力してるんですか!？」

「・・・すまん」

シグナムさんは、謝りつつはやてをヴィータに預けて私の前に立ちただかったの。

「だったら、私にも考えがあります・・・えいつ」

「きやつ!？な、何をやるバニングス!？」

「何って、はやての代わりにシグナムさんにマッサージさせてもらいます」

最初の一撃は、想定外だったのか簡単に受けてくれたけど、その後すぐに胸を両手で庇いながら後ろに下がったの。

でも、私はさらに手をワキワキさせながらシグナムさんに近づい

ていったのよ。

脱衣所の中、逃げ回ってたけどやっとの思いで角に追い詰めてじつくりと堪能させてもらったわ。

感想、形も良く大きくて揉み応えたつぷりかといって硬すぎず柔らか過ぎず……結構なお手前でした。

そのあと、はやてにもしっかり復讐してやったわ。

はやてって見た目よりよっぽど（検閲：読んだらアカンよ by はやて）だったわね

他にも、シヤマルさんにノエルさん、ファリンさん、美由紀さんみんなすごかったわ。

それとはやても、私を襲う前にみんな（なのはたちも含む）を襲ってみたい。

Side 晶

何か、温泉からもどつたらなのはちゃんたち、年少組の様子がおかしかったんだ。

はやてちゃんを見て顔を赤くしてたりしてたよ。

すずかちゃんなんて、ノエルさんの影に隠れてはやてちゃんの正面に立とうとしないんだ。

美由紀さんとかシヤマルさんたち、年長組の人は、笑ってるだけで何も教えてくれないし……

「……………ねえなのはちゃん、はやてちゃんとお風呂で何かあったの？」

「！？晶君のエッチッ」

「え、あのなのはちゃん？」

「行く、すずかちゃん、アリサちゃん」

なのはちゃんは、すずかちゃんとアリサちゃんを連れてどこかに
行っちゃったんだ。

ただ、僕は何があつたのか知りたかつただけなのに……

「晶、なのはと喧嘩でもしたのかよ？」

「ああ、ヴィータちゃん。そうじゃないんだよ。僕はただなんでみ
んなはやてちゃんを避けてるか聞きただけなんだ」

すると、ヴィータちゃんまで顔を赤くして怒鳴ってきたんだ。

「こ、このバカ！お前は、知らなくていいんだよッ」

「え、でも、心配だし……」

「とにかく、その話は二度とするな良いなっ？」

「あ、あのヴィータちゃん？」

「い・い・なっ？」

「……はい」

結局、ヴィータちゃんの迫力に負けてそう言っちゃたんだ。

でも、なのはちゃん達も何処かから戻ってきたら元に戻ってたか
ら大丈夫だよな、きっと。

Side シャマル

夕食に出された山の幸をふんだんに使われた料理を堪能し、今私
たちは食休みしてます。

……お茶飲んでるし、これはチャンスよね？

私は、鞆の中から一つの箱を出して机の上に置いたんです。

「あの・・・お茶菓子にこれをどうぞ、私が焼いたクッキーです」
「ほおー、では一つ・・・」
「・・・あのとうですか、土郎さん？」
「・・・うん、中々おいしいですよ、シャルルさん」
「ありがとうございますっ」

私は、思わずお礼を言っちゃいました。
これで、今までの苦労も報われます。

もうみんなに、ドジッ娘なんて言わせません！

土郎さんの言葉を聞いた他の人たちも手をつけてくれます。
みんなおいしいって言うてくれます。
その中には、晶君の姿もありました。

「シャルルさん、おいしいですよこれ！」
「はい、今の私があるのはあの時晶君が励ましてくれたからです。
ありがとうございます」
「べ、別にお礼なんていいです、僕は思った事を言っただけですか
ら」
「ふふふ、顔、真っ赤になってますよ？」
「ツも一ついただきましたね!？」
「はい、いくらでも食べてください」

晶君は、照れ隠しなのかクッキーをどんどん食べていきます。

ふふふ、元々このクッキーは、晶君に食べてもらつたために作ってき
たんですよ

「（モグモグ）・・・ウグッ!？」

「ああ、ほらそんなに焦って食べるから。はい、お茶ですよ」

「……………」

「?どうしたんですか、晶君……晶君?」

「……………」

いくら呼びかけても返事がありません。

他の人たちも異変に気づいてこちらを見えています。

「どうしたんだよ、シヤマル」

「ああ、ヴィータちゃん。晶君が突然返事しなくなっただけです」

「晶が?おい、晶!…………シヤマル」

「何ですか、ヴィータちゃん?」

「こいつ、気絶してるぞ」

「え、え!?!」

「さっきまで、こいつ何してたんだ?」

「え、普通にクッキー食べてただけですよ」

「(カリッ)…………別に可笑しなところないぞ」

「じゃあ、晶の食べてたこのクッキーが原因か?(カリッ)ウグツ」

「ええッヴィータちゃんまでえ!?!」

その後、分かった事なんですけど、低確率で失敗作ができるみたいなんです。

しかも、味は前以上に酷い物で一口で一晩気絶するほどだったんですよ。

やっと、治ったと思ったのに……………

さらに、悪い事は続くものなのか旅館の近くでジュエルシードが発動したみたいなんです。

晶君は気絶してるからなのはちゃんとユーノ君の2人だけで飛び

出して行っちゃいました。

シグナムやザフィーラも着いて行くって言ったんですけど、「いつまでも晶君に頼ってばかりじゃいけないと思うんです。」

それにヴェータちゃんにアドバイスもらって訓練したから大丈夫ですよ、「って断つたらしいです。」

でも、結局なのはちゃんたちは、ジュエルシードを持ち帰ることができませんでした。

フェイト・テストロツサっていう女の子の魔導師とその使い魔に負けて持って行っちゃったらしいです。

うえ〜ん、もしかして私の所為ですかあ!?

つづく

未熟な旅行（後書き）

女風呂の描写、変じゃないですよ？

4 / 10 修正

未熟な交渉

なのは達は今、あの日の夜、気を失ってた晶にフェイトの事を説明していた。

「その子、本当にフェイトって言ったの?!」

「うん、でもどうしてそんなに驚いてるのさ、晶」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「晶君前に言ったよね。気になることがあるなら何でも話し合おうって」

「なのはちゃん・・・・・・・・そうだね、言いだしっぺの僕がこれじゃあいけないよね」

晶は、苦笑を浮かべてそう言ってすぐに、顔を引き締めてしゃべりだす。

「まず、今から言う事は、未確定だって事を頭に入れておいて2人とも。名前や姿が同じ人間なんて探せば、いくらでも出てくるだろうから」

「うん」

「わかったよ」

「じゃあ話すけど・・・・・・・・僕ね、そのフェイトって子に心当たりがあるんだ」

「え!?!」

「ど、どういことさ、晶!」

「すずかちゃんちに二人が行った日にね、街で迷子になってた子と友達になったんだ、その子の名前がフェイトっていうんだよ」

「あの日に?」

「そう、もう一人アルフっていうお姉さんと一緒にこの辺りに引ッ

越してきたって言ったんだ」

「あ！そういえば、あの子最後に使い魔の人をアルフって呼んでたよ、晶君」

「え……そうなんだ。じゃあ本当に同一人物なんだね」

なのはの追加情報を聞くと晶がポツリとそう呟いた。

「あの……それじゃあ、これから僕達はあの魔導師の子をどうすればいいと思うの、晶？」

「そうだね……あくまで僕が知ってるフェイトちゃんは、悪い事をするような子じゃないと思うんだ」

「じゃあ、あの子と戦わなくていいんだね、晶君！」

「だといんだけど……とりあえず、話を聞いてみないとね」

「でも、フェイトちゃんは言葉だけじゃ、何も変わらない、伝わらないって……」

「確かに、何も変わらないかもしれないね」

「だったら「でもっ」え？」

「でもさ、結局戦うことになったとしても何もしないよりましだと思いますんだ」

「……そっか……そうだよね！」

「じゃあ、僕がフェイトちゃんと話してみるから「晶君、その役私にやらせてくれないかな？」なのはちゃん？」

「私、あの子とちゃんとお話してみたいの、お願い晶君」

「……この役ってかなり危険だよ」

「わかってるよ。それでも、なんだかあの子とお話したいの。だからお願い！」

「……僕は、アルフさんの相手で手一杯になるだろうから気を付けてね」

「うん……」

「それじゃあ、とりあえず次に会ったときは、例え相手が拒んで、

戦いながらも呼びかけ続けるって事だよ、なのは

「うん」

「でも、それってすごく大変なことだよ？それでも、やるんだね、なのは」

ユーノは、念を押すようにもう一度尋ねてもなのはの考えは、変わらない。

「うん、やっぱり言葉にしないと伝わらない事ってあると思うんだ。だから、私がんばるよ」

「ハア~~~~・・・わかったよ、僕も協力する。防御は僕がするかなのは、思う存分『お話し』しなよ」

「ありがとう、ユーノ君！」

「あゝ・・・気合を入れてる二人には申し訳ないんだけど、もしかしたら戦闘しながらじゃなくても話し合いができる方法を今思いついたんだけど・・・」

「え、ほんと晶君！」

「そうだよ、どんな事思いついたんだい、晶」

この後、晶が思いついた方法は、2人にとってとても信じられないものだった。

リリカルガイバー 9話 未熟な交渉

Side ずっとか

最近なのはちゃん、私たちに何か隠し事知るみたいなんです。

アリサちゃんもその事気にしてるみたいだけど、なのはちゃんは何も言ってくれないからアリサちゃんのイライラが募っていました。そこで私たちは、人目の無い体育館裏に呼び出して事情を聞くことにしたんです。

でも今、アリサちゃんのストレスが目の前で爆発しちゃってるんです………関係ない晶君に向かって。

アリサちゃん、これじゃあただの八つ当たりだよ

「いいから、ささつと知ってる事しゃべりなさいよ!」

「いや、突然こんなところに呼び出されて急にそんなこと言われても何がなんだか………」

「そうだよお、アリサちゃん。説明もなしに尋ねても晶君、何の事かわからないよ」

「………そうね」

アリサちゃんは、一度深呼吸して気持ちを落ち着けてから話し始めます。

「最近なのはちゃんの様子が変なのあんたも知ってるでしょ?一緒に暮らしてるあんたなら何か知ってるでしょ」

「………本当は、なのはちゃんが話してくれるまで待つてた方がいいのは、分かっているんだけど何か危険な事に巻き込まれてるんじゃないかって不安なの、この前街中に突然木が生えてきたりしたから。だから何か知ってるなら、教えてくれないかな晶君」

「う~~~~ん………」

晶君腕組んで何か考えてる、やっぱり何か知ってるんだ

「もったいぶらずに話なさいよ!なのはが何か困ってるなら私達も手伝う事だつてできるんだから」

「………そうだね、なのはちゃんには話さないでつて言われてたけどそろそろ限界かもね」

「どづいづこと、晶君」

「うん、今なのはちゃん、探し物をしてるんだよ」

「何で、それを私たちにも隠さなきゃいけ・いや、なのはなら私たちに迷惑になるからって言わないわね」

「あの・・・それで何をなのはちゃんは探してるの？晶君」

「う・う・ん、僕も詳しくは知らないけど海鳴市内できれいな石を探してるみたいだよ」

きれいな石・・宝石なのかな？

「ふ・ん、それで私たちに何か手伝える事ってないの？」

「・・・・・だったら、僕みたいに目撃情報を集めてくれないかな？さすがに範囲が広すぎて探すのに苦労してるみたいだから」

「ああ、だから最近アンタクラスの男子たちに噂話とか聞いてたのね・・・・・だったら、化け物の噂まで集めてたのは何でなの？」

「そっいえば、晶君が怪物とかの噂も集めてるって聞いたことあったね」

「あ、ああそれは、僕の趣味だよ。都市伝説とかの話を書く傍らで聞いてたんだ」

「へえ・・・、あんたにしては変わった趣味ね・・・」

「は、ははは」

アリサちゃん、晶君の様子が変わるのに気づいて疑ってるみたい

「・・・・・いいわ、理由は聞かない。でも、なのはにケガとかさせたら承知しないからね」

「うん、それに関しては僕もしっかり守るから大丈夫だよ」

「やっぱり、何か危険な事に首突っ込んでるんじゃない!!」

「あ・・・・・じゃあ情報よろしく!!」

あ、晶君すごい勢いで走ってちゃった

「チツ、逃げられたわ。まあ、何も知らなかった前よりはマシね」

晶君もなのはちゃんもケガとかしないでね

私は、晶君が走り去った方を向きながらそう祈っていました。

S i d e 晶

あ、あぶなかったー・・・アリサちゃん鋭すぎだよ

僕は、まだ2人がいるであろう体育館裏を見ながら息を整えていた。

とりあえず、口裏合わせてもらうためになのはちゃんには、さっきのこと話しておかないと

S i d e なのは

最初聞いたときはびっくりだよ。

だって、アリサちゃんとすずかちゃんに私が探し物をしてることを話したって聞いたからです。

でも、よく聞いて見るとジュエルシードのことや魔法の事は話してないって分かりました・・・ただ、危険な事に関わってるって気づかれたばいってところが気懸かりです。

明日、学校で問い詰められたりしないかなあ？

幸い今日は、すずかちゃんとアリサちゃんもお稽古があるから一緒に帰らなかったけど、アリサちゃんの私と晶君を見る目がひしひしと感じていました。

「どづしたの、なのは？」

「え、なんでもないよユーノ君」
「うん、明日の事、考えるとちよつと憂鬱だなあつて・・・」
「ああ、アリサちゃんからの追求だね。確かに・・・晶、もつとうまく誤魔化せなかったの？」
「い、いやアリサちゃんの巧みな誘導尋問に引つかかっちゃったから・・・面目ない」
「いいよ、晶君そんなに思いつめなくても」

私たちは、ビルとビルの間を通りながら目的地に向かっているの。
今回は、街中を探し回るんじゃなくて晶君が集めてくれた情報を頼りにジュエルシード探しです。

「キユウ！」 『あ、あつたよなのは！』

「発動してないみたいだし、さくつと封印して例の作戦開始というか、2人とモ」

「キユツ」 『了解だよ、晶』

「うん。お願い、レイジングハート」

【All right】

そして、ジュエルシードを封印して、私たちは作戦通り行動を開始したの。

Side アルフ

この前の白い子から勝ち取った一個と封印したジュエルシード一個を持ってあのオニババのところに行つて来たフェイトは、体中に酷いキズを負つて帰つてきたんだよ！

あたしは、がんばったフェイトがこんな不当な扱いに腹を立てて文句言つてやるうとしたんだけど、「私が悪いんだよ・・・だから、

そんなことしないで」「ってアイツを庇うんだ。

それに、あんまりご飯も食べないしケガの手当てもしないで、探索に次ぐ探索の毎日。

「……これ以上、フェイトに無理させないようにあたしがガンバ
ンないといけないね

「アルフどうしたの？怖い顔して」

「いいや、なぐんでもないよ」

「そう……ッ 結界!？」

「……どうやら先越されたみたいだね……封印はあつちでやつ
てくれるだろうしフェイトは先に帰ってておくれよ」

もう封印されてるだろうし、あとは横取りして逃げればいいからね。
それくらい……

「どうするつもりなの、アルフ？」

「なーにちよつとジュエルシードを頂きにね。あの白い子と使い魔
ならあたし一人で十分だよ」

「……大丈夫？」

何も言わなくてもフェイトはあたしの考えてることを分かってくれ
てる。こういうのをこの国では以心伝心っていうんだったね

「何言ってるんだい、このあたしを誰の使い魔だと思ってるんだい？」

「でも……心配だし」

「あー、わかったよ。だったら、フェイトは見てるだけ！実動はあ
たしだけでやる。これでどう？」

「……わかった。でも危なくなったら助けるからね」

「大丈夫だって……」

そう大丈夫に決まってる。あんな甘ったれのガキンチョなんかに負
けるわけがない

やっぱり、結界を張れば探さなくてもあつちから来てくれたよ。これで作戦の第一段階終了

僕があの時2人に提案したのは、まずフェイトちゃんたちより先にジュエルシードを発見、そして封印してからユーノが結界を張りこちらの位置を知らせる。

目論見どおり、ザフィーラさんみたいな獣モードのアルフさんと街灯の上に立つてる黒いバリアジャケットを着たフェイトちゃんが現れた。

「こんにちは、フェイトちゃん、アルフさん・・・いやもうこんばんわだね」

「どうして、晶がここに・・・それにその白い子達は」

「まさかそいつらの仲間!? あたしたちを騙してたのかい!」

「違いますよ。あの時あったのは、偶然。そもそもフェイトちゃんたちが魔導師だったことはこの間の旅館の近くの時の後にはちゃんたちから聞いたんだですよ?」

「・・・なのは?」

「ああ、紹介しますね、こっちの白いバリアジャケットの子が高町なのはちゃん、そしてこっちのフェレット? がユーノ・スクライア、ジュエルシードの発見者兼持ち主です」

僕は、フェイトちゃんの疑問に2人を前に出して紹介する事で答えたんだ。

ユーノとなのはちゃんは、2人に自分で改めて自己紹介をしてる。そして、ここからが作戦の第二段階・・・

「2人に提案があるんだ、僕達が今封印したこのリアル19のジュエルシードをフェイトちゃんたちに渡すよ」

「え!?!」

「はあ!？」

2人とも僕の言葉に相当驚いてみたいだ。まあ当然か、向こうは戦
う気で来たんだろうから

「もちろん、ただでってわけじゃないよ？」

「まさかこの一個でジュエルシードから手を引けっことかい？」

「.....」

「違いますよ。ただ、今から僕たちとお話をしましょうっただけで
す」

つづく

未熟な奇襲

リリカルガイバー 10話 未熟な奇襲

Side フェイト

あの白い子とは次に会うとき、ジュエルシードを巡って戦う事を覚悟していました。

しかも、この場には晶も待っています。

私には、何がなんだか分かりませんでした。

でも、アルフがそんな私の変わりに聞きたいことを聞いてくれます。

そして、分かった事は、私たちの出会いは仕組まれた物ではなく、ただの偶然どということ。

あの時の晶の言葉にうそはなかったんだ・・・よかった・・・

「この前は自己紹介できなかつたけど私、高町なのは。私立聖祥大付属小学校3年生、友達はなのはって呼ぶよ」

「僕は、ユーノ・スクライア」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ふん」

返事を期待してなかったのが高町さんたちは、気にしていないみたいですね。

アルフの方は、不機嫌そうに3人を眺めています。

晶もその事には、触れず話を進めていきました。

シリアル19のジュエルシードを私たちにくれるといい、その見返りに話を聞かせて欲しいという申し出です。

「……………どうするんだい、フェイト。あたしは、悪くない条件だと思っよ」

「……………そう……だよ」
戦わなくていいならそれに越した事ないよね。晶とも戦いたくないし……………

「晶、その提案受けます」

「ありがとう、話し合いを受けてくれて。さあ、なのはちゃん後は、約束どおり君に任せるよ」

このまま、晶が話すんじゃないんだ

「うん」

「……………」

「……………」

私と高町さんは、少しの間お互い無言で向かい合っていました。

高町さんは、どう話し出そうか迷うように口をあけたり閉じたりしています。

でも、どうするか決めたのか彼女は、一度大きく深呼吸してから口を開きました。

「……………あ、あの！私がジュエルシードを探してるのは、ユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いだったけど、今は自分の意思で集めようって思ったの。自分の暮らしてる街や周りの人たちが危険な目に会うのが嫌だから……これが私の理由だよ」

「……………どうして、そんな話を私にするの？」

前に言葉だけじゃ何も伝わらないって言ったのに……………

「晶君に気づかせてもらったの。例え争い合う事になっても、理由

も知らずにするのは私嫌なの。それにもしかしたら、戦う必要もないのかもしれないから」

「え……」

「だから、フエイトちゃんの集めてる理由教えてくれないかな？もしその理由が悪い事に使うんじゃないなら私たちの持つてるジュエルシードも全部渡すって私たち3人で話し合っただけで決めたの。それに協力だつてするつもり。だから、話してくれないかな？」

「わ、私は……」

私が集めてる理由。それは……

「……母さんのため」

「え？」

「理由は知らないけど母さんの夢を叶えるために必要だつて言うてたから」

「そうなんだ、お母さんのために……」

「うん」

「ちょっと待って、フエイトちゃん！じゃあ君は、何に使われるかも知らずに集めてるって事？」

・
・
・

この会話がきっかけで私たちは、あれから2時間ほどたった現在の庭園の中を歩いています

目的は、母さんの所にジュエルシードを届ける事と晶たちとの約束を果たすための二つです。

その約束は、母さんにジュエルシードを集めてる理由を聞いてくること。

ちなみに、私の手には1つシュークリームが入っている箱を持っています。

「じゃあ、次に会うときまでに母さんに聞いておくね、晶」

「待って、フェイトちゃん」

「どうしたの、高町さん」

「これ私のお父さんたちがやってる店のシュークリームなの。おいしいからアルフさんとフェイトちゃんも食べてみて」

って高町さんが帰り際に渡してくれました。

2個人っていたので、アルフと私で1つを半分にして食べました。

とっても、おいしかったな……

私は、母さんにも食べてもらいたくてここに持ってきています。

でも、アルフはいい顔していませんでした。

「フェイト、それあの鬼婆にかい？」

「アルフ、母さんをそんな風と呼んじゃダメだよ」

「でもさあ……」

「でもないよアルフ……私怒るよ？」

「……分かったよ、もう言わない。でも……」

「でも？」

「どうせ持つて行っても食べやしないよ？それだったら私たちで食べた方が……」

って言うてましたけど、私の意志は変わりませんでした。

あ、そういうしてる間に着いたみたいです。

Side なのは

昨日は、フェイトちゃんとちゃんとお話できて良かったです。

「……………それにしても、今日のアリサちゃんやっぱりすごかったなあ」

予想通りアリサちゃんによる私と晶君への追及は、苛烈を極めまくらすのに苦労しました。

「ごめんね、アリサちゃん」

Side アルフ

あの鬼婆（あつフェイトには内緒だよ）のどこから帰ってき手からフェイトの様子がおかしいんだ。

またいつものようにケガをして帰って来たんだけど、今日のはさらに顔が真っ青になってたんだよ。

「ごめんよ、フェイト」

「何で謝るのアルフ……………とにかく地上に帰ろ」

「……………何言ってるんだい！まだ顔色悪いんだよ！？ほらまだ寝てなよ」

「大丈夫、体調が悪いわけじゃないよ。ただ、母さんにお説教されてから話してきただけ……………」

「そんなわけないじゃないか！真っ青になって帰ってくるなんて初めてなんだよ！？」

「それは だから」

「え、なんだって？」

あたしは、か細くてよく聞き取れなかったんでフェイトに耳を近づけたんだよ。

そしたら、とんでもない事を言ってたんだ。

「な！？本当にそう言ったのかい？」

「うん。母さんがそうしなさいって……」

あの鬼婆何考えてるんだ！ただアンタが何に使うか言えば無用な戦いをしなくて良いのに！！

あたしが憤りを隠せないように、フェイトも悲しそうにしてたよ。

Side ユーノ

やっぱり、なのはも僕もフェイトさんとの話して彼女の人となりが分かってきて戦わなくて良いんじゃないかって気がしてきたんだ。でも、晶が聞いてたフェイトさんのお母さんの理由によっては事情が変わるだろうけど……

「あんな良い子のお母さんなんだしきっと大丈夫だよ」って晶も言ってたしね。

僕もそう思います。

そして、今は発動を始めたジュエルシードを僕達は感知しました

「ユーノ君、これって！」

「うん、ジュエルシードが発動したんだ！！」

「ユーノ、いつもの結界を！」

「わかった。封時結界発動！」

「レイジングハート、お願い！」

「ガイバー！！」

僕の結界が展開されるとすぐに2人は戦闘モードに突入、そして晶に抱えられて（なのはが飛んでいくよりガイバーになった晶に抱えられてった方が速いんだ）急行したんだ。

そして、公園に辿り着いた僕たちは樹木を取り込んだであろうジュエルシードの前に辿り着いたんだ。

「ヴオオオオオ!!」

「フェイトさんは、まだ来てないみたいだね」

「うん。だったら先にこの厄介ごとを片付けよう、2人とも」

「「うん／了解」」

晶がそう言っただけはいつも通り前衛の晶、後衛の僕となのはに分かれたんだ。

Side 晶

今だと違って植物系の相手か・・・重圧砲で様子を見るか

僕は、前に出した両手の五指に意識を向けその間に極小ワームホールを形成、チャージを極短時間に止めた低力の衝撃波を投射したんだけど・・・

「・・・手前で弾かれた？」

これって、まるでメガスマツシャーを弾き返されたときみたいだ

「バリアーだ！晶、あのジュエルシード、バリアーを使えるみたいだよ！」

「ええ！ユーノ君、何かバリアーを破る方法はないの？」

「え？・・・ごめん、思いつかないよ。晶はなにわっ反撃し

てきた!!」

「考える時間はくれないかッ」

「ユーノ君、逃げて!!」

「うん!!」

ユーノは後ろの茂みの中へ、僕となのはちゃんは空へと逃れたんだ。

そして、さっきまで僕たちがいた場所をいくつもの根が蹂躪していったよ。

その様子を見たいたなのはちゃんが、次の手を考えて僕に話しかけてきたんだ。

「……………晶君、私試してみたい事があるんだけど良いかな？」

「え、うん。まだ何も考え付かないしやって見るだけやってみてくれる」

「うん。レイジングハートもっと高く翔んで!!」

【A i r r i g h t】

上昇していったなのはちゃんは、レイジングハートが砲撃形態にしたんだ。

そこでようやく僕は、なのはちゃん何を考えていたか気づいたよ。

「……………なるほど、重圧砲（極低力版）より威力の高い砲撃をするのか。それにしても……………」

「撃ち抜いて　デイバイン!!」

【B u s t e r !】

……………なんで、力技の打開策をなのはちゃんらしいって思ったんだろ？

しかし、なのはちゃんの砲撃もバリアーで阻まれてダメージを与

える事は出来なかった。

あれでもダメか・・・じゃあ接近戦に持ち込むか？いや、あの根で迎撃されて近づくのは困難だ。だったら・・・

「なのはちゃん！今度は、反対側からデイベインバスターを撃つて！」

「え、でもまた防御されちゃうよ！」

「今度は、同時に2方向から攻撃するんだ！僕も重圧砲を最大出力で撃つから合わせて！」

「うん！」

なのはちゃんが移動するのを見ながら僕は、もう一度重圧砲のチャージを始めた。

今度は、さつきみたいに中途半端じゃなく精一杯チャージしての最大！

「・・・いくよ、なのはちゃん!!！」

「うん！デイベイン」

「バスター!!ノッ!!！」

ドゥッ

「ヴオオオオオオ!!??！」

「やったあ！そうだ封印 レイジングハート、お願い!!！」

【Sealing mode set up】

「ジュエルシード、シリアル7 封印!!！」

なのはちゃんも封印になれてきたみたいだね

僕は、バリアーが破れた瞬間を見逃さず封印を行ったなのはちゃんを見てそう思ったよ。

S i d e なのは

封印を終えたジュエルシード回収のために地上に降りてきたの。
ユーノ君も終わったのに気づいて茂みの中から出て来たよ。
そして、私たちは戦闘モードを解除してジュエルシードの前でフ
イトちゃんをまつことにしました。

「お疲れ、2人とも！」

「うん、ユーノ君はケガとかして無い？」

「大丈夫だよ」

「それにしても、今回のジュエルシード今までより厄介だったね」

「そうだね、晶君」

「それに今日は、なのはちゃんにも助けられたし、ありがとう」

「ええッお礼なんて良いよ、晶君。こちらこそいつも助けてくれて
ありがとう」

「ゴホン、僕の事を忘れないでね？」

「あはは、別に忘れてたわけじゃないよ、ユーノ君」

「そうだよ、ユーノも結界サンキューな」

「だったらいいけどさ……」

「それにしても、晶君……重圧砲って怖いんだね」

「まあ、最大で撃ったからね」

私の視線の先には、いくつもの木の幹が大きく抉られ倒れている
林があるの。

それが、晶君の重圧砲の傷跡です。

改めてガイバーのすごさを実感した私でした。

そんな私たちの前にフェイトちゃんが獣モードのアルフさんと一
緒に空から降りてきてジュエルシードをバルディッシュに収めたの。

「あ、フェイトちゃんこんばんわ」

「……」

「?どうしたの、フエイトちゃん」

【Scythe form set up】

「え?」

「……ごめんなさい」

「あぶない、なのはちゃん!」

晶君の慌てた声を聞きながら私は、振り下ろされる黄色の大鎌の刃を見つめていました。

つづく

未熟な奇襲（後書き）

久しぶりのバトルです、どうだったでしょうか？

未熟な協力

リリカルガイバー 11話 未熟な協力

Side アルフ

「母さんが晶たちを傷付けてでも全てのジュエルシードを手に入れなさいって言うってたんだよ……」

これが、フェイトから鬼婆が突きつけた命令だったんだ。

フェイトは、「傷付けてでも」って言うってたけどあいつの事だ殺せって言うってたんだろうね。

晶たちと鬼婆を天秤にかけてフェイトは鬼婆を取ったんだよ。

あたしは、フェイトの使い魔。フェイトが望むなら血塗れにも何にでもなつてやるさっ

「……だから、フェイトの邪魔をさせないよ、晶！」

「ツアルフさん!!」

あたしは、高町を庇おうとした晶の邪魔をした。

……これでこいつとの縁も完全に切れたんだろうね

フェイトが選んだこととはいえ遣り切れないね。

そして、あたしたちの目の前でフェイトの刃が振り下ろされた。

「なのはちゃん!!」

Side フェイト

「……………どうして避けなかったの」

私には、始めから高町さんに当てるつもりはありませんでした。

こちらの敵意を見せてから警告するつもりだったんです。

でも、高町さんは何もなかった……無抵抗でした。

私の考えを知ら無いはずの彼女がなぜ何の抵抗もしなかったのか理解できませんでした。

「……………フェイトちゃんを信じてたから」

「そう、信じるのはあなたの勝手だよ」

ちゃんと冷たい声と顔で私言えたかな？

「……………晶君が言ってたよ、フェイトちゃんは悪い子じゃないって」

「そう……………」

晶……………

「それに昨日始めてちゃんと話した私でもわかってることはあるよ」
「？」

「それは、フェイトちゃんがとつてもやさしいお母さん思いの子だつて。それに、初めて会った時も攻撃を止めて警告してくれたよね」

高町さん……………でも、私は

「……………あなたたちはもうジュエルシードから手を引いて下さい」

「どうして……………」

「次は本当の潰し合いになります。私たちもそれを望んでいるわけではありません」

「どうして！ねえ、何があったの、教えてくれないと」「さよならフェイトちゃん！？」

「いいね、もし次会った時は大人しくジュエルシードを渡しなよ？
でないとかブリッっじゃすまないからね！」

「待つてフェイトちゃん、アルフさん!!」

私たちは、高町さんたちが呼び止める声を無視して去っていきま
した。

「……これでよかったんだね、フェイト」

「うん、私たちは、悪者に徹しなきゃ」

「……お願いだから、もう私たちの前に現れないで

Side なのは

「……あ、あれ?なんで立てないの?」

どうして突然、座り込んでしまったんだろ私

「どうしたの、なのはちゃんツ?」

あ、晶君やつとこつちを見てくれたんだ

晶君は、フェイトちゃんが去っていったから心ここに在らずって
感じできずとそつちを見ていたの。

「……それって、あの子のデバイスがなのはのすれすれを通っ
て行ったから、やっぱり怖かったんじゃないかな」

「ユーノ君?」

「ほら、極度の緊張が解けると腰が抜けちゃうって聞いたこと無い
?」

「ふえええ、そういうのって本やテレビの中だけだと思ってたよ」

「……じゃあ、なのはちゃんは、しばらく立てそうに無いね」

「にははは、そうみたい。またお願いできるかな、晶君」

「いいよ」

晶君は、そう言うといつかみたいに腰を屈め私が乗れるように

してくれませう。

私は、何とか晶君の背中に乗ってから気になったことを聞いてみました。

「重くないかな、晶君？」

「ううん……重いかなやっぱり」

「ひどいよおッ私が聞いたことだけど、それ女の子に言う事じゃないよ……」

「ごめん、ごめん」

私は、抗議するように晶君の背中をポカポカ叩いていました。

晶君は、私の為すがままにしばらくさせていましたが真剣な口調で私に話しかけてきたんです。

「……なのはちゃん、お願いだから2度とあんな真似はしないで」

「あんなことってさっきのこと？でも、フエイトちゃんなら」

それに、晶君でも同じ様なことしたんじゃないかな？

「うん、大丈夫だって僕も思ったけど、見てる方は気が気じゃなかったよ。僕も思わず体と声が出てたし」

「そうだよ、なのは。僕なんかもうダメだって思っちゃったよ」

「ええー、ユーノ君まで、そんな事言うの」

「言うよ。僕は、なのはになるべくならケガなんてして欲しくないよ」

「……それになのはちゃんにケガさせたら士郎さんたちに申し訳が付かないし、僕たちが恭也さんに殺されちゃうよ」

「2人ともそれは大げさだよ」

お兄ちゃんは、怒ると思うけどそんなことしないとと思うけどなあ

「いやいや、あの人ならやりかねないよ、ねえユーノ？」

「うん。あの人なのはのことにになると目の色が変わって危ない人に

なるから」

「なんで、2人ともお兄ちゃんのそんな一面知ってるの？」

私の質問に2人は、微妙な表情を浮かべるだけで何も話してくれませんでした。

しばらく経つと私も自分の足で歩けるようになり、思い切つて気になっていた事を晶君たちに尋ねてみました。

「ねえ、2人ともこれからジュエルシード探しどうしようか？」

「もちろん続けるつもりだけど……なのはちゃんは、やめても良いんだよ？」

「……それってどういうこと？私はもう必要ないの!？」

「ち、違うよ！封印だけならもうユーノが出来るし、フェイトちゃんたちとのこともあるから……」

「そうだよ。もうなのはが危ない事に無理に関わる事無いって……」

「イヤッ！私は、晶君たちがなんと言おうとやめないからね!!」

「一人ででも続けるんだから!!」

「まいったなあ……まさかなのはちゃんがここまで嫌がるなんて……」

「どうする、晶？」

「このままじゃ、一人で突っ走りそうだし……仕方ないか。ユーノ良いよね？」

「……そうだね」

「なのはちゃん、さっき言った事は取り消すよ。だから、力を貸してくれない？」

「……もう、私を仲間外れにしない？」

「しないよ！したこともない。ねえ、晶？」

「そうだよ、なのはちゃん。僕達は別にそんな事したいわけじゃないんだから……」

「そう・・・だよな。ごめんね、2人とも。変なこと言っちゃって・・・」

「気にして無いよ、なのはちゃん。でも・・・元々なのはちゃんが自分で言うまで何も言うつもりじゃなかったけど、こうなったら仕方ないか」

「どういうこと、晶君？」

「フェイトちゃんと戦うなら、土郎さんたちに説明してからにしよう。シャマルさんに頼めばケガしてもある程度なら治せるだろうけど、今まで以上に危ない事には変わらないんだから」

「お父さんたちに!？」

「フェイトちゃんを止めるためにも僕たちは、いつもなら学校に行ってる時間もジユエルシードを探す必要があると思うんだ」

「そっか、昨日フェイトさんは朝から夜までずっとジユエルシードを探してるって言ってたっけ」

「そういえば、フェイトちゃんそう言ってた」

「でも、土郎さんたちに何の説明もなしに学校を休む事なんて出来ないでしょ?しかも、どのくらい休むかわからないのに」

「そう・・・だね、晶君」

「でもでもッ何て説明したらいいのかな!?まさかいきなり魔法少女になりましたって言うわけにいかないし・・・」

「何処まで話すかは、なのはちゃんに任せるから」

「うん・・・」

Side ユーノ

なのはは、土郎さんたちに僕と出会ってからのことを僕の正体や魔法の事を伏せてその日の内に説明したんだ。

そして、危ない事になるってことだけは、伝えてたよ。

それでも土郎さんたちは、なのはがジュエルシード探しを続ける事を、そのために学校を休む事を許してくれたんだ。

まあ、なのはは知らないだろうけど前から色々協力してもらってたからね

それと、なのはが寝たあと僕と晶は、土郎さんと桃子さんに道場に呼び出されて、なのはを頼むって頭を下げられちゃった。

そして、今日までの1週間。

学校を「家の都合」ということで休み、フェイトさんと出会うこともなくジュエルシード発動前に2つ封印する事ができたんだ。

でも、フェイトさんも動いてるので僕達が向かったときには、すでに無くなっていたことが2回あったよ。

「……やっぱりフェイトさんも動いてるみたいだね」

「うん。私たちはジュエルシード9個、フェイトちゃんは少なくとも5個は手に入れてることになるね」

「残り7個だね」

こんな会話が あつたのが、3日前のこと。

でも、それ以降の情報は全てガラス瓶の欠片だったり、ビーズだったりではずればかりだったんだ。

今日は、晶と二手に分かれて探してたんだけど、大きな魔力を海の方から感じたんだ。

「キュツ？」 『……これって、もしかしてフェイトさん？』

「だったら、向かわないとツユーノ君結界は？」

「キュウウ……」 『無理。ここからじゃ、結界の範囲外だよ……』

「とにかく海の近くの公園に向かおう、ユーノ君」

「キュツ」「うん」

僕達は、急いで公園に向かったんだ。

晶にも走りながら念話で知らせたけど、遅れるって言うてたよ。

どうやら、人ごみの中に今いるみたいで、殖装をすぐには出来な
いらしいんだ。

一方公園に付いた僕たちが目にしたのは、発動したジュエルシ
ード6個によって竜巻が起きた海だったよ。

僕達は、急いで人の居ない林の中に入ってセットアップするとそ
こに向かっていったんだ。

そして、そこで僕達は魔力を大幅に消耗しながらもジュエルシ
ードを封印しようとしてるフェイトさんたちと鉢合わせしたんです。

「あんたたち………」

『どうするの、なのは？今なら彼女を……』

『……うんうん、今はジュエルシードの封印が先だよ』

『じゃあ……』

『うん』

「アルフさん、そこをどいて！」

「フェイトの邪魔はさせないよ！」

「違います！今は、ジュエルシードの封印を！」

「つべこべ言うな！！」

ああーもお……この分からず屋！

「なのは！フェイトさんのところへ！」

「うん！」

「あ、こら待ちな！」

「やめてください！」

「この……邪魔だ！」

アルフさんの攻撃を避け距離を置いた僕は、チェーンバインドで

竜巻の動きを封じようとしたんだ。

なのはの方も、無事フェイトさんの所に辿り着いたみたいだったよ。

でも、ジュエルシードの力が強くて僕一人の力じゃ長くは持ちそうに無かったんだ。

「んぐぐ……」

もう、持たない！

「う、うわっ!?……え?」

……どうして、急に楽に

「……ユーノ、君はこれの維持に集中して！僕が引っ張るから
!?!」

「晶!」

「状況はよく分からないけど……どうやら間に合ったみたいだね」

僕の目の前には晶がガイバーの姿でチェーンバインドを両腕に抱えて全力で引っ張っていたんだ。

でも、ガイバーでもどんどん引き摺られていった、その時でした。

「……ああーもう！情け無いよ、しっかりおし!?!」

「アルフさん、分かってくれたんですね!」

「勘違いするんじゃないよ、このままフェイトだけじゃ無理だっと思っただけさ。にしても……」

?アルフさんどうして、晶を胡散臭げに見てるんだ?

「そっちのお前誰だい?見たこと無いけど」

「え……ああ!この姿で会うのは、初めてでしたね。僕は晶ですよ」

「……ああ!そういえば言ってたね」

ユーノは、アルフさんより先にジュエルシードに到達して・・・
・その勢いのまま空の彼方へ飛んでいったよ。
アルフさんは、そのまま残りのジュエルシードを回収して何処かへと転移して行った。

「・・・・・・・・あの晶君。今ユーノ君が？」

「うん。とっさだったけど、うまくいったみたい」

「・・・・・・・・・・しよーおおおおお！！！！」

「ああお帰り、ユーノ」

「ああお帰りっじゃないー！酷いじゃないか突然！？」

「いや、あのままじゃ全部持ってかれそうだったから・・・・・・・・」

「それはそうだけど・・・・・・・・」

「ごめん・・・・・・・・それでいくつ取れた？」

「・・・・・・・・2つ」

「そう・・・・・・・・」

つまり4つ持ってかれたってことか

「・・・・・・・・何、不満なの？それでも僕、この小さい体を精一杯伸ばしたんだよ！？」

「まあまあ落ち着いて、ユーノ君」

「落ち着けないよ、なのは。僕はねさつき死に掛けたんだよ？あの速度と高度から落ちたら水でも地面と変わらないんだ。まあ、ぎりぎり制動が間に合ったけどさ」

なのはちゃんが仲裁に入るけどしばらくユーノの怒りは、収まらなくて僕は彼に何度も頭を下げる事になったよ。

これで残りは一つ。

フェイトちゃん、次は僕たちを狙ってくるのかな？

「晶！聞いているの！？」

「あ、うん聞いているよ、ユーノ」

「全く君は）クドクドクドクドクド」

くじく

未熟な協力（後書き）

やっとユーノボンバー（ユーノを全力投球）のところまで書けました。

未熟な怒り

Side アルフ

ちくしょおおおごめんよ……ごめんよおフェイト……

堕ちて行くあたしの胸中は、そのことでいっぱいだった。

そして、あたしの耳にこびり付いて離れないフェイトの悲鳴。

意識がかすれていく最後の瞬間までフェイトを助ける事をあたしは考えていたよ。

必ず助けに戻るから……待つて……てお……く……れ……よ……

「お……!? 生……てる……!!」

リリカルガイバー 12話 未熟な怒り

Side ユーノ

前の封印から2日。

フェイトさん側からの接触も無く最後のジュエルシードも見つかってはいませんでした。

そんな時でした。

なのはの携帯にヴィータさんからの連絡があったのは。

「それほんとなのっヴィータちゃん!？」

『こんな事で嘘ついてどうすんだよ。とにかくケガは、シャマルが

今はやての付き添いでいないから止血と包帯を応急処置はしといて、あたしらで今見張ってるから早く引き取りに来てくれ』

「うん、今からみんなで急いでいくから待ってて!!」

『ああ・・・それとよ、お前んとこのシュークリームかケーキ』
「ヴィータ、土産の催促とは情けないぞ」
「うっせーなシグナム。当然の報酬だろうが」

「にやははは、わかったよ。両方持っていくからね、ヴィータちゃん。じゃあ、また後で」

『早く来いよ、なのは』

この連絡を受けた僕たちは、翠屋によってから急いで八神家に向かったよ。

そして、そこで待っていたのは、シグナムさんたちに必死に頭を下げてるアルフさんの姿だったんだ。

Side アルフ

あたしが、目を覚ますと見知らぬ人間たちに囲まれていた。でも、青い狼があたしに話しかけてきて状況をなんとなく察せただよ。

ああ・・・あたし魔導師に捕まっただね・・・

だからってあたしがすることは変わらない。

あたしに残された時間は、もう長くは無いだろうけど晶たちを何とか説得するつもりだったよ。

でも、こいつらからは逃げられず逆に残り時間を減らしちゃっただけだったよ。

だから、恥を忍んで開放してもらったためにこいつらにもこっこの事情を説明したんだ。

・ ・ ・

「大丈夫かい、フェイト？まだ寝てなくて・・・」

「大丈夫だよ、アルフ。それとありがとね、私の変わりに動いてくれて」

「そんなことはいいんだよ・・・にしても、母親なのに実の娘に落雷を落とすなんて!!」

「私が不甲斐なかったからだよ・・・」

道中ずっとこんな様子で庭園内を進んでいったよ。

そして、部屋の前に着くといつものごとくあたしは外、フェイトは中へと別れた。

これが、そもそもの間違いだったんだ。

中からは、またフェイトの苦痛に耐える声と肉を打つ鞭の音。

でも、今回はそれで終わらなかったよ。

「い、いやあああああああ!!!」

「フェイト!?!?!」

こんな悲鳴今まで上げなしたこと無かったのに!!

今までに無いフェイトの様子にあたしの我慢も限界だった。

何者も拒絶するかのような固い扉をあたしは、拳でブチ破り見たのは、礫にされたフェイトの耳元で何かを囁くあの女と涙を流しながら気を失ってるフェイトの姿だった。

それを見た瞬間あたしの目の前がカッて赤く染まってアイツに突き撃していたよ。

このクソ女！！よくもフェイトを！！！！

「ッ………躡がなって無いわね」

「この！！フェイトに何をしたっ！！??」

「別に。ただこの人形に真実ってモノを教えてあげただけ」

「フェイトは、人形じゃない！！」

「そっか、あたしのご主人様は、フェイトはっ！！！！」

「いいえ、人形よ。私たちの望みを叶えるための人形でしかないわ」

「このつまだ言うか！！アンタは母親で！あの子はアンタの娘だろ！なんでそんな酷い仕打ちができるんだよ！！」

「そっか、こんな事言ってもこいつはフェイトの「違うわ」なっ

「私の娘は、アリシアだけ。こんな模造品「ふざけるなっ！！！！」

「…本当に躡がなって無い駄犬ね」

「ガハッ！！??」

こっちの拳が届くより早くアイツの魔法があたしの胸を貫いたんだ。

体をとっさに捻って即死を避けることは出来たけど、そこまで。

あたしは身動きできず、アイツはこっちを見下していたよ。

ちくしょおおお……

「ゴホッ……」

「………呆れたしぶとさだわ……どうしたのアリシア?……

・ええ……ええそうね。わかったわ」

「何こいつ一人でぶつぶつと……」

「お前の命もう少しだけ預けておくわ」

アイツは、あたしに手を翳すと何かの魔法を発動させた。

すると、痛みが少し和らいだけど体からは力が抜けていたんだ。

「いったい何をしたんだ、あたしに」

「地上に戻ってもう一人の魔導師のところから残りのジュエルシードを手に入れてきなさい」

「ふ．．．ざ．．．」

「この砂時計の砂が全て落ちるまでに約20時間かかるわ。それまでは人形の処分を待ってあげる。助けたかったら急ぎなさい」
こいつ、フェイトを人質につ

アイツは、大きな砂時計を出しひっくり返しながらあたしにそう宣告した。

「それにお前も死にたくなかったら急ぐ事ね。すぐ死なれちゃ困るから少しだけケガを治しておいたけど、お前と人形との契約は解除しておいたから」
なっ．．．じゃあこの体から力が抜けてく感じはっ

その後は、あたしは地上に転送されたよ。

S i d e ヴィータ

聞き終えたあたしらは、みんな絶句してたな。

なのはたちも同じだ。

それでも、本当に母親かよ．．．にしても、アリシアって誰だ？

S i d e プレシア

「ゴホッゴホッ」

．．．．フフ、もうすぐよ。もうすぐあなたをその狭苦しい場所か

ら出してあげられるわ、アリシア

「……あら意外に早かったわね、駄犬。やっぱり自分の命が係っていると違っのかしら？」

「戯言は良いよ」

「まあそうね。でも、その3人と小動物は助っ人かしら？」

「はっ、そんな事しようとしたらフェイトを殺す癖してよく言うよ。安心しなよ、晶たちはフェイトが心配で着いて来ただけさ。現にデバイスも待機状態だろ？」

「そうね」

確かに、白いのと少年と金髪の女もバリアジャケットをまとって無いし、デバイスも待機状態だわ。小動物は3人の内の誰かの使い魔でしょうけど

「アンタの望みの物だってちゃんと持って来たさ、なのは頼むよ」

「うん……レイジングハート」

【put out】

赤い宝石形のデバイスからジュエルシートが排出されたのを見て私は、それらを手元に招き寄せ気配と数を確認したわ。

「……どうやら、本物のようだけど1個足りないわよ？」

「私たちが持つてるのは、それだけです。最後の一個は見つけてません」

「そう……まあいいわ、20個あれば事足りるし」

さあ、行きましょう、アリシア。忘れられた都、アルハザードに！

私は、一刻も早くアリシアの元に行きたくて歩み始めたわ。

でも、忌々しい事に駄犬たちが私を呼び止めたのよ。

「どこ行くんさい！！早くフェイトを放せ！！」

「そうです、早くフェイトちゃんを解放してください！」

ああ・・・そういえば、そんな約束してたわね

「忘れてたわ、ほらこれでいでしょ？」

「・・・フェイトノフェイトちゃんノフェイトさんッ！」「」

私は、もう使い道の無い人形の拘束を解いてやった。

人形は、重力に引かれて前に倒れていくが地面に当たる前に駄犬が抱きとめわらわらとさっきの白い子達が集まってくるのを視界の隅に写ったが、もう私にはどうでもいいことだったわ。

「待ちな！」

「全く次から次へとキャンキャンうるさいわね。そんなに殺されたいの？」

せつかく見逃してあげようっていうのに

「あ、間違えちゃった」

「・・・・・・なっ！？」

Side なのは

一時間前・・・

始めは、大人しくジュエルシードを渡すことを考えました。

でも、今私たちは、必死になってフェイトちゃんを助ける別の方法を考えているところです。

そこには、ヴィータちゃん達の姿もあります。

アルフさんの説明を聞いていたヴィータちゃんも一緒に悩んでくれています。

「ジュエルシードを渡すのも、そのフェイトって魔導師を見捨ても出来ない・・・じゃあどうすんだよ」

「ヴィータ少し黙っている。我々は今それを考えているんだ」

「このっシグナム、てめえ」

ヴィータちゃん、全然いい考えが浮かばなくてイライラしてるみたいです。

何も浮かばないまま時間だけが、容赦なく進んでいきます。

また、それとともにアルフさんの容態もどんどん悪くなっていき
ました。

ユーノ君は、そんなアルフさんに付き添っています。

「ハアーハアー……」

アルフさんどんどん、弱ってきてるよ

「アルフさん、やっぱり誰かと契約しなোসないと！」

「いや……だね」

「でも、このままじゃフェイトさんを助ける前にあなたが……」

「あたしのことはいい……んだよ。それよりフェイトを……」

始終こんな様子です。

そして、さらに30分過ぎた時、晶君の呟いたある言葉をきっか
けに事態は好転していきました。

どうしよう、もう3時間しかないよお

「……こういう時、刑事ドラマとかの身代金だと本物の札束を
用意するか、最初と最後の2枚だけ本物で後は新聞紙か何かと入れ
替えるんだよね」

「バカ、そんな事してもジュエルシードの気配ではれるだろうが、
晶」

「そうだよね、ヴィータちゃん。現実はそのなにつまくいかないよ
ね……」

偽物と入れ替える……それだよ！！

「聞いてみんな。私いい考えが浮かんだよ！」

「本当か、なのは？」

「うん、さつき晶君がドラマの話してたよね、それで思いついたんだけど。渡すジュエルシードの2つか3つの本物を渡して、後は偽物を渡すの」

「つまり、偽物の中に本物を少し紛れ込ませて気配を誤認させるという事か、高町？」

「そうですね、シグナムさん。それで、フェイトちゃんを助けたら私と晶君とユーノ君、アルフさんで取り返すっていうはどうかな？」

「でも、都合よくジュエルシードそっくりの石なんてないよ、なのはちゃん……」

「そっか……」

「……ただいま……」

「主とシャマルが病院から帰ってきたか……ん？シャマル？」

「それだ！あたしにはシャマルがいたじゃんか！
シャマルさんがどうしたの？ヴィータちゃん」

Side 晶

そして現在……

「シャマルさん、ご協力ありがとうございます」

「いいんですよ。温泉の時は、晶君に迷惑掛けちゃったんですから」

僕は、隣で今回協力してくれたシャマルさんに感謝を口にしたんだ。

僕の手には、10個のジュエルシード。

シャマルさんの『旅の鏡』でフェイトちゃんの母親から奪い返した物だ。

最初、シヤマルさんのドジが発動した時は焦ったけどね

また、そんな僕たちの近くには、アルフさんやなのはちゃんが開放されぼろぼろのフェイトちゃんを見ていたよ。

「フェイト、フェイト！・・・ダメだよ。あたしの言葉に反応してくれない」

「どうして！？目を開けてるんだよ！？」

「なのはとアルフも落ち着いてよ。シヤマルさん、フェイトさんを見てあげてください！！」

なのはちゃんの頼みにシグナムさんたちのサポート担当であるシヤマルさんがフェイトちゃんの診察を開始した。

ちなみにユーノがアルフさん呼び捨てにするようになったのは、死にかけてた彼女を自分の使い魔にしたからだ。

最初は、フェイトちゃん以外の使い魔になることを拒んでたらしいけど、ユーノの「このままじゃフェイトさんに二度と会えなくなるし、彼女もきつと悲しみますよ！！」って言葉がどうも決め手みたいでユーノと契約してたよ。

「わかりましたから、ちょっと場所を空けてください」

「頼むよ、シヤマル」

さて、フェイトちゃんのご心配だけどあの人から眼を離すと危険ほいし・・・

「ガイバーツ！！」

会話を聞きながら殖装し、まだ動きを見せないフェイトちゃんの母親を見張っていた。

「ゴホツ・・・クツ！」

「ッ！」
また雷撃か！？

僕に向かってきたものはワームホールで受け、なのはちゃんたちの方に向かったのは予めうち合せた通りにユーノがみんなを守っている。

でも、これはただの目くらましだったのか彼女は、奥に向かって走っていたんだ。

僕も、当然追いかけたけどタッチの差で分厚い壁が通路をふさいでしまったよ。

「この程度の壁ならっ……破ッ!!」
ドガッ

「よしこれで先に進める」

『重いパンチ』で壁を破り中に入るとそこには天井までずらっと並ぶ無数のシリンダー。

そして、その中には……

「な……何だこれは……」
子供の標本なのか！？これが全部!!

人の形をしていない者、胎児、体のどこかが欠損している者、0歳〜10歳ごろまでの子供たち、各内臓……シリンダー内にはそれらが納められていた。

しかも、顔が判別できる子達は……

フェイトちゃんと同じ顔だ!?

「どういうことだ!!プリシア・テスタロツサツ!!」

「……フッ」

僕は語気を荒らげて部屋の中央に安置されたシリンダーの傍らに立つ彼女を糾弾する。

でも、プレシアは歯牙にもかけない。

そして、あざ笑いながら隣のシリンダーと共に何処かへと彼女は転移していったんだ。

まさかプレシアはあのシリンダーと逃げたのか・・・いや、

「どうしたの、晶君？大声なんか出して・・・」

「そうだよ、晶。一人で先に行くのは危険だよ？」

「晶！あの女を殴るのあたしにもさせておくれよ」

まずい！これをみんなに見せるのは

「来ちゃダメだ、みんな！！見るなッ！！！！」

「え？・・・なんなの・・・これ・・・」

！？」

時すでに遅し・・・なのはちゃんたちもこの光景を見てしまっていたよ。

つづく

未熟な真と宣戦布告

リリカルガイバー 13話 未熟な真と宣戦布告

S i d e 晶

「うう……」

「大丈夫、なのは？」

「う、うん。何とか……ユーノ君こそ顔、真っ青だよ」

「大丈夫だよ……うつぶ」

「……別に強がらなくてもいいのに」

なのはちゃんとユーノは、お互い気分を悪くして吐きそうになるのを我慢しているようだ。

アルフさんの方は、目の前の狂気の所業とも言える光景に絶句していた。

3人ともかなりの衝撃を受けてるみたいだけど僕はクロノスとの戦いである程度耐性が出来ちゃったよ

僕は、そのことが少し悲しかったけどすぐに怒りを覚えてたよ。

だからいつの間にか、これを行ったであろうプレシアを呼び捨てにしていた。

「3人とともにあえずここから出よう」

「あの女をほつとくのかい、晶!？」

「プレシアは、どこかに転移していったよ。よほど大事だったのかシリンダーと一緒にね。アルフさんは、行き先に心当たりある？」

「いや無いね」

「ならここから出ましようよ。後ろの二人にここは、刺激が強すぎますから」

アルフさんもその事に賛成の様子で何も言わずなのはたちを外へと連れ出していく。

僕は、この場に一人残りシリンダー内の無数の亡骸をソニックバスターで破壊した。

だっていつまでも、亡骸を晒して置くのが忍びなかったんだよ。

・・・これが終わったら、簡素な物になるだろうけどお墓を造って供養してあげよう

僕は、そんな思いながらこの部屋を後にした。

Side ユーノ

なのはも僕も気分が大分良くなってきた頃、晶はあの部屋から戻ってきたんだ。

「・・・晶君、なにしてたの？」

「あの子たちをあのままにしておくのが忍びなくてね」

晶は、彼女たちの体を葬ってきたんだね

「・・・そうだね。でも晶君はすごいね。私はあの時自分のことで精一杯でそこまで考えが回らなかったよ」

「それが普通だよ。逆に僕みたいにならないほうが良いよ」

晶・・・

晶は、さびしそうにそう言った。

なのはは、そんな晶の様子に疑問を感じただろうけど何も言わな

かったんだ。

でも、晶は気を取り直して僕達に言ったよ。

「それでね、今回の事が終わったらお墓を造ってあげようと思うんだけど・・・」

「私も手伝うよ、晶君」

「僕にも手伝わせて、晶」

「じゃあ約束だよ」

「うん」

「・・・ところで、フェイトちゃんの様子はどうだったの？」

「あ・・・」

「うん。それは・・・」

「・・・何かあったの？」

なのはは、伝えられそうに無いし「こは僕が

「晶・・・落ち着いて聞いてね」

「うん」

「フェイトさんのケガは、シャルルさんが治したけど・・・」

「けど？」

「・・・よっぽどショックな事を言われたんだね。心神喪失状態になってるって」

「・・・元にもどる見込みは？」

「シャルルさんも専門家じゃないからよくわからないって・・・」

「ッ！」

晶は、憤りを抑えるかのように近くの柱に拳を叩きつける。

それから、深呼吸をして努めて冷静になってから口を開いたよ。

「・・・だったら、シャルルさんにフェイトちゃんを地上まで運んで『帰ってもらっては困るわ。折角ゲームの準備が整ったのに』プ

レシア！貴様ッ」

晶よっぽど怒ってるんだね

『あらあら、怖い声を出してどうしたのかしら？』

「あんた、何処にいるんだい！！そこに行ってぶん殴ってやるから
！！」

アルフも……

『駄犬まで……まったくそんなにキャンキャン言わなくても私が今
いる所を教えてあげるわ。ゲームのルールと一緒にアリシアが説明
してくれるわ。さっアリシアお願いね？』

『初めましてだな、ガキども。俺がアリシアだ』

「きやつ！？」

「「な！？」」

「こ、こんなのがあの女の娘なのかい？」

……アルフ、この声、大人の男の人の声だよ

「か……怪獣なの！？」

……にしても、なのは言うとおりまるで怪物だよ

Side 晶

プレシアの代わりに魔法陣の画面に現れたのは、シリンダー内に
漂っている存在。

あれは、まるで……

獣化兵！？……いや、まさかそんな
ソアノイド

『怪獣とは酷いじゃねえーか、白いの。俺はこれでも人間だぜ？ま
あ、奴らに改造されてこんな姿になっちまったがよ』

「か、改造！？」

『おう拉致られて、気づいたらこのざまよ。まあそれももう少しの
辛抱だけだな……』

「ど、どうということなの？」

「ん？気になるのか、白いの？良いぜ話してやるよ・・・俺はな、この姿になつた所為でこの中でしか生きられない体になつちまった。まあその代わりに少し変わった能力も手に入れて、それを使って俺を起こした間抜けな奴を操って施設を脱走、そのままいつを使つて俺が元にもどる研究をさせてたんだが・・・2年ぐらいだつたかな？で、そいつが死んじまつてよ次の奴に乗り換えてもすぐに死んでまた換えてを繰り返していったら、この女のところに俺は辿り着いたんだ」

「・・・え？」「・・・」

「・・・ちよつとまで、それってプレシアはお前に操られてただけってことなのか？」

「いやあ、俺はこいつの背中をすこし押してやっただけさ。元々死んだ娘を生き返らせるって研究してたんだからな。俺は、その娘が研究の結果生き返つたけど、シリンドー内でしか生きられないって五感付きの幻覚を見せて成り代わつただけ。後は、この女にここから出られるように研究させたただけ。・・・でもな、それも失敗に終わつちまった」

「失敗だつて？」

「ああ、実験は本物の娘の遺伝子を使って新しい体を造つてその体に乗換えるつてもものだった」

「まさか、あの部屋の娘たちは！？」

「ああ、ありや失敗作どもだ。あ、一つだけオリジナルも混ざつてるけどな。とにかく、やつとの思いで体は出来て、俺の前にアリシアの記憶の一部を入れて試してみたんだが失敗しちまつてよ。しかもこの女、人形に情が移つて研究をやめようとしやがったのさ」

「おい、まさかその子つて・・・」

「そこで転がつてる人形さ。こいつ、プレシアに大嫌いつて言わせたら絶望に染まったいい顔してたぜ？ひやははは」

「このつ・・・」

「お願い、やめてよ！！」

アルフさんは、手を白くなるぐらい握りしめて画面を睨みつけていた。

僕も同じ気持ちだ。

一方なのはちゃんは、フェイトちゃんを抱きしめて訴えてるけど奴は聞く耳を持たない。

そして、奴の耳障りな笑い声を聞きながらも何とか冷静さを失わずに奴に僕は口を開いた。

「・・・それより良いのかよ？そんなこと、彼女の前でしゃべってちまって」

『ああ大丈夫だぜ、今はもつと強力な幻覚を見せてる。それにこれ話を話しておかないとゲームが始まらねえからな。さあ、与太話はこのでだ。ルールを説明するぜ・・・俺たちは、今庭園の最下層にいる。通路には、傀儡兵を配置したからそいつらを倒してここまで来ればいい。また、今から5分後、ゲームは開始、同時に庭園の駆動炉を暴走、それに伴い30分後には庭園が崩壊する。棄権の受付は5分後の開始の合図までだが、棄権ならジュエルシードを渡してもらう。分かっているとと思うが、ジュエルシードを持った奴がこの庭園から逃げるのは禁止、それ以外の人間が逃げるのは構わないがな。まあもし持ち逃げしたら、この庭園をお前らの街に落とす。俺たちはその前に手持ちのジュエルシードと駆動炉を使って次元震を起こしてアルハザードへの道を開き旅立つけど・・・お優しいお前らなら被害者のこの女も街も見捨てられないだろ？あとは、援軍を呼んでも即落すからな？さあ、今から5分間よく相談して決めると良い』

「・・・」

そう宣言したあいつの姿は消え、変わりに画面には、通路内に無数の巨大な鎧たち　おそらくこれが傀儡兵なんだろう　で埋め尽く

されていく様子が映されていた。

さて、敵は僕達が逃げようが負けようが問題ないのか。それに戦いを挑んでも、あの数じゃいくら倒してもきりが無いだろうし……

「……高町さん、私にジュエルシールドを渡して」
え、この声って……

「……フェイトちゃん/さん!」「」「」
「フェイト……フェイトオ……フェイトッ」
「アルフ、ごめんね心配かけて」

アルフさんは抱きついて喜び、フェイトちゃんはそんな彼女の頭を撫でていた。

少しの間そうしてたフェイトちゃんは、さっきの続きを言ったんだ。

「さっきの話、私も聞いてたよ。私はまだ本当の母さんの言葉を聞いてないし、会ってもいない。だから、母さんを助けて、もう一度会わなきゃいけないんだ。だから、高町さん、私にジュエルシールドを！」

「……フェイトちゃん」

フェイトちゃんは、そう言ってなのはちゃんに頭を下げて頼んだよ。

なのはちゃんは、ポカンって口を開けてフェイトちゃんを眺めてから言葉を発したんだ。

「フェイトちゃん、一人で行くつもりでしょ?でも行かせないよ一人じゃ、私も一緒に行くよ」

「僕も行くよ、フェイトさん」

「もちろん、あたしも着いて行くよ、フェイト」

「高町さん、スクライアさん、アルフ……」

「なのはで良いよ、フェイトちゃん」

「僕もユーノで」

「……ありがとうございます、なのは、ユーノ、アルフ」

「……よかったね、フェイトちゃん」

「……ところで、晶はどうするんだい？何も言わなかったじゃないか」

「あ……晶……」

「……フェイトちゃん、そんな目をそらさなくても」

「ハア……いいかい、フェイトちゃん」

「……何？」

「こういう時、僕たち友達なんだから、助けてって一言言えば良いんだよ？」

「晶……まだ私を友達だと言ってくれるの？私、人じゃ「ストップ！それ以上言う」と怒るよ？」……」

「君は、生まれがちよつと特殊なだけだよ？間違っても人じゃないなんて言っちゃダメ。さ、もう一度始めから言っごらん？一言で良いから」

僕の言葉を聞いたフェイトちゃんは、泣き笑いをしながら「助けて」って言ったんだ。

当然僕も、「いいよ」って応えたさ。

そして、どう動くか話していると瞬く間に時間は、過ぎていったよ。

『……さあ、約束の時間だ。返事を聞こうかっておや？人形が目を覚めたのか』

「……」

『だんまりか……まあ良しさ、返事を聞こう』

「そんなの当然、決まってるだろ？」

「そこで首を洗って待ってな！」

「母さんを返してもらいます！」

「私も全力全開でがんばるよ！」

「力の限りなのはたちをサポートするよ！」

「僕は、お前を許すつもりは無い！」

「」「」「」そこで待ってる／な／て！」「」「」

最後にシャマルさんに後ろで見守ってもらいながらみんなですそう締めくくったよ。

つづく

未熟な真と宣戦布告（後書き）

シャマルが空気になっちゃいました。
でも、今回の役目は、終わってるし……

未熟な罠

73年前

スラムで盗みや殺しなど金のために悪事を働いていた『彼』は5年前、この施設にある実験の被検体にするために拉致された。成功率の低い実験の被検体は、基本的に拉致や誘拐された者たちが使用され反乱防止のため眠らされたまま実験が行われる。

案の定、『彼』に施された実験も失敗。

以後長い年月を他の失敗作たち同様に施設内で生きた標本扱いとなった。

しかし、この失敗で『彼』にも得たものがある。

それは、実験を担当した研究者たちにも思いもよらぬ特殊能力だった。

逆に失ったのは、人間としての姿とシリンダーの外の世界と生殖能力。

なぜなら、シリンダーの外の世界で『彼』は10分と生きられなくなっていたからだだった。

そして、それから数年が過ぎたある日、『彼』のシリンダーと一人の新人研究員が行方を眩ますという事件が発生。

機密漏洩を防ぐため、すぐに極秘で捜索が始まる。

3年後、その研究員の遺体を発見。

死因は、過労と過度のストレスだった。

しかし、『彼』の行方は未だ不明。

そして、22年前のある日。

『彼』の入ったシリンダーは、辺境のとある技術開発局関連の施設にあった。

Side シヤマル

「・・・僕達が失敗したときは、土郎さんたちやアリサちゃん、すずかちゃんたち、出来る限りの人を連れて安全なところに逃げてください」

「一人で大丈夫なんですか、晶君。なのはちゃんたち4人は、最下層に向かいましたけど、駆動炉に一人でなんて・・・」

私は、晶君に護衛してもらって時の庭園の入り口に戻って来てください。

なのはちゃんたちは途中で別れ最下層へ、晶君は一人で駆動炉の破壊に向かい、私のシグナムたちにこのことを伝え最悪の事態に向けての準備に向かうところです。

この配役には、お母さんを取り返したいフェイトちゃんとジユエルシードを持つなのはちゃんのとこに戦力を集中、私はシグナムが取り付けたた約束があるからとこれ以上の干渉を断られたから。

そして、消去法で一人で駆動炉を破壊したらすぐになのはちゃんたちの援軍に向かう晶君なんですけど・・・

やっぱり、一人でなんて心配です

「大丈夫ですよ、ここに来るまで僕の活躍を見てたでしょ？」

「それは、そうですね・・・」

確かに、ここまでの傀儡兵をほとんど一人で倒してましたけど・・・
「シヤマルさん、心配してくれるのはうれしいんですけど一人のほうを周りを気にして進むより早いですよ、なのはちゃんたちを置いていく訳にはいかないですから」

「あ、あれより早くですか!？」

「はい、だから安心してください」

マスクで表情は見えませんでしたけど、私を安心させるように笑顔でそう言っていると声で分かりました。

S i d e 晶

何とか心配してくれたシャマルさんを送り出した僕は、すぐに遅れを取り戻すために駆動炉へと全力で向かっている。

・・・とは言うものの、やっぱり数が多いな。でも・・・
「その分なのはちゃんたちに向けられる敵は、少なくなるからなッ
と!」

僕は、斧槍を持つ傀儡兵の頭を叩き潰しその口にする。

ちなみに一番数が多かった剣と盾を持っていた傀儡兵の姿は無い、すでに周波数を合わせたソニックバスターで対処しているから援軍に現れる事もない。

息つく暇もなく背後から振り下ろされるスパイクハンマーをかわした僕は、続いて襲ってくる空中からの襲撃者を飛び上がりながら左の高周波ソードで数十体目の傀儡兵を切り伏せ、その体を蹴りすぐに地上に着地、また走り出した。

そして、遅れてさっきまで僕がいたところには、太い光に飲み込まれている。

奥ですつと僕が飛び上がるのを待つて狙っている砲撃兵の仕業だ。

アイツがいなけりやもつと早く進めるのにッ

「って愚痴つても仕方ない・・・とにかく出来る限り早く突破してみんな合流しなきゃ!」

「うん・・・うんうん!」

なのはは、よほどうれしかったのか状況を忘れてフェイトに笑顔を向ける。

だが、相手も黙って見ているわけもなく背中 of 砲口を彼女たちに向けチャージを始めた。

でも、なのはたちの攻撃の方がそれより早く放たれる。

「サンダーッ」「デイバインツ」

「バスター!!!」

放つたれた2人のバスターは砲撃兵を倒し、庭園の外壁にも穴を開けてる。

そして、行く手を阻む傀儡兵がいなくなった最後の扉に4人は手をかけた。

Side なのは

「・・・画面で見たよりこの子達少なかったね、ユーノ君」

「そういえばそうだね、なのは」

「もしかして、晶君の方に・・・晶君、大丈夫かなあ」

ううゝ心配だよ

「晶なら大丈夫・・・きつと」

「そうそう、フェイトの言う通りだよ。自分から一人で行くって言ったんだからよっぽど自信があるんだよ。だから、心配するだけ無駄無駄」

「フェイトちゃん、アルフさん・・・そうだよね!晶君は私より強いんだからきつと大丈夫だよねッ」

フェイトちゃんより晶君と一緒にいた時間長いのに・・・情けないなあ私

そんな風に考えていましたが最後の扉を前に私は、いつでも戦えるように頭を切り替えました。

そして、重い扉をアルフさんが開いた時、中から目が眩むほどの強い光が溢れてきます。

「ま、眩しいッ」

「「キヤッ」」

「うわっ」

何が起こったの!?

Side フェイト

光が治まって目を開けると何も変わつたところはなかつたんです。私の前にいたアルフも無事だったみたいです。

隣のなのはたちが気になり目を向けました。

そういえば、なのはたちは大丈夫だったかな?

「なのはたちは、だいじ・・・なのはッ！ユーノッ！」

「「・・・・・・・・」」

「「」」

なのはたちが居た所には、今まで見たことの無いタイプの2体の傀儡兵。

白い飛行兵と両手に鎖の付いた盾を持つ飛行兵でした。

そして、彼らの足元に倒れ伏したなのはとユーノの姿を見つけました。

さっきの光は、このための目晦ましだったんだッ

「このッよくもユーノ達を！」

「なのはたちを助けるよ、アルフ！」
「分かってるよ、フェイト！」
今助けてあげるからね！！

私は、なのはたちを巻き込まないためにバルディッシュをサイズフォームにしてあえて近接戦を挑みます。

でも、そのスピードの乗った一撃を白い飛行兵は難なく対応して見せたんです。

やっぱり姿だけじゃなくて、今までと違う！

「
「ガアア！」

アルフの方も、一筋縄じゃいかないみたいだよ

Side 偽アリシア

ひやは、うまくかかってくれたぜ

俺は、目の前で繰り広げられている4人の戦闘を劇を観賞するよ
うに眺めていた。

一方は人形と犬ところ、もう一方が白いのと小動物に分かれての
同士討ち。

実力的に拮抗してる奴らが互いの事を敵と認識して戦ってるんだ。
決着が着く頃には相当消耗してるはずだ。

そうすれば弱ってる今のプレシアにも楽に倒せるぜ。そして、大した
労力を使わずにジュエルシードが手に入るって寸法だ。後の問題は
ッ全部終わるまであのクソの足止めだな！！

俺は、画面に映る忌々しいもう一人のガキに視線を移した。

あれで仕留められると思ったんだがよ、しぶてえなあオイッ

巨大な斧を寸での所で真剣白刃取りをしているガキを画面越しに睨みつけた。

Side 晶

あぶなっもう少し遅かったら肩から真っ二つだった

僕は、顔の横で白刃取りで止めている斧を見てそう思ったよ。

あの瞬間、首を横にずらして少し猶予を作った間に抜けた腕で白刃取りしたんだけど、とっさの判断が功を制したみたい。

さてと、この状態じゃもう動けないし、リスクを承知でソニックバスターを使うか

下半身も上半身も動かない現状で使える武装は、ヘッドビームとソニックバスターだけ。

しかし、ヘッドビームは、威力が小さすぎて傀儡兵の鎧に阻まれるから数打ちの傀儡兵が現れるのを承知でソニックバスターを使つたよ、重斧兵に。

……よし、これでデカブツは始末したからこの斧を捨て……
てッ！

ドオオオオオオン
再殖装をすればッ

コッココ

！？「「「「

「ガイバー……ッ!!」

案の定、前触れなくサイズが変わって拘束が解け、すぐに再殖装しその衝撃波が周囲の傀儡兵たちを潰し見る影もなくなり容易に脱出が出来たよ。

「さてさて、この後は如何したものかな？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

やっぱり出て来たよ数打ちの奴ら。それに外側の方でしがみ付いた奴らもこっち来たし……あ、あれ使えそう!!

僕は、あいつらの頭や肩を蹴って飛び越える。

途中、砲撃兵が撃ってきたけど回避して目的の物を両手で掴んだよ。

さっき捨てた、巨大な斧をね。

「どっせいい!!」

「……………」

「……………」

「ハンマー投げみたくこのまま回……ってえ、群がってくるお前らを一掃!!!!」

あとは……

「お前だあああ!!」

「……………」

僕は、最後に砲撃兵に向かってぶん投げた。

十分な遠心力を受けた斧は、すごい勢いで飛んで行き砲撃兵を真っ二つにして、壁に半ばまでめり込んで止まった。

そして、邪魔者がいなくなった最後の扉を抜けて駆動炉の前に辿り着いたんだ。

「大きい・・・けどッ」

これぐらいなら片肺で十分！

ベリッ

僕は、右胸部装甲に手を掛け一気に引き剥がした。

この後何があるか分からないし・・・

ヴヴヴヴ

エネルギーの無駄遣いは控えるべきだ

ウオオオオオオ

やった事無いけど、出きるような気がするッ

ガッ

僕の胸から放たれた強い閃光、メガスマツシャー胸部粒子砲の光だ。

駆動炉を跡形もなく消し去り、今は内側から庭園の壁を少し削っていた。

ズズズズ

「止まれ、止まれッ、止まれえええッ！！」

オオオオオオ・・・

「止まったあ・・・」

見事、内壁を少し削るだけでスマツシャーを止められたけど、一難去ってまた一難っていうのはこういうことを言うんだね。

ヘッドセンサーが部屋の外に傀儡兵の動体反応を捉えたよ。

それも、隣の部屋を埋め尽くすほどの量を。

「これは・・・退路を絶たれたのか」

どうする？またスマツシャーを使うか？

「いや、あの様子じゃあ他の部屋も同じような状態のはず。全部を抜ける前にまた塞がれるか・・・」

出口は、あの扉一つだけ・・・こんな事ならあのままスマッシュャーで外まで穴を開けて・・・穴ッ

「そうだった道が無いなら作ればいいんだ!」

そして、僕は両手に力を込めた。

つづく

未熟な僕（後書き）

やっと出たメガスマツシャー・・・でも大した活躍なしです。
でも、次に出したときには活躍してもう予定です。
そのために消耗を抑えましたから。

未熟な決着ときどき穴

リリカルガイバー 15話 未熟な決着ときどき穴

Side なのは

この子の動き、まるでフェイトちゃんみたいに速いよお！

【Flash Move】

今度は、発射の速いやつ！

【Divine Shooter】

「シュート!!」

あつゝ・・・変な円盤に切り裂かれちゃった・・・

「うにゃあ!こつちに来たー?!」

Side フェイト

私の放ったアークセイバーは、撃ってきた弾を両断しそのまま白い飛行兵に狙い通り襲い掛かりました。

でも、白い飛行兵は斧槍の柄の部分で受け止めていますですが足を止めています。

チャンス!

【Blitz Action】

「

ッ?」

ウソッ!?

アークセイバーを囿に相手の死角に超高速移動した私は、バルデ
イツシュで近接戦を挑みましたがそれにも対応して見せました。

早く母さんとなのはたちを助けたのに・・・
「・・・こうなったら！！」

Side アルフ

こいつ、案外すばしっこい！

「こつのお、大人しく中りな！！」

「

私が放ったフォトンランサーは、尽く回避されるか盾で防御され
てしまう。

それに牙を立てようとしても簡単に避けていくので私の攻撃は、
一向に中る様子がないんだ。

「ちいつまた鎖で！！」

「

さっきから距離を取ってチマチマとー！？

「お前、男？だったら拳できな！！」

「

Side ユーノ

僕の相手の傀儡兵は、とても特殊でした。

動物の形をしている事もそうですが、なんとこの傀儡兵は・・・

ツ人型に変形？！

「
」
「しかもよりにもよって近接戦?!」

その四肢で地面を力強く蹴り加速してジャンプしながら空中で変形して見せる。

僕が、その事に驚いたら重力を味方につけて拳を振り下ろしてきたんだ。

回避が間に合わない!?

「
」
「クツ!!...うわっ!?!」

僕は、慌ててラウンドシールドを張って防いだけど吹き飛ばされてしまったんだ。

Side 偽アリシア

アイツは、駆動炉ん所に閉じ込めたし後は...

「あ、あれ?動けないよっ!!」

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天」

へへ、あの呪文は確か。だったら、そろそろ決着が着くか。じゃあ、あっちは...

「ぐうううッ」

「さっさと潰れなよっ!!」

こっちもか...なら

「プレシア、そろそろ止めの準備しておけ」

「ええ、分かったわアリシア」

プレシアにそう命じて俺もタイミングを謀っている。
俺の能力を解除する最高のタイミングをだ。

ひやは、やっとの思いで倒した相手が自分たちの味方・・・そんな時のあいつらの顔・・・

「最高だろうなあ~~~~」

「アリシア、イヤアアアアアアアアア!?!」

あ??うるせえぞプレシア

「ってなんじゃこりゃ~~~~っ!?!?!?!?!」

あ、あ、穴が!俺の腹に穴が開いてやがる!?!

「アリシ・・・ア・・・」

「おっと、あぶない」

この声は・・・

「お、お前いつの間・・・それにどうやって・・・」

「ん」

「う、上?」

倒れたプレシアを抱きとめたアイツが上を指差した。俺が目を中心に向けると人が一人通れるぐらいの穴が開いていた。

まさか、あんな短時間であそこからここまで掘って来たっていうのかよ?

「ありえねえ~~~~」

S i d e 晶

僕がここについてすぐに放った重圧砲で腹に穴を開けられ、虫の息の偽アリシアを眺めていた。

「ヒュー・・・ヒュー・・・ヒュー・・・」

これなら、放っておいてももう長くはないだろうけど・・・
「見れば見るほど獣化兵そっくりだ。何か関係があるのか？」

僕は、そんなことを考えながらプレシアが気を失った事で辺りに散らばったジュエルシードをプレシアを抱えながら回収しに動いた。でも、すぐになのはちゃんたちの声が聞こえてきて意識をそちらに向いたよ。

「フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイア　「え？え？えっ？フェイトちゃん？」え、なのは？」
「ダメッ止まらない！なのは！！！」

「ッ！」

「ああああ・・・」

「ゲホッゲホッ」

「！？なのは無事だったの！？」

「う、うん、なんとか」

なのはちゃんにフェイトちゃんの攻撃が直撃したときはヒヤッとしたけどよかった

「ぐうう・・・アルフ！？」

「はあ？ツてユーノじゃないか！？」

「あっちも落ち着いたみたいだけどなにがあっただ？」

どうしてなのはちゃんたちがお互い戦っていたのか気になったけど、とりあえず回収できた4つのジュエルシードとプレシアを抱えて4人に僕は近づいていったよ。

Side out

一時混乱していたなのはたちだったが、プレシアを抱えてやって来た晶に言われてそれぞれの話を聞きさっきの状況を飲み込めた

ようだった。

お互い相手の無事を喜んだのも束の間、倒れプレシアを心配していた。

「ユーノの魔法でどうにかできないの？」

「無理だよ。外傷ならともかくただ倒れたっただけじゃ・・・」

「・・・今ヘッドセンサーで調べたけど、内側がぼろぼろだよ。脈拍とかも乱れてる」

「そんな！？どうにかできないのっせつかく母さんを助けられたのに・・・」

「・・・」

「・・・そうだっ！ジュエルシードだよ、フェイトちゃん！こういう時こそ願いを叶えてもらえばいいんだよ！！」

「でも、なのは。ジュエルシードは・・・」

「あ・・・そうだった・・・ねえ、晶君。ガイバーの力で何とかならないかな？」

「・・・残念だけど、ガイバーにもそんな力ないんだ・・・」

「そんな・・・」

「・・・あたしゃ難しい事わかんないけど、ジュエルシードを魔導師が制御できないのかい？」

「あ・・・そうだよ、アルフ！ジュエルシードの力も魔力なんだから、魔導師とデバイスで誘導してやればうまくいくよ、きつと！」

「ツなのはジュエル晶？・・・これって」

「アイツを倒したときにすぐに回収できた分のジュエルシードだよ、使ってフェイトちゃん」

「ありがとう、晶！・・・」

さっそくフェイトは、受け取ったジュエルシードをプレシアの手に持たせその手を自分の両手で覆い集中し始める。

すると、その手から光が徐々に漏れ出し始めた。

晶は、その様子を確認してから隣でそれを同じように見ていたのはに手を差し出した。

「なのはちゃん、残りの分もレイジングハートにしまっておいて」「うん」

「……………ハア〜ハア〜ハア〜」

「うまくいったの、フェイトちゃん？」

「たぶん……………」

「……………今調べてみたけど、脈拍が安定してきたよ」

なのはの問いにフェイトは、疲労困憊の様子で微妙な表情のまま答えたが、成功を匂わせる晶の言葉に満ち足りた笑顔を浮かべた。

Side 偽アリシア

「やったね、フェイトちゃん!!」

「ありがとう、みんな」

クツソ……………俺はもうすぐ死ぬのにアイツら……………

俺は、あいつらの歓声を聞きながらどんどん力が抜けていく体に鞭を打って前に這いずっていく。

そして、手に目的の物が当たりそれを残った力で握り締めた。

一人で死んで溜まるか!!お前らいやお前らの大切なもん全部

「道連れ」に「じでやる」!!!!!!」

俺は、最後の力を振り絞り絞り掠れた喉でそう叫んだ。

Side なのは

後ろの方から聞こえてきた声に私たちは身を竦めてしまいましたが、ただ一人、晶君だけが振り向いていました。

「何だったの今の声!?!」

すごい声だったよ

「ッそれにジュエルシードが発動してる!?!」

「ツなのはちゃん!?!」

晶君に抱きしめられちゃったよお!?!

「ふええええ、しよ、晶君今、こっぴつことはしてる」何言ってるの!?!早く首に掴まって!?!「え、違うの?」

「早く!?!」

何か今の晶君怖い

私は、有無を言わさぬ晶君を不振に思いながら彼の首の後ろに両手を回します。

ううゝ恥ずかしいよおゝ

「フェイトちゃんもごめん!」

「え、晶?」

今度は、フェイトちゃんとプレシアさんも!?!

晶君は、2人を両脇に抱えて立ち上がりながらさらに続けて言うたんです。

「アルフさんは、ユーノを連れて全力で付いてきて下さい」

「ちょ、ちよつとどうしたのさ晶?」

「そつだよ、今の晶何か変だよ?」

うんうん

「それに、ジュエルシードのことどうにかしないと、晶」

「理由は後で話すから!?!早くッ!?!」

「あ、ああ分かったよ。ユーノちよつとごめんよ？」
「う、うん」

みんな晶君の迫力に負けて言われた通りに行動し始めます。
私たちは大人しく晶君にしがみ付き、アルフさんは動物形態にな
ってユーノ君を啜えて晶君に続いて走り出しました。

その時、私だけ後ろを向いていたので見えてしまったんです。
さつき晶君が見ていた辺りに小さな黒い穴が浮かんでいて、周り
の物をどんどん吸い込んでいるのを。

もしかして、晶君はコレから逃げようとしてるの？

Side フェイト

私たちは、今庭園の外、つまり高次空間内にユーノのバリアタイ
プの防御魔法に守られ、その外にいる晶とチェーンバインドでアル
フが繋いでくれています。

地面も重力も無いこの場所に戸惑っているけど、空気があったの
で落ち着いてみんな今は晶の話聞いています。

ただ、私はある理由でそれどころじゃありませんけど……

ど、ど、ど、どうしよう!?

「それで何があったのさ、晶？こんなところにまで来て」

晶に、晶にツさつきわ、私のっ……む、む、胸を触られちゃった・

・

「もしかして、あそこにあった、黒い穴に何か関係あるの？」

はう~~~~恥ずかしいよお!!

「何だいその黒い穴ってフェイトどうしたんだい!? 顔が真っ赤じ
やないか？」

「ア、アルフ、これはその……」

「大丈夫、フェイトちゃん？実は無理とかしてない？」
しよ、晶！！

「大丈夫だよ！うん、私。無理もしてないよ」

「そう？」

あう、まだ疑ってる話題を逸らさなきゃ！

「なのは、黒い穴って何だったの！？」

「え、うん。さっき最下層で周りの」
「
なんとか逸らせたかな？」

私は、そう思い心を落ち着かせてなのはの話に集中して聞き始めます。

そして、聞き終わると最初にこの質問をしようとしたアルフが真っ先に声を上げました。

「……なるほどね。それで関係あるのかい、晶？」

「うん、怨嗟の音が聞こえたと同時に重力異常を感知して振り向いたら」

怨嗟……あのすごい声。今も耳から離れないよ

「まだ小さかったけどアレは……ブラックホール（BH）だったよ」

「……はあ！？」「」「」

「ね、ねえ晶君今ブラックホールって……」

「言ったよ。冗談とかじゃなくてね。たぶん偽アリシアがジュエルシードを使ったからだよ」

Side out

晶がなのはたちにそう打ち明けた後、しばらく話し合う事になった、これからどうするかを。

そして、出てきた方針はこの3つ。

1つ目、地上に逃げるごと。

しかし、すでにBHの影響で空間が歪み始めていて、転移座標が設定できないとユーノが言っている。

2つ目、晶がそのまま牽引して転移可能なところまで退避する、もしくは救助を待つ。

これも上の影響下では不可能だろうとされる。

さらに、ユーノとフェイトがそのまま成長を続けるBHを放置すると地上や他世界に影響が出るかもしれないと危惧してこれも断念。そして、3つ目。

庭園が消滅してBHが露出したらジュエルシードをプレシアの時にみたいに発動させられるだけして放り込んで相殺を試みる。

これしか取る道は無かった。

ただ、フェイトはもう発動させるだけの魔力を残してなく、ユーノとアルフもこれまでの戦闘での消耗と今使ってる魔法の維持を考えると無理、なのはは何か2個発動させるのが精一杯だが、未発動の物を一緒に放り込んでも暴走ならともかく望んだとおりには発動しないとの事だった。

そこで、圧縮魔力が入っているシャマルが別れる前にはたちに預けていったカートリッジ24発を括り付けて補う事を考えて実行することになった。

「アイツが発動させた最初の一個に誘発されたのも合わせて6個・・・
・・・4個足りないけどこれで治まってくれればいいんだけど・・・
・・・」

「大丈夫だよ、晶」

「きつと何とかなるよ、晶君！」

「そうそう、気楽に行こうよ晶」

「アルフの言う通りだよ、晶」

「フェイトちゃん、なのはちゃん、アルフさん、ユーノ・・・そう

だね」

不安が口に出た晶をなのはたちは口々に励ます。

そして、事を起こすまでの猶予を休息しながら待つことにした。

また晶は、その間殖装を解いてエネルギーをチャージしている。

なのはたちはああ言っていたが、晶には何か嫌な予感がしたからだった。

そして、もうしばらく時間が過ぎ、時の庭園の内への収縮が終わり、晶たちが脱出するときよりも大きくなったBHが露出した。

「　　ッ　　ッ　　ッ　　出来たよ、フェイトちゃん！」

「うん。後はこれを括り付けて、晶！」

「ありがとう・・・ッ!!」

頼むうまくいってくれ!!

受け取った物を晶は、全力で投げBHにも引き寄せれてすぐに飲み込まれていく。

そして、しばらく様子を伺っていたが、成長速度が落ちただけに留まってしまった。

「……………」

失敗は、火を見るより明らかだった。

5人とも落胆を隠せないでいる。

だが、晶は気を取り直して 失敗した時のために考えていた策を実行に移した。

Side なのは

私たちが、落ち込んでいた時晶君は一人で次の行動を起こしていました。

胸の装甲に両手を掛け、勢いよく引き剥がしたんです。

ベリッ

「きゃッ」

「何してるんだい、いったい!？」

「……もしかして」

「足りない分を補ってみるよ、出きるか分からないけど」
え？

「やっぱり!」

ユーノ君、何か知ってるの？

ユーノ君に聞く前にヴヴヴヴって何かをチャージするかのような音が私たちに聞こえた後、BHに向かつてすごい音と一緒に晶君の胸から強い光が向かっていきました。

何してるの、晶君？

「ユーノ君、何か知ってるの？」

「うん、晶が今使ってる武装は胸部粒子砲メガスマッシャーって言って、ガイバー最大最強の兵装なんだ」

「へえー、晶のやつ、そんな武器持ってたんだ……でもなんで今まで使わなかったんだい？」

「強すぎて使いどころが無かったんだよ、アルフ。下手に街中で撃つと射線上が更地になるらしいんだ」

ふええええ、そんなにすごいんだ！

そして、ユーノ君が言うには、そのメガスマッシャーのエネルギーで足りない魔力を補おうとしてるとのことでした。

私にも何か出来ることないかな？

「……フェイトちゃん、まだ魔力残ってたら全部私に頂戴」

「なのは？」

「晶君ががんばってるのに見てるだけなんて出来ないよ」

これが私の考えて出た答えでした。

残り少ない魔力でも晶君の負担を軽減出来るならって思ったんです。

その思いにフェイトちゃんだけじゃなくてユーノ君とアルフさんも答えてくれました。

Side 晶

まだまだ、まだ全然足りない！！

1分ほど照射続けた頃、僕は徐々に忍び寄ってくるBHを見て焦りを覚えていた。

あと少しで限界のような感じがしたからだった。

後ろの方からなのはちゃんの声が聞こえてきたんだ。

「晶君！私達も手伝うよ！！」

「なのはちゃん！？でも君はもう魔力が……ってなんでバリアジヤケットを着てないの！？危ないじゃないか！」

「私たちのバリアジヤケットの魔力も掻き集めてどうにか砲撃魔法一発分の魔力を確保したんだよ。それに私だけじゃないよ？ねえ、フェイトちゃん」

「うん、なのはに言われて私達もただ黙っていられなかったの」

「フェイトちゃん、ありがとう……って私達も？」

まさか……

「そ、あたしらもさ、ねえユーノ」

「うん」

「なあ！？」

この2人もって事は……

「どうせ逃げられないんだ。長時間の魔法の維持なんて意味ないよ」

「そうだよ。だから、晶ががんばってる間だけ維持の分だけを残して全部なのはに譲ったんだ」

「2人とも……」

なのはちゃんは、ユーノの防御魔法からシーリングモードのレイジングハートを出しBHに向ける。

「いくよッデイバインバスターのバリエーション！！」

「……これが私たちの全力全開！！！！」

「スターライトツ……ブレイカー……ッ！！！！」

「は、ははすごいや、みんな。僕もサボってられないねッ」

桃色の魔力光がスマッシュヤー同様にBHに注がれていく。

でも、それも束の間のこと、一発分を全て注ぎ込み光は止んだ。

「もう正真正銘すつからかんだよ、後お願い晶……く……ん」
「……」

なのはちゃんも辛いのにがんばったんだ、負けてられない！！ガイバー……もつと……もつと力を！！！！

なのはちゃんの言葉に僕は、何も答えて上げられなかったんだ。

もうほとんどエネルギーが残っていなかったから。

だから、願ったんだ力が欲しいって。

そうしたら、本当に叶ったんだ。

背中から暖かい、いや熱い何かが注がれて力が湧き上がって来たよ。

なんだか分からないけど、これだったら！！

Side フェイト

私たちの渾身の一撃、晶の役に立ったかな？

私は、気絶して倒れこんできたのはを抱きとめながら晶の背中を眺めていた。

その時、私たちと背後に何か大きな物が転移してきたんです。

それは、大人の人が入っても十分余裕のあるサイズの白い塊。

どこかガイバーに似ていました。

そして、晶の背中に何かを照射し始めたんです。

もう力の残っていない私たちには、それをただ眺めている事しかできませんでした。

でも、その次の瞬間からメガスマツシャーの光が強くなっていくが分かります。

それに、これから感じるのは……

ジュエルシードの気配？でも、なんでこんなところで……

ジュエルシードは、暴走して発動した時近くにあった物を取り込むことを思い出します。

もしかして、これが最後のジュエルシードなの？

私には、そう思えてなりませんでした。

そして、どれだけ経ったでしょうか。

光が止むとBHが消え、晶が倒れてくると同時にジュエルシードと思われるソレはどこかにまた転移して行きました。

「大丈夫、晶！うっ・ひどい」

胸の周りが融けたり炭化してて、レンズみたいのも割れてる！それに両手首から先が無い！？

「しょ、晶・・・手が」

「ははは、見苦しいもの見せちゃったね。でも、大丈夫。時間が経てば元に戻るから」

「笑い事じゃないよお」

うう心配したのに・・・

「ああ泣かないですよ！？くそ、手が無いから頭を撫でて上げられないッ」

しばらく、私の泣き声が辺りに響いていました。

つづく

未熟な決着ときどき穴（後書き）

今回はいつもより長めになっちゃいました。
そして、まもなく無印編の終わりです。

未熟な『はじめまして』

BH 発生より10分

時空管理局所属 L級8番艦 次元空間航行艦船 『アースラ』より

「みんなどう、今回の航海は順調？」

「はい、現在第3船速にて航行「艦長!!!」」

「次元震らしき反応をキャッチしました。場所は、現在の速度ですと・・・8時間ほどの所です」

「らしき？正面モニターに出して。あと現地の様子出せる？」

「はい、やってみます」

アースラ艦長、リンディ・ハラオウンの指示を聞き、オペレーターが操作を行い、時の庭園の収縮の様子が映し出される。

「センサーは、次元震に似た数値を示しています。それにAクラスのリストロギア反応もあります」

「そう・・・そのリストロギアが原因かし、ん？これは魔力光よね・・・ちよつとここをズームにして」

「了解」

「・・・どうやら、彼らに事情を聞かなければならないようね」

リンディの目は、BH対策を話し合っている晶たちの姿を映していた。

リリカルガイバー 16話 未熟な『はじめまして』

BH消滅から一時間。

まだ空間の歪みが残っているため地上に戻れないため、なのはたちはフローターフィールドで休眠を取っていた。

いつ戻れるようになるかわからないからなるべく消耗を避けるべきつと晶が提案したからである。

ただ、再生中のため殖装が解けない晶は1人、見張りの意味も込めて座って休んでいる。

「………フェイトちゃん、眠れないの？」

「……気づいてたの、晶」

「まあね。何か心配事でもあるの？」

「………母さんが………」

「プレシアが元気になるかってこと？」

「それもだけど、もし母さんが私のこと受け入れてくれなかったら
って思うと………」

「………僕にはね、母さんの記憶が無いんだ。もの心ついた時にはもういなかったから」

「晶？」

「だから、僕には母親ってどういうものかわからないけど」

晶は、フェイトのいきなりなぜ？って疑問を手で制して自分の生い立ちを話続ける。

父親との生活や幼馴染の事を。

そして、最後に耳打ちで何かを告げるとフェイトは、酷く驚いて表情をしていた。

「それでね、瑞紀が僕は何も変わってないって言ってくれて吹っ切れたよ」

「………じゃあ晶も私と………」

「まあ、似たようなものだね。でもこの事は、なのはちゃんには秘

密だよ？まだ話してないから」

「……じゃあ晶のお父さんは？」

「受け入れてくれたよ」

「そうなんだ……でも……どうしてそんな話を私に？」

「僕だけフェイトちゃんのこと知ってるのは、フェアじゃないですよ？」

「……」

「ああそれと、もしプレシアが拒んだら彼女とOHANASIIしたいから教えてね？」

晶とフェイトがそんな話をしてからさらに4時間ほど経った現在。彼らは今ある問題に直面していた。

グウ~~~~

「……お腹減ってるみたいだね、みんな」

「……」

「……そういう晶はどうなんだよ？」

「殖装中は、栄養の補給はいらなんだけど……再生が終わって殖装が解けたら、相当減ることになるね」

全員、口を開くのが億劫だという様子だった。

ユーノは、代表してただ1人堪えていない晶に恨み言を言っている。

その影で、女性陣は今、ある意味食糧事情より深刻な危機に関して内緒話をしていた。

なのはとフェイトは、自身のスカートを両手で握り締め何かを我慢しているようだし、アルフも何処かそわそわして落ち着きがない様子である。

「ね、ねえフェイトちゃん、ま、まだ我慢できそう？」

「う、うん、もう少しだけなら。アルフは？」

「ま、まああたしもかね」

「うう〜で、でもこれからどうすればいいんだろあ」

なのはのこの呻きは、3人の心を表している。

だが、彼女らにとって救いの神が現れたのは、それからすぐの事だった。

「……？あれは……みんな！何かこっちに近づいてきてるよ！！」

「ほんとだ……あつ次元航行船だ！あれに救助してもらおうよ、みんな！」

晶の発見とユーノのこの言葉になのはたちは喜んだ。

ただ、そうなる今この状況を説明しなければいけないための会議を緊急で開かれる。

そして、晶たちの前にその船の乗組員の1人が転移してきた。

「こちら、時空管理局執務官「……」保護してください！！」

「クロ……では、武装を解除してこちらの指示に従ってください」

「……はい」「」「」「」

名乗りを途中で遮られてしまったクロ、もといクロノは、ぶすつとしながらも晶たちにそう指示した。

すでにバリアジャケットもデバイスも待機状態にあるのはたちは準備万端である。

即ちこの言葉は、晶に向けられたものであったが……

「早くしないか！」

「いや、これには理由が……」
「どうしても指示に従わないなら、実力行使も」

このようにクロノと晶は、少し揉める事となったが途中で仲裁に入ったリンディによって落ち着いたクロノに説明をし事無きを得た。だが、クロノは晶を監視して怪しい行動をした時、いつでも動けるようにしていようと密かに考えていた。

また、晶はリンディに自分が事情聴取を受けるから、なのはたちに何か食べ物と飲み物を上げて欲しいと願い出てこれも許可された。そして、艦内に通された晶たちはプレシアが医務室に運ばれていくのを見送った。

「エイミィ、後は頼む……」

「はいはい、ではあなたたちは、私について来て下さいね」

「あ、あの！」

「？確かあなたは……高町なのはちゃんだったけ？どうしたの？」

「そのお……」

恥ずかしそうになのはは、エイミィに耳打ちで何かを伝え始める。その後ろには、同じく顔を赤くして俯いているフェイトと落ち着きの無いアルフ。

聞き終えたエイミィも事態を把握してユーノに言った。

「ちよくと君はここで待っててね？」

「え、あの」

「こら、デリカシーが無いぞ、男の子」

「……」

「じゃ、そういうことだから、クロノもちょっとここでこの子と一緒に待っててね？」

「ちよ、エイミィ!？」

エイミィに怒られ、さらになのはたちからは非難の視線を受けユ
ーノは、黙り込んでしまう。

そして、クロノが止めるのも聞かず4人でどこかに行ってしまった。
た。

「……………あゝなんだ……君はいつまでその姿にいるつ
もりだ?」

「……………そういえばそうですね」

と、このような流れでユーノは元の姿に久しぶりに戻った。

何処からか戻ってきたフェイトやアルフは平然としていたが、な
のはだけユーノが人間である事に今まで気づいておらず驚いていた。
そして、食堂へと向かうのはたちと別れた晶は、クロノにリン
ディの待つ部屋へと案内された。

そこは、盆栽やら茶釜やら和風に彩られた部屋の畳の上にリンデ
イは正座して晶を出迎える。

「改めて、この艦の艦長、リンディ・ハラオウンです」
「深町晶です」

「さて、お堅い挨拶はここまでにして、ささ楽にしてくださいな」

「は、はあ」

「……………ところで、本当に大丈夫なのかしら?実際に見るとすごく
痛々しいけど……………」

「大丈夫です。そろそろ再生も終わると思いますので。それより何
から話せば?」

「では、初めからお願ひします」

晶は、ユーノとの出会いから今までのことを話した。

フェイトとプレシアのことは、あくまで被害者だという設定で。

また、プレシアについては、今回の表の黒幕だった事から物的証拠はBHに飲み込まれたが念には念を入れて彼女をグレイシア・テスタロッサという偽名で紹介していく。

謎の怪人（偽アリシア）に誘拐されて、魔導師適正があったフェイトを脅し街に散らばったジュエルシードを集めさせていたが、途中から晶たちと和解し協力してグレイシアを救出に成功して怪人も倒したが、最後の足掻きでジュエルシードを発動させBHを発生させて自らもそれに飲み込まれていった。

それを持っていたジュエルシードや砲撃魔法、ガイバーのメガスマッシャーのエネルギーを使ってBHを相殺させたと一部真実を改変して予めなのはたちと話し合っていた説明を行った。

聞き終えた2人は、無言だったがクロノはやがて口を開いた。

「……無謀だ。もし失敗していたらと考えなかったのか、君たちは！」

「落ち着きなさい、クロノ」

「うまく言っていたから良いようなものの、下手をしたら被害は君たちの命だけでは済まされなかつたんだぞ！！」

「……言いたいことはそれだけ？」

「何？」

「あなたたちには本当に感謝しています。飲み物も食べ物も無くかといつて地上に戻るこの出来なかつた僕たちを保護してもらつたんですから。でも、その時その場に居なかつた君に何か言われる筋合いはないと思うよ」

「何だと!？」

「それに、ユーノが言っていたけどジュエルシードの移送先は時空管理局だつたらしいじゃないですか。なのに、何らかの原因でその移送船にトラブルが発生してジュエルシードは所在不明になった。

当然、その調査を管理局は行うものじゃないんですか？ジュエルシ

ードの危険性もユーノは報告したと言っていましたよ。でも、一ヶ月以上経って全てが終わった後にあなたたちは現れた、これはどういうことなんですか？」

「……………」

痛いところを突かれた2人は、何も言えなくなりました。

その後は、何とか気を取り直したリンディが聴取が続けたが、その雰囲気は悪かった。

またそれに拍車を掛けたのが、ガイバーのことについてだ。

質量兵器を禁止する管理局側にとってまさにその塊であるガイバー。

そのことについてのクロノからの追求でさらに悪化したからだ。

その後、リンディの尽力によって何とか事情聴取も終わり晶は部屋の外で待たされることになった。

「艦長！あいつはまだ何かを隠しています。もっと強く追求すべきです！！」

「……………」

リンディは、クロノがまだ言っているが彼女の頭には退室の間際に言われた管理局への勧誘の晶からの返事が引っかかっていた。

「才能があるからって子供を戦場に送り込むあなたたちを僕は許せません」

「それは……それは仕方ないことだ！管理局は人手不足だから……」

「確かクロ君だった「僕はクロノだ！犬猫じゃない！！」失礼、クロノ君のような子供「これでも14歳だ！」……それでも子供であることには変わらない。それがこの場にいる、管理局側の世界にとってはそれが常識らしいですけど、日本で生まれ育った僕から

すれば、そんな常識間違つてると言わせて貰います」

「貴様！」

「だから、管理局に入るつもりは僕にはありません。それに……もしなのはちゃんたちも誘うつもりならまず親御さんから交渉したらどうですか？まあ、僕が親ならそんなこと許さないでしょうけど」

昔リンディは、まだ幼い子供を採用する管理局をいつか変えてみせると考えた事があった。

だが、いつの頃からかその事を全く考えなくなっていたことに晶とのこの会話があるまで気づかなかった、いや思い出さないうでいた事に今気づいた。

「艦長！……母さん聞いている！？」

「え、ええ聞いているわ。でもね、クロノ」

まるで誰かに記憶を操作されているような気がしたリンディは言い知れぬ不安を抱くが、それを表に出すことは無くまだ抗議しているクロノを説得し報告書には晶の話通りの内容で出す決定を下す。

今だに、納得がいかない様子のクロノが部屋を出て晶を食堂に連れて行こうとして目にしたのは、殖装が解けて気絶している晶だった。

クロノが慌てて晶を医務室に運び込んだのはまもなくの事である。また、プレシアについてだが意識を取り戻した彼女は、フェイトを生み出してからこの事を悪い夢だと認識していた。

それをアルフや晶、フェイトが根気よく説明して現実であったと認識するとフェイトに「ごめんなさい」と泣いて謝っていた。

なお、「フェイトは私の娘よ」と言っておりフェイトはその事を喜んだ。

また、元々頭の良いプレシアは現状を理解するとフェイトと暮らすために元々の名前を捨ててグレイシアを名乗る事を決める。

あとは、ボロが出ないように念入りに設定をして晶たちにもその内容を話し協力を頼み、管理局に自分がプレシアであることを隠した。

そして、空間も安定して地上に戻れるようになった晶たちは、久しぶりに地面を踏みしめた。

なのはと晶、ユーノは高町家へ、フェイトとグレイシア、アルフは彼女たちが拠点として使用していたマンションへと分かれることとなった。

なお、ユーノは、次元航路が安定するとミッドチルダ帰る予定となっている。

アルフも、新しい主人であるユーノについていくこととなっていた。

ただし、もしフェイトをまた泣かせるような事があったら何処までも追いかけてぶちのめすとグレイシアに警告していた。

そして、それぞれの家への分かれ道にさしかかった。

「今度決着をつけよう、フェイトちゃん」

「うん、私負けないから、なのは」

「私だつて負けるつもりないよ」

「フェイト、行きましょ」

「そうそう、家でゆっくりしようよ、フェイト」

「うん。じゃあありがとうね、なのは、ユーノ。それに晶……」

「どうしたの、フェイトちゃん？」

「……これ助けに来てくれたお礼」（チュッ）

「へ？」

「じゃあー!」

「あら」

「へ〜」

「うわ〜」

フェイトは、しばし晶の前で何かを考えていたがやがて覚悟を決めると行動に移した。

それは、晶の頬へとキスだった。

間抜けな声を出す晶を始め、それぞれがそれぞれの反応を示す。

そして、晶が何かを言う前にフェイトは顔を真っ赤にして離れて彼女を呼んでいたグレイシアとアルフの元に去って行ってしまふ。

「~~~~~ツじゃあまたね、晶！」

「.....」

「~~~~~ツ晶君、何鼻の下伸ばしてるのツ？」

「イタツどうして足を踏むんだよ、なのはちゃん？」

「だらしない顔してたからだよ！」

「ちょ、待つてよなのはちゃん！」

晶を置いて帰っていくなのはを踏まれた庇いながら追いかけていった。

ちなみに、これが原因なのかなのはとフェイトの勝負は壮絶だったと決戦場の結界を担当していた唯一の観戦者である某結界魔導師の少年が言っていたが勝敗に関しては何一つ話すことはなかった。

そして、それから1週間後。

フェイトの姿は、私立聖祥大付属小学校のなのはたちの同じクラスにあった。

「あ・・あのはじめまして、フェイト・テストロッサと言います。よろしく願います」

つづく

未熟な『はじめまして』（後書き）

次回からはA、Sと無印の間の話を少し書こうと思っています。
5/30 誤字修正です

未熟なとある日

リリカルガイバー 17話 未熟なとある日

ユーノとなのはの2人は今、海鳴市の上空に張った広域結界内にいた。

「ねえ、なのは」

「何、ユーノ君」

「いつたい、なのはは何するつもりなの？結界を張ってほしいだなんて」

「ん〜．．．ちよつとスターライトブレイカーを改良してみたからその試射がしたかったの」

「アレを．．．も、もしかして、さらに威力をあげたなんて暴よくわかったね、ユーノ君」拳え、!？」

「チャージタイムを増やして威力を大幅アップしてみたの。目標は、晶君のメガスマッシュだよ！レイジングハート！」

「ま、待ったなのは!！」

【Starlight Breaker standby ready】

「あわわわわ」

【count 9．．．8．．．】

「はッこ、こうしちゃいられない！もつと結界を強化しないと!！」

【．．7．．．6．．．5．．】

「むむ．．．！これは結構スゴイかも!！」

【．．4．．．3．．】

「間に合った!！」

【．．2．．．1】

「スターライトおお・・・ブレイカーーツ!!!!」

2人は、桃色の閃光に飲み込まれていった。

同時刻 アースラ

リンディとクロノは、エイミーが地上から広域結界の展開と高魔力反応をキャッチしたと報告を受け一部始終をモニターごしに見ていた。

「……」

「な、何てバカ魔力……」

「結界内側から破壊……え」と・・・なのはちゃんたちは・・・

あ、大丈夫！生体反応があります。でも、墜落してる!!」

「あゝもう！エイミー転送してくれ！」

「あ、大丈夫みたいだよ、クロノ。ちょうど晶君が近くにいて今救助に向かっている。十分間に合うよ」

「それでも、クロノを送っておいてエイミー。地上の医療施設じゃ分からないリンカーコアへのダメージが今回の場合ありそうだから」

リンディの心配は正解だった。

高町なのは、自爆により魔力エンブレイ、全治一日半とアースラ医務室より診断される。

ちなみにユーノは、軽症ですんでいる。

そして、自宅のベットで静養してるなのはは今、晶からお説教をレイジングハートともども受けていた。

「ううう失敗したよお」

【Sorry my master】

「まったく・・・でもいい機会だ。しばらくなのはちゃんは、魔

法の使用とそれに関する訓練禁止!!」

「ええーひどいよ、晶君! どうしてそんな事言つもの!?!」

【It is not possible to consent
《納得できません》!】

「・・・」

「イッタ〜イ! 何で、チョップするの晶君!」

「前にも言っただろ! 無茶な訓練をするなって!!」

「ううー」

晶が怒っているのには訳があった。

それは、以前ユーノから教えてもらった最近なのはとレイジングハートが行っている訓練の内容である。

日常生活をレイジングハートが強い負荷を掛けたまま生活し、授業を聞きながらレイジングハートから送信されるデータを元に心の中でのイメージファイト、そして後の空いた時間はぐったりするまでの実践訓練かフェイトとのトレーニング、これを日曜以外くり返している。

この内容を聞いた晶は、無茶な訓練をしないようにと注意してみた。

だが、なのはは「最初は辛かったけど、今はそんなに」っと言っていて改善する様子が無かった。

だから、グレイシアやフェイト、クロノなどの他の魔導師にも尋ねてみたがやっぱりこれはやりすぎだと言われる。

そんな時に起きた今回の事故。

晶は、容赦しなかった。

「『散りも積もれば山となる』・・・昔の人はよく言ったね。まさに今のなのはちゃんだ」

「?」

「なのはちゃんは前、あの魔導師養成ギブスを今はそんなに疲れな

いって言っただけで、そんなにつてことは少しは疲れる。そして訓練に次ぐ訓練・・・その後全力で休む事での完全回復」

「そうだけど、何かおかしいかな？」

「んな訳あるかー！！」

「にゃあ!？」

「疲れは自覚のないまま溜まってくだぞ！魔法の練習が楽しいのは良いけど、そのせいでいつか魔法が使えなくなっても良いのか！？グレイシアみたいにッ」

「あ・・・」

「あいつは、無茶に無茶を重ねた結果、魔法を使ったびに寿命を削るような体になったんだろうが！！」

「・・・ごめんなさい」

【・・・Sorry】

「とにかくしばらくはゆっくり休みなよ」

「うん・・・」

「・・・クロノに相談して教導メニューってのを頼んでおいたから、それを参考にこれからは訓練をしなよ？わからない所はグレイシアに聞けば答えてくれるだろうし」

「あつ・・・ありがとう、晶君！」

「ただし！・・・適度に休む事、良いね？」

「うん!!」

これはなのはの失敗したある日の光景。

ところ変わって、最近海鳴市内のとあるマンションに引っ越したグレイシアの朝は、起きてすぐに厨房に立つことから始まる。

「え〜と、次に塩を振って・・・ってもうこんな時間！？アルフ、フェイトを起こしてきて」

「・・・あいよ」

「・・・それでこっちは、味噌を溶かしてと・・・」

グレイシアは、傍らに置いてある料理の本を見ながら朝食を作っている。

その指は、絆創膏をいくつもつけていた。

「やっぱり、20年以上のブランクはきついわね。あの頃はこのぐらい簡単だったのに・・・って焦げてる焦げてる！こっちは、吹き零れてる!？」

「・・・母さんおはよう」

「おはよう、フェイト。もうすぐできるから待ってて」

「あ、私お皿運ぶの手伝う」

「あら、ありがとうフェイト」

今までアリシアを生き返らせるために研究に打ち込んできたグレイシアは、使い魔のリニスが食事を用意しなくなった後はジャンクフードやサプリメントなどに頼ってきたために出来たブランクだった。

そして、出来上がった朝食のメニューは、白米、少し焦げた焼き魚、少し薄い味噌汁、ほうれん草の御浸し、グレイシアの苦心の作品だった。

「・・・ごめんなさい、フェイト。母さんまた失敗しちゃった」

「気にしないで母さん。私、母さんの手料理大好きだもん」

こんな会話の後、フェイトは米粒一つ残さず食べてグレイシアお手製の弁当を持って学校へ登校していく。

アルフは、そんなフェイトを途中まで見送った後、ユーノのところへと向かった。

一方、2人を送り出したグレイシアは、掃除、洗濯を済ませると

近所のスーパーの広告を見て今日のお買い得商品を調べた後に昼食を済ませるとある部屋へと入っていった。

その扉のプレートは、『グレイシア工房』と書かれている。

この研究所で日夜、フェイトを守るためのグッズの製作をグレイシアは行っていた。

ちなみに最新作は、今日もフェイトがバルディッシュをはめて登校していったペンダントである。

これは、待機状態のバルディッシュでもある特定条件下 フェイトが気づいておらずバルディッシュが彼女の危機を感知した時で防御魔法を行使できるようにするデバイスの拡張装置である。

フェイトは、この機能を知らないが単純にグレイシアからのプレゼントとしてすごく喜んでいた。

そして、今はその次回作の研究真っ只中で参考資料としてルーン魔術の本を開いている。

地球の魔法ともいえる呪いとミッドチルダの技術を融合させた物を作るのが目的だった。

「……やっぱり、このルーン文字っていうの魔力に働きかけてる。まあ、これじゃあ気休め程度だけど」

『あ、あの母さん、起きて。朝だよ』

「あら、もう16時40分。タイムサービスに向かわなきゃ」

グレイシアは、フェイトの声が録音された目覚ましを止めて出かける準備を開始した。

この目覚ましは、グレイシアを起こしたいと考えたフェイトだが、彼女は朝に弱く起きられなかった。

そこでせめて自分の声で起きて欲しいと考えて初めてもらったお小遣いで購入し、プレゼントしたものである。

以降グレイシアは、この目覚ましで起き、研究を止める時にも愛用している。

そして、スーパーに出かけると店舗の前で知り合いの2人の主婦に出会った。

「こんにちは、桃子さん、シャマルさん」

「あらこんにちは、グレイシアさん」

「こんにちは。グレイシアさんも今日は牛肉が目的ですか？」

「ええ・・・と言う事はシャマルさんもなんですね。では、今日も私たちはライバルですね」

「ですね」

「あ、私ですよ。お互い今日もがんばりましょ」ピッピッピッピッ
「・・・現在午後17時0分0秒をお知らせしますピッピッ
ッ！」

『ただいまより、午後5時から10分限りの恒例タイムサービス

』

桃子の言葉を遮る様に流れた時報。

この店内放送を合図に主婦の激しい戦いが始まった。

桃子、シャマル、グレイシアは急いで目的の物を手に入れるべく急ぐが、すでに他の主婦たちが争奪戦を始めている。

そして、タイムサービスの時間が終わり桃子達と別れたグレイシアは、戦利品を手に帰宅していった。

部屋に戻ると夕食の支度を始めながらフェイトたちの帰りを待つ。フェイトは、なのはや晶とのトレーニングをした後、アルフと帰宅してくるからだ。

「ただいま、母さん！あ、私も手伝うね」

「いいのよ、フェイト。テレビを見てても」

「じゃあ、あたしはそうしてるよ」

「あんたは、少しは手伝いなさいよ！」

こんな会話も最近では、日常茶飯事となっている。
そして、21時ごろになるとフェイトとアルフは就寝し、グレイ
シアも準備が出来次第眠るようになっている。
これがテストロッサ家のある日の光景であった。

つづく

未熟な夏の日

無限書庫。

管理局の管理下にある世界の書籍やデータが全て収められた気の遠くなるほどの規模で本棚が並んだ書庫である。

そのあまりの巨大さ故にチームを組んで年単位での調査が行われる。

だが、そこにたった2人で挑む無謀な挑戦者がいた。

その名は、ユーノ・スクライアとその使い魔、アルフ。

無事次元航路が安定しミッドチルダに戻る事のできたユーノとアルフは、晶が戻る方法を探すためにジュエルシードの1件で管理局に貢献した見返りに無限書庫の閲覧を希望した。

そして、リンデイが許可を出しそれ以降ここでユーノは検索魔法を駆使して探し、アルフはその手伝いをしている。

「ユーノ、新しいの持ってきたよ！」

「……ありがと、アルフ」

「それで探し物は見つかったのかい？」

「まあ少しずつね……」

リリカルガイバー 18話 未熟な夏の日

ジュエルシード事件から3ヶ月。

季節は夏真っ盛り。

世間の学生は、この時期特有の長期休暇、夏休みに突入していた。それは、なのはたちも例外ではない。

そして、今なのはたちは、海に海水浴に来ていた。

「12、34、5678・・・とふく〜これで準備運動おしまいだよ、フェイトちゃん」

「うん・・・ね、ねえなのは。私の水着っておかしいのかな？」

「そんなことないと思うよ、フェイトちゃんにすごく似合ってると思うし」

「そうなんだありがとう、なのはの水着はかわいいね」

「えへへ、そうかなあ・・・でも、どうしてそんなこと聞いてきたの？」

「あのね、さっきからいろんな人がこっちを見てるから」

フェイトはパレオ付きの青いセパレートの水着、なのはは胸元にリボンのワンポイントと所々フリルのあるオレンジのセパレートの水着を着ている。

確かに、フェイトの言う通り先ほどから様々な人がなのはたちに注目している。

中には、立ち止まりこちらを見物している者までいた。

そして、なぜか全員男であった。

だが、なのはが答える前にすずかと組んで準備運動していたアリスが答えた。

「それは、私たちじゃないわよ？」

「そやね、アリスちゃんの言う通りや・・・まあ、一部はちゃんけど」

「アリスちゃん、それにはやてちゃん、ヴィータちゃん？」

「どうということ？」

また、それに同意するようにザフィーラに乗ったはやと恥ずかしそうに顔を赤くしてもじもじしているヴィータが一部の見物者から歓声を受けながら加わる。

ちなみに、すずかは薄紫のワンピース、アリスは白とレモンイエ

ローのセパレート、はやては競泳水着、そしてヴィータは……

「あいつらは、シグナムさんやシャマルさんたちを見てるのよ」

「まあ、2人ともスタイルええからな」

「それだけじゃないでしょうが！アンタが選んだ水着も原因の一端じゃないの？ほらヴィータがいい例じゃない。さつきもこつち来るときヴィータの写真撮ろうとしてた奴らが居たでしょうが」

「白いスク水が悪いんか？折角『ヴイーた』って名札までつけてヴィータの魅力を十二分に引き立てとるんよ。それにシグナムたちも似合うもん選んだけど？」

シグナムは赤いビキニ、シャマルは背中が大きく開いた翠のワンピースである。

また2人が準備運動のさいに前屈や背面反りなどをしていた時に観衆が色めき立っていた。

その成果、2人とも何処か居心地が悪そうにしている。

ちなみに八神家のメンバーが着ている物は、全てはやて監修の元でチョイスされている。

「このままじゃ落ち着いて遊べないよ、なのは」

「そうだね、フェイトちゃん。どうしょ」

「私も恥ずかしいよ、アリサちゃん」

「そんなこと私に言われたって、どうすりゃいいのよすずか」

「は、はやてえ」

「……わかったわどうにかしたる。ヴィータ降りるの手伝って」

「あ、ああ」

「よいしょつと……ザフィーラあの人たち追い払って来たって、お願いや」

「ウオン」

「・・・あ、監視員の人に捕まらんようにな！それと怪我させたらアカンよッ！」
「ウォン！」

そして、しばし砂浜に悲鳴と獣の鳴き声が響き渡り静かになった頃には、プライベートビーチのようになのはたちのパラソルだけが残されていた。

その下には、桃子とグレイシアが麦藁帽子を被ってなのはたちを見守っていた。

ちなみにグレイシアはフェイトの水着姿をビデオや写真で記録している。

「さ、これで静かになったやろ？みんな遊ぼ」

「い、いいのかな？」

「やっちゃったものは仕方がないわ、なのは。開き直って楽しんだ方が得よ」

「そ、そうだね」

「・・・そういえば、晶君これなくて残念だったね」

「あんなのほつといていいのよ、すすか」

「アリサちゃん、それはひどいよ」

「いいじゃない、私たちの誘いを蹴ったのアイツなんだし。ほら、なのはにフェイトも泳ぐわよ！」

「あの私、泳げないんだけど・・・」

「大丈夫、私が教えてあげるよフェイトちゃん」

「ありがとう、なのは」

こうして、アリサに引つ張られる形でなのはたちは海へと飛び込んでいった。

「ほんまに残念や。折角晶君の趣向調査のためにこの水着選んだり

ヴィータたちにそれぞれ違った水着選んだのにな」

「え？はやて、何か言った？」

「いゝや、なゝゝんも言つたらんよ、ヴィータ」

「そっか」

ザフィーラの背中に乗って海の中を進んでいるはやてとその近くで一緒に泳いでるヴィータの間にそんな会話があったとかないとか・・・

同時刻 喫茶翠屋

「これ追加。よろしくね、晶君」

「あ、はい！」

バイトのウエイトレスが持ってきたカップや皿を置いてホールに戻っていく。

晶は、黙々と食器洗いに専念していた。

本来、雇用が禁止されている年齢である現在の晶に今出来る仕事は、これと掃除ぐらいだった。

昔から仕事で忙しい父に代わって家事をやって来た晶には、苦にならない事である。

「……………晶君、今からでもなのはたちのところに行かないかい？」

「土郎さん、突然来て何言ってるんですか！」

「だがね……………」

「今はこんなですけど僕、精神的には高校生ですよ？その事知ってるでしょ。それなのに働かずに旅費を出してもらうだなんて……………」

「晶君のそついう律儀な所はうれしんだが……………」

士郎は、そう言うと腕を組んでうんうん言い出した。
晶は、それを見ながらも手を止めずに皿を洗っていく。

「……………だったら、これならどうだ？なのはをその旅行に同行させてやってくれ」

「は？あつちで何が起るか分からないですよ？」

「クロノスだったか？君が元の世界で追われていたのは？」
「ええ」

「だが、ジュエルシードのせいでこの街は突然地面から大木が生えてきたりと不可思議な騒ぎが色々起きたせいでニュースや新聞に取り上げられて目立ったが今の今まで奴らは来なかったんだろ。ならこの世界には存在しないんじゃないかな？」

「……………確かに。でもだったら、これから僕がやるうとしてるのは無駄ってことに」

「そこで話を戻すんだが、俺と桃子さんはこの店があるから、長期連休になってもなのはを何処にも遊びに連れて行ってやれない。だから、娘が遊びに行く旅費を親が出すのは普通だろ？」

「……………僕1人だったので野宿するつもりでしたけど、そうなる
と旅館かホテルに泊まらないといけませんけど保護者がいないと・

「保護者が……………恭也と美由希は忙しいし……………少し考えさせてくれ」

それから数日後。

なのはと晶、そしてテストアツサ家の面々は、某県の皆神山の山中にいた。

「グレイシア、迷惑じゃなかったかな？保護者役として連れてきてしまったけど」

「いいのよ、私も折角の夏休みだしフェイトと何処か行きたいと思
っていたから。それに人類以外の知的生命体の生きた遺産をこの目
で見られるかもしれないんでしょ？研究者としての血が騒ぐわ！！」
「そ、そうですか・・・」

グレイシアに様子に呆れながら山中を進む。

なのはとフェイトもハイキング気分でその後について来ている。

「フェイトちゃん、旅館の人に聞いたら今日の夜、夏祭りがあるん
だってみんなで行こうね！」

「うん、私お祭りって初めて」

「そっか・・・あのね、お祭りにはね綿飴やチョコバナナ、りんご
飴に杏アメとか色んな美味しいもののお店や金魚掬いやヨーヨー釣
り、射的とかの遊べるお店がたくさんあって楽しいんだよ」

「へ〜〜〜」

「あ、それとね、旅館の人が」

道中、今日の夜の予定に花を咲かせる2人。
やがて、晶たちは目的地に到着した。

「ここが、ふもとの人たちが言ってたこの山を祭った祠みたいだけ
ど・・・奥は行き止まりみたい」

「じゃあ、これ以上先に進めないの、晶君？」

「だね。となるとここから調べるしかないけど・・・頼めるかな
2人とも？ヘッドセンサーじゃ範囲が狭すぎるんだ」

「うん」

「いいよ」

「あ、ちよつとまちなさい！セットアップする前にコレを地面に刺
してフェイト」

「コレって何、母さん？旗みたいだけど・・・」

「コレはね、刺した魔導師の魔力を使つて結界を発生させる簡易結界発生装置よ。晶君が周りに気づかれないようにしたいって言つてたから、旅行に出る前に母さん急いで作つたの。なのはちゃんもフエイトも結界魔法使えないし私ももう魔法は使えないから……」

・あ、刺す時に『フラグイン！』って叫んでね？それが起動パスワードだから」

「うん……えいッ『フラグイン！』」

グレイシアの説明どおり結界は、旗を中心に半径10メートルほどを半球状に包み込んだ。

なのはとフエイトは、それぞれの持つ探索魔法を地下に向けて発動させる。

結果がでるのを飲み物や食べ物を出していつでもなのはたちが休めるように準備をしながら待つ晶とグレイシア。

本来晶は、地下数十キロを潜つて調べようとしていたが、穴の後始末などいくつかの問題点をグレイシアから指摘されなのはたちに頼る事になった。

そして、結果は地中に大きな空洞があるだけだった。

今は、敷物の上に座つてなのはとフエイトは休憩しながら晶の質問に答えていた。

「……その空洞内には、化石とか何か生物の反応はなかったの？」

「私のほうは、何もなかったけど……フエイトちゃんは？」

「私も同じだよ」

「そっか……ありがとう2人も。じゃあ街にもどつて今日は観光しようか。明日は海鳴市に帰りながら水族館や遊園地とか動物園に行つて遊びたおそうか」

晶は、若干気落ちしていた。

ここに来れば何か元の世界に戻る手立てがあるんじゃないかと期待を少なからずしていたからだ。

ユーノの方からも何の音沙汰もないためなお更だった。

だが、それも街に戻るまでのことその後は、なのはたちとこの辺りを観光していく。

そして、夜になるとなのはとフェイトに誘われて夏祭りへと繰り出していった。

なのはは金魚柄のピンクの浴衣、フェイトは白百合柄の水色の浴衣を着ている。

「どうかな晶君？この浴衣、仲居さんに貸してもらったの」

「ど、どう晶？」

「2人ともとってもかわいいよ」

「えへへへ、ありがとう」

「はう〜」

「さ、嫌な事忘れてパアツと遊ば晶君！」

「そう・・・だね」

「そうそう、行こ晶君、フェイトちゃん」

「ああ」

「え？あ、うん」

なのはの心遣いに感謝していた晶とふにやっと表情をとろけさせているフェイトもなのはに腕を引かれて屋台へと歩き出す。

ちなみにその頃、薄紫の浴衣を着たグレイシアはフェイトを中心に写真を撮りながらその後ろをついて来る。

そんな夏のある日の夜だった。。

一方、無限書庫では・・・

「ユーノお、あたしも手伝おうかぁ？」

「コラツユーノにくつつくんじやないツリーゼロツテ！」

「うるさいにゃ〜あんたには聞いてないにゃ」

「あんだとコラ!？」

「なにさ、やるって言うの、アル・フ？」

「このっ！」

「や、やめなよアルフ・・・ってリーゼアリアさん何か？」

「私も何か手伝うわ」

リーゼロツテの惚けた態度にアルフは、持っていた本を放り出し詰め寄っていく。

一方、リーゼアリアは2人が取っ組み合いをしている間にユーノの隣を陣取っていた。

リーゼロツテとリーゼアリア姉妹は、ユーノをクロノから紹介された時に妙に彼のことを気に入ってしまった暇があればこうしてちょっかいをかけて来るようになったのだ。

「こら！リーゼアリアあんだもユーノにくつついってんじやない！ユーノが迷惑そうだろ！」

「そうなの、ユーノ？」

「あ、いや・・・それは・・・」

猫を素体にしたリーゼ姉妹と犬科の狼が素体のアルフは素体の影響なのか仲が悪かった。

一度喧嘩が始まると中々治まらず調べ物どころでなくなってしまう。

「今日こそ、決着つけてやる！表にでな!!」

「そのケンカ買った！」

「返り討ちにしてあげる」

「あわわわわ・・・」

そして、今日もケンカが勃発しユーノはそれを情けない声を出しながらついて行くしかなかった。

4人が去った無限書庫には、さっきまでユーノが見ていた本が投げ出されている。

まだ、読み始めたばかりなのかページはほとんど進んでいない。

だが、その表紙には、闇の書事件に関する報告書と書かれている。その日付は今から11年前になっていた。

つづく

未熟な秋空に差す影

ゴポゴポ水泡が弾ける音と何らかの液体を循環させる音が入り混じる中、互いの姿をそこに広がる闇に隠されているのを気にせず、彼らは協議をしていた。

「……AM0301-Lは、アルハザードに辿り着く前に死んだ」

「まあ、それほど期待していたわけではありませんでしたが……仮に奴が彼の地に辿り着きその力をもって叛旗を翻す可能性もありましたが、手に入る物なら手に入りたいと思い監視をしていたわけですが……」

「残念でなりません」

「じゃが、全くの無駄と言っわけでもなからう？ プロジェクトFの研究データのすべてはこちらに送られてきておるのだから。じゃが……」

「ええ、奴を殺した者が問題です」

「よもや、夢物語の地を探していて神話の存在が現れようとはの。いやはや、数奇な巡り合わせじゃて」

この言葉と共に彼ら前に3D映像が映し出された。

だが、その光源を持つとしても彼らを露にする事は無くぼんやりと輪郭を浮かび上がらせるだけだった。

「神話……ガイバーですか……」

「殖装者の名は、深町晶という次元漂流者だそうで」

「はてさて、どうしたものかの。折角現れた彼奴らの生きた遺産じゃ、是非我らが手に収め研究してみたいものだが……」

「無理矢理連れてきて、所内で暴れられても困りますし……」

学校が終わりすずかやアリサともすでに別れ、今日は塾が無いのは晶と共に以前使ったグレイシア謹製の簡易結界装置で作り出した結界内でトレーニングに打ち込んでいる。

小太刀の木刀を持った晶と少し離れた場所に向かい合うように立っているのは、そしてその近くには待機状態のレイジングハートがベンチの上に置かれていた。

「2人とも行くよ〜」

【All right】

「いつでも来い！」

「すう〜はあ〜〜〜〜〜……リリカルマジカル！」

なのはは、目を閉じ深呼吸をしながら精神集中を行った後、呪文を詠唱を開始した。

「福音たる輝き、この手に来たれ。導きのもと、鳴り響け。ディバインシューター、シュート！」

「よっつ」

【？】

「ほい」

【？】

「コントロール、コントロール……」

「ハアッ！」

【？】

自らに向かって放ったれたのはのデバインシューターを晶は、ある時は体を右にずらし、またある時は一步下がり、またある時は木刀で防ぐなどといったことを繰り返している。

なのははレイジングハートの補助なしでのシューターのコントロールを、晶はその的になる事でシューターを避けたり、防いだりと回避や防御の訓練をしているように見えた。

そして、レイジングハートのカウン트는晶が動かなかつたらヒットしていたもしくは、木刀で防いだ場合の数を計測している。

【???】

「くう！」

「こッの！ハアハア」

【???】

「ぐうっ!？」

「大丈夫、晶君!？」

【New record】

この訓練を初めて行った頃、晶はほとんど反応する事が出来ず1、2発で体に痛打を貰っていた。

その度に、なのははすぐに晶に駆け寄っていき訓練は中断してしまっ

た。人を傷付けることに罪悪を感じる正常な感性の持ち主であるのは。

だから、今も晶にヒットするとすぐに駆け寄っていつてしまう。

「やっぱりこんな事やめようよ・・・それが無理ならせめて殖装しよう?」

「それじゃ、ダメだって前に言ったでしょ?生身のままやるから意味があるんだよ」

「『ガイバーは今以上の力を得ることは出来ないから、強くなるに

は戦闘技術と反応速度を上げる以外の方法が僕には思いつかない』
「だったよね・・・だけど・・・」

「ごめん。なのはちゃんに魔法が使えるだけで普通の女の子だもんね、人を傷付ける行為をして何も感じないわけないもんね・・・でも、やらなきゃいけないんだ、強くなるために・・・」

「・・・そんなに強いのが、アル・・・アルカンフェル？って」「うん。今のままじゃ手も足も出ないほどにね」

「ふえ～～だったら私も手伝いするよ！それにフェイトちゃんもきつと協力してくれるよ、ユーノ君やアルフさんもきつと！だからみんなががんばれば「それはダメ」え・・・」

「あいつは、なのはちゃん流に言うともみんなで全力全開で戦えば勝てるなんて次元じゃないんだよ」

「だったら、なおさら!」

「これは、僕たちの世界での戦いだよ。こつちの世界の君たちを巻き込むことは出来ないよ。あと似たような問答をこの訓練を始めてからもう数十回もしてるよ？」

「うううううう～～～～晶君のバカ!!もう知らない!!」

「なのはちゃん!?!」

・
・
・

「　　って言うことがこの前あったんだよ、フェイトちゃん!!」「晶がそんな事を・・・だから、ここの所、休み時間やお昼に晶と話そうとしなかったの、なのは?晶寂しそうだったよ」

「いいの!晶君の方から謝って来るまでぜーったい許さないんだから」

「・・・それで肝心の晶は?姿が見えないけど・・・」

「はやてちゃんの所。昨日、ユーノ君とアルフさんからお手紙とピ

デオレターが届いたの。それでシグナムさんたちに話さなきゃいけないことができたんだって。お手紙の内容は、見せてくれなかったけど……」

「そうなんだ」

「それより、トレーニングを始めようよ。それでね、終わったら家で一緒に届いたビデオレターを見よ？」

「うん……あ、なのは、話は変わるけど母さんが例の件やつとOKしてくれたよ」

「ほんと！やったね、フェイトちゃん！これで、シグナムさんやヴィータちゃんにも負けないね」

「うん。でもね、パーツを取り寄せたり、フレーム強化をしないと危ないとかで結構時間がかかるって」

そして、なのはとフェイトは、教導メニユーを元に組んだトレーニングを開始した。

またレイジングハートとバルディッシュは言葉こそ発することはなかったが彼らも自信が生まれ変わるその時を心待ちしていた。

その頃、晶はシグナムたちと人っ気のないビルの上屋にいた。

彼女たちの手には、昨日届いたばかりのユーノからの手紙《中間報告》が握られている。

ちなみにはやては、検査入院ためこの場にはいない。

というか、元々晶はこの場にシグナムたち4人しか連れ来る気はなかったが。

「こ、コレに書かれていることは、本当なのか深町！！？？」

「嘘ついてたら承知しねえぞッ！」

「嘘だつて言つてください、晶君！」

「……本当なのだな？」

「少なくともユーノが無限書庫つて所で数ヶ月調べた限りではそう

みたいなんだ。残念ながら……」

「あたしたちがいるだけではやてが……」

「かといって闇のいえ、夜天の書を完成させればはやてちゃんが死ぬなんて……」

「……」

ユーノからの手紙には、平行世界への渡り方について進展はないが、それを調べている時に発見した闇の書についての情報が現在分かっている事が書かれていた。

闇の書の本当の名前は夜天の書といい、現在は壊れている。

ページを完成させれば融合事故がほぼ確実に起き、周辺の次元世界をも巻き込む程の暴走の果てに所有者すらも殺した後、白紙状態に戻り次の所有者の下へと転移すると。

「……ならば、私たちがやることは一つだ。主はやてが少しでも長く生きてもらうため我等は再び眠りにつこう。スクライアたちがどうにかする方法を見つけてくれるのを祈りながら」

「ですね。はやてちゃんは泣いちゃうでしょうけど……」

「あと、じいちゃんたちにもお別れ言わねえとな」

「深町、お前の心使い感謝する。主の前でこのことを伝えずにいてくれて」

「……感謝なんてよしてください、ザフィーラさん」

「それと、お前が我から一本取れるまで面倒を見てやりたかった」

「いえ、いいんです。今までありがとうございました」

「深町、我等は明日主はやてが退院後、予てより計画していた家族旅行に出かける。その後主はやてを説得して眠りにつこうと思っている」

「いっぱい思い出を作ってきてください。眠ってる間も夢で見られるくらい」

「ああ、そうしよう」

ミッドチルダ 某所

「お前たち、あの方々からの指令が入った。目標データやミッションプランは、今配っている資料を見てくれ」

「隊長、俺らに回って来たってことは、久しぶりに魔道師の実験体の捕獲っすか？」

「いや、今回の目標は魔導師ではない。ロストログアといっても差し支えないだろう」

隊長と呼ばれた男は、部下たちがあげてくる疑問に答えていく。そんな中で、周ってきた資料を見ていた男が声を上げた。

「え？こんなガキですか？」

「そうだ。だが、見た目に騙されるな。奴は監視対象AM0301-Lを殺害している」

「あ、あいつをですか!？」

「そうだ、直接戦闘能力はないがAM0301-Lの能力がどれほど厄介な物かは諸君らも知っているだろう」

「……………」

「厄介な目標であることは想像は容易いだろう。だが、今回我々は基本的に裏方だ。実行犯は現地で調達する。それに伴い外部からの情報提供者もいるが……まあ顔を合わせることもないので気にしなくていい」

「了解、ボス」

「では、出発までに各自熟読しておくように。以上だ」

「……………了解!」

つづく

未熟な秋空に差す影（後書き）

というわけで、A、S編が始まります。

この出だしだけでも、今後の展開が読める方がいるかもってびくびくしながら書いています。

未熟な意地

11月19日

「主はやて、深町たちへのメールですか？」

「そうやよ。今日の宿の民宿に着いたって打つとたんや」

「そうですか」

「え〜と後、明日は九州に上陸にします・・・と送信！」

「はやて！はやて！枕投げっていうのやろうぜ！」

「おお、それナイスアイデアやヴィータ！」

「だろ？マンガとかだと修学旅行のシーンで必ずって言うほどあったからな！」

「ヴィータちゃん！！」

「何だよ、シャマル？」

「明日も朝早くに飛ばなきゃいけないし、民宿に人にも迷惑ですから今日のところは寝ましょ」

「えーーーーーー」

「えーっじゃありません！」

「ちっわかったよ・・・じゃあ、はやてホテルか旅館に泊まる時にやろうぜ」

「そうやな、約束やヴィータ。そんな時は、シャマル達も巻き込もうな」

「おう！」

「何2人で悪巧みしてるんですか！」

「何でもあらへんよ。おやすみ、みんな」

「あたしもおやすみ！」

「もー2人とも・・・おやすみなさい、2人とも」

はやてたちの旅行は、極力交通費を節約し旅行日数を増やしてい

るため、もっぱらの移動方法はシグナムたちの飛行魔法に頼っていた。

その次の日の朝、在日米軍のレーダーに未確認飛行物体4体の反応があったとか無かったとか。

リリカルガイバー 20話 未熟な意地

ミッドチルダ 管理局取調室

「……ユーノいい加減全てを話してくれ」

「だから、僕は何も知らないって言ってるだろ、クロノ！」

「そう言うがここの所君が調べてる物は、どれも闇の書に関するものばかりだ」

「そ、それは……管理局が第一級搜索指定遺失物にするような代物がどんなのか気になっただけだよ！」

「……ここ一週間ほどの間に魔導師襲撃事件が起きてる」

「？それがどうしたんだよ、クロノ」

「被害者は全員リンカーコアが異様に消耗している。管理局は、闇の書が関係しているのではと捜査を始めている」

「バカな……！」

「被害者の証言によると犯人は3人。ハンマータイプのデバイスを持つ小柄の少女と剣のデバイスの女性。この2人はベルカ式らしい。そして3人目は褐色の肌の男の使い魔だ」

「そんな、ありえないよ……確かに手紙にも書いておいたのにあつ！」

「やっぱり何か知ってるんだな、ユーノっ話すんだ……！」

「……」

「ユーノ……！」

ユーノは、もう黙っている事ができない状況なのを知る。
そして、その重い口を開かざる負えなかった。

12月8日

「なのはちゃん、お昼一緒に」

「……フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん行こ！」
「ちよつとなのは！」

「はあ~~~~今日もダメか」

「あの……晶君」

「ああ、すずかちゃんか。僕のことは良いからなのはちゃんの所に行つてあげて」

「い、いいの？」

「うん」

「……わかったよ」

「……フェイトちゃんもすずかちゃんが行つた方がいいよ」

「うんうん、今日は晶と食べようと思つて」

「……そっか、ありがとう」

晶とフェイトは机を合わせて弁当を食べ始める。

しばらく他愛のない話題を話していたが事情を知っているフェイトは、意を決して口を開いた。

「ねえ、晶。もう3週間だよ？2人がケンカしてから」

「ん……そうだね」

「晶から折れることは出来ないの？」

「無理だよ。こればかりは誰になんとわれよつと一歩も引く気はないんだ」

一方、なのはを追って行ったアリサと遅れて2人と合流したすずかたちは……

「……それであんたたち2人に何があったのよ？」

「……」

「黙っていないで何とか良いなさいよ！」

「アリサちゃん、落ち着いて！」

「あ……ふう……あたしたちじゃ力にならないかもしれないけど、一緒に悩んであげることには出きるのよ？」

「そうだよ、なのはちゃん。言いにくい事ならその所は、暈して良いから話してみてよ」

「アリサちゃん、すずかちゃん……ありがとう。あのね」

なのはは、とつとつと話し始める。

魔法の事やガイバーのこともあるので全く違う話になっているが、晶と意見が合わなかったことが原因だということは伝わった。

「……あんたたちバカ？」

「ええっひどいよアリサちゃん！？」

「だって、あんたたちがあんまりにも不毛な事してるから」

「何処が不毛なの？」

「なのはは強情だし、あいつはたぶんなのはたちに迷惑を掛けられないか思ってるでしょ？ちょうど4月のなのはみたいに」

「そうかな？」

「そうなの！だから、いくらなのはが待ってもあいつは意見を変えないわよ」

「……だったら、どうしたらいいのかな？」

「そうね……どういづのはどうかしら？」

「え、なにになにアリサちゃん？」

「なのはが足手纏いじゃないって所を言葉じゃなくて行動で見せ付けるのよ」

同時刻ミッドチルダ 管理局内の一室

初老の男、グレアムは物思いに耽っている。

そんな彼を沈痛な面持ちで見守るリーゼ姉妹の姿があった。

「……あのような得体の知れぬ者たちの口車に乗ってしまったて本当によかったのか？」

「お父様……」

「4騎士が目覚めて8ヶ月が過ぎても一向に蒐集を行う気配はなかった」

「ええ、ただ静かに暮らしてた」

「……私もこのまま何も起こらず我々は静かに彼女たちを見守っていたらいいのでは？と思ったよ、ロツテ」

「でも、不安だったんですね、お父様？」

「ああ、そうだよアリア。いつ爆発するか分からない爆弾を見ているような心地だったよ。そんな時、彼らが現れた」

「……ええ、覚えていますが、あの時のことを」

「私たちに気づかれずにこの部屋に入り込んできた声からして男のようだった。姿は見えなかったけど確かにこの部屋の中に居た」

「そうだな、どんな姿をしていたのか、彼らの目的はどこにあるのか、そもそもどうやって私の計画を知ったのかもわからない。すべては謎だらけの存在だ」

「それで、停滞していた蒐集をさせて『闇の書』を完成間近までは協力する。その後は私たちの計画通りにすればいい、邪魔はしないと……」

「ただし、自分たちについては何も探らず聞くな。やれば、この計画を暴露するとも言ってきた」

「そして、私は彼らの口車に乗り、言われるがままに4騎士とあの少女の情報を渡してしまった・・・」

それは、苦悩と後悔の独白だった。

だが、グレアムはそれを踏みしめリーゼ姉妹に、いや自分に言い聞かせるように言った。

「・・・すでに歯車は動き出し、後戻りできない。ならばより良い結果を求めて万進するのみだ・・・2人とも、よろしく頼むよ」

「はい、お父様」

同日22時57分

小学3年生は、すでに夢の中にいる時間。
それは、なのも同じだった。

「ん・・・すう・・・」

【Caution・Emergency《警告、緊急事態です》】
「ッ結界!?!」

なののは、結界の展開を感知して夢の中から飛び起きた。

『なののは!今の感じた?』

『うん、今それで飛び起きたところだよ。フェイトちゃん何が起きたか分かる?』

『うんうん、母さんも分からないって。とにかく今からこの結果の中心に行ってみる』

『うん、私も晶君を起こして急いで向かうからフェイトちゃん無茶しないでね』

『分かった、なのはたちが着くまで様子を伺っておくよ。それじゃあ、後で』

『うん、気をつけてね』

『さっ早く晶君を起こし……』

【Master?】

「……これは、アリサちゃんが言ったチャンスなのかな? 晶君抜きでこれを解決したら……うん、そうしよう。行こう、レイジンググハート!」

【Is it good? 《よろしいのですか》】
「いいの!」

非殖装時は普通の何の力もない人間であるためまだ寝ている晶を起こさずに結界の中心に向かって飛び立っていった。

だが、その歩みはフェイトからの念話ですぐに止められた。

『なのは、今すぐ晶を連れて逃げて! 早く!』

『フェイトちゃん、どういうこと!』

『説明してる、暇はきやああああ!』

『フェイトちゃん?』

『……』

『フェイトちゃん!』

『……』

「ッ急ぐよ、レイジンググハート!」

【All right】

フェイトの異変になのはは、速度をさらに上げて急行する。

その一方で、心の片隅に不安が舞い上がってきていた。

フェイトちゃんが念話に答えられない状況に追い込まれてる? 変な意地張らずに晶君を……

「こんなんじゃないやダメダメ！私とフェイトちゃんでは何とかしてみせるんだから！」

そして、現場に到着してなのはが見たのは、バルディッシュが大破しバリアジャケットもぼろぼろにして倒れてるフェイトとそれを見下ろしている……

「シグナムさんとザフィーラさん、それにヴィータちゃん！？え、何、どういうことなの？みんなはまだ旅行中のはずでしょ！？」

「………やつと来たか」

「おい、なのは。晶のやつはどうしたんだよ？」

「よもや、逃げたのではないだろうな？」

「ねえ、答えてよ、3人とも！！」

「………見ての通りあたしたちがフェイトを倒したんだよ」

「さあ、こちらの問いにも答えてもらおう。深町は何処だ？」

つづく

未熟な意地（後書き）

しばらくの間、旅行中のはやてたちと現在の晶たちの話で構成していきます。

なので、シグナムたちになにがあったかはその時に。

未熟な強襲

11月22日

はやてを抱えたシグナムを先頭に5人は、鎌倉に来ていた。

ちなみにはやての愛車の電動車椅子は、重くて嵩張り、行ける場所も制限されるので八神家で休暇中である。

そのため、シグナムとザフィーラの2人が交代で抱えて観光をしていた。

「あ、ここやここ！雑誌で紹介しとった成就院！」

「ここには、何があるのですか、主ははやて？」

「ここにはな、縁結びにご利益がある不動明王さんがおるんや」

「あたしそいつ知ってる。確か顔と腕がいつぱい生えてる仏さんだろ、はやて？」

「それは千手観音さんやな、ヴィータ。不動明王さんは手に剣と縄を持った怒ってる顔した5大明王さんの1人なんよ」

「へ〜はやて、物知りなんだな」

「伊達に本ばかり読んどった訳やあらへん」

「・・・それで、どうするとご利益が得られるのですか？」

「それはな、携帯で写メを撮ってそれを待ち受けにすればいいんや、ザフィーラ」

「縁結びをしたいだなんて・・・あッもしかしてお相手は晶君ですか？」

シヤマルは、手を口に当てにゆふふつという笑い声が聞こえてきそうな意地の悪い笑顔だ。

「な!?! ちゃ、ちゃうよ、晶君はただ友達や!?!」

「そんな慌てて否定するあたり怪しいですよお」

「もうシャマルからかわんといて！」

「だったら誰となんです？」

「それはな．．．みんなとや。シャマルとシグナムとヴィータとザフィーラの4人とこれからもずくくつと一緒にいられますように思つてな」

「くくく．．．．．」「くくく」

「どうしたんや、みんな。そないな顔して？」

4人は、はやての言葉に度肝を抜かれる。

この旅行が終わった後に迎える別れをまだ、はやてには話していない。

だからこそ、このはやての言葉は4人に辛く突き刺さる。

「私、なんか変なこと言うた？」

「．．．．．いえ、そんなことはありません、主はやて」

「そうですよ、ただちよつと驚いただけです」

「そっか、よかつた」

ほつと胸を撫で下ろすはやて。

だが、そこに飛び込んでくる泣き声。

「うえええええん、はやてえー!!」

「ちよ、どないしたんやヴィータ!? シグナムちよつと下ろして」

「はい」

「うわあああ〜ん」

「よしよし、どないしたのヴィータ? 突然泣き出して」

「．．．くすつ．．．」

シグナムに地面に下ろされたはやての胸に飛び込んでいったヴィ

「タは、しがみ付き頭をぐりぐりと押し付けていた。
はやては、そんなヴィータの頭を優しく撫で続けるが一向に進展
はない。」

そこで、ザフィーラがヴィータの心情の一部をはやてに代弁した。

「もちろん我らもですがヴィータは、うれしかったのでしょうか。主
にそんな風に思ってもらえて」

「ザフィーラ……そうなんか、ヴィータ？」

「……（コク）」

「そうかそうか……よしよし」

ヴィータが泣き止むまではやては、撫で続けていた。

その様子を他の3人は、複雑な気持ちで見続けている。

その後、不動明王像の写メを撮りそれぞれ待ち受けに設定してい
た。

また、4人の心はこんなことを想っていた。

例え離れ離れになっても我らの心は主はやてノはやてちゃんノはや
てノ主と共に……そして、いつの日か再び

リリカルガイバー 21話 未熟な強襲

12月8日 22時59分

なのはとの念話を終えたフェイトは、一足先に結界の中心、海鳴
市市街地上空に辿り着いていた。

フェイトは、辺りを見渡して見るがそれらしい影は見当たらな
かった。

「……それらしい、魔導師は居ないみたいだけど……バル
ディッシュはどう?」

【It approaches from the under
at a high speed《目標、下から高速接近中》】

「え?あ!」

「……良くぞ受け止めた、テストロッサ」

「シグナム!?」

「次、行くぞ」

「ッ!どうして、攻撃してくるの!」

「お前が邪魔なのだ。深町を捕らえるためには」

「どうして晶を狙うの!？」

「奴は強くなつた。ザフィーラから体術を学び、自らを高めようと
努力もしていた。一対一ならすでに良い勝負になるレベルやも知れ
ぬ。だが、万全を期し数で挑まねばならぬことが口惜しい」

「答えになつてないよ、シグナム!」

「そろそろ高町と深町がここに着く頃か……仕方がないと
は言え残念でならん。お前たちとも正々堂々と戦いたかつたのだが
な」

「え?」

「ヴィータ!!」

「テートリヒ・シュラーク!」

【Defensor】

「くうッ……ヴィータまで!」

別方向からの奇襲してきたヴィータのハンマーをバルディッシュ
が展開したディフェンサーが防ぐがすぐに破壊されて吹き飛ばされ
るフェイト。

飛ばされながら晶をここに着させてはいけないことを理解したフ
ェイトは、そのままなのはに念話を送った。

『なのは、今すぐ晶を連れて逃げて！早く！！』

『フェイトちゃん、どういうこと！？』

『説明してる、暇は』

「・・・念話とは、余裕だな。我らを相手に」

「あ！」

「レヴァンティン、叩ッ斬れ！」

【Jawohl】

「はあっ！！」

【Defensor】

「ッ・・・きゃッ」

「そうだけ、墮ちるお！！」

「きゃああああ！！！！」

シグナムの紫電一閃は、ほんの少しの抵抗をただけでディフェンサーが破壊されフェイトに襲い掛かった。

とっさに直撃を防ごうとバルディッシュで受け止めたフェイトだったが、その一撃はバルディッシュの本体を傷付ける。

そして、さらに追い討ちを掛ける様に飛ばされた先にいたヴィータのハンマーヘッドがフェイトを打ち落さしていた。

同日23時01分現在

「・・・家に置いて来たのか？」

「ッ・・・」

「だんまりか。だが、それでは肯定している様なものだぞ、高町」

「2人とも・・・ここはあたしに任せて行けよ」

「1人で平気か？」

「見くびんじゃねえッあたしはヴォルケンリッターの鉄槌の騎士だぞ！！」

シグナムのこの問いは、1人でも決意が鈍らないかと言う意味だ。ヴィータもそれを理解している。

だから、ヴィータの返答も主の、はやてのためならどんな事でもしてやるっという意味合いで言っていた。

「・・・わかった」

「気をつける。高町も以前とは違う」

「んなこと、百も承知だ！」

「ここは任せる」

「先に行っているぞ、ヴィータ」

「ああ、行けよ、2人とも」

シグナムたちは、ヴィータにそう言う和高町家へと飛翔を始める。しかし、事情はまだ何も分からないが、それを許すほどのものはも抜けてはいない。

「行かせないよ！」

「邪魔させるかよッ！」

【Schwalbfliegen】

「ふんッ！！」

「ッ」

ヴィータは、なのはの出鼻を挫くように2つの鉄球を打ち出した。なのはもそれを回避し撃墜していくが、その間にシグナムたちの離脱を許してしまった。

「ヴィータちゃん邪魔しないでよ！！」

「話聞いてなかったのかよ・・・お前の相手はあたしだ！追いたきゃあたしを倒してからにしろ！！」

「うう・・・だったら私も容赦しないから！」

「ああ掛かって来いよ、なのは！グラーファイゼン！！」

【Divine Shooter】

【Schwalbefliegen】

「シュートツ！」

「オラアツ！」

撃ち合った互いの5つの誘導弾は、中空で衝突、相殺される。だが、それによって発生した煙で一時的に視界が被われた。

【Shooting Mode】

「デイベイン」

「見え見えなんだよ！」

「あつ」

すかさずデイベインバスターのチャージを始めようとしたのはだが、これまでも2回なのはの相手を努めた事のあるヴィータ。当然、なのはの得意な魔法や戦法もお見通しである。

だから、なのはの行動を見越して煙を突っ切って来たヴィータは、無防備なのはにグラーファイゼンを振り下ろす。

「これで終いだ！」

「なんてね」

【Flash Move】

「何い！？」

フラッシュムーブで目標が目の前から掻き消え空振りしたヴィータに一瞬虚が生まれた。

そして、なのははすでに攻撃態勢に入っている。

「ヴィータちゃんなら」

【Divine】

「来ると思ったよ!」

「ちッ障い」

【Buster】

「!」

【】

ヴィータの攻撃を交わすと同時にデバインバスターの発射までの時間を稼ぐための距離を開けるフラッシュムーブを用意していたなのは読み勝ちだった。

そして、ヴィータたちは砲撃の轟音とその閃光に飲まれた。

「やった、初めてヴィータちゃんに勝てた!」

【Congratulations my master】《おめでとunggざいます。マスター》

「っと晶君の所に急がなきゃ!」

【ket nf m】

「?レイジングハート、今何か言った?」

【oN^{いしえ}】

「ケーテ」

「ほら、やっぱり何か聞こえる」

【Master, it's the lower side】《マスター、下です》!」

「ハンマアアア!」

「ヴィータちゃん!? んん」

パリン

「ふあ!?! あああああ!」

ラケーテンハンマーで襲って来たヴィータに気づいたのは、とっさに張ったラウンドシールドで防ぐ事に成功していた。

だが、それも一瞬の事すぐにガラスが割れるような音と共にワールドを貫いた鋭い先端部をレイジングハートの本体（赤い宝石）近くの柄が受け止めてくれるもそのまま諸共に打ち上げられた。奇しくも落下地点は、フェイトと同じビルの屋上でその床に叩きつけられ転がっていったなのは。

「うあ……ど、どうして？確かにデイベインバスターの直撃をヴィータちゃん受けたのに」

「あのまま防御するより、フェアータ使ってお前らの死角で移動して強襲した方が良いつて思い直したんだよ」

「そんな……折角初めてヴィータちゃんに勝てたと思ったのに」
「相手の状態を確認せずに気を抜いたお前が悪いんだ、なのは」

ヴィータは、何とか立ち上がったなのはに止めを刺そうとグライファイゼンを振りかぶる。

だが、それを黙って見過ごすレイジングハートではなかった。

【Protection】

「ちつ邪魔すんなよ、レイジングハート！ぶち抜けツグラーファイゼン！！」

【Jawohl】

「きやああ！！」

「あっち行つてるッ」

「……ああ、レイジングハートッ」

【Master……マスター……】

「ハアーハアーこれで……お前を守ってくれるも……んは居なくなつたぞ」

再度のラケーテンハンマーがプロテクションを打ち砕きさらになのはへと襲い掛るが、その一撃を間一髪リアクターパージが相殺す

る。

だが、その代償に屋上の手すりに叩きつけられその弾みでレイジングハートを手から離してしまった。

すかさずレイジングハートを蹴ってなのはから遠ざけるヴィータ。

そして、使い終わったカートリッジを排出しながらヴィータはなのはへ今度こそ止めを刺すために近づいていった。

つづく

未熟な強襲（後書き）

はやてたちの今回の旅行先での出来事は、ある番組を見ていて思い
つきました。

未熟な暴走

11月26日

四国、関西地方の観光を終えたはやて一行は名古屋に到着していた。

「今日の夕飯は、名古屋名物尽くしや！」

「なあ、はやてもう食っていいか？」

「こら、ヴィータ。はしたないぞ」

「うっせえぞシグナムッ」

「もうヴィータちゃんたら。今ひつまぶしをお茶碗に盛り分けますから待つててください・・・ザフィーラそれ取ってください」

「わかった」

座敷席で一つの机を囲む5人の前には、味噌カツ、手羽先、味噌煮込み、きしめん、ひつまぶしの名古屋5大名物が一品ずつ並んでいる。

5人の前にひつまぶしの入った茶碗、机の真ん中に他の4品が乗った皿やどんぶりが置かれている

「さ、みんな食べよか。いただきます」

「・・・いただきますっ」「・・・」

そして、一斉に箸を動かし始めた。

ヴィータは先ほどから気になっていた手羽先を素手で掴み豪快に齧り付き口の周りを手羽先のたれで汚している。

「これ、甘辛のたれでかなりいけるよぞっはやて！」

「ああ口の周りたれで汚れとる。ヴィータ拭いたるからこつち向き
「ん……………」

はやてはヴィータの口と手をおしぼりで拭いていく。
ヴィータも大人しくされるままになっていた。

「……………」ありがとう。それよりはやてが食ってるそれ何？」

「これはな、味噌カツや。病気に勝つという元担ぎに最初に食うとっ
たんよ」

「それって効果あるのか、はやて？」

「さあ？でも、受験とか勝負事とかある時に勝利祈願でカツを食べ
るってテレビとかでやっとなし気休めでもやっと思つてな」

「だったら、じゃんじゃん食べてくれよな」

「うん……………」あ、そやヴィータも食べてみ、あ〜ん」

「あ〜ん……………」結構いけるなこれ。ただソースの代わりに
味噌付けただけだと思つてたけど」

「そうやる」

シグナムは、味噌煮込みを自らの空きの椀によそい食べている横
でシヤマルがきしめんしめに手をちゆるちゆると食べている。

そして、ザフィーラはひつまぶしを食べていた。

はやては、そんな彼を見てポツリと呟いた。

「……………」ザフィーラ、狼モードで食べてもええよ、この部屋個室
やから。でも、誰かの足音聞こえたら元に戻つてな？」

「よろしいのですか？」

「ええよ。ほれそうすれば、手羽先の骨も食えるやる？」

「……………」では、お言葉に甘えて」

こうしてザフィーラは、久しぶりに骨を食べる事ができた。

23時05分 高町家

高町家の二階の窓の前にシグナムとザフィーラがいた。
その部屋の主、晶は、まだ何も知らず布団で寝ている。

「やるぞ」

「ああ」

2人は、部屋の窓をガシャンッと豪快に叩き割り晶の部屋の中へと進入した。

「ッ！？」

「約一ヶ月ぶりだな、深町」

「息災だったか？」

「シグナムさんとザフィーラさん！？いつ旅行から帰ってきたんですか？」

「先ほどだ」

「へえ〜ってだからって窓を割って入ってくる説明になってませんよ！どうして割ったんですか！！」

「はあー・・・お前は暢気だな。我々が知り合いだからか、信用されてい「僕は信用してますけど？」そうか・・・」

シグナムは、晶の答えに沈痛な面持ちになったが気を取り直して本題を語りだした。

「・・・実はお前に頼みがあって急いできたのだ」

「僕にですか？良いですよ。ザフィーラさんたちには恩がありますし。あッでもこの窓ガラスの修繕費は払ってくださいね？土郎さんたちには誤魔化しておきますから」

「ふっ……わかった全てが終わったら私が非常勤で働いていた時の貯金で払おう」

「約束ですよ、シグナムさん……それで僕は、何をすればいいんですか？」

「何……我らと殺しあってくれれば良いだけだ」

「ふんッ！」

「へ？……はッが、ガイバアアアッ！
！」

シグナムが言い終わると同時にザフィーラは、晶を掴み窓の外へと投げ飛ばす。

晶は最初何が起こったか理解出来なかったが、どんどん近づいてくる地面を見てすぐさま殖装した。

「な、なな何するんですか！？」

「お前をさっさと殖装させるためだ。私たちが用があるのは、ガイバーになったお前だからな」

「だからっていきなり二階から放り投げるだなんて！？」

「……時間が惜しい。さあ始めよう」

「……」

「……さっき言った事、本気なんですか？殺し合いだなんて」

2人は、臨戦態勢を取るが晶はまだ納得していなかった。

「冗談にしてもやり過ぎですよ？シグナムさん」

「……この期に及んでまだそんなことをッ」

「仕方が無い、シグナム」

「ああ、この手は使いたくなかったが……深町、高町とテストロッサの命は我らの手の内だ。助けたくば戦え」

「なっ!?!」

「おかしいと思わなかったのか？殖装した今なら結界が張られているのに気づいているだろ？それなのに今だにテストロッサどころか高町が出てこない事に」

「そもそも、窓をアレだけ派手に割って隣の部屋の高町が来ないことも妙だろ？」

「……………本気ですか」

「ああ」

「……………分かりました、あなたたちを叩きのめしてでも事情を聞かせてもらいます！」

「我ら2人を相手によく言ったッ!」

晶は、重力制御球でシグナムたちのいる空中へ飛びそう啖呵をきる。

そして、晶対シグナム、ザフィーラの戦いが始まった。
まず、シグナムが先制する。

「では参る　はぁッ」

「前と違って……………反応できてるッ!」

晶は、以前一度だけやったテストの時と違いシグナムの斬撃の軌道が分かり体もその軌道から逃す事が出来た。

「やった!」

「ふむ、やはり以前とは違うというわけか……………だが」

「我が喜んでいる間を与えるわけが無かるっ?」

「ぐぁッ!?!」

下へ回り込んでいたザフィーラのアッパーが晶の顎を捉え打ち上げた。

さらにシグナムの肩を狙った技が晶を襲う。

【Explosion】

「紫電一閃ッ！」

「ッこんッのお！」

「ぐうッ………」

飛ばされながらも晶は、左腕を盾にしながらカウンターでシグナムの空いた腹に右の拳を打ち込み弾き飛ばした。

おかげで、本来左肩から両断されるのを斬り飛ばされ左腕と肩を少し挟られた程度で済んだ。

だが、追撃はまだ終わっていないかった。

「安心するのはまだ早いッ」

「しま がッ!!」

シグナムを弾き飛ばしてすぐに、晶の背後に急上昇してきたザフィーラの回し蹴りによって家屋の屋根に叩きつけられてしまったからだ。

「無事か、シグナム」

「ゲホッゲホッ……ああ、だがこれで目的の1つ手に入れたも同然だ」

「そうだな。では面倒になる前に占めといて」

シグナムは殴られた腹を片手で押さえながらザフィーラに対応するが、こうして話していても2人の視線は碎けた瓦と木材の破片の

中心で立ち上がるうとする晶から離してはいなかった。

「頭部は傷つけるな」

「ああ分かっている『鋼の軛』ッ!!--」

「え?　　ッ!!--??」

同時刻　海鳴市　市街地

なのはは、殺されると思い恐怖で体が竦んでしまっていた。

「・・・やだよ、こんなところで終わるなんて」

「・・・殺したりしないから大丈夫だ、なのは。目を覚ました時には怖い事は全部終わってる。それまで寝ててくれよ」

「それってどういうことなのヴィータちゃん・・・やっぱり晶君に何かするつもりなの?」

「・・・」

「んんッ」

なのはが問いにヴィータは何も答えずグラーファイゼンを振り下ろそうとした。

なのはもその時を予感して目をぎゅっと閉じた時、横から金色の魔力光の魔力弾がヴィータを襲う。

ヴィータは、慌ててそれをガードした。

「んああッ」

「ハアーハアーハアー・・・なのははやらせない」

「え?・・・フェイトちゃん!」

「・・・フェイトお前、目が覚めちまったのかよ」

ヴィータが防いだ魔力弾は、倒れながらも傷ついたバルディッシュを何とか彼女に向けたフェイトが放ったフォトンランサーだった。

その頃 高町家近郊

ザファイラの『鋼の軛』は、晶の右腕、両肩、両足、腹、右胸部、喉を貫いて磔にしていた。

屋根の上には、ガイバーの排気口（口の横に煙を吐き出している所）から吐き出した血や傷口からの血で赤い水たまりが出来ている。シグナムは、紫電一閃を発動しているレヴァンティンの剣先を唯一無事な頭部の頭頂部の辺りに狙いを定め突きつける。

「ぐがつ・・・そ・・・れはダ・・・メですッ、シグナムさん！」

「憎んでくれていい、恨んでくれてもいい・・・さらばだ、深町
！！！」

「ッ！！！」

突きこまれたレヴァンティンは、頭頂の後ろの辺りを紙の様に貫き刀身周辺の脳を焼きガイバーの発声器官でもある口部金属球を破壊して体外へと顔を出していた。

そして、事が終わるとすぐさまレヴァンティンは引き抜ぬかれ鋼の軛からも開放される晶の体。

だが、この時シグナムたちは晶に起きている異変に気づいていなかった。

「・・・・・・・・終わった、引き上げよう」

「深町は我が持っていていこう。お前は先ッしゃがめ、シグナム！！！」

「！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ザフィーラの言葉にすぐさま反応してしゃがんだシグナムは、そこから横に転がって距離を置こうとした時、さっきまで彼女の頭があった場所を高周波ソードが通り過ぎて行く光景。

さらに転がっているシグナムにレーザーが連射して襲ってくる。

しかし、ザフィーラもただ黙ってみている訳も無くシグナムが立ち上がるまでの時を稼ぐために格闘戦を挑む。

そして、立ち上がったシグナムが見たのは、額の金属球の隙間から光が漏れている晶とクロスガードの上から蹴り飛ばされたザフィーラだった。

しかも、晶の頭部は、シグナムによって破壊された傷跡をそのままに残している。

「……………」

「ぐツ!? 骨にひびが入ったか」

「深町に一体何が起きたッザフィーラ! 私は、確かに脳を破壊したぞ!」

「落ち着け、我にも分からんのだ」

「……………すまん」

「何故こうなったか分「双方戦闘行為を中止しろ!」ッ新手か!」

「僕は時空管理局所属執務官クロノ・ハラウン。ロストロギア『闇の書』の守護者2名、君たちを拘束する!」

「……………引くぞ、シグナム。この上、管理局まで加わっては不利だ」

「分かった」

『ヴィータ、シグナムだ。こっちに管理局が介入してきた』

『こっちもアルフとユーノが現れたとこだ!』

『そうか、引き上げるぞ』

『それより首尾の方は?』

『ダメだ。想定外のことが起きた。だが、手ぶらでは帰らん』

『わかった。落ち合う場所はいつものとこだな、掴まるなよ!』

『そっちこそな』

「腕は使えそうか？」

「問題ない」

「なら、私が隙を作るその間にアレを回収、そして離脱、いいな

「ああ」

「では行くぞッ!」

【Sturmwind】

「ッ!? 待てッ!」

シグナムが放った衝撃波は、クロノと晶を襲いその間にザフィーラが晶の斬り落とされた左腕を回収して2人はそれぞれ別の場所へと転送していく。

『エイミー、追跡を!』

『今やってるよッ』

『そっちは任せたぞ』

「・・・晶、君にも話を聞かなければいけない。理由は分かっているな？」

「・・・」

「ッぐうッこれが君の答えか。なら公務執行妨害と質量兵器使用の現行犯ならびに遺失物隠蔽の容疑で君を逮捕する!」

晶は、クロノが手加減なしの重圧砲を放った。

クロノは、それをラウンドシールドで防御して晶にデバイスを向けながらそう宣告した。

そして、クロノは攻撃を開始した。

「ステインガーレイツ!」

「……………」

だが、クロノの放った直射型の光弾は、ヘッドビームで撃墜されてしまった。

「やはり、これでは無理か。ならッ」

【Stinger Sniper】

「ショット！」

「……………」

「…る白銀の翼、疾れ風の剣……」

クロノが次に放った光弾は、彼を中心に螺旋を描きながら晶を襲う。

光弾の制御をしながら別の魔法を詠唱しているクロノ。

一方、晶は光弾をひろりひろりと木の葉の様に避けていき、最後には高周波ソードの一振りですテインガースナイプを斬り捨ててしまった。

しかし、クロノの攻撃はそこで終わっていなかった。

ステインガースナイプの発射後詠唱していたディレイドバインドが発動し晶の体や腕、足といった場所を魔力の鎖でその場に拘束する。

「……………」

「これで動けないだろ？」

クロノがしたことは、ステインガースナイプでディレイドバインドを設置した場所に追い込んでいっただけだ。

ただ、クロノにも想定外だったのが最後の追い込みで光弾を斬り捨てられたことだ。

「……………」

「それに君の今の状態　　ッじゃヘッドビームしか使えないだろ？」

晶が近づいてくるクロノをヘッドビームで抵抗するが彼の手甲やデバイスで防がれてしまう。

「どうやらソニックバスターに必要な口部金属球は破損しているし、残った胸部のスマッシャーは右を破損。無事な左は腕が無いなッ！？」

「……………」

「　　から装甲を剥がせないだろ？」　とクロノが続けようとした時、左胸部装甲が独りでに開きチャージを開始した。

回避は間に合わず防御も危険だと判断したクロノは、慌てて砲撃魔法の準備する。

「……………」

「間に合った！」

【Blaze Cannon】

ほぼ同時に発射された砲撃は、ぶつかり合う。

だが、クロノの方が押されていた。

「負けるかアアアア！！　　ッ！！！」

「……………」

魔力をさらに注ぐクロノ。

また、晶の方も更にエネルギーを注いだのかスマッシャーの光が強くなった。

そして、僅かの均衡のあと押し負けたブレイズキャノンは呑み込

まれスマツシャーの光がクロノを襲った。

シグナムたちの追跡に失敗した後クロノの様子をモニターしていたエイミィとリンディは、悲鳴を上げる。

『クロノッ!?』

『……艦長つ執務官は無事です!!』

『本当!』

『はい、ブレイズキャノンが威力を減衰させていたようです。それに片肺だった事も幸いでした』

『そう』

アースラのブリッジオペレータの1人ランディの報告に2人は、安堵する。

そして、当のクロノはバリアジャケットをぼろぼろにして地上に不時着していた。

「ぐう何とか助かったけどこの後は」

『クロノ、今の爆発は!?!』

『ユーノか・僕が晶にやられた時のものだ』

『なっ!』

『嘘ッ晶君がそんな事するはずないよ!』

『そうだよ、何かの間違いだよッ』

『落ち着きなよ、2人とも』

念話を聞いていたなのはとフェイトも参加してくるが事實は、変わらない。

2人はまだ信じられない様子で、アルフが落ち着かせようとするが効果は無い。

一方、ユーノは違った事を考えていた。

『……クロノ、晶の様子を教えてくださいませんか？もしかして、頭に怪我をしてなかった？』

『ああ、そうだが。でも、それが何か関係あるのか？』

『あるよ。後、額の金属球から光が出てなかった？』

『そういえば……』

『そつか……クロノ今すぐ、デバイスを捨てて晶に敵意を向けるのをやめるんだ！』

『何を言っているッそんなことをすれば、僕がやられるだけだ！』

晶は込められた魔力が消耗し術者からの供給も途絶え消えたバインドから脱出し、止めを刺すためにクロノへと動き出す。

残量エネルギーが僅かなのかメガスマツシャーや重圧砲のようなエネルギーを食う武装を使わず接近してくる晶。

クロノは、距離を取ろうと傷ついた体で飛び始める。

「……………」

「ッ怪我のせいでスピードが出せないッ！」

『つべこべ言わず、僕の言う事聞け！今の晶に手加減だとかそんなこと考えてないんだよ。ただ、向けられた敵意に反応しているだけだ！』

『余計そんなこと出きるか！！』

『どういうこと、ユーノ君ッ』

『何か知ってるの！？』

『説明は後でするから、早く！！でないと間違いなく殺されるぞ！』

「！！！！」

「……………」

「くッ」

『……………ッユーノ！！死んだら化けて出てやるからなッ！！！！』

ユーノの言葉をいまいち信じられないクロノだったが、もう目の

前で高周波ソードを突き刺そうと右腕を上げている晶を見て一か八か覚悟を決める。

デバイスを手放し、敵意を向けるのを止めたクロノ。

「……………」

「……………?……………」

「……………生きてる、クロノ?」

『ああ、本当に止まっている』

高周波ソードの切先は、クロノの頭上で止まっていた。

つづく

未熟な暴走（後書き）

7 / 1 1 ちよつと文を追加しました。

未熟な不満

11月30日

「おい、見るよあの2人。すげースタイル良いよな」

「あの気の強そうな口リっ子に罵られたいんだな」

「胸が大きいし腰も括れててそそられるぜ」

「あの子を抱えてる男の人、野性味溢れててかっこよくない？」

「ハア〜ハア〜もう少しで中が見えそうッ」

「抱えられてる子もかわいい！」

「吹けッ神風ええええ！！！」

「てめえら、こつち見るんじゃねえっ！！！」

今はやてたち一行は、横浜中華街にいた。

一部、おかしな発言もあったが彼女たちは注目されていつ。

その視線や言葉に晒される恥ずかしさに耐えられなくなったヴィータが怒鳴るが、一時的に沈静化するだけでまたすぐに集まってくる。

それどころか、恍惚とした顔でヴィータを見るモノたちすらいた。

「ヴィータ落ち着け」

「けどよお、恥ずかしいんだよ。ただでさえ、あたしのはこんなに裾が短いんだぞ」

「私もこの服体の線が出て恥ずかしいですよ」

シグナムは堂々としているがヴィータは自身の服の短い裾を引っ張り、シャマルは体の線を隠そうと両手で体を抱いている。

何故注目されているか、それは彼女たちの格好が原因である。

「……主はやて、本当にこの格好で歩くのがここでの流儀なのですか？その割には、周りの者たちは普通なのですが？」

「あゝシグナム、私を疑つとるんか？」

「い、いえ、決してそのようなことはっ」

紫のチャイナドレスを着ているシグナムは、慌てて弁解した。

シグナム同様白いチャイナドレスを着たはやては、紫の胴着を着たザフィーラに抱えられている。

事の発端は、はやての一言だった。

「今から行く中華街はな、華僑ちゆう昔この国に渡ってきた中国人たちの子孫が集まって出来た街やから中国の人っぽい服で観光するんがその仕来りなんや」

「それ本当なのかよ、はやて。今まで色んなとこ観光したけどそんなこと始めてだぞ」

「ほんまやほんま、大マジヤー！」

「ふむ、仕来りなら致し方ありませんが、主はやて、中国人っぽい服とは如何様なものなのでしょうか？」

「それやったら、この雑誌の付箋が付いとるページで服を借りられるお店と一緒に紹介されとるよ」

はやては、シグナムに鞆から出した雑誌を渡す。

ザフィーラ以外の3人は、その本を覗き込んでいる。

その様子を見ていたはやては、悪戯の成功した子供の顔をしていた事に誰も気づいていなかった。

そして、冒頭に戻ると言うわけである。

シヤマルは青の、ヴィータは特別仕様の裾が短い赤のチャイナドレスにいつもは三つ編みの髪を頭の両側で団子状にしている。

また、寒い季節のため袖は長めで、ガーターやパンスト、ニーソ

ックスそれぞれ装備している。

そして、中華街を抜けた後、記念撮影を最後にしてこの事は終幕した………かに見えたが、今日の宿のホテルで再熱した。

「どういうことだよはやて!!」

「どないしたんや、そないえらい剣幕で」

「どうしたもこうしたもあるかよ!!」

ヴィータは、お風呂上りのはやてに携帯片手に涙目に詰め寄っていた。

「はやてが、あたしたちに内緒で送ってたこのメールだよ!!」

「あ……見てもうた？」

携帯の画面には、何時の間にとったのか中華街でのヴィータたちの写メが添付された『今この格好で中華街を歩いてます』

「ああ、そして、あいつらからのこの返事『中華街にそんな仕来り無いよ』って………」

「あはははは………」

はやては、笑って許しを請うが前髪に隠れたヴィータの表情は、うかがい知れなかったが顔を上げたヴィータにはやては慌てた。

「………ひでえよはやて。あたしを騙すなんて………それに戻ったらあいつらにバカにされる」

「うわわわ、泣かんとしてヴィータ!そんなことあらへんよ。えへつとほらッみんなかわいっていつとるやんか!」

はやては、すばやく携帯を操作して、なのはたちからのメールの一つを見せた。

「それに、アレには訳があつたんや!!」

「……どなんだよ?」

「いつまでも忘れんためや。こんだけインパクトのある記憶やったら『闇の書』が何度別の主に渡つてもヴィータたちが私のこと忘れる事あらへんやろ?」

「はやて……」

「まあ、悪戯心もあつたけどな」

「うがあああ!あたしの感動を返せえー!!」

「あははー寛仁なあ~~~~」

リリカルガイバー 23話 未熟な不満

12月10日

「ん……んんツ!?ん、んん~~~~ツ!!??(口に何か入つてる!?!それに手も足も動かない!?!?)」

晶が目を覚ますと口に詰め物をされ、拘束衣を着せられて牢屋の中に入れられているようだった。

だが、何故自分がここにいいのか分からない。

そこで、覚えている最後の記憶を掘り返してみた。

「ん…….ツん~~~~!!んツん~~~~!!??(確か、シグナムさんとザフィーラさんが襲つてきて…….ツなのはちやんたちはどうなったんだ!!!それにシグナムさん達も!!!)」

「…….目が覚めたようだね、晶」

「んんん!?(クロノ!?)」

晶が意識を失う直前の事を思い出し騒ぎ出す。
その時、牢屋の向こうにクロノが現れた。

「んんー！！（これはどういうことさっクロノー！！）」

「あゝ何を言いたいかは何となく分かるけど、その前に一つ聞きたいんだが、君に『深町晶』としての記憶と理性があるかい？あと今、体は君の意思の元に動かしている？」

「んんー（当たり前だよ）」（コク）

「それはどちらもイエスという意味だね？」

「ん」（コク）

「・・・じゃあ、口枷を外すけど殖装したり大声を出さないでくれよ。不便な格好だけでもうすぐ、君への暫定的な罰が終わるからそのまま聞いて欲しい。君が意識を失ってる間の事を話す。もちろん、君がそんな罰を受けているのかの理由も」

「ん」（コク）

クロノは、牢内に入り口枷を外し彼が現場に付いてから今までに起こったことを話した。

シグナムたちには逃げられ追尾も巻かれたこと、晶に撃墜され死にかけて自分のこと、ユーノからの説明、なのはたちの保護、無意識かでのことなのでクロノへの殺人未遂は拘束衣を着ての24時間の牢屋入りとした晶への罰（ただし、意識を失っている間も含む）、何故クロノたちがここにいるか（なのはとフェイトへもすでに説明済みと言っていた）を。

それを聞いた晶は・・・

「・・・えゝゝと、ごめん。迷惑掛けた」

「もう済んだことだ。それとユーノから伝言だ『自衛モードのことしか話してないから、安心して』だ」と

「そう……」

「それで、他に何か隠してるんだろ？自衛モードに関連しての」

「はは、鋭いね」

「執務官だからな」

クロノに伝言を頼んだ時点でこの質問があることが予想出来そうなものだが、頼んだ本人はその事に気づいていない。

また、ユーノは、無限書庫に戻りクロノから正式に依頼され『闇の書』（壊れている今の『夜天の書』を便宜上そう呼ぶ事になった）を修復する方法を調べている。

苦笑する晶に当然だと言わんばかりに答えるクロノ。

晶は、とつとつと話し始めた。

「……自衛モードになったのは今回で3回目。一度目は、始めてガイバーになった時、相手はグレゴールっていう重戦車並みの筋力を持った獣化兵。僕は自身を超える巨体の腕を捻子折り頭を握りつぶした」

「……」

「2度目は、対ガイバー用に開発されたエンザイム？の強殖装甲分解酵素で頭蓋を吹き飛ばされた時」

「なるほど、今回と似たような状況だ。それで？」

「死闘の末にメガスマツシャーで跡形も無く吹き飛ばしたって聞いたよ……父さんをね」

「父さん？どういうことだ」

「エンザイム？の素体にされていたのは父さんだったんだよ」

「なっ！？待て調整されても本人の意識は残るって……なのに君の父親は自分の息子を襲ったのか！？」

「……獣化兵にはなのはちゃんたちに話してある特徴のほかにもう一つ、上位調製体の獣神将^{ソアロード}への「絶対的服従」があるんだよ。だから、あの時父さんの意識は関与できなかったんだよ」

さらに晶は、そのトラウマが原因で一時期殖層出来なくなっていた事や力を取り戻すまでの話をした。

それに対しクロノは……

「……すまない」

「気にしないでよ、もう乗り越えた事だから。それに僕も君のお父さんのことを不可抗力とはいえ知っちゃたし……」

「ユーノから聞いたんだな？」

「うん、シグナムさんたち宛の手紙と一緒に同封されてた手紙に書いてあったよ」

「そうか……この件が終わったら話をしないか？片親で苦労した事とか」

「うん、僕も似たような事を考えていたよ。じゃあ約束」

「ああ約束だ……おっと時間だな。さ、拘束衣を脱がせるぞ、晶」

クロノがそこで話を一旦打ち切り時計を確認しそう言いと拘束衣を脱がせ何処かへと誘導し始めた。

また、脱がせて貰っている間になのはたちへ絶対服従の事と父親の事を話さないで貰うように晶はクロノに頼み彼も承諾したがリンディには報告すると言った。

そして、今はなのはたちの話題を話していた。

「そんなにひどいのなのはちゃんたち？」

「ああ、君が意識を取り戻すまで待ってるっていうて聞かなかったから薬で無理矢理寝かせたぐらいだ。今は作戦会議室で母、艦長と一緒にいるよ」

「そつか……心配かけたな2人には」

「そう思うなら、元気な姿を見せて安心させてやれ」

そして、クロノたちが作戦会議などに使う部屋へと入るとなのはとフェイトは、会議のために集まっていた各部署の代表者（武装局員の隊長やエイミーなど）の見ている前で抱きつき晶の回復を喜だのも束の間、彼女たちは少し晶から距離を置いてある不安を口にした。

「……私のこと覚えてる？」

「もちろん、覚えてるよなのはちゃん」

「じゃああ、安心したら腰抜けちゃったよお」

「晶、私の「フェイトちゃん」の事もね」よかった」

「2人とも心配かけてごめんね」

「全く、フェイトを心配させんじやないよ」

「面目ありません、アルフさん」

2人とも、脳があんな状態になって自分たちのことをちゃんと覚えてるか不安だったようだ。

アルフは、決して喜んでいないわけではないがやはりフェイトに心配をかけさせたことにご立腹の様子。

さて、なぜ主人のユーノはミッドチルダなのにアルフがアースラに留まっているのか。

それはフェイトのことが心配だったからというのもあるがユーノに「僕は無限書庫でがんばるから、アルフにはシグナムさんたちを止めるのを手伝ってあげてほしいんだ」と言われたからだ。

「それより気になってただけど何であるの時、僕を起こさずに1人で行ったの？」

「それは……」とりあえず今後の事を話し合いたいんだけどいいかしら？」「はいっ」

「あ、そうですね」

リンディは、ポンと手を叩いて注目を集め提案した事に言いづらそうにしていたのははそれに飛びつき、疑問を口にした晶もそれを引っ込めた。

フェイト、アルフ、クロノも不満はなさそうである。

「さて、まず明らかにしたいのが4騎士。今回は3騎士しか確認されていなくても、目的ですけど、状況となのはさんたちからの話からすると重中八苦晶君のようだけど、あの「何かしら、晶君？」

「正確には、僕にはなくガイバーが目的だったと思うんですけど」「なぜ、そう思うのかしら？」

「僕が目的なら、わざわざ起こして殖装させる必要が無いからです」「確かにリンカーコアの無い晶君を狙うよりはその方が適当ね。それに妙といえば魔導師襲撃の被害者への蒐集も・・・ユーノ君からの手紙は彼女たちに見せたのよね？」

「ええ。シグナムさん達もその事を納得して、旅行が終わったらはやてちゃんを説得して再び眠りに着くと言っていました」

「そう。ガイバーと蒐集、何か関連があるのかしら？・・・」

「・・・それと気になることがもう一つ」

「何？どんだん言っただけだよ、晶君。今は、どんな些細な情報でも欲しいわ」

「シグナムさんたちが次に狙ってくるのは制御金属球かもしれないわん」

「何故、そう思うのかしら？」

「前に話した元の世界で僕達を狙っていたクロノスもガイバーの弱点でもあり、中枢でもある制御金属球を手に入れるために僕の脳髓を破壊して無力化しようとしたことがあったのでもしかして思っただけです」

晶が口にしたのは、エンザイム？の時のことだ。

この場で詳しい話をさつき聞いたばかりのクロノは、苦い表情をしていたが確かに可能性が無いわけじゃないと思った。

その後、結局目的はわからずじまいだったが、方針が決まった。

「執務官クロノ・ハラウオンならびにアルフ、民間協力者深町晶の3名は4騎士との戦闘を担当」

「……はい」

「また、深町晶は本人の希望により囿とする。そして、高町なのはならびにフェイト・テストロッサは今回の一件への干渉を禁止とする」

「……」

これは、リンデイがなのはとフェイトに協力を要請したことで晶が再度の襲撃が予想される自分を囿にするから彼女たちを戦わせるのはやめるように言ったからだ。

リンデイも短期での終結を望む事から危険は、承知で晶の提案に乗った。

なのはたちが納得せず不満を募らせている間にも作戦人事は進んでいき作戦会議に参加しているその部署の代表が返事をしていく。そして、最後の人事が通達された。

「最後に、武装局員は、”檻”の形成、維持に全力を注ぎ4騎士との戦闘行為を避けるように全員に徹底させること」

「了解」

「以上。今作戦の成功を祈る。解散!!」

リンデイの号令の後、部屋から退出していく代表者たち。

だが、リンデイの指示に不満を持ち直談判を行ったのはとフェイトだったが聞き入れられることは無かった。

そして、食堂で晶とクロノ、エイミィ、アルフらに2人は、さっ

きまで文句を洩らしていた。

だが、クロノが話題をずらす為に出した一言が原因で少し立て込むことになる。

「そういえば、晶。君の幼馴染の瑞紀さんが好きなのかい？」

「なあ!？」

「OK・・・その反応で十分だよ」

「ク、クロノだってエイミィさ」晶君・・・」え何、なのはちゃん?」

「フェイトちゃんも?」

「瑞紀さんのこともっとシリタイナ」

「う、うんいいけど」

「・・・私にも聞かせて」

「べ、別に良いよ、フェイトちゃん」

幼馴染としか聞いていない2人は気になるようだった。

アルフは、尻尾を足の間に挟んで小さくなり嵐が過ぎ去るのを待つようである。

「おお、修羅場つてる修羅場つてる。ナイスクロノッ」

「エイミィ・・・」

また、クロノに親指を立てるエイミィとそれに呆れる彼の姿もあった。

同日 14時27分 海鳴市内のある雑居ビルの一室

管理局からの追尾を巻きいくつかの次元世界を経由してからこの世界に戻ってきたシグナム、ヴィータ、ザフィーラそして先の件に

姿を見せなかったシャマルの姿があった。

「シャマル、主はやてはどうだった？左腕の引渡しと一緒に見てきたのだろ」

「ええ、はやてちゃんは今もいつも通り」よく眠っていました」

「……そうか」

シグナムは、疲れたような声でそう返した。

「……それと新しい指示です。今夜もう一度襲えと。持つてくるのは額にある金属球だけかまわないそうです。そこが、ガイバーの中枢だから」

「……どこから我々も晶から聞いていない情報を得てくるのだ、ヤツラは。まさか管理局内にスパイでもいるのか？」

「そうだと思います。彼らも「作業員からの報告」だと言っていましたから」

つづく

未熟な不満（後書き）

海水浴の時と同様にヴィータとはやての絡みを書いていたらなぜか
こつこつシーンが浮かんできました。

未熟なユウカイ その1

リリカルガイイバー 24話 未熟なユウカイ その1

12月1日

それは日光江戸村からの帰り道のことだった。

「はあ〜もう貯金がそこを着いてもうたわ」

「もうつてこれだけ旅行してれば当然ですよ、はやてちゃん」

「みな、気づいてるか？」

「せやかて、今まで何年も日常生活を節約してこつこつためてきた貯金なのに・・・まあ、私ら家族が多いからしゃあないか」

「とーぜんッ」

「愚問だ」

「ですね、それに旅行もいいですけどお家が一番、落ち着きますよ」
「ええ」

シヤマルとはやての会話の影でシグナムから発せられた。

それにヴィータやザフィーラ、そしてシヤマルもはやてとの会話を続けながら答えていく。

『最初は、気のせいかと思ったんですけど・・・』

「せやなあ〜、晶君やなのはちゃんたちとも会えるしな」

『ああ、私もだ。どうやら相手は素人ではないようだ、人気がなくなつたらおそらく来るぞ。その前に巻ければいいが・・・気を引き締めおけ』

『『了解／おう／はい!』』

さらにしばしの時間が過ぎた。

予想以上の人員に巻くのを失敗しシグナムたちは今、走って逃げた。

「いたぞッ」

「くっ!？」

「おいシグナムこっちだッ!」

「わかったッ」

「・・・な、なあシグナム、なんで私ら追われとるの?」

「わかりません。それと舌を噛んでは事ですので口は閉じていてください」

「わかったわ・・・」

だが、はやての指摘ももつともだとシグナムは思った。

自分たちはまだ蒐集で他者を襲ったことは無い、かといってこの世界で罪を犯した事も恨みを持った事もないはずなのだ。

また、心優しいはやてがそのような事をするはずも無い。

そこで考え付いたのは2つ。

1つは、過去の主たちによって命じられた事による復讐。

もう1つは、あまり考えたくは無いがユーノが管理局にばらした
ことよるものだった。

「・・・どちらも推測に過ぎんか」

「どうした、シグナム?」

「いやなんでもない、ザファイラ」

「・・・そうか。だが少し妙だと思わんか?」

「何がだ?」

「いや・・・」

「所で気づいているか、シグナム? 奴等は、まるで我々を何処かへと誘導しているように動いている事に」

「……確かに言われてみれば、絶妙なタイミングでの相手の姿や声によつて我々が取るべき道を1つにしていたな。すまない、本来なら将たる私が気づくべきことなのに……」
「気にするな。時にはこういうこともある。だが……」
「ああ、我々の行き着く先は奴らにとつて都合のいい場所なのだろう……最悪、魔法の使用を考慮しておこう」
「そうだな」
「そっちにいったぞ追えっ!!」
「チツもっ追いついてきたか」

ザフィーラとシグナムの会話は、ここで終わる。
グイータとシャマルもこの会話を聞いていたので現状を把握した。だが、後ろからは追っ手の声が近づいてくる。
出きる事は限られ、この場を空を飛んで逃げられたとしても目的がわからない以上このまま海鳴市にまで追いかけてくる可能性がある。
る。

シグナムは、そこまで考えて自らの胸の中にある小さな主を見てポツリと以前彼女から教えられた諺を口にした。

「……虎穴に入らずんば虎子を得ずでしたね、主はやて」
「へ、どないしたんやシグナム？」
「いえ、ただこれから御身を危険にさらし戦う事をお許してください」
「ん~~~~~如何にもな人たちやつたし……まあこの場合、正当防衛になるんかな？……あと私の事はシグナムたちが守ってくれるんやろ？」
「当たり前です！」
「ならええけどただ、やりすぎたらあかんよ？」
「はい、その命しかと……みな、聞いたな？奴らの罠を中から食い破り殲滅。そののちに目的を聞き出すが殺すなよ？」
「……おう／はい／うむ」「」「」

そして、シグナムたちは誘導されるまま開発地区の一角に建設中の人気の無いマンションへと入ると4人の軍人の様に風貌の6人の男たちが待ち構えていた。

外国人風の男たちの中で唯一の黒髪の男が話しかけてきた。

「さて、八神はやて嬢を渡してもらいましょうか？」

「なぜだ？」

「そうですね、あなたたちを利用するためですよ。おや、どうしました驚いた顔をして？」

「……普通こういう状況やと、目的を話したりしないんとちようの？」

「別に話したところで何の支障も無いのでね、他に聞きたい事があるなら答えますが？まあ答えられる範囲ですが」

「ほう・・なら我らを利用して何をするつもりだ？見ての通りただのか弱い女2人と男1人、子供2人だ。しかもそのうちの1人は足が不自由なのだぞ？なんの役に立つ」

シグナムは、さらに情報を引き出すために言葉を操る。

自分たちに利用価値は無いと言いながら。

だが、帰ってきたのは嘲笑だった。

「ハハハハ、ジョークがお上手だ。ヴォルケンリッターのあなたたちがか弱い女性やただの子供だなんて」

「……我らの事を知っていたか。では、管理局だな？」

「いえいえ、私たちは管理局なんぞではありませんよ。我々の組織の中には魔導師や管理局に恨みを持つ者も少なからずいますから」

「恨みか……では我々の使い道もそちら関連なのだな？」

「……さあどうでしょう？それはあなた方がこちらの駒になっただからお教えしましょう」

男は、その問いに答えず含み笑いを浮かべているばかりだった。

「・・・まあいい。だが、我らの正体を知っていながら姿を見せたのがたつた4人だけか？ここに誘導したときの人員を呼ばなくて良いのか？」

「他の者達には、あなた方が逃げられないように道の封鎖や空を生パ体熱線砲型たちで狙っていますので逃げられませんよ？」

「生体熱線砲だと？」

「ええ、人の在るべき姿の一つです。そして、我々も・・・」

「・・・なっ！？」「・・・」「きゃああっ・・・」

頭部が変貌し始め、それと共に膨張する男たちの体に耐えられなくなつた服が破れていき、最終的には異形の姿へとなる男たち。

人が異形の姿へと変貌する様を見せられたはやては、気を失ってしまったようである。

「おやおや、はやて嬢には刺激が強かつたようですね」

「お前・・・たちはまさか、獣化兵ソファノイドなのかッ？」

「ほう我らの事をお知りで・・・ああ！並行世界からの次元漂流者たるガイバーから聞いたのですね。アチラではどのような獣化兵が開発されているのか興味深いですね」

「ではやはり！」

「そう先ほどのあなたのお言葉通り獣化兵ですよ。知っているという事は、我々の力の程もご存知かと思えます。さあ、それを踏まえたと上でもう一度聞きましょう。大人しく我々に利用されなさい」

「断固拒否する！レヴァンティンツ！！」

【Siegg】

「いきますよクラーレルヴィント！」

【Anfangg】

「ぶつ潰すぞグラーフアイゼンツ！」

【Bewegung】

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグナムたちは、デバイスを起動させ騎士服を纏い戦闘態勢を整える。

ザフィーラも無言で騎士服を纏う。

「シャマル、主を頼む」

「ええ、みんな気をつけて」

「さくつと倒して、さっさと飯食おうぜ」

「・・・油断するな、ヴィータ。深町が言っていただろう、魔力を使わずに魔導士に匹敵する力を発揮すると」

「そんなの気にすんなよ、ザフィーラ。あの一番弱そうな蛸みたいな奴を真っ先に潰せば3対3だぞ？」

「・・・なるほど、1対1ならベルカの騎士に負けはない」

「そういうことだ!!」

・
ヴィータがそんな事言っている時、それを聞いた獣化兵たちは・

「がははは、ひでえ言われようだなシネバイト」

「うつせー・・・確かにこの面子の中じゃ俺が最弱だけどよ・・・

だけど、俺だってラモチスを苦もなく絞め殺すくらい・・・」

「・・・・・・・・・・・」

亀のような風貌の獣化兵にそう言われたシネバイトと呼ばれた蛸の様な風貌の獣化兵は落ち込む。

また、もう一体の昆虫のような獣化兵は無言だ。

彼は、調整前にある事件によって言語中枢に障害を持つようにな

り片言でしかしゃべれなくなっている。

「おやおやあなた方は、わかってないご様子だ。何故我々がこの場を戦場に選んだのかを「知っている」「おや？」

「見たところお前たちには飛行能力が無さそうな所を見るに我々から飛行能力というアドバンテージを奪う事と使用できる魔法を制限する事が目的だろ？ここで大威力や広範囲の魔法を使おうものなら柱が破損して数百トンの瓦礫の下敷きになりかねんからな」

「ふふ、正解ですが、それがわかっていながら尚、あのような事が言えるとは」

「ばあくか、そのぐらいのハンデがあつてちょうどいいぐらいだぜ」「そうだ、我々ベルカの騎士を舐めるなッ！！」

ヴィータとシグナムの言葉を引き金にシグナムたち3人は駆け出した。

ヴィータの提案どおり真っ先にシネバイトを潰そうとしたのだが、その前に他の獣化兵たちが立ちふさがる。

「ちっ！」

「邪魔すんなよ、バカッ！」

「がはははは」

「.....」

「わかっているな、シネバイト」

「OKボス！！」

つづく

未熟なユウカイ その1（後書き）

感想の受付がユーザーのみってなっているのに今日始めて気づいて直しました。

あと、来週の投稿はバイトの面接に受かっていたら休むかもしれません。

未熟なユウカイ その2

リリカルガイバー 25話 未熟なユウカイ その2

シグナムたちは、小競り合いを続ける内に目の前に立ちはだかつている者たちによってすぐに互いをフォーローには入れないほど引き離されいていた。

ヴィータの場合

「いい加減そこだよ、ドン亀！」

【Schwalbfliegen】

「おらあッ！！」

「ぺっ！」

ヴィータの放った鉄球3つがまっすぐに獣化兵を襲う……が、口から吐き出した何かによって3つ全て地面に転がされる。

「凍ってる?!」

「がははは見たか、ガル balan 様の力を！」

「てめえ、何しやがった！」

「俺の体内で精製された液体窒素を吹きかけてやったのよ」

「液体窒素ってあのもうすげえ冷てえ奴かよ……だったらこれならどうだッ」

ヴィータは、距離を置き攻撃するどころか駆け出し接近していった。

「自棄になるのが早いぞ、小娘」

「言ってる!」

【Explosion】

ジグザグに走りガルバランの狙いを定めさせずにどんどん接近していく。

その途中、カートリッジロードも行いとうとう懐に潜り込んだ。

【Raketenform】

「喰らいやがれッラケーテン」

「おおお!」

「ハンマーッ!!」

ヴィータは、亀に似た風貌から硬いと思いテートリヒ・シユラークでは無くラケーテンハンマーの使用に踏み切る。

幸いパワーはあるがヴィータのすばやい動きについてこれなかったらしいガルバランは、驚きの声を上げるだけだった。

そして、ヴィータは、自身の腕力と最小限の回転の遠心力にロケットの様に噴射する魔力を乗せてこの状態から出せる最速、最大の一撃をガルバランの胸部甲殻に叩き込む。

だが………

「なあっ!」

「がははは温いは小娘ッ」

ヴィータが見たのは、ロケットを噴射しながら何とか甲殻に食い込もうともかくグラーファイゼンだった。

「俺の体を砕きたかったらこの倍は持って来んかい!」

ザフィーラの場合

「ぐぐつううう!!!」
「.....」

ザフィーラと昆虫型の獣化兵は、組み合っていた。

「.....お前.....俺より.....力.....弱い」
「うおおおおお!!!」
「.....無駄」

ザフィーラは片言で話す相手に蹴りを浴びせるが堪えた様子は無かった。

「だったらこれを受けてみるッ 『鋼の軛』!!!」
「.....」

四方から発生した『鋼の軛』が獣化兵を串刺しにしようと襲い掛かる。

加減して勝てる相手ではないと判断したザフィーラは全力で魔法を放った。

ザフィーラはこれで倒すまたは今の状況を打開できればと思っていたが、獣化兵に焦りの色は全く無い。

それどころか逆に放った本人が驚愕することとなる。

「!?! 『鋼の軛』が消えただど!!!??」
「俺.....対魔導師用.....試作獣化兵.....ヘルゼルグ」
「対.....魔導師用!?!」

『鋼の軛』が触れた部分の外殻の表皮は、茶色く変色しているもののダメージを受けた様子はない。

「・・・俺の外殻・・・魔力・・・減衰させる・・・魔法・・・効かない」

シグナムの場合

【Besserung《回復》】
「くっ！」

シグナムは、これで何度目かになるレヴァンティンの修復を行う。彼女自身も強固なはずの騎士服が胸元や裾、背中、袖など様々なところが斬られている。

血が流れているところもあるが多くは騎士服だけに留まっていた。シグナムが体を捻ったりして回避行動を取っている事もあるが何より相手には殺す気がまったく無いからでもある。

「何だ奴の剣は!？」

「ふふ驚いてるようですね？私のこの剣は、高周波ブレードです」

「ッ深町の高周波ソードと同じか・・・道理でよく斬れる訳だ」

「ええ、理論上この世の物質全てを斬れます」

「晶から聞いているぞ、お前達のような獣化兵のことも・・・超ハイパーソニック獣化兵というのだろうか？」

「ふふ、知っていたましたか・・・申し送れました、私はザンクルス。仰るとおり超獣化兵ですが・・・これでは我々の機密がどれだけ漏れているのでしょうか・・・」

ザンクルスは、胸に右手を当て軽く頭を下げふざけたように自己紹介をして見せるが、すぐに情報漏洩に憂いる。

それを尻目にシグナムは、捲れてくる胸元を左手で押さえながらレヴァンティンに指示を出した。

「レヴァンティン、我が甲冑を！」

【Panzergeist】

「おや？今度は魔法での防御ですか………」

「物質化している騎士服やレヴァンティンとは違い我が甲……無駄です」ツ！？」

ザンクルスが動き出すがこの魔法に絶対の自信を持つシグナムは、空中戦ならともかく地上戦では捉えるのが困難なほど素早いザンクルスを攻撃を合えて受け後の後をとることで制すつもりだった。

だが、シグナムの甲冑は、すれ違いざまにわき腹を浅く引き裂かれる。

そのことに動揺しパンツァーガイストが解けてしまったシグナムは、さらにザンクルスから背中への鋭い蹴りを受けに前方へと飛ばされてしまった。

「くあっ!？」

「今の魔法相当の自信がおりだったようですが、高周波の武器は物質だけでなく、魔力同士の結合にも効果があるのですよ」

「私の甲冑が……」

「その後様子では知らなかったようですね……そんなことよ
り」

やはり動揺を隠せないでいるシグナム。

そんな彼女へ地面を這う様に近づいてくる影があることに気づいたザンクルスは、念を入れて気取られないようにと自らへと気を向けさせる。

そして、それがシグナムの足元まで到達した時、一斉に彼女へと襲い掛かった。

【Warning《警告》】

「!?!」

「捕まえたぜ!」

「チエックメイトです。にしても、お前はその縛り方が好きです
すね」

「へへ、すみません」

影の正体は、シネバイトの触手だった。

シネバイトはシグナムに近づきながら触手を操作し、彼女の体を
這い寄せ適度な力を加えて拘束していく。

彼女の胸が強調される様に触手で縛られザンクルスに斬られた服
から谷間が覗いている。

一方その本人は、レヴァンティンを腕が縛られたまま器用に順手
から逆手に持ち替えシネバイトを刺そうとしていた。

「ぐはッ!?!」

「申し訳ありません、手がこれなので足蹴にしてみました。で
も・・・おいたはダメですよ?シネバイト」

「りょかい」

「ぐむッ」

シグナムに蹴って黙らせたザンクルスはシネバイトに指示を出す。
まずシネバイトは、魔法をコマンド発動させないためにその触手
で口を塞いだ。

さらに、レヴァンティンを奪おうと触手がシグナムの腕を外にひ
ねり出したが苦痛に耐え彼女は手放そうとしない。

だがシグナムは、触手とは別に独立しているシネバイトの2本の
腕がさらに加わり抵抗空しくレヴァンティンを奪い取られてしまっ
た。

「んー！」

「ここは、任せましたよ？私は、はやて嬢の確保に向かいます」

「任せてください」

「んんー！ー！ー！ー！！！」

「無駄だぜ？聞いてたかも知れなけどな、俺はラチモス、常人の10倍の筋力を持つそいつを絞め殺すぐらいは分けないんだぜ？」

「！？」

「魔力で身体能力が強化されていようと女のお前が素手で俺の触手からは逃げられる分けないだろうが！」

シヤマルとはやての場合

「………邪魔ですね」

「！？」

シヤマルのバリアタイプの防御魔法をザンクルスは、シグナムの時と同様に容易く引き裂きバリア内部に侵入する。

そして、この事態に今だ気絶中のはやての前で彼女を庇うように両手を広げザンクルスの前へと立ちはだかるシヤマル。

「こ、来ないでくださいッ！！」

「戦闘能力を持たないあなたでは無理です、退いて下さい。要らぬ怪我をする事もないでしょう？」

「嫌です！！！！」

「はあ~~~~仕方ありません……ねッ！」

「きゃッ」

断固拒否する姿勢のザンクルスは、シヤマルの横っ面を手の甲で張り倒しはやてへと高周波ブレードを突きつけて彼女に命じた。

「さあ、あと2人のヴォルケンリッターに伝えなさいあなたたちの主は私たちの手に墮ちたと」

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・はい」

シヤマルは、不甲斐無い自分を悔み、念話をザフィーラたちに送った。

そして、ザンクルスの前にその部下3人とデバイスを奪われたシグナムたちとヘルゼルグに叩きのめされ痣やキズだらけのザフィーラが並べられていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あなたたちにやって欲しい事は3つです。これをこなせばはやて嬢を解放しましょう」

「・・・・・・・・さっさとその3つを言え。すぐに済ませてくる」

「それでは一つ目ですが、闇の書を591ページ以上まで蒐集する事です」

「！？待てよッ完成させたらはやてが死んじゃうんだぞ!？」

「おや、そうなのですか・・・・・・・・ですが、別に完成させるとは言っていないですよ?」

「じゃあ、完成させなくていいんだな!」

「ええ、ですが591ページまでは最低でも蒐集してもらいますよ」

「そっか・・・・・・・・よかつた〜〜」

蒐集については、完成させなくて良いと言う事でとりあえず安心したヴィータたちだが、2つ目はそうはいかなかった。

「では納得していただいたようなので2つ目ですがこれは1つ目が完了しだい行動してください

「わかつた」

「深町晶をなるべく生け捕りにして来て下さい。額部分と腰部のメタルは無傷でお願いします。それ以外でしたらどうなっても構いませんが、なるべく原形を留めておくようにお願いしますね」
「なん・・・だと？」

「聞こえませんでしたか？深町晶というよりガイバーを無力化した状態で私たちに引き渡して欲しいのですよ。それと斬りおとした部位も回収してきてくれると尚良いです。3つ目は、これが終わってから伝えます・・・おや？出来ませんか、みなさん？」

「当たり前だ。あいつは私た」では、はやて嬢には死んでもらいますしょう」「ツヤめるおおおおお！！！」

「・・・はやて／はやてちゃん／主ツ！？」」「」

ザンクルスは、言うが早いか床に寝かされていたはやての頭から縦へと高周波ブレードを振り下ろす。

つづく

未熟なユウカイ その2（後書き）

え〜やっちまいました、オリジナルオリキャラ獣化兵。

ガイバーに天敵のエンザイムシリーズがいるように、魔導師への天敵として考えました。

それと、魔法は高周波の武器でも斬れるって設定です。

晶は、暴走してクロノを襲った時のことを聞いてその事に気づきました。

詳しいヘルゼルグの設定は次回かそのさらに次の投稿の時に出します。

あと、面接に落ちたのでまたしばらくは、同じペースで投稿すると思います。

また話数のおかしかったところを修正しました。

未熟なユウカイ その3

はやてが斬られた。

そう見えた4人は、絶望感に打ちひしがれる。

しかし、よく見ると斬られたのは、はやての上下の下着や衣服のみ。

その下から覗く素肌にはキズ一つ無く、胸は穏やかに上下していた。

「次は、服だけではすみませんよ」

「はやて・・・死んでない・・・よな？」

「ええ、殺していませんが・・・次にNOと答えたら容赦しませんよ？」

そして、シグナムたちは、ザンクルスたちに屈服した。

また、はやては、そのまま大型トレーラ内に用意されていた調製槽の中へと入れらる。

それを見たシグナムたちが獣化兵にされるのではと青ざめているのを見てザンクルスは言った。

「心配せずとも彼女は、獣化兵にできませんよ」

「本当か!？」

「ええ『はやて嬢』は、調整できないのでご安心なさい」

ザンクルスにそう言われヴィータは、ホッと胸を撫で下ろしたが他の3人には彼の物言いに引っかかる所があった。

「・・・『しない』ではなく『出来ない』とはどういうことだ？」

「おや?そこに気づきましたか・・・これも機密なのですが一時

的とはいえ仲間ですからまあ少しだけ教えてあげましょうかね」

「我らを仲間と呼ぶな！さっさと続きを話せ」

「反抗的な態度ですね？」

「コッコッ」

「……まあいいでしょう」

4人は、ザンクルスの物言いに青ざめたが彼の許しにホッと撫で下ろすが感謝はしていない。

そして、ザンクルスは中断していた話を再会した。

「理由は魔法資質を持つ人間は獣化兵には向かないからです」

「それってどういうことですか？」

「おっとそれ以上は……それより、早く用事を済ませ
てはやて嬢を解放してあげた方がいいのでは？」

「ッわかっている！！」

こうしてシグナムたちは、魔導師襲撃事件を起こすこととなる。

また、晶襲撃までの1週間の間に彼を襲う覚悟を決めた。

はやては、それを調製槽の中でシグナムたちが全ての事を終える
まで眠り続ける。

リリカルガイバー 26話 未熟なユウカイ その3

12月10日

会議が終了してすぐ、本局からの通信が入っていた。

相手は、過去に『闇の書』事件に深く関わったことがある所謂お偉いさんである。

「お久しぶりです、提督」

「元気そうで何よりだ、クロノ」

提督と呼ばれた初老の男性とクロノが、気安そうに挨拶を交わしている後ろで、晶、なのは、フェイトの3人は、居心地悪そうにしていた。

「・・・それで、君が深町晶君で、後ろにいるのが高町なのは君とフェイト・テストアロツサ君だね？」

「・・・は、はいっ」「」

3人は、偉い人としかクロノから聞かされていないので緊張した様子で返事をした。

「ハハハ、そんなに緊張しなくてもいいよ。私は、ギル・グレアムなのは君と同じ世界出身の人間だよ」

「ふえ〜そうなんですか？」

「じゃあ、地球の・・・」

「そうだ、私はイギリス人だがね・・・所であちらの世界の事を少し聞かせてくれないかね？」

「いいですけど・・・どうしてですか？」

「何、ただの好奇心だよ。こちらとあちらの世界の違いを聞いてみたいんだ」

「はあー」

晶が語ったのは、科学技術がこちらの方が進んでいる事やこちらと似たような世界情勢、あとクロノスの事を当たり障りない程度に話した。

「なるほど・・・・・・晶君となのは君は、私と少し似ている

ようだね」

「？あの・・・それってどういうことですか？」

「私も君たちと同じように偶然の出来事とその後の人生を大きく変えたということだよ」

「えつと・・・つまり私がユーノ君の声を聞いて助けた事や」

「僕が偶然、ユニットを拾った事と同じようなことがグレアムさんにもあつたつてことですか？」

「そうだ。50年以上前、私は偶然、怪我をした管理局の人間を見つけて管理局に入ったのだよ」

「「へえー」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああすまないね、フェイト君。私たちだけで盛り上がってしまった」

「・・・・・・・・・・気にしないでください」

フェイトは、晶となのはとは違いこの話題に参加できず疎外感を感じていたようだった。

「君のこともリンディ提督から聞いているよ。お母さん思いのとても優しい子だよ」

「あ・・・ありがとうございます・・・・・・・・」

フェイトは、顔を赤くし照れているようだ。

その後は、グレアムが体験した『闇の書』事件のことや現主のはやての事等話をしたりと時間は瞬く間に過ぎていった。

そして、最後にグレアムは、晶にこんな質問をした。

「・・・・・・・・君がどうして戦っているか、教えてくれないかね？」

「僕が・・・ですか？そうですね・・・知ってしまった以上放っておけないからでしょうね。車が近づいてきている車道にボールを

追いかけて子供が飛び出そうとしたら止めるでしょ？あれと同じですよ」

「そうか……君は囚役を志願したらしいが……怖くは無いのかね？君が死にくいということは聞いているし4騎士達も殺す気は無いようだが、何かの手違いで制御金属球コントロールメタルだったかね？が破損するかもしれない、決して有り得ないことではない。わざわざ自分から危険に飛び込む事に恐怖は感じないのかね？」

「そんなの怖いに決まってるじゃないですか。そうしたら、僕は死ぬんですから……でもだからって見て見ぬ振りもできないですから……」

「……損な性分だな、君は」

「ええ、全くです」

「さて、長々と年寄りの話に着き合わせてしまつて悪かつたね」

「いえ、そんなことないですよ。僕も普段出す事のない本音をしゃべる事が出来ましたし」

「そう言ってくれると私もうれしいよ……君の無事と元の世界に戻ることを及ばずながら祈っているよ」

「はいっありがとございます！」

「あと、クロノ。余り無茶をしないようにな」

「わかつています。急時にこそ冷静さが最大の友。提督の教え通りです」

「うむ……それとなのは君にフェイト君」

「……？」

「君たちは、今ただの子供と変わらない。晶君が心配だろうが軽率な行動は慎むようにな」

「……」

こうして、通信を終えた。

モニターが消えるのを確認すると大きくため息を吐いた。

「ハアーーーーー……………無事を祈っているか……………
・フフフ、私は何を言ってるんだ。彼が奴らの手に落ちねば計画
が進まないというのに……………」

グレアムは、背もたれに体を預け、眉間の辺りを揉み解しながら
自嘲するように笑いながら呟いた。

「…………2人とも、4騎士が捕まらないように手助けしてやってく
れ」

「はい、お父様」

地上 海鳴市

通信が終わりアースラに居場所のないのはとフェイトは、地上
に戻されフェイトの家に向かっていた。

「…………グレアム提督にもああして念を押されたね」

「うん…………だから、グレイシアさんの所に催促に行くんだよ。
…………それにしても晶君、本当に瑞紀って子のこと好きなのかな
?」

「え!…………どうなんだろ。でも、満更でもなさそうだし…………」

何かと気になるお年頃の2人は、この話題を道中続けた。

「無理ね」

これがグレイシアに会って、早速レイジングハートとバルディツ

シユが今日中に直るか聞いたのはたちへの返答だった。

「どうしてですか！？前破損した時は、一日で直ってましたよ！」
「あのね、その時は自己修復でどうにかなったレベルだったの。確かにもうパーツ交換も終わって本体も修復は終わって、頼まれてた新システムも組み込んだけど、まだフレーム強化が終わってないのよ」

「でも、母さん”フレーム強化しなくても使える”って前言ったたよ？」

「ええ、フルドライブしなければフレーム強化しなくても大丈夫よ」「だったら！」「でも！」

「まだ、2機とも新システム導入による最適化の真っ最中。終わるのは、早くて明日のお昼ごろって所かしらね」

「そんな〜〜」

同時刻 アースラ艦内

晶とクロノとアルフが打ち合わせのため話し合っているときのことだった。

「あっ」

「どうしたのさ、晶？」

「いや、今思い出したんですよ、アルフさん。あのさクロノ、牢屋の所で言うの忘れてたんだけどさ、あの口枷って殖装させないためだよな？」

「？そうだが」

「あれ無意味だから、今度からつけないでくれる？次が無いことを祈ってるけど」

「無意味？君が呼ぶから異次元から来るんだろガイバーは？」

「まあ、そうなんだけど、別に声に出す必要は無いんだ……」

たぶん」

「たぶん？曖昧な答えじゃないか、晶」

「試した事ないからですよ、アルフさん」

「だったら、何でいつも”ガイバー”って叫ぶのさ？」

「なのはちゃんたちが魔法を使う時、よくその魔法名を叫ぶでしょ？アレと似たような物でその方が、殖装するって意識しやすいからだよ」

「つまり、君が意識すればできるっということか？」

「っと思っんだ。ガイバーは、声に反応するんじゃないって背中を誘殖組織が呼び寄せるからね。だから、あの時もう少しクロノが現れるのが遅かったら試すところだったよ」

「ハハ、それはよかった。誤解で艦内設備を破壊されては堪らないからね」

「フフフ、そうだね。僕もこれ以上迷惑は掛けたくないし……」

クロノと晶は、お互い笑って話していたのも一転、晶の表情は陰しい物になった。

「……どうしたんだい、晶？」

「折り入って、2人に頼みたいことがあるんだ」

「？聞けるかわからないがとりあえず言ってみなよ」

「そうだね。内容にもよるからね」

「うん……なのはちゃんたちの前じゃ言えなかったんだけど、もし僕が」

こうして交わされた晶とクロノ、アルフの間に結ばれた約束。

まさか、約束したその日に約束を果すことになるうとは、この時クロノもアルフも想像すらしていなかった。

UJU<

未熟なユウカイ その4 (前書き)

申し訳ありませんが色々と後の事を考えてヘルゼルグの姿を変えま
した。

未熟なユウカイ その4

『ヘルゼルグ』

昆虫型獣化兵ラゼルをベースに、対魔法外殻を賦与した対魔導師用試作獣化兵。

筋力増幅率がラゼルより高いため体が一回り大きくなり俊敏性が若干低下。

また普通の外殻と違い、皮膚のような薄い外殻による多層構造になっており各層ずつ魔法を減衰させる効果を持つが一過性である。そして、効果を失った部分は茶色く変色しすぐに脱皮する（剥がれる）。

一時的に脱皮した部分の魔法減衰量が低下するが、脱皮して10分もしないうちに再生し元の減衰量に戻る。

（調製実験報告書より）

リリカルガイバー 27話 未熟なユウカイ その4

12月9日 19時14分 海鳴市 ビル屋上

晶は、眼下で煌くネオンやテールランプ、ヘッドライトの輝きを見ながら口を開いた。

「……………どうでした、久しぶりの家は？」

「まあまあだったね。あいつもフェイトを大切にしているみたいでち

よつと安心したよ」

殖装している晶の隣にいるアルフは、彼の質問にさっきまで居たテスタロツサ家の様子を思い出しながら言った。

彼女の顔は、フエイトが幸せそうであれそうだ。

この場にいるもう1人、クロノも口を開く。

「晶の方は、どうだった？なのはの親御さんは」

「さすがに連絡無しで姿を消してた訳だから怒られた上に桃子さんには、泣かれちゃったよ」

晶の方は、彼の身を泣いて案じてくれた桃子に小さい頃に他界した母親が心配してくれたかのように感じた。

「そうだ！はやてちゃんの家、どうだったクロノ？」

「ダメだね。家政婦が定期的に掃除に来るのを近所の人たちが確認していたけど、ここ数週間の間誰かがあの家で生活していた形跡はなかった」

「・・・そう。はやてちゃんたち何処にいるんだろ？」

はやてたちのことを心配するように呟いた晶にアルフは、呆れて言った。

「・・・お人よしにも程があるんじゃないのかい、晶？あつちは、アンタを襲ったんだよ」

「まあそうですね・・・ね」

晶は、苦笑するものの心配している事を変えることはなかった。

「・・・晶、そろそろ始めよう」

「うん」

「あたしは、ザフィーラの相手をすればいいんだろ？」

「ああ、僕は鉄槌の騎士を。晶には、剣の騎士が相手だけど・・・
・くれぐれも気をつけるんだ。君がやられるという事は、守護騎士
達の目的達成を意味する事を忘れないように」

「大丈夫。前、戦って感じたんだけど、一対一ならそう簡単に負けることはないよ」

「そうか」

「エイミイそつちも準備できたか？」

『こつちは、いつでも良いよ！』

モニター越しにエイミイが親指をクロノに立ててみせる。

そして、晶は、アースラの機器を使って広域へと念話を発信した。

『僕は、ここにいます』と。

同時刻 高町家

その念話を聞いたなのはとフェイトは、連絡を取り合っていた。

「フェイトちゃん、どう？外に出られそう？」

『無理だよ。母さん、私が晶の所に行かないように見張ってるみたい』

「そつか・・・じゃあ、私だけで行くね」

『気をつけてなのは』

「うん。全部解決してまたいつもの生活に戻ろうね、フェイトちゃん。はやてちゃんたちと一緒に！」

『がんばって！！』

なのはは、フェイトとの念話をきり士郎たちに見つからないように夜の街へと飛び出して行った。

同時刻 雑居ビル屋上

こちらもなのはたち同様、念話が聞こえていた。

「あちらからの誘いか・・・畏だな」

「ああ・・・」

「そんなもん、内側から食い破ればいいだろ」

「そうだな、ヴィータ。シャマル、お前は後方で待機。時を見て・・・」

「わかってます、シグナム」

シャマルは、強張っている顔で答える。

その様子にシグナムは、すまなそうに言った。

「すまん。お前に晶への止めを刺す役をやらせて」

「いいんです。私にしか出来ない事ですから」

シャマルの決心は、揺らぐ事なくシグナムにそう返事した。

「ヴォルケンリッター・・・出陣する!!」

屋上から紅、紫、緑、白の四つの光が戦場へと飛び立った。

そして、海鳴市の上空には、シグナム、ヴィータ、ザフィーラと晶、クロノ、アルフの6人が向かい合う。

一方、その周囲では、武装局員たちが強装結界を展開しシグナムたちの離脱を阻んでいる。

シグナムは、その結界を一度見渡すと口を開いた。

「……”檻”というわけか」

「そうだ。この結果ならお前たちでもそう易々と脱出は困難だろ？」

「こんなもん、あたしのギガントでぶっ壊せるぜ、黒すけ」

「ッ」

「落ち着きなよ、クロノ。ヴィータは元々あなんだから、いちいち反応したら話が進まないよ」

師匠であるアリアたちならともかく自分より小さい子供（実年齢は上だが）に黒すけ呼ばわりされてキレそうになるクロノをアルフが落ち着かせている間、代わりに晶が話を続けた。

「……どうしても、引けないんですか？今こちら側には、管理局が付いています。今なら温情あ「無理だ」……」

「晶無駄だ。こいつらは、引かない。力付くで取り押さえるしかない」

「……」

シグナムの悲痛な答えを聞いた晶は、クロノの言葉に絞り出すように答え予め決めていた相手との戦いが切って落とされた。

結界外部 海鳴市 地上

「ハア……ハア……この辺りだよね？」

デバイスを持たない今、空を飛べないのはは、強装結界の展開を感じしここまで走ってきていた。

なのはは、辺りを見渡し人の目が届きにくい近くの建物の影に移動し結界内との境目に手を差し込んだ。

「レイジングハートが居なくなっただけで私にもできることがあるんだから!!」

アースラ ブリッジ

「サーチャーに反応?これってツ艦長!なのはちゃんが結界内にツ」
「何ですって!?彼女を監視してた局員はどうしたの!?!」
「.....ダメです。応答ありませんッ」

なのはは、必ず無茶すると予想していた晶がリンディに申請して武装局員を割いてもらっていたのだが、その局員にアレックスが何度も交信を試みようとしてリンディに報告した後も努力している。

同時刻 海の近くの公園内の林

『.....レミング08!応答せよ!!こちらアースラ!!!.....
レミング08!応答せよ!!こちらアースラ!!!.....こちら』

血濡れの通信機の近くには、動かぬ肉塊が一つ。

「.....」

それは、なのはの監視に派遣されていた局員だった。
彼は魔法を使う間も無く襲われたようで破壊されたデバイスも近くに転がっていた。

『よ!!!こちらアースラ!!!.....レミング08!応答せよ
!!!こちらアースラ!!!.....レミング08!応答』

翌日の早朝、通信機の反応を逆探知してこの場所に訪れたレミング11に全身の肉と骨をグチャグチャにされた無残な姿で発見される。

結界内部

なのはは、空を見上げていた。

「あの紅の魔力光がヴィータちゃんでその相手が水色だからクロノ君だ。それで、白いのと金色がザフィーラさんとアルフさんかな？じゃあ、あれがシグナムさんと晶君だね」

なのはの視線の先には、紫の魔力光が何か（魔力光を発しないガイバー）と何度もぶつかり合っている様子を映している。

「……………よっし！私は、シヤマルさんを探そッ」

シヤマルの魔力光が見えないことから自分の今できることを考え出したようなのはは、ほぼ無人の街を走り出す。

一方、強装結界を維持している武装局員たちに変化があった。

『なのはさんを急いで確保して！彼女を人質に取られたら事だわ』

「了解、艦長。さて誰を」

『隊長、俺に行かせてください！』

「お前か、レミング06……………いいだろう、行って来い！あとは、俺たちで何とかする」

『ありがとうございますッ！…！』

レミング06は、そう言うと所定の位置から飛び出して行った。

なのはは、目に付いた隠れられそうな場所を探しながら近くのピルの屋上に向かおうと走っていた時だった。

ここまで、高町家から走り続けてきた所為だろうか。

判断力が若干鈍っていたなのはは、人影を見つけると疑いもせず、にシヤマルを見なかったか尋ねた。

「ハア・ハア・あの・すみませんッこの辺りで金髪のボブカツトの女の人見ませんでしたか？」

「知ら・・・ない」

「そうですか、ありがとうございます え？」

お礼を言いました走りだして十数歩の所で異常に気づいた。

「どうして結界内に人が？もしかしてあなたも・・魔導師なんですか？」

「あんな・・薄汚いモノと・・一緒に・・するな！！」
「ひゃっごめんなさい」

男の剣幕に怯えるなのは。

そして、男はなのはを冷たい眼差しで見下ろし言った。

「お前・・ここにいる・・なら・・獲物」
「え？」

男は、そう言うと体が膨張し始め姿が変わっていく。

そして、変わり果てた姿は、ザフィーラを痛めつけたヘルゼルグだった。

「ひっ」

「容赦しない・子供でも・魔導師ならッ」

その様になのはは、はやてのように気絶こそしなかったが腰が抜けてしまったようでその場へたり込んでしまう。

その間にもヘルゼルグは、恐怖を駆り立てるかのようにゆっくりとなのはに歩み寄っていく。

「どうした・・・逃げない・・・のか？」

「こ、来ないでえ！」

「それ以上その子に近づくな化物！！」

「え？」

「？」

あと数歩でなのはに手が届こうとした所で上空から救いの主が現れた。

なのは保護に向かってきていたレミング06である。

つづく

未熟なユウカイ その4（後書き）

8 / 14 ちよつと修正

未熟なユウカイ その5

『ヘルゼルグの調整体について』

調整素体には、管理局や魔導師に強い恨みを持つ者たちが試作体に伴う危険性を承知で志願。

第97管理外世界に派遣された彼もそんな1人だ。

彼の場合は、とある事件で言語障害が残ったものの生き残ったが妻と息子は死亡。

当初は、当時起きていた連続殺人の新たな被害者ではっとニュースに取り上げられ唯一の生存者の発言に注目が集まっていた。

そして、意識を取り戻し捜査官からの事情聴取の際に、犯人の顔が何度か次元犯罪者を逮捕して二ユースで取り上げられたことでそれなりに有名だった管理局所属の魔導師の顔と同じだったと証言した。

しかし、世間には連続殺人事件から一転し”ガス爆発事故”として発表される。

何故そうなったのか。

捜査の結果、その魔導師が犯人だと探り当てたが管理局は、スキヤンダルの発覚を恐れ彼の聴取を黙殺し、何処の家でも起きそうな事故に置き換えた。

その上、見舞金の名目で彼に多額の口止め料を支払い脅しを掛け真相を闇へと葬ろうともする。

報道にも圧力を掛け彼の話が世間に信じられることが無い様にもしていた。

犯人は僻地へと左遷したと聞いたが、彼はその後、反管理局・魔導師の組織に身を投じ現在、秘密任務に参加中。

『レミング06』

本名レナルド・ローズ 27歳 既婚者。

第1管理世界 「ミッドチルダ」出身。

まもなく第一子が生まれる予定である。

そんな彼だからだろうか、なのはのこを放っては置けず真つ先に名乗りを上げた。

リリカルガイバー 28話 未熟なユウカイ その5

「お前・・・武装局員・・・だな？」

「そうだ。大人しくいれば危害は加えない」

「そうか・・・」

なのはとは違い明らかに管理局の人間だとわかるレナルドにヘルゼルグは、プルプルと震えながらも言葉を紡ぐ。

一方のレナルドは、相手の昆虫のような姿に臆した様子はない。以前別件で次元犯罪者が生み出したキメラを見ているからだ。

「投降すれば、君を元に戻せるかもしれない。だから」

「・・・ふふ・・・ハハハハハッ」

レナルドが相手は怯えているのでは？と言葉を発している時、ヘルゼルグは狂ったように笑いだした。

なぜならさっきの震えは、自身の中で燻ぶっていた管理局への憎しみを押さえつけているもの。

だが、レナルドがヘルゼルグの問いに答えたことで、抑える必要を失い殺意は外へあふれ出した。

「殺すツ・・・殺すツ・・・ころすツ・・・ころすツ!!!」
「ツ!?!」

なのはの時とは違い明確な殺意が場を満たしヘルゼルグは、レナルドに持ち前の俊敏性を生かし飛び掛りその爪振る。

だが、レナルドもただ黙ってやられるわけもなく防御魔法を展開した。

「ムダダああッ!?!」

「なあ!?!ガアアアッ」

「!?!」

シールドは、ヘルゼルグの紙を引き裂くような容易さで引き裂かれレナルドの右腕が宙に飛んだ。

また同様にシールドを抜け茶色く変色したヘルゼルグの腕の一部も抜け殻となって共に宙に舞う。

同時刻 アースラ

「エイミィツまだ直らないの!?!」

「今やってますけど、相手の通信妨害魔法が強くて、すぐには・・・」

今全てのモニターが死んでいて結界内部の映像も通信もアースラに届いていなかった。

これは、なのはがヘルゼルグに遭遇する少し前から続いている状況である。

「とにかくなるべく急いで!」

「了解、艦長!」

少し前 あるビルの屋上

「……………これで良いんですね？」

「ああ、これでヘルゼルグは思う存分戦える」

通信妨害魔法を展開し終えたシャマルの後ろに控えていたカメレオンの様な獣化兵、ロツシュは、彼女の問いに満足そうに答える。

「俺は、アイツのデータを観測しなけりゃいけないからもう行くが……………これが最後のチャンスだぞ？」

「わかっていますッ」

ロツシュは、全身の変色細胞を使い周りの風景に紛れ込みながら家屋や電柱の上を利用してヘルゼルグの様子を良く見られる場所に移動していった。

なのはたちの所に戻るとヘルゼルグが傷口を押さえ倒れているレナルドを甚振る様に攻撃を加えていく。

「ツギ……………ミギアシ」

「ガッ」

「ッ」

「ヒダリアシ」

「ギャッ」

「ッ！」

「サイゴニ……………ヒダリウデ」

「グギヤアアアア」

「いやぁあッ」

ヘルゼルグは、順番に手足を踏み潰していきレナルドを苦しめて

いく。

今まで、危険な目に遭ったのは最初のジュエルシードに遭遇した時だけ。

その後は、ずっとレイジングハートや晶たちに守られ、もしくは支えに成ってくれるモノたち近くに居る状況での危険ばかりだった事で戦歴の割りに恐怖には慣れていなかった。

だから、晶たちも自身の力の象徴たるレイジングハートも持っていない今のなのはは、自身を中心に広がっていくアスファルトの染みとそのせいで不快感に気づかないほどの恐怖に囚われる普通の10歳の女の子に戻っていた。

そして、そんななのはの前でヘルゼルグは、さらにレナルドの胸板に左足を乗せじょじょに体重を掛け苦しめていく。

「クルシメ・・・クルシメ」

「ガアアツ・・・に、逃げるんだ!!」

「え?」

「今の内にツ!!」

自らの身の危機よりなのはのことを案じ必死に訴えるレナルドの様子にやっと思怖から脱せたが出来たなのは。

そして、そんな彼女が起こした行動は、見捨てられないという事もあったろうが士郎からの教えにもよる行動なのだろう。

なのはは飛びついた、ヘルゼルグに。

「もうやめてええええ!!」

「俺のことはいい逃げる!!!!」

「・・・ジャマダ」

「きゃッ!?!」

ヘルゼルグの左足にしがみ付き邪魔をするが、その足を振り回し

容易くなのはを振り払う彼女、アスファルトの上を数メートル転がされ止まる。

「~~~~ツ・・・?ひゃツ・・・こ、これってツ!?!」

なのはは、全身の痛みを堪えて立ち上がろうとしたとき、その手に触れた物があった。

ソレを握っている腕に驚いたものなのはは、その腕を慎重にかつ迅速に外しソレをヘルゼルグに向けた。

ソレは、ストレージデバイス。

持っていた右腕と一緒にレナルドから飛ばされたデバイスだ。

「・・・人のデバイスでできるかわからないけど・・・」

なのはは、出来るかわからないがとにかく起動状態のままだったレナルドのデバイスを手に一か八かの詠唱を開始する。

「リリカルマジカル、福音たる輝き、この手に来たれ」

AIを積んでいないストレージデバイスだったからか彼女は賭けに勝った。

4つの環状魔法陣がデバイスを取り巻いていく。

「導きのもと、貫け!ディバインバスター!!!」

「ツ!!!?!?!?!?!」

「すごい・・・・・・・・・・」

「やった!」

なのはの放った桃色の閃光は、レナルドを甚振っていたヘルゼルグを背中から包み込んでいった。

レナルドは、なのはの砲撃のすごさを間近で見ることとなった。
だが、対魔導師用の名は、伊達ではなかった。

「痛い……でも……正気に戻った」

「う……そ……そ……」

「なあッあんな強力な砲撃魔法を受けてもダメなのか!？」

確かにデイベインバスターは、直撃し変色した分の外殻を消し飛ばしたようだ。がヘルゼルグの特殊外殻を超えることが出来なかった。ただし、レナルドのシールドを抜けた際に脱皮していた右手を少し火傷している。

だが、その痛みでヘルゼルグは、正気を取り戻す事ができ当初の目的を思い出す。

「……任務続行……でも……それ邪魔」

「あっ!」

「それにしても……もっと……苦しめたかった……でも……お前……
……処分……しないと……俺……暴走……する」

「ッ」

「だから……残念……」

「やめてっ!!」

ヘルゼルグは、なのはからデバイスを取り上げへし折り遠くへ投げるとレナルドに向かって歩き出す。

だが、なのはは、ヘルゼルグの前に両手を広げて立ちはだかった。

「お前……殺さない……でも……邪魔」
「ッ」

なぎ払おうと腕を振り上げるヘルゼルグになのはは、目をギョッ

と閉じて衝撃に備えた。

そして、大きな爆音が辺りに響く。

話はずれるが少し前の事だ。

デイバインバスターが放たれた様は、上空で戦っていた晶にも確認できた。

「あの魔力光はなのはちゃん!？」

「貰った!!!」

「ッ」

なのはの登場に、思わず下を見てしまった晶。

そのチャンスをシグナムが見過ごすはずもなく、紫電一閃で首を刈りに来る。

晶もそれに気づき慌てて迎撃した。

あらゆる物質を切り裂く事が出来る高周波ソード対レヴァンティンの刀身に魔力と炎の追加効果に乗せた紫電一閃。

「・・・仕損じたか。だが、代わりに右のソードは貰った」

【Besserung《回復》】
「クッ」

その勝負は相打ちとなった。

高周波ソードもレヴァンティンも刀身が折れていたからだ。

だが、レヴァンティンはすぐに修復したが、高周波ソードの再生には時間がかかる。

再殖装すれば別だが速度で勝るシグナムがそんな暇を晶に与えてくれる訳がない。

ならば、なぜ晶が今までそんな彼女と渡り合ってこれのか。

それは、体術の技術の向上もあったが何より高い反応速度と厚い

装甲にガイバーならではの超感覚のおかげである。

また優れた感覚は、別のことも知らせてくれた。

今度は、シグナムから意識を逸らさないようにしながら地上を盗み見て目にしたのは、デバイスを奪われても尚、獣化兵らしき怪物の前に立ちほだかっているのはの様子だった。

そして、晶はすぐに行動を起こした。

「
」
「弾幕か!？」

晶は、チャージを最低限に留めた重圧砲（極低威力版）をガトリングの様に連射する。

威力が最低レベルとはいえ元々強力な武装のため、その威力はなのはのデイバインシューター並である。

だが、シグナムなら甲冑を纏えばどうと言う事はない攻撃。

だが、そんな暇を与えないほどの連射にさすがの彼女もレヴァンティンと鞘による防御に専念せざる終えない。

そして、さらに追い討ちを掛けるために晶は攻め立てた。

「ハッ」

「舐めるな!」

「セイッ!」

「ッ!」

シグナムの懐に飛び込みながら放った晶の左右のコンビネーションキック。

先に放った右蹴りは鞘に、そのままの状態からすぐさま放たれた左蹴りは刀身に防御され、シグナムに打撃を与えることは出来なかった。

だが、これらが防御されることを晶は予想済みだった。

「でえええいッ!！」

「!?!」

刀身と鞘を蹴りその場でバク宙しもう一度、今度は両足で思いっきりシグナムを防御の上から蹴った。

つづく

未熟なユウカイ その5（後書き）

デイバインシューターの詠唱を模写ってデイバインバスターの呪文にしました。

それはそうと話が中々進みません。

この話を書いているとどんどん文章量（話数）が増えていってしまいます。

未熟なユウカイ その6

リリカルガイバー 29話 未熟なユウカイ その6

晶は、水泳のターンをするように体を捻り体勢を切り替え壁を蹴シゲナムる。

その力を推進力に換え、重力も味方に付け滑空していく。
その最中に、何度も軌道修正を細かに行い狙いが外れないように。
だが、壁代わりに使われたシゲナムが黙って行かせてくれるわけがない。

「逃がさんツ」【Explosion】

「飛龍一閃!!」

「!?ゲツ」

納刀された状態から放たれたシゲナムの砲撃に見間違っほどの斬撃。

だが、晶は体勢を立て直し尚且つその力さえも利用してさらに加速して行った。

そして、今にも腕を振るいそうなヘルゼルグへ一直線に左の高周波ソードを突き出して体当たりした。

「ど」

「ッ!!」

晶が地面に激突した事で起こった爆音が辺りに響く。

だがその進路上にいたヘルゼルグは、何かを感じるより先に絶命。機密保持のため、彼の体内ではすでに分解酵素が働きだしている。一方晶は、激痛を感じながらなのはに話しかけた。

「~~~~ツ・・・なのはちゃん、無事？」

「・・・しょ・・・う君？ひゃツ・・・死んでるの？つて晶君大丈夫なの！？」

「結構無理したけど、問題ないよ」

「でも、両足が」

「大丈夫、大丈夫。グラビティコントロール重力制御球は無事だからほらっ」

なのはは、晶の声に目を開けると仁王立ちしているヘルゼルグの左肩の上部から右肩の下部まで抉られた姿に驚いたものの助かった事に安堵した。

だが、すぐに両足の根元近くから失った姿の晶に気づいた。

シグナムの”飛竜一閃”がもたらした結果である。

ヘルゼルグの腕が振るわれる前にここに辿り着けた代償だが、晶は重力制御球で浮いて見せて戦闘に問題ないことを示した。

そして、なのはを安心させると重傷のレナルドに声を掛けた。

「管理局の人、意識ありますか？」

「あ、ああ」

「辛いでしょうけどアースラへの通信を開いてください。僕の方では、さつきから連絡が着かないんです」

「わかった」

晶の言葉を聞きレナルドは、青白い顔で通信を開く。

それから晶は、なのはを彼の近くに呼んだ。

「なのはちゃん、君には聞きたい事が色々あるけど、今はこの人を

助ける事がさきだ」

「……うん」

「まず、この人の右肩の傷口。ここを本当は、清潔な布が良いんだろうけど無いから比較的きれいそうな布の上から押さえてあげて。それでいくらか出血が抑えられる」

「うん」

「そうしたら、この人が意識を失わないように喋りかけてあげながら、アースラと繋がったらすぐに回収してもらって」

「わかったの」

なのはは、運よく湿っていなかった自身のハンカチを出しその上から押さえ晶の指示にしたがって行動していく。

自分のせいで死に掛けるレナルドを助けるために。

「……晶君、迷惑掛けてごめんね？」

「いいよ、無事だったなら。それに約束したろ？君を」

「時間切れ《タイムアップ》だ」

「がふッ!？」

何かを言おうとした晶は、途中で追い着き背後に回ったシグナムに首を墮とされた。

力が抜けた体は地面に落ち、首はシグナムの手の中に収まる。

首の切断面と口（口部で息を吸い込んだり出したりしている所）

から晶は、血を吐き出していた。

「え?……きやああッ晶君!?!??」

「……シグナムさん」

「……カートリッジを補給する間だけ待たせてもらった」

自身の顔に落ちてきた血でなのはは、目の前の光景を現実と認識

し悲鳴をあげた。

一方、唾然とシグナムの名を口にした晶に彼女は、ぼつりと聞こえるか聞こえないか微妙な声量でそう呟くと彼の首を高く上げた。

そして、念話を送った。

『シャマル』

『……はい』

シャマルは、クラールヴィントが生み出した異次元空間の窓へと手を伸ばし

「ごめんなさい、晶君!!」

突き入れる。

目的はすぐに済んだ。

異次元の窓から引き抜いたシャマルの手には金属球が一つ、血や細胞一欠けらも付けずにきれいに抜き取られていたガイバーの制御金属球があった。

はやてとの約束も友人をも手に掛けたがこれで、あと一つ奴らの指示に従えばはやてを助けられる。

シグナムとシャマルは、そう思っただろう。
だが

『な、何だ!?!』

『シグナム!?!どうしたんですか!』

『深町の首が!』

まだ終わってはいなかった。

「あああッ」

異変は、突然だった。

制御金属球を抜き取られた晶は、痙攣を起こし始めその頭が徐々にその形を崩していくと共に肉感的な色へとその体を変貌していった。

強殖細胞の暴走である。

それを見たなのはシグナムには、何が起こっているのかわからない。

唯一、作戦前にレミング隊の隊長から聞かされたレナルド以外は。

「あああ!?! あゝ あゝ あゝ あゝ!」

「晶君、どうしたの!?!」

「クツ……は、離れない!?!」

苦しむように叫び声を上げている晶を心配そうに、不安そうに声を上げる。

シグナムの方も晶の尋常じゃない様子に手を離そうとするがすでにその手の平には捕殖が始まっていた。

しかも、シグナムの左腕のバリアジャケットの下は、ミミズが皮膚の下を進んでいくようにボコボコと膨らみ徐々に捕殖範囲が広がっていく。

シグナムは、自身の左腕の感覚が無くなってきている事と腕の中を何かが這い回る不快感を感じていた。

そして、それがもうすぐ体に到達しようとした時決断した。

「ああああああ ツグウツウウ!」

「きゃああああっ」

「自分で自分の腕を……斬った!?!」

シグナムは、レナルドの言葉通り捕殖されつつあった自らの左腕を直感でこのままだと危険だと感じ斬りおとしたのだ。

その時、出血を抑えるために刀身の炎で傷口を焼いたためその痛みは、想像を絶するものだろうに声を押し殺して見せる。

傍目には、気でも狂ったかのような行動になのはが悲鳴を上げるが、この場合それは正解だった。

少しでも遅かったら、体にも捕殖が進み切り離す事が出来なくなっていたからである。

一方斬りおとした腕は、すでに腕の全てを捕殖し終え新たな獲物を探して触手を伸ばし首無しのがイバーの体へと接触し、融合していた。

そして、また新たな獲物を本能のままに求め手に入れた腕を使って這い出す。

最も近くにいる獲物、なのはとレナルドへと。

「がああああッ」

「晶……君？」

「ダメだッ近づくんじやない！バリアを張るんだ！！」

なのはは、思わず手を差し出そうとするが出血で顔を青白くし何時意識を失うかわからないような容態のレナルドが必死に声をあげる。

「がああああ……な」

「どうしてですか！晶君、あんなに苦しんでるんですよ！！」

「違うんだ。もう……彼じゃない……」

「な……な……」

「何言ってるんですか!？」

「……なの……は……ちゃん」

「ほらッ私を呼んでるじゃないですか!」

「よく聞くんだ！彼は」

暴走した強殖細胞は、その醜い姿を晶の姿へ、うなり声を掠れているが彼の声に変えなのはの名を呼び始める。

レナルドは、今にも強殖生物に駆け寄っていきそうなのを引き止め作戦前に聞いた制御金属球を失ったガイバーがどうなるかを聞かせた。

「彼はそれを承知で囿になったんだ。君たちを危険な目に遭わせないために……」

「そんな！じゃあもう助けられないんですか!？」

「なののは`ち`ゃ`ん`」

なののはは、その事にショックを受けるがその間にも少しずつだが着実に彼女たちに近づいてくるガイバーの成れの果て、強殖生物。

「助ける方法はある……が……」

「が？」が”何ですか!？……あつ”

「……」

「意識が……ない」

「なののは`ち`ゃ`ん`」

「晶君……必ず助けるから……今はッ！」

レナルドは、晶を助ける方法を伝える前に意識を失ってしまった。

なののははそのことに呆然としまいが、強殖生物が今もなのはを誘き寄せる為か彼女の名前を呼び続けている。

なののはは、レナルドと強殖生物を交互に見た後、強殖生物に手向け最後に晶の名を呟き決断した。

「リリカルマジカル」
「なのはは、ちやん」
「守護する盾 風を纏まといて鋼と化せ すべてを阻む 祈りの壁 来たれ我が前に……」

なのはは、プロテクションを展開し、拒絶する。

だが、強殖生物は尚も諦めず、元の醜い姿に戻りプロテクションを叩いてきた。

一方左腕を失ったシグナムは、空中へと退避し他の騎士たちに念話を送っていた。

『……撤退する。ヴィータ、結界を『無理!』』

『黒スケのやつ以外にやりやがる。こいつをすぐにどうこうできねえよ!』

『我もヴィータの援護にまわれん』

『……どうしたら』

『使え』

『誰だ!』

『闇の書の色を使え。それしか在るまい』

『質問に答えろ!』

『お前たちに3つ目の命令を下す者だ』

『お前が……』

『そんなことよりも、ここで捕まっては主は助けられんぞ?』

『でも、アレは!』

『減ったページはまた蒐集すればいい……その後に私から命令を実行してもらうがな』

謎の男が念話に割り込んできたが、この男のいう事はもつともだつた。

ヴィータもザフィーラも手が離せずシグナムは負傷。

『………已む負えんか・・シヤマル』
『わかりました……』

局員たちに位置がばれるのも構わず潜んでいたビルの屋上でシヤマルは魔方阵を展開し詠唱に入った。

「夜天の書よ、守護者シヤマルが命じます。眼下の」

シグナムは、シヤマルの詠唱を聞きながら他の3人の足手まといにならないようにすぐに撤退を始める。

「敵を打ち砕く力を、今、ここに」

その時、ふと下を覗くと強殖生物に襲われているのが目に映ったがシグナムは黙殺した。

「……すまぬ」

「撃つて、破壊の雷！」

【Geschrieben】

つづく

未熟な喪失

リリカルガイバー 30話 未熟な喪失

シヤマルの詠唱に従い上空で渦巻いていた雲の中心、紫の魔力の塊から放たれる”破壊の雷”。

雷の力によつて強装結界が徐々に綻んでいく。

ザフィーラは、その混乱に乗じて撤退を開始した。

「高町たちを守つてやれ。アレの直撃を受けるのは危険だ」

「待ちなよザフィーラ!!」

「・・・・・・・・」

アルフにそれだけ言うとな彼女の静止を無視し飛び去っていく。

一瞬追おうかアルフは迷ったが、ザフィーラの忠告を聞きさつき

桃色の魔力光が見えた所へと急ぐ。

「あばよ、黒スケ!」

「待て!」

【Stinger Ray】

一方、ヴィータも撤退しようとするがいち早く立ち直ったクロノがそれを阻む。

ヴィータは、クロノが放った光弾を避けたり、グラーフアイゼンで弾いたりして凌いだ。

クロノもこれでやれるとは思つておらず足止め程度に考えていた。

「こつのお・・・うぜえぞ、黒スケ! 吼えるグラーフアイゼン!!」

【Ja・Explosion】

だが、しつこいクロノにキレたヴィータは、衝撃弾を生成しそれをグラーファイゼンで叩くことで閃光と音による瞬間的なスタン効果を発生させるアイゼンゲホイルを放った。

そして、クロノが視界を取り戻した頃には、すでにヴィータの姿は消えていた。

「がああああああ！！」

「今度は、何が起こっているの!？」

相変わらず強殖生物がプロテクションを叩いているが破れる様子はない。

だが、なのはは、そっちより落雷の音と共に今も結界を破壊しようとして猛威を振るっている破壊の雷に不安を隠せない。

そんな時だった。

「ギユ？」

「どっけえええええ！！」

「アルフさん！」

「!?!？」

強殖生物の困惑の声と共に金色の鎖、チェーンバインドが強殖生物に絡みつき、その端を持っていたアルフが強殖生物を放り投げた。すぐにアルフは、サークルプロテクションを張りなのはたちを守る体勢に入った時、ついに強装結界が崩壊し、魔力爆撃が彼女たちを襲った。

「!?!?!?!？」

だが、アルフのサークルプロテクションが3人をその力から守り難を逃れた。

また、クロノも自身で乗り越えた。

しかし、守りも無くこの力を受けたモノもいた。

ソレは

「ギユワアアアアッ!!」

強殖生物である。

強殖生物は、“破壊の雷”によって右半身を失い、残った左半身や頭もひどい状態になっているもののまだ生きていた。

だから強殖生物は、最も近くにいる滋養源のなのはたちに残った左腕を使つて匍匐前進するように這いずつて行く。

「あ……」

「チツアレを受けてまだ生きてるのかい!?ほんとにしぶといね」

「ああ、本当にしぶとい」

「クロノ君!」

アルフの口から出た愚痴に自力で“破壊の雷”を乗り切つたクロノが彼女に同意しながら強殖生物を遮る様になのはたちの前に空から降りてきた。

「クロノ、あいつはアタシが動きを封じとくから、早くそつちの局員を!!」

「ツわかつた、そつちは頼む!エイミイ、聞こえるか!!エイミイ!!」

『やつと繋「医療班を準備させてくれ、ここにいるレミング06が瀕死の重傷だ!!」ツ了解!!』

「だったら隠す事もないか・・・ガイバーは、晶は強殖細胞と額にあるコントロールメタルが無傷なら何度でも復活できる。だが、コントロールメタルを失った強殖細胞は暴走し殖装者を”食い”・・・ああなる」

そう言つて強殖生物を指差すクロノ。

なのははクロノの話から彼が何を言おうとしているか察する。

「ツじゃ、じゃあコントロールメタルがシグナムさんたちに盗られた今は」

「どうする事もできない・・・そして、晶からもしもの時のことを僕とアルフは頼まれている。強殖細胞を一片も残さずに消してくれと」

「そんな！？また・・・また私の所為で晶君が・・・」

「なのは・・・」

「な`の`は`ち`ゃ`ん`」
「ッ」

「アイツまたっ！！」

「アレが強殖生物の擬態能力か・・・」

強殖生物は、またも晶の姿（左上半身と顔だけの）に擬態して声を出し始める。

なのはは、晶が自分を責めているようで居た堪れない。

アルフは、そんななのはを見て怒りを露わにして言った。

「クロノ！アイツがまた妙な事する前に跡形も無く吹き飛ばしておくれよ！！」

「ああ」

「でも、跡形も無く吹き飛ばしちゃったら強殖細胞つがッ!？」

「それは大丈夫だよなのは。予め作戦前に強殖細胞を採取して極低

温保存してあるから、コントロールメタルを取り戻せば晶は戻ってくる」

「ほんとうなの？」

「ああッ!？」

「え？」

「なあ!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クロノがなのはから強殖生物に目を戻すとそこには、晶に擬態したもしくは本性を現した強殖生物でもないモノが代わりにチェーンバインドに縛られていた。

代わりに居たのは、ロングヘアのピンクの髪の裸の大学生ぐらいの女性だった。

ただ、普通と違う所があるとしたら左上半身と顔だけで生きている事。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うっそ!？」

「あれって・・・・・・・・シグナムさんの？」

「彼女の遺伝子情報マトリクスを元に擬態したのか」

晶の姿の効果がないと判断したのか強殖生物は、シグナムの姿へと擬態していた。

なのはとアルフはそのことに驚いているが、クロノはいたって冷静に分析する。

そして、クロノは再びデバイスを向けた。

【Blaze】

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグナムの姿をした強殖生物は、クロノを怯えたように見つめる。そうして、油断し近寄ってきた所を触手で捕殖する心積もりの強殖生物。

だが、クロノには通用しなかった。

「無駄だ。お前が何を狙っているか知っている僕は躊躇しない！」

【 Cannon 】

「グエツ!?グエアオオオ ！！」

強殖生物の姿と断末魔は、青い閃光に呑み込まれて消えていった。

シグナムたちのアジト（雑居ビル）

次元転送を繰り返して、追跡が無い事を確認してからシグナムは、アジトに戻ってきていた。

「……………これで、傷は塞がりましたけど。私の魔法では失った腕までは……………」

「構わん。戦えさえすれば問題ない」

腰に差した鞘からレヴァンティンを引き抜き素振りをし調子を見ながらシグナムは、シャマルにそう返した。

「……………それでシャマル。あいつ等今度は、何て言って来たんだよ？」

「やっぱり、また蒐集をして規定のページ以上になってからあの時、念話に割り込んできた人と引き合わせるそうです」

「そっか……………やっぱりそう都合よくはいかねえよな」

ヴィータは、シャマルの答えに落胆したように話すのだった。

強殖生物を吹き飛ばしてから数時間後。

今なのはは、アースラ艦内で会議に参加していた。

会議室のモニターには、なのはの記憶を元に作成されたヘルゼルの画像が映されている。

なのはもそのことで報告を行ったが、今は席に着き医療班からの報告を聞いていた。

「一命は取り留めましたが、今だ予断を許さない状態です・
・医療班からは以上です」

「次にブリッジから報告します。守護騎士たちへの追跡はまたも失敗。コントロールメタルに取り付けていた極小発信機は騎士達に発見されたのか途中で破壊されやはり失敗。現在、守護騎士達の行方と共に全力で探索していますが・・今だ発見できていません。こちらからは以上です」

エイミイは、そう言って席に着き、立ち代る様に別の人間が立ち報告が続けられていく。

そんな中なのはは、医療班の報告に安堵しながらもコントロールメタルの行方がわからないことに焦りを感じる。

そうしている間に全ての報告が終わっていた。

「のはさん・・なのはさん・・なのはさん!」

「あ!？すみませんリンディさん、考え事していて聞いてませんでしたッ」

「いいのよ、会議はもう終わったからお家の人に気づかれる前に一度お家に帰って休息をとりなさい」

「・・・はい」

「それにアルフさんはなのはさんに付いて行って上げてほしいの。フェイトさんにも協力してもらえないか頼んできてもらいたいし」

「あいよ」

「あと・・・なのはさん。あなたの申し出はこちらとしてはとてもうれしいわ・・・でも、一度休んでからゆっくり考えてみて・・・晶君が何を望んでいたか」

なのはの申し出。

それは、レイジングハートの修復が終わったらコントロールメタル奪還（シグナムたちの逮捕）に協力させて欲しいとの申し出だ。

4騎士とまともに渡り合える魔導師がクロノとアルフしかいないのでリンディとしては嬉しいものであったが、彼女はそう会議室から出て行くなのはの背中に言葉を送った。

「・・・・・・・・・・さて、会議を続けるわよ」

「はい・・・レミング08の死亡を確認しました。犯人はわかりませんが」

なのはは以外退させずに待っていた他の参加者たちは、リンディの言葉に

”会議は終わった”なのはにはそう言って帰宅させたリンディ。自分のために実は死者がすでに出ていること。

晶のことですでに相当な参っているなのはには聞かせられない内容でもあるからだが、リンディが彼女に言った事もこうした処置をした理由だった。

つづく

未熟な決意

なのはたちが会議をしている頃、地上の数時間前ヘルゼルグが死んだ辺りが見渡せる場所で息を殺し慎重に周囲を見渡している影があった。

「……管理局の連中やっと撤収したか」

カメレオンのような風貌の斥候獣化兵、ロツシュである。

「まさか、魔力爆撃をしてくるなんて……コレが無かったら死んでたぞ」

ロツシュは、茶色く変色した盾のような物を見た。

「ヘルゼルグの外殻の組織を培養して作った特別製の盾・用心のためだったか役に立ったな……それよりもうすぐ夜明けだ。日が顔を出す前に行くかッ！」

ロツシュは、その特徴的な目をぎよろぎよろと動かしてもう一度周囲を探つてから仲間がいる場所へと建物の屋根や屋上、地上を人に見られないように記録用カメラを片手に飛び移ったり走っていく。

そして、すぐに夜明け前の薄暗い中でその変色細胞を駆使し視認できなくなった。

リリカルガイバー 31話 未熟な決意

12月10日 早朝

「・・・おそらくそれは、”破壊の雷”だと思います」
「”破壊の雷”？随分物騒な名前ね。どんな効果があるのかわかるかしら？」

無限書庫で調査を続けていたユーノは、数時間前クロノが見たことをそのまま話すと強装結界を破った力の正体を口にした。
その名を聞いたリンディは、更に掘り下げて聞く。

「結界破壊の効果を持つ純粹魔力攻撃の広域攻撃魔法ですが、直撃を受けたら相当危険な魔法であることは過去の文献にも書かれています」

「・・・。」破壊の雷”の他にわかる事はないか、ユーノ？」
「そおだな・・・あ、確か闇の書が未完成の状態ではそれまで蒐集したページを大きく消耗させて発動するってあったよッだから、そう何度も使えるような魔法じゃないはず！」

クロノの問いにユーノは、これまで調べてきた”闇の書”に関する調査や書物から得た知識を探っていき該当した事を口にした。

「・・・なるほど。だったら次の奴らの行動も読めるな」
「？」

「どういうこと、クロノ君？」
「いいかエイミィ、守護騎士たちは晶を襲う前、魔導師を襲撃しリンカーコアの蒐集をしていた。だが、ここで”破壊の雷”によって大きくページを消耗した」

「あっそっか・・・そうしたら次にやることはその使っちゃったページの補充！」
「そういうこと」

エイミィは、クロノの説明の途中で合点がいき、説明を引き継ぐように言った。

それを聞いていたリンディは、すぐに指示を出す。

「エイミィ・これから24時間3交代で他の次元世界の監視をしてちょうだい」

「了解、艦長」

「ご苦労様、ユーノ君。あなたのおかげで捜査がやりやすくなったわ」

『あ、ありがとうございます、リンディ提督・・・あの・・・一つお願いが』

「何かしら？」

『なのはに』

同日

朝、目を覚ましリビングに集まってきた土郎たちを待っていたのは、真剣な顔をしたなのは。

「・・・お父さんたちに話さなきゃいけないことがあるの・・・」

そう暗い顔をしたなのはが口を開いて告げられたのは、魔法や管理局、ロストログアの事。

ユーノに出会ってから体験した事を全て話した。

その事について土郎達はすでに了承済みのことなのですぐに受け入れることができ、なぜなのはにその事を黙っていたかを説明すると共に土郎はなのはに詫げる。

だが、それでなのはが目を赤くし隈作って土郎たちが起きて来るのを待っている理由にはならず、桃子がその理由を尋ねると想定外のことを耳にした。

「晶君が……」

「……死んだだと？」

「うそ……」

「……そんな」

なのはが口にした事実。

それを聞いて土郎達は、口々に信じられないと言った様子だった。

その頃、テストロッサ家でもなのはと共に地上に戻ってきていたアルフから晶の死を伝えられていた。

「う……そ……そ……」

「そう……晶君らしいわね」

ショックを受けるフェイトと達観したようにそう口にするグレイシア。

反応は、それぞれだが動揺を隠せない。

とくにフェイトは、グレイシアに止められなければその場にいた事に、自分を助けたがために死んだ事になっていたということまでショックは一入だ。

また、そのために今のなのはの心中も正確に察せられた。

「……私も協力する……今度は私が晶を助けるの！」

「アタシもその事を頼むつもりだったけどさ……いいのかい、グレイシア？」

「……フェイト意思是固いのね？」

「ごめんなさい、母さん。でも、私にも責任の一端はあるから」

「……………はあ………あなたがわがまま言うなんて初めてだものね」

「え?」

「なのはちゃんには夕方になったらデバイスを取りに来るように連絡しておいて、フェイト」

グレイシアは、しばしそう口にしたフェイトを見つめていたがやがてため息をつき彼女に背を向けるとそう言った。

「母さん?」

「それまでに微調整を済ませて現段階での最高の状態にしておくから。それと今日は学校を休んでこれから備えてたくさん休んでおきなさい、フェイト」

「ありがとう母さん!」

そうしてフェイトは、グレイシアが管理局に関わる事を、危険な事に首を突っ込む事を許してくれたことに気づき彼女の背中に抱きついた。

そして夕方。

テストロッサ家に、レイジングハートを受け取るためのものが到着していた。

どうやらなのはも士郎達から許しを得られたようだ。

「いい2人とも。朝にも言ったけど微調整を済ませて最高の状態ではあるけど、2機ともフレームの強化が終わってないからフルドライブだけはしないようにね」

「あの………やったらどうなるんですか?」

「わからないわ。やったとたんどカントとあなたたち共々大爆発するかもしれないし、2人とも魔導師として再起不能なレベルのダメージを受けるかもしれないの。だから絶対に使わないでね?」

「はい／＼ん」

グレイシアは、もう一度念を押ししてからなのはたちにレイジングハートたちを渡す。

そして、なのはたちは受け取った自分のデバイスに声を掛けた。

「晶君を助けるために一緒にがんばろうねレイジングハート」

【All right, my master!!】

「晶を助けるのに力を貸して、バルディッシュ」

【Yes, sir!!】

フェイトの参入の一報はすでにアルフからアースラに伝えられており、発見しだいなのはたちに念話が送られる手筈になっていた。

夜

なのはとフェイトは、アースラに何か進展がないか聞きに来ていた。

「魔導師が襲撃されたって報告は、他のパトロール中の艦からも本局からも入ってないよ」

「そうですか・・・」

「昨日の今日だもんしょうがないよ、なのは」

「・・・そうだね、フェイトちゃん」

なのはは、今の時間の担当のランディに聞いた所そう返され落胆の色がやはり隠せない。

そんななのはをフェイトが慰めるがあまり効果があったとは思えなかった。

1 1 日 1 2 日 1 3 日 1 4 日
.

瞬く間に4日の時が過ぎる。

なのはとフェイトはその間、ただ待つのではなくアースラの訓練室で新しい力の練習に勤しむ日々を送る。

一方、シグナムたちが関与していると思われるリンカーコア持ちの大型生物ばかりが襲われるっという情報が入ってきていた。

それまで、魔導師への襲撃ばかりを警戒していたアースラだったが、この日からはそちらにも目を光らせることになる。

そして、さらに2日の時が経った。

1 2 月 1 6 日

「欠席は . . . 今日も深町君だけですな」

「 」

「さて、連絡事項ですが . . . 最近市内の小学生の女の子が何人も行方不明になっているそうです。習い事や塾などで皆さんも夜遅くな . . . 」

担任の教師はそう言って確認してから連絡事項を伝えていくが、なのはとフェイトの耳には、右から左へと聞き流されていた。

そして、一時限目の算数の授業中、彼女たちが待ちに待った念話が届いた。

『なのは、フェイト。守護騎士達を補足したすぐに来てくれ!!』

「!!!!」

クロノからの連絡を受けたなのはたちは、授業中にも関わらずぐに荷物を鞆に片付けると立ち上がり先生に言った。

「どうしたの、高町さん、テストロッサさん？」

「高町なのは」

「フェイト・テストロッサ」

「一身上の都合で早退します！」

「は？………ッ待ちなさい、高町さん、テストロッサさん！

！！」

教師の制止を無視し2人は、学校を飛び出す。

そして、人気の無い以前ジュエルシードの一つを見つけたことのある神社の境内に着くと2人はレイジングハートたちを取り出し両機の新しい名を高らかに口にした。

「レイジングハート・エクセリオン」

「バルディッシュ・アサルト」

「セーリット・アーリーアップ！」

つづく

未熟な言伝

吹き抜けの広い建物。

奥のほうからは、女性と思われる悲鳴が聞こえ、幼い悲鳴も聞こえてくる。

もちろん戦闘時でもないので皆、獣化していないものの、その悲鳴をBGMに筋トレをしている者や読書に耽る者など様々だ。

なぜなら任務もほぼ終わり後は、人質を来る時まで保管しておくだけの日々のため、各々好きな事をして暇を潰している。

そんな中には、賭け事に勤しむ者たちも当然でてくる。

「俺はフルハウスだ」

「ちっワンペア」

「俺もだ」

「俺はツーペア」

「へっへっへ、俺の勝ちだな！」

勝負に勝った男、ロツシュが机の上の掛け金を自分の所に持つてくる。

そんな中、次のゲームをしようとカードを切り配り始めた時、ロツシュに声を掛ける者がいた。

「ロツシュ」

「ボスも入りますか？」

「いや私はいい。それよりお前はコレを持って明日、本部に戻れ」

「突然どうしたんですか、ボス。予定では、あの嬢ちゃんを猫たちに引き渡したら全員で撤収じゃなかったんですか？」

ロツシュは、困惑気味にザンクルスに聞き返す。

それにザンクルスも苦い物を噛んだような顔で答えた。

「それがな．．．科学者連中がヘルゼルグの記録とガイバーの体を早く持ってこいとせつついてきてな．．．」

「．．．なるほど。でも、腕だけですか？何だったらコントロールメタルも「ダメだ」何故ですか？」

「万が一コントロールメタルと腕が接触すればガイバーが蘇ってしまふからな。そこでコントロールメタルは、ここで出来る範囲の調査をしておいて、我々が撤収する時に持ち帰る事になったのだ。その腕は、それまで科学者共を黙らせ

ておくための物だ」

「そういうことですか．．．っという訳で、俺はこれで降りるぜ」

「おいおい勝ち逃げかよ！」

「しゃーねーだろ？撤収命令が出たんだからよ」

ロツシユは、ザンクルスが差し出すアタッシュケースを受け取り、さつき勝った分の金を持ち他のメンバーにそう言っただけで荷造りのためその場を離れていった。

そして、翌日ロツシユは、ミッドチルダへ小型の次元空間航行船で向かった。

リリカルガイバー 32話 未熟な言伝

地球時間で12月16日 9時14分

砂漠が視界いっぱい広がるある次元世界の空を1人翔る彼女は、自らに土をつけた先ほどの戦闘を思い出しながら誰に聞かせるわけ

でもなく呟く。

「……まだ慣れんな。どうしても左腕があるものとして動いてしまっ」

反省しながら左側を見る。

そこには、有るべきものが無く騎士服の上着の左袖が風に揺らされていた。

「しかし、さっきのでやっど1ペーッ!？」

彼女は、前方の人影に気づき急停止する。

そして、彼女の行く手を阻むように待っていた小さな人影、高町なのはが口を開いた。

「……シグナムさんやっど会えました」

「高町か」

転送直前

「フェイトちゃん、私にシグナムさんの相手をさせて」

「え……でも、クロスレンジが苦手なのはだとシグナムには」

次元転送直前、アースラの転送ポートの前でシグナムの所に送られる予定のフェイトになのはがお願いをしていた。

「わかってるよ。でも、あの人は私が決着をつけたいの」

「でも……」

「大丈夫、今のあの人は片腕だよ？前みたいには戦えないよ。それにレイジングハートもパワーアップしたんだから、何とかなるよ」

「……クロノからも何か言つてよッ」

「……だが、なのはの言う通り、剣の騎士は片腕を失い戦力が低下しているのも事実だしな……」

「はいっストップ!」

「艦長」「リンディさん」「

議論が平行線のまま進まないと判断したリンディは、手を叩いてそれを打ち切りなのはに言葉をかける。

「なのはさん。あなたは どうして彼女と決着をつけたいって思ったのかしら?」

「……私の所為で晶君がああなったから私の手で……」

「そう……でもフェイトさんが どうして反対してるか、わかってる?あなたが心配だからよ?あなたはこうと決めたら平気で無茶をするからなのよ」

「そうなんだ……ありがとう、フェイトちゃん」

「なのは……」

「でも、ごめんね……私はシグナムさんの前に立たなきゃいけないの。私の手で晶君を取り戻したいし、なんでこんな事をしたのかシグナムさんたちの口から直接聞きたいから」

「はあ~~~~~……仕方ないわね」

リンディは、長いため息を付くと、ユーノから頼まれたことを実行した。

「晶は自分を助けるために無茶したり怪我をしたら、喜ばずにきつと怒ると思うよ、なのは」

「え?」

「これはユーノ君からなのはさんが無茶しそうな時に伝えて欲しいって言われてたのよ」

「確かに、晶なら怒りそう」

「フェイトちゃん・・・」

「それになのはさんには、私たちがとやかく言うより晶君がどう反応するか想像させた方が効き目があるって言ってたわね」

「ユーノ君・・・」

なのはは、ユーノの言伝をかみ締める。

そして、もう一度考えてからリンディたちに自分の気持ちを伝えた。

「・・・わかりました、無茶はしません。だから、シグナムさんとは私にやらせてください！」

「・・・言っておくけど、援軍を期待しているならダメよ？あなたたちが3騎士の相手をするからクロノと武装局員たちには隠れている湖の騎士を探すことになっているんだから」

「わかってます。いざとなったら逃げます。だからお願いしませすッ
！！」

なのはは、リンディに深々と頭を下げて頼み込む。

リンディは、しばらくその姿を見続けやがて口を開いた。

「・・・もし、こちらが危険だと判断したらすぐに強制的にこちらに転送するわ、これはフェイトさんにも言えることだけだ」

「じゃあっ！」

「ええ、大怪我しない程度にがんばってください、なのはさん」

「ありがとうございます！」

「あと！なのはさんが先日、遭遇した晶君の世界にいた獣化兵のような存在にも気をつけてね。彼らにはどうも魔法が効きづらいようだから」

最後に、そうヘルゼルグのことを注意するように伝えるリンディ。そして、現在、なのはとシグナムは空で睨み合っていた。

「用件は……コントロールメタルだな？」

「そうです、晶君を返してください」

「残念だが、すでにアレは我らの手を離れた」

「でも、何処にあるか知っているんですよね？」

もう自分たちは持っていないつと言うシグナムになのはは、祈るような気持ちで聞き返した。

「……」

「答えてください!!」

「……お前の持っている杖は飾りではないだろうッ！」

「ッ！」

シグナムは、なのはの問いに答えることは無く、腰に差したレヴアンティンに手を掛けすばやくなのはに接近すると居合い抜きをするように斬りかかる。

だが、なのははそれをレイジングハートの柄で防ぐ事に成功していた。

「ほう……テストロッサとの模擬戦で目が養われたようだな」

なのはとシグナムの戦いが始まった頃、ヴィータの元に向かったフェイトも戦っていた。

【Plasma Lancer】

「プラズマランサー、ファイアッ！」

「ハッいくら早くたってそんな直線軌道の攻撃当たるかよ!!」

プラズマランサーを難なく回避したヴィータ。
だが、これでプラズマランサーから逃れられたわけではなかった。

「ターン！」

「ッ追ってくる！？だったらッ」

【Schwalbfliegen】

「オラア！！！」

同数の鉄球を打ち出しプラズマランサーを相殺する。

だが、そこにフェイトがアサルトフォームのバルディッシュを振り下ろしてきた。

「ヤアアッ！」

「こんっのおおお！！！」

ヴィータもそれに応戦してグラーフアイゼンを振り上げた。

また別の場所では、アルフとザフィーラも戦っている。

それらの様子を映したモニターをリンディたちは見守っていた。

「いい、エイミー。いつでもなのはさんたちを戻せるようにスタンバイしておいて」

「わかってます、艦長。なのはちゃんたちに何かあったら晶君に会わせる顔ありませんから」

「そうね。今まで失敗続きだものね……」

そつえば、こちらの動きをまるで知ってるみたいだったわ……まさか情報が漏れてたの？でも、発信機のことやなのはさんへの護衛、そして強装結界の範囲などのこと全てを知っていたのは……

……

リンディは、思わずブリッジクルーたちを探るようになってしまった。

その動きを不審に思いエイミーが声を掛けた。

「艦長？」

「あ、うんうんなんでもないわ・・・」

いけない、いけない。クルーを疑うなんて・・・疲れてるのかしらね、私も

「クロノそっちはあなたに任せるわ」

『了解』

「さ、あなたたちはなのはさんたちに集中して！」

「・・・はい」「・・・」

リンディの内心の不安を振り払い指示を出していった。

そして、リンディからシャマル搜索の全てを任されたクロノは、通信を切ってからまもなく彼女を発見した。

つづく

未熟な貪欲

はやてが眠っている調製槽を残念そう物欲しそうに眺める一人の男がいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何をしている、ブロイズ」

「ああ、ボスですか」

ブロイズ（グレゴールノバリエーションの1つ。俊敏に富代わりに筋力増幅率が1.3倍となっているが、ラチモスに次ぐ調製成功率のため現在脚光を受けている）と呼ばれた男は、ザンクルスに会釈すると思いつて考えていたことを伝えた。

「・・・ボス、この子で「ダメだ」・・・最後まで言わせてくださいよ」

「聞かなくてもわかる。お前の事だ、どうせはやて嬢で遊ばせてくれつと言っただろ？」

「・・・・・・・・ええダメですかね？」

「ダメだ。お前に渡したら壊すだろ？」

「さあ？それはこの子しだいでしょ」

「無理だな。今までも何人壊しているんだ、言ってみろ」

「え〜と・・・・・・・・ひい、ふう、みい・・・・・・・・」

ブロイズは、指折りしながら数え何でもないかのように答えた。

「11人ですかね」

「そうだ、しかも1週間でっだ。そんなお前にまだ役目があるはやて嬢を渡せるか」

「そんな、殺生な。折角の上玉なのに・・・」

「・・・仕方ない・・・いくら攫って来てもいいから我慢しろ。ただし、証拠を残すな」

「へえーい」

ブロイズは名残惜しそうにはやてを視姦をし始めた。
そんな彼を見ながらザンクルスは惜しむように呟く。

「この趣味さえなければ、ブロイズは優秀な人材なのだが・・・」

「

リリカルガイバー 33話 未熟な貪欲

「はあ~~~~・・・2日ぶりにさっぱりしたわ。今なら風呂好きだったシグナムの気持ちわかるかもあ」

オアシスの泉の畔で誰に聞かせるわけでもなくシヤマルは呟いた。

コントロールメタル強奪後から管理局の搜索を撤くために、蒐集をするために地球へは帰らず今まで野宿ばかりしていた。

そのため、ともに風呂には入れることも稀だったので、一足先についていたシヤマルはちょうどいい泉を見つけ尚且つこんな辺境に人が来ることは無いだろうと水浴びをした。

その名残で髪がまだ少し湿っている。

「ヴィータちゃんやシグナムもきつと水浴びするわね。ザフィーラには悪いけど・・・それにしてもここに集合って念話をしてから結構経つのにみんな遅いわね」

「・・・3人は来ない」

「!?!?管理局ッ」

「ああ、管理局所属執務官クロノ・ハラウオンだ。湖の騎士シヤマル、君をロストロギア不正使用及び民間協力者の殺害行為、公務執行妨害その他諸々の容疑で逮捕する！」

「そ、そう・・・もう見つかったのね」

クロノに彼のデバイス、S2Uを頭に突きつけられ動けず、この状況を脱する方法を必死に考えるシヤマル。

そんな彼女に罪状を述べ捕まえようとするクロノ。

このままならシヤマルは確保される。

そんな時、第3者の乱入がシヤマルを救う。

「抵抗はす「それは困るな」る・・・ッ!?!」

「今の声・・・あの時の」

もうダメだ。

そう思った時シヤマルは、破壊の雷を使つきっかけになった男の声を聞く。

一方でクロノは、言葉にうまく出来ずに呻きのような声がしだいに驚愕の声へと変わっていく。

「あ・・・ああああ!?!」

「な、何が起きてるのッ」

「もう動いても大丈夫だぞ」

「・・・」

背後で何か起きているそれしか判らなかつたシヤマルに男が声を掛ける。

その声に従い、ゆっくりと振り向くシヤマルが見たのは、自身の魔法”旅の鏡”のようにして胸から腕を生やしたクロノとそれを為している彼の後ろに立っている仮面の男だった。

そして、仮面の男は、握っていたモノを彼女に見せ命じた。

「……さあ奪え」

そんなことが起こっている頃

「アクセルシューター」

【Acceler Shooter】
「シューーッッ」

なのはから放たれたデイベインシューターの応用型の誘導操作弾。それらはなのはの制御に従いホーミングレーザーのようにシグナムに襲い掛かる。

【Schlangeform】
「はあああ!!」

対するシグナムは、シュランゲフォルムによる空間攻撃に撃つて出る。

2人の戦いは、シグナムがクロスレンジに持ち込むか、なのはが砲撃魔法を撃つ時間が取れるロングレンジか、距離の取り合いになっている。

そして、先に放った双方の魔法は、レヴァンティンの刀身を掻い潜りシグナムを襲おうとする弾体がシュランゲフォルムの空間攻撃が防ぎ二人の視界を白煙で塞いだ。

「ッ何処!?!?!いた!もう一度!!」
【Acceler Shooter】

白煙の中に動く影を見つけそこにアクセルシューターを撃ち込む。

そして、それが命中するのが見えた。

「やった!!!」

【Master】

「うん、お願いレイジングハート」

【All right・Buster mode・Drive
ignition】

「いくよッ」

【Load cartridge】

「デバイスッ」

【Buster・Extension】

なのはが畳み掛けるように放った止めの一撃を影は、為す術も無く直撃した。

その光景は、当然なのはからも確認できた。

「……………やりすぎちゃったかな？」

【There is no problem《問題ありませんよ》
Master^{マスター}】

「そうかな？」

【It is so.《そうですよ》】

「そう…だよね」

なのはの不安そうな問いにレイジングハートは、問題ないと言って彼女を気遣う。

だが、事態は、そのレイジングハートによって一変した。

【!Master!!】

「え？」

「はああああああ!!!!」

「ッ!？」

下からのレヴァンティンの斬撃。

それによってレイジングハートは切断、なのは自身のバリアジャケットも左脇下から右肩へとダメージを受けた。

「ちっ浅かったか」

「シグナムさん……じゃあさっきのはいい……」
「私の上着だ」

そうシグナムだとなのはたちが思ったのは、彼女の脱いだ上着だった。

それをワザとなのはに発見させ油断を誘い、奇襲を掛けたのだが寸での所でレイジングハートが接近してくるシグナムに気づきなのはに警告したおかげで先の一撃で沈まずに済んだ。

だが、なのはを救った当のレイジングハートは自身の修復も忘れ自責の念に囚われていた。

自分が偽者だと気づけば、なのはを気遣うためとはいえしゃべっていた事で反応が少し遅れ彼女を傷つけてしまったことに。

しかし、そんなレイジングハートを開放したのもなのはだった。

「ありがとう、レイジングハート。あなたのおかげで助かったよ」

【Sorry……Recovery】

なのはは、シグナムから距離を取りながらレイジングハートへの感謝を述べる。

それに対しレイジングハートは、一言謝ってから自身を修復した。だが、彼女たちが出来たのは、そこまでだった。

「え?」

「……………」

「きゃああああ」

「貴様ッ」

仮面の男がクロノの時と同様になのはからリンカーコアを摘出したからだった。

また、フェイトたちの方もまた仮面の男が邪魔をする前ののはたちと同様、いやフェイトが押していた。

【Plasma Lancer】

「クッ」

【Panzerhinderis】

ヴィータは、フェイトのフォトンランサーの発展型、プラズマランサーを全方位を多面体で構成された障壁で覆って防御しようとするヴィータ。

ただ、避けても追尾して来ることはすでに身を持って知っていた。だから、移動も防御も捨てて防御に専念する。

おかげで、フォトンランサーは障壁を越えることは無くその表面で止まっている。

「……………ブレイク」

「ッ!？」

だが、フェイトの一言でそれらすべてが爆発しヴィータの障壁を破壊してみせる。

「今度こそ!」

【Load cartridge・Haken form】

フェイトは、白煙に突っ込んでいく。
そして、ヴィータに肉薄、バルディツシユを振り下ろそうとした時、彼から警告が発せられた。

【Sir!】

「ッー!」

フェイトも反応するがそれよりも早く、いつの間にか取り囲んでいた拘束輪がいくつも彼女の動きを封じていった。

そして、それを為した人物もフェイトの目の前に現れた。

「ッ誰!?!」

「………ッ」

「あ………うあ……ああああ!?!?!」

「お前は……」

「ヴィータちゃん」

「シャマル!どうしたんだこんなところに」

「私のところにも管理局の執務官が来たの。それをこの人が助けてくれたの。それにあの時の念話の人」

「!あの時のやつか!」

「さあ鉄槌の騎士と湖の騎士よ、奪うがいい」

仮面の男は、ヴィータとシャマルにフェイトの金色のリンカーコアを差し出した。

「な、なんで同じ男が2人も同時に!?!」

「エイミイ何してるのッ2人を戻して!?!」

「あ……はいッ」

アースラでこの状況を見ていたエイミイは、驚き指が止まっていたがリンディの声で正気に戻り急いで転送シークエンスを動かしていく。

だが、途中でその動きを止めてしまった。

「ああ！艦長、ダメです。今戻したら2人にどんな影響が出るか！」

「そんな………アルフさんに救援を「それもダメです！あつちはまだ戦闘中！」ツだったらクロノは！？」

「クロノ君も応答がありません！そんな他の武装局員達も！」

「また……また私たちはッ！！！」

クロノ達をモニターせずになのはたちに集中していたため、今になって事態に気づいたリンディたち。

リンディの口からは後悔と苦悩が漏れる。

だが、すぐに自分たち出来ることへと動き出した。

「すぐにあつちへの医療班の派遣準備を！」

「はい！」

「それに本局内の医療施設の手配をして！早く！！！」

「了解！！！」

「………お願い死なないで」

すべての指示を出し終えたリンディに後出来た事は、なのはたちの無事を祈る事だった。

つづく

未熟な現状（前書き）

直接的な表記は無いですが一応R15にしました。

未熟な現状

肉と肉が激しくぶつかり合う音に何かの水音、それに荒い息遣いが奥の方から聞こえてくる。

今、そこではブロイズが攫ってきた少女に何かをしているようだ。そして、しばらくするとブロイズが奥から戻ってきた。

「……ありゃあ、もう持ちそうにないな」

「よっ」

「あ？ああ、マルカルトか。仕事はいいのかよ？」

マルカルト（森林地帯の戦闘に主眼を置いた獣化兵）は、コントロールメタルの調査を任されている一人だ。

そして、ブロイズの同好の友でもある。

「今は機械の結果待ちだ。にしてもお前はいいよなお楽しみで……俺にやりたぜ」

「だったら、今がダメになったら攫ってくるつもりなの奴の片割れお前にやるのか？生意気そうな奴と大人しそうな奴が2人なんだが。この前街でぶらついてた時見つけたんだよ」

「ほお……それは楽しみだな」

2人は、その時のことを思い浮かべだらしのない笑みを浮かべていた。

リリカルガイバー 34話 未熟な現状

12月16日 12時07分 時空管理局本局 医療施設

「先生、みんなの容態はどうですか？」

「全員、命に別状はありません。武装局員の方達も、民間協力者の子達も、あなたのご子息も。ただ……」

「ただ何ですか!？」

リンディは、なのはたちを診た医師の勿体付けた言い方に何か重大な障害でもでたのかと声を荒げてしまう。

その様子に医師は、慌ててリンディにして続きを話す。

「落ち着いてください。ただリンカーコアが異常なほど小さくなっているので、しばらくは魔法が使えないでしょうっと言おうとしただけです」

「……それだけですか？」

「ええ」

「はあ……。だったらあんな勿体付けた様な言い方しないでください! てつきり私は……」

「配慮が足りず申し訳ありません」

リンディの言葉を聞き顧みて自分に落ち度があることを認め、頭を下げ詫びる。

「……話は変わりますがレナルド・ローズさんについてなのですが」

「!あれから何か、変化があつたんですか？」

「いえ、未だに意識は戻っていません。それに戻ったとしてもアレだけの出血量だったので何らかの後遺症が心配されます」

「そうですね……」

「それでは私はこれで」

「ありがとうございました」

その場を離れて行った医師にリンディは頭を下げ見送った。
そして、1人になったリンディに声を掛ける女性がいた。

「リンディ」

「・・・レテイ来てくれたの？」

「ええ・・・いろいろ大変だったみたいね、アースラ組みの戦力が全滅って聞いたわ。クロノ君は無事なの？」

レテイ・ロウラン。

リンディの同僚であり、友人の女性である。

「無事よ。魔法がしばらく使えないけどね。他のみんなも同じ」

「そうなの・・・ところで上も下も大慌てよ？武装局員一個中隊とAAA+ランクの執務官に高ランクの民間協力者の魔導師が2人が全員やられたって」

「レテイ、1つ訂正よ。高ランクじゃなくて高ランク相当の子達よ。ちゃんと計測してないから」

また、レテイは本局運用部に勤務している関係でアースラの現状を聞いてやってきたようだった。

「・・・それで何処が私たちの後を引き継いでくれるの？」

「5番艦ライオネルよ。今急ピッチで”アルカンシエル”を換装中。でも、あなたたちの管轄なのは変わらないみたいよ？」

「え？でも、私たちは・・・」

「そうなんだけどね・・・どうも上は、あなたたちにやらせたいみたい。それにユーノ君だったかしら？あの子の調査で一度蒐集された魔導師からはもう出来ないってことも理由みたい」

「つまり私たちなら、もう蒐集される心配は無いから前線で面と向かって対峙できるってことね」

「ええ。だからライオネルの人たちは、あなたたちが復帰するまでの騎士達の監視と蒐集の妨害が主任務よ。まあいざとなったら彼らが事態の収拾に動くけどね」

「そう・・・あっちの人たちには苦勞かけるわね。そうだレティ、私はここから離れられないから代わりに『私たちの失態で、ご迷惑をおかけして申し訳ありません』ってライオネルの艦長に言っておいてもらえないかしら？」

「わかったわ。そう伝えておく」

17時37分 クロノの病室

「・・・・・・・・・・」

目を覚ましたクロノは、気を失う前に言われたことを思い返していた。

「ま・・・待て！」

「・・・・・・・・・・」

「グッ」

「時を待て。時機に何が正しかったかわかる」

「ということだ？」

「・・・・・・・・今に気にするな」

仮面の男は、倒れたまま彼の足首を掴んで引き止めるクロノの手を振りほどくと振り返らずにそう言ってシヤマルの後を追い飛んでいった。

クロノは、どういう意味なのか今も考えている。

そんな時だ。

彼の病室をノックする音が聞こえた。

「……どうぞ」

「うむ。お邪魔するよ」

「ッグレーム提督！」

「……大事なさそうで何よりだ、クロノ」

グレームは、しばしクロノの様子を伺ってからそう言った。

「君が”闇の書”に蒐集されたと聞いて肝を冷やしたよ」

「ご心配をお掛けして申し訳ありません……」

「何、気にすることはない。報告は聞いている。獣化兵だったかな？
なのは君を襲ったのは」

「はい」

「その上更に騎士達に味方する勢力が、しかも君を後ろから不意打ちできるほどの手足れが現れるなど誰も想定しておらんかったのだ。仕方ない」

「励ましの言葉、ありがとうございます。回復したら必ず彼女たちもろとも逮捕して見せます！」

「そうか……だが無理だけはするなよ？」

「ええ」

17時41分 なのはの病室

今この部屋には、ユーノがお見舞いに来ていた。

「や、なのは。久しぶり」

「うん、久しぶりだね、ユーノ君」

「……お父さんたちどうだった？」

「すごく心配してたよ」

「そっか悪い事しちゃったな」

ユーノは、さっきまで地球の士郎たちへなのはが病院に搬送された事を伝えに行っていた。

グレイシアの所にはアルフが行ったが、やはり青い顔をしていたようだとなのはに話した。

「それで今はフェイトの病室に行ってるよ、アルフは」

「そうなんだ」

「ユーノ君、あの伝言聞いたよ？」

「・・・やっぱり無茶しようとしたんだ」

「にははは、ユーノ君にはお見通しだったんだね」

「そりゃあ、なのはの行動を間近で見て来たからね」

面会時間いっぱいまでユーノとなのはは、会話を楽しんだ。

途中、フェイトを車椅子に乗せてやって来たアルフも混ぜて。

21時43分 ある次元世界の洞窟

外は、嵐に見舞われている。

そこで今日の宿をここと決めたシグナムたち。

そして、子供の体であるヴィータは、すでに眠ってしまいシャマルの膝を枕にしている。

だが、シャマル、シグナム、ザフィーラの3人はまだ眠らず今後の事を話していた。

「シャマル、あとのくらいだ？」

「今日、なのはちゃんたちを蒐集して大分進んだからあと・・・12ページって所かな」

「そうか・・・だが、今日のようなことも起こるまい。それに今まで以上に困難になるだろうな。管理局も警戒してくるからな」

「そうだな・・・それにあの者たちにも注意せねば。シグナム、戦

闘中とはいえお前でも気づかなかつたのだろうか？」

「奴らが行動を起こすまで気づけなかつた」

「とにかく、ページを揃えた時あの人たちが私たちに何を命じるつもりか……それが判ればいいんですけど」

「……夜天の書が目的か？」

ザフィーラの口から出た疑問。

だが、すぐにシグナムが否定する。

「だが、完成しておらず、主以外には使用できないものを手に入れてどうする」

「……もしかして、はやてちゃんを洗脳して使うつもり？でもそれだつたら私たちに完成を命じるはずだし……何より”最低でも591ページ”、何でこんな中途半端な量を指定したのかも気になるし……」

シャマルは、難しい顔でそう言った。

そして、最後にシグナムが纏めに入った。

「……奴らがどのような事を企んでいようと我らに出来ることは、主を取り戻すまで奴らの言いなりになるしかない」

「……こんな時、晶君たちがいてくれれば何か打開策が思いついたかも」

「言うな、シャマル。深町は私たちの手で。高町たちともそれで敵対しているのだ。過ぎた時はもう元には戻せん」

「そうね、ごめんなさいシグナム、参謀役の私が弱音を吐いちゃつて」

「気にするな。不安な事がこれだけあるのだ。そういう時もある。だがヴィータの前では見せるなよ」

「ええ、この子が一番不安でしょうから」

シャマルは、ヴィータの頭を優しく撫でる。
すると、むず痒そうにヴィータは寝言を口にした。

「にゅ〜はやくすぐってえよ・・・」

「そうか、主の夢を見ているのか」

「ヴィータちゃん・・・」

「・・・」

3人は、ヴィータの幸せそうな顔を眺めていた。

つづく

未熟な現状（後書き）

ライオネルというネーミングは、思いつきです。

最初はただ5番艦と書いていたのですが名前があったほうがいいのか
なっと思ったのでつけました。

未熟な悲鳴

12月18日 地球 6時43分 海鳴市桜台林道

ここには、フェイトとなのは、そして子犬モードのアルフの3人が集まっていた。

その他には、レイジングハートやバルディッシュも指南役としてなのはとフェイトを見守っている。

「……ん……ッ……」
「……」

フェイトとなのはは、両手を胸の前にして目を瞑り集中している。何をしているのか？

それはリンカーコア破損後のリハビリ兼ねた魔法の練習だった。少しでも早く回復したなのはとフェイトは、早朝人影の無いここで3人で集まって時間ぎりぎりまで練習した後、学校に歩いて登校するのがこの2日の日常の始まりである。

アルフは、一応2人の護衛としてなのはたち下にいる。だから彼女も今2人の様子を固唾を呑んで見守っていた。

「……はあ~~~~」

「今日もダメだね」

【Thanks for your effort, master】
《お疲れ様です、マスター》

しかし、状態は芳しくないようだった。

アースラの武装局員達も本局で回復を待っているが、なのはやフェイト、彼らと同じように回復を待っているクロノたちほどの回復

は見られていない。

ちなみにユーノが海鳴市に帰るなのはたちの指南役として随行するという話も出たがそのユーノが襲われかねないということでアルフが

12月19日 15時21分 ある次元世界

「……………」

「くっ待たしても！」

武装局員たちは蒐集対象の大型生物を潰した後、すぐにシグナムの攻撃を交わしつつ互いにカバーし合い彼女に捕まらないように、尚且つ何時現れるかわからない仮面の男たちを警戒しながら撤退していった。

シグナムは、今日3度目になるその姿を憎々しげに見送るしかなかった。

「これでは、ヴィータたちも同じような状況なのだろうな。そうすると昨日の量から推測して……………3人合わせてやっと1ページ弱というところか」

シグナムは、武装局員たちに妨害されながらも得たこの日の成果を推測してその少なさに落胆する。

「だが、17日にかなり稼げたおかげで大分進んでいたから、残り……………」

ライオネルがアースラから引き継いでシグナムたちの搜索を始めたのが16日の昼過ぎからだだったが、行方を眩ましていた彼女たち

を発見出来たのは翌日の夕方であり、その間にかなりの数を蒐集できたようだった。

「約2ページといったところか・・・このままのペースなら21日に既定ページに到達・・・仮面の男たちの命令にもよるが最短でその日で終わる。もうまもなく辛抱しててください、主」

リリカルガイバー 35話 未熟な悲鳴

12月20日 14時53分

アリアは、一人でザンクルスたちの潜んでいる港の貸し倉庫に訪れていた。

なぜ、彼女がここに訪れたか？

それは、闇の書の状況を伝え、時が近い事を、そしてはやての引渡し要求をしにきたからだ。

「 というわけでそろそろ彼女をそこから出して私たちに引き渡してほしい。あとは薬で眠らせておけばいいから」

「・・・いいでしょう。マルカルト頼みます」

「ウィーツス・・・調製液、排出開始つと」

ザンクルスの命令を聞き、彼の後ろに控えていた以前ブロイズと話していた男、マルカルトが調製槽に備え付けられていた機器を弄り槽内を満たしていた液の排出を開始させる。

その様子を眺めながらザンクルは、ふと気になったことを尋ねた。

「・・・ところで関係ない話なのですが・・・もう1人の方はど

うしたのですか？」

「ロツテは、お父様の護衛よ」
「なるほど」

なぜ、そんなことを彼女たちがしたかというと、あっちにいる（本局に潜んでいる）ザンクルスの仲間がグレアムを暗殺するかもと用心したからだ。

ザンクルスは、その後排出が終わるまでの間アリアに世間話を一方的にして暇を潰す。

一方でアリアは、そんな彼を無視してはやてを眺めていた。

そして、調製槽から出されたはやてをバスタオルで包みこの倉庫を去っていった。

「……………この世界での任務も終わりましたし、あとはコントロールメタルの輸送兼護衛をしながら撤収しますか」

「ボス…それって明日の夕方、いやっ昼まで延ばせませんか？他の奴らが遊んでる間、オレは一生懸命に働いてたんですよ！少しぐらい遊ばしてくださいよ」

「ふむ…確かにマルカルトの言う事にも一理ありますね……………調製槽の管理やコントロールメタルの検査などで忙しかったですし……………いいでしょう」

「マジすか！？ありがとうございます！！」

「礼には及びません。ここの爆破準備や機材の片付けなどを考えるとそのくらい掛かりますからね」

「……………それとブロイズを貸してくれませんか？あいつが今度攫おうとしてた子達が欲しいんで」

「そういえば、あなたと彼は同好でしたね…………………………仕方がありませんね」

「重ね重ね、ありがとうございます！！」

マルカルトは、深々とザンクルスに頭を下げると急いでプロイズに知らせにいった。

「やれやれ、仕方が無いやつですね……さて私は遊んでる奴らの尻を叩いて、ゆっくりと準備しますかね、ゆっくりと」

ザンクルスは、そんなことを言いながらのんびりと動き出した。

12月21日 7時41分 バニングス家 門前

「じゃあ、行ってくるわ、鮫島。迎えはいつもの時間と場所をお願い」

「わかりました、お嬢様。いつてらしゃいませ」

執事兼運転手の鮫島に見送られてアリサは、通学バスの停留所に向かう。

家屋に屋根の上に身を伏せてその様子を伺う獣化したマルカルトの姿があった。

プロイズの調べで夜は鮫島の迎えや人目が多い所にいるため攫うのは困難だが、朝の登校時にだけ独りになる瞬間があることわかっていたためそこを狙うことにしたのだ。

もちろん、鮫島もアリサが入学した頃にその事を心配してそこまで送る事を進言したが彼女の「大丈夫よ」という一言でそれ以上は言えず、代わりに防犯ブザーやスタンガンのような防犯グッズを渡して持ち歩いてもらっている。

一方、プロイズは、彼女の友人、月村すずかを攫いに行っている。この場にはいない。

そして、鮫島や辺りに人影も無い事を確認したマルカルトは、アリサの背後に一気に飛び降り彼女に抵抗の暇も与えずに気絶させる事に成功し、車を隠しておいた場所に獣化兵の身体能力を利用して

すばやく移動し獣化を解くとそこに用意しておいた服に着替え、旅行用の大きなトランクケースの中にアリスを入れ、何食わぬ顔で乗ってきた車を運転し同じくすずかを攫う事に成功したプロイズを乗せ貸し倉庫まで戻っていった。

もちろん、遺留品を残さず、目撃情報も出さずにだった。

同日 9時31分

「・・・リ・・・や・・・！」

「・・・」

「アリス・・・ん！」

「ん・・・うるさいわよ・・・」

「アリスちゃん！」

「わかったわよ、起きるわよ・・・ってすずか？というかここ何処よ！？」

「よかった、アリスちゃん目が覚めて」

アリスが目を覚ますと自分を起こす親友のすずかを目にし、そしてすぐに見覚えの無い場所というかアニメやSF映画の宇宙船のような内装の部屋で大きなベットのの上に寝かされている事に驚く。

彼女たちは知る由も無いが、ここはザンクルスたちが海鳴市の沖に沈めて海中に隠しておいた彼らの次元航行船の一室。

撤退のため、用意しておいた隣の空き倉庫へと昨晚の内にガルバラン他数名の潜水能力を備えた獣化兵たちが乗ってきたもの。

そして、倉庫内では土気への影響と撤退準備でごたごたしてるためこっちに連れ込んだマルカルトたち。

「私にもわからないの。さっき目を覚ましたらここにいて、隣アリスちゃんがいたから」

「そうなんだ……え〜と私は朝バスの停留……？そこから記憶が無いわね」

「アリサちゃんも？私も確かに家を出て歩いてただけど……」

「……」

そこで2人は同時に気づいた、自分たちが誘拐されたのではと。そして、それは正解だった。

2人が目を覚ました事に気づいたマルカルトたちが部屋へと入ってきたからだ。

「ッ」

「おお目が覚めたみたいだね、お譲ちゃんたち」

「だ、誰よ、あんた達!？」

内心怯えながらもアリサは、目に見えて怯えているはずかを背中に庇いマルカルトとブロイズに食って掛かった。

だが、彼らはそんなアリサを無視する。

「時間も無い事だし、とりあえず味見してみようぜ？あとは帰りながらじっくりとっな」

「そうすっか」

「質問に答えなさいよ!」

アリサが強く声を張り上げるが全くの無視、いや彼らの視線は2人に注がれていた。

そして、マルカルトはアリサへブロイズはすずかへと近づいていく。

「ッ」

「コラ逃げんなよ。どーせ逃げられねえんだからよお！」

2人は、部屋の中を壁伝いに逃げていくが逃げ切れるわけも無い。そして、マルカルトに掴まりそうになったはずかをアリサが突き飛ばした。

「はずか！」

「へへへ」

「アリサちゃん!？」

「おっと君はとりあえず彼女がどうなるか見てようか？オレと」
「ひっ！」

だが、突き飛ばされたはずかも結局、ブロイズに肩を掴まれた。そして、彼女の前でアリサへの仕打ちが始まった。

「とりあえず、この邪魔なのを取ろうか」

「な、何すきやあああああ！」

「アリサちゃん!!!」

アリサの服の前をマルカルトが引き裂く。

彼女の悲鳴が響く。

だがその後、なぜか艦が小さく揺れたと思った時、異常が起きた事を知らせる赤灯と警報音が艦内を染め上げた。

つづく

未熟な悲鳴（後書き）

契約社員の仕事が決まりました。

明後日、初出社なのですがたぶん疲れ果てて今までのようなペースで書く余裕が無いと思うので真に勝手ながら週1だった投稿を次はとりあえず2週間後の土日のどちらかに（今後もっと遅くなるかも？）したいと思います。

ごめんなさい。

ただ、このまま未完で放置するつもりはありません。

未熟の終わり

『……ッ!!!』

マタ……キコエタ

『ア……んッ!!!』

デモ……ドウセ……マエミタイニ……スグニキ……コエナ……
ク……ナル

何処かに彷徨う彼に聞こえてきた”音”。

以前から幾度も聞こえては、瞬く間に消えていったここでの自分が発するモノ以外の唯一の”音”。

ソレニ……カンガエ……ルノガ……オ……ッ
クウダ

そして、だんだんと彼の意識は、再び眠りにつこうと薄れていく。
だが、そんな彼を揺り動かす”音”が耳に入ってきた。

『誰……アリサ……を助……て!!』

ツシッテル?……ソノナマエ……ソシテ……コノコエ……

彼は、どこかで聞いた覚えがあるようなその”音”に興味を覚え
睡魔に身を任せるのを止め耳を澄ませる。

すると、2つの悪意と怯える少女たちの思念を感じた。

『私に触るな!!』

『アリサちゃんにひどいことしないで!!』

……アアソウダ、オモイダセタ。コノコエハ、アリサチャントス
ズカチャンダ……コマッテル……イカナキヤ

彼は、少女たちの声を聞き歩みだした。

上も下も、右も左もわからず体も無い彼だったが、とにかく意識は前へ前へと進んでいこうとする。

だが、進めど進めど闇が続くばかりで本当に進んでいるのか疑問を感じてしまう。

その一方で事態は刻々と変化をしていく。

このアリサの声は、その

『きゃあああ!?!』

アリサチャンノヒメイツ! ?クソツカラダダ!カラダサエアレバ!

!!!

そう彼が強く願った時、始めて”音以外”の変化が現れた。

ヒカリ?・・・モシカシテアソコニイケバ!

とにかく、他に当ての無い彼は、そこに向かって走った。

光に近づくとつれて彼を行かせまいとする力がどんどん彼の進むスピードを遅くしていく。

それでも、懸命に、それこそ這いずってでも進もうとする意思の元進み続ける。

そして、辿り着き光の中へと身を投じた彼は、「これで助けに行ける」そんな確信めいていたものを感じた。

だから、彼女たちの切実な願いを薄れゆく意識の中で聞いた彼はアリサたちに聞こえるか判らなかったがそう力強く応える。

『誰か助けて!!!』

イマたスけニイクから!!!

リリカルガイバー 36話 未熟の終わり

12月21日 9時36分 次元航行船内 居住区画

最初は、音が遠く振動も弱かったがそれもどんどん強くなってきている。

「……………ゴオオオオン

「お、おいこれって!?!」

「……………ゴオオオオン

「……………近づいてきてるのか?」

「……………ゴオオオオオン

状況がわからないマルカルトは、アリサを突き飛ばしこの部屋の端末でブリッジに繋いだ。

ブロイズもすずかを手放しマルカルトに続く。

「おいつ何が起きてる!?!この音とさつきから続いているこの揺れは!?!」

「……………ゴオオオオン

ブリッジクルーの男は、困惑気味に答える。

その間にも近くなってきており、揺れもどんどん強くなっている。

「し、侵入者です!」

「……………ゴオオオオン

「はあ!?!お前ら何見てたんだ!?!」

「……………ゴオオオン

「ち、違います!ちゃんと見ていました!ですが直接艦内の第7区

画に転移してきたんです！！しかも、どんどん壁や隔壁を破壊してそちらに向かっています」

・・・ゴオンッ

「だったら、近くの戦闘員を送り込んで迎撃しろ！」

「もうっ「ドツツゴオン」」

「っ「ツ！？」」

壁を破壊する音と衝撃、そしてその破片がこの部屋を包んだ。

またモニターは、壁の破片で壊れてしまったようだ。

そして、新しく出来た入り口からゆっくりとした動作で腰をかがめて入ってきたのは、3メートルを越す巨人だった。

「・・・」

「ツ！？」

巨人は、真っ先に部屋の隅で破けた服の前を引っ張って露わになっていた胸を隠すアリサとドサクサでブロイズから逃れられ彼女に寄り添っていたさすがに真っ先に視線を向けた。

巨人が開けた穴側の隅だったため瓦礫はどれも彼女たちには当たっていない。

もしかしたら、当たらないように開ける場所を考慮したのかもしれないが、アリサとすずかは無傷で巨人に怯えている。

そんな2人に巨人は、のっそりと二人の前に片膝をつきその大きな手をアリサへと伸ばす。

「ッ！やめて！！」

「・・・」

「！？」

すずかの制止に反応して巨人は、彼女へとその方向を変える。

それに対して目をギュッと閉じながらもアリサから離れようとはしないですか。

そして、その手は彼女へと到達した。

「ッ……………え？」

だが、すずかに与えられたの優しい衝撃を少し頭に受けただけだった。

巨人は、アリサを守ろうとした彼女を労わる様に頭に手を乗せ撫でる。

そうしてから、すずかに許しを得るようにジッと彼女を見つめた。

「……………」

「……………もしかして……………何もしない？」

「……………(コク)」

すずかはふと頭に浮かんだ事を口にする巨人が返事をするようにコクつと頷く。

そして、巨人が改めてアリサへと手を伸ばす。

「ひう!？」

「大丈夫だよ、アリサちゃん。この巨人さんは何もしないよ」

「……………(コク)」

「わかっ……………たわよ」

先ほどマルカルトたちに乱暴された事とその巨体に恐怖を感じるアリサ。

だが、すずかの言葉とそれを肯定する彼に何とか返事した。

「あの・・・アリサちゃんが怖がらないようにゆっくりと動いてね？」

「(コク)・・・」
「!??~~~~~」

さすがが彼に一応念を押してから、彼は今一度手を伸ばす。しかし、やはり恐怖を感じるのか声を上げるのを必死に我慢したもののやはり強張ってしまうアリサ。

彼はその事に反応して動きを止めてしまう。

「い、いいから何かしたいなら早くしなさいよ!!」

「・・・」

「プツ・・・なんだ・・・アンタそんなことしたかったの？」

アリサからの許しも得てやっと彼は彼女へと触れる事ができた。

その手が行ったのは、それまで頬を流れていたアリサの涙を人差し指で拭ってやることだった。

アリサの顔には、こんな事をしたいがためにあんなに慎重になっていた彼に笑みが浮かぶ。

その時、そんな彼女たちとは反対側の壁があった辺りで瓦礫が崩れた。

「ッ!?!」

「ゲホツゲホツあ~~~~クソツ・・・やりやがったな!!」

「!!?!」

「ぶ、無事だったか、マルカルト」

「おう、お前もみたいだな。獣化が何とか間に合ってよかったぜ」

アリサたちは、そこから現れた彼らの姿に驚く。

そこから現れたのは、獣化して何とか無事だったマルカルトたち。彼らは、互いの無事を確認しあう。

しかし巨人だけは、それに気づいたものの意に介さず立ち上がり瓦礫と衝撃で破壊された先ほどまで彼女たちが寝かされていたベットからシーツのなるべく大きい切れ端をアリサに被せる。

「あ……ありがとってそうじゃないでしょうッあいつら!？」

「無視してんじゃねえ!!」

「ッ!？」

「……………」

マルカルトの強い言葉に巨人は、その声に身を竦ませるアリサたちを庇うように彼らの前に立ちはだかる。

彼らは、軽い怪我はしていたもののまだ戦闘に支障をきたしている様子は無い。

「ま、待て!落ち着け、マルカルト!!」

「アア!何、ぶるってんだよ!?相手は、1人だぞ!!」

ブロイズの一見、臆したような言葉にマルカルトは、荒い言葉で返答する。

だが、ブロイズも生き残るために引かない。

「いつものお前らしくないぞ、奴は隔壁も破壊してきたんだぞ!アレの耐久性は、お前のほうが詳しいだろ!!」

「ッ……ああそうだった、すまん。楽しみをいいところで邪魔された上に、怪我までさせられて頭に血が昇っちゃった」

「落ち着いたのなら、いい」

ブロイズの指摘にやっと興奮が治まり口調も落ち着き、事態を把

握するマルカルト。

隔壁は、獣化兵が暴れてもそう簡単に破壊できる代物ではない。さらに、破壊には1.5倍の筋力増幅率を誇るグレゴールでも苦勞する。

つまり、俊敏性を上げたため筋力増幅率がグレゴール以下の自分やブロイズは、それを易々と破壊してきた目の前の巨人にまともに遣り合っても勝ち目は無いということだ。

従って、次に彼らが起こすことは 逃げることだった。

「ブリッジの奴らがいい加減この辺りに獣化兵を送ってきてるはずだ、そこまで撤退するぞ。何あの巨体だ、そんなに早く動けないはず……」

「ああ、反撃はそれからだな」

「そうだ。いくぞ……1……2の……3!!!」

「！」

「あ」「

「……」

マルカルトたちは、巨人から目を離さず小声で打ち合わせると一斉に背を向けて走り出す。

そして、部屋の壁をプチ破り彼らはここから脱出。

巨人は、追わなかった

「ちょっとあいつ等逃げるわよ！」

「……」

「……もしかして、大丈夫なの？」

「(コク)」

「どっしして……」

アリサの心配そうに言うが巨人に焦った様子が無い。

そのことに疑問を感じる彼女。

一方巨人の頭部では、左右4つの金属球が動いていた。

そして、彼から何かか唸る音がするとすずかたちが思った時、彼が頭をある方向に首を振ったときその額が光ったのを見た。

一方、マルカルトたちは、通路の曲がり角を巧みに使い巨人からの何らかの遠距離攻撃を警戒しながらブリッジ方面に逃げていた。

「……………追ってこないな」

「ああ、やっぱりとろいんだ……………お！味」

「あ」

予想通り味方の獣化兵を見つけた時、マルカルトたちの意識は永遠に失われた。

それは、派遣されてきた獣化兵も同じだった。

なぜなら、壁を貫いてきた超高出力の赤外線レーザーになぎ払われ頭部や体を失ったからだ。

つづく

未熟の終わり（後書き）

アリサたちのピンチに颯爽と現れた巨人は何者か！？

・・・・・・まあ、みなさんにはわかりますよね？

ところで、仕事で体だすごく痛いです。

なので今後もこのペースで投稿していきなっと思いましたが、無理だと感じたらまた報告して遅くします。

あと、サブタイトルに”終わり”って着いてますけどまだまだ完結しませんので、今後もよろしくお願いします。

アットウ

外で機材及び爆破準備の指揮を執っていたザンクルスは、侵入者の報告を船外で聞いた。

そして、外にいた部下たちを集め突入準備を整えていたとき彼が目にしたのは、中型ながらリンディが艦長を務める巡航Ⅰ級8番艦、アースラをも凌ぐ装甲を内側から貫き何かを薙ぎ払うかのような軌跡を辿るレーザーだった。

「あの光は！総員獣化だ！！」

「……………！！……………」

それを巨人が放ったものと判断したザンクルスは、部下たちに指示し自らも獣化する。

次々に本性を顕わにして衣服が体の膨張に耐えられず破れていく。

そして、瞬く間に異形の姿をして常人を超える力を持つ獣化兵部隊へと変貌した。

「生体熱線砲装備型は、直ちにチャージを始めろ！！筋力増幅型は砲丸を持って！飛翔の……………」

ザンクルスが次々に指示を出し、部下達もそれに従い動く。

その頃には、ステルス機能が停止した船体が海鳴市にその姿を見せ、所々から煙が上っている。

幸いリーダージャマーは貸し倉庫周辺に設置しているためアースラには、まだ気づかれていないものの、すでに隠密どころではない。そして、すべての指示を出し終えた頃、彼らの中型次元航行船が……………輪切りにされた。

「なあ！？」

「……………ッ！！！？」「……………」

普段冷静なザンクルスも中型といえど十分巨大なその船体をまさか輪切りにするとは思っておらずその光景に驚きを隠せない。

それは、部下達も同じだ。

だが、すぐにザンクルスは、冷静さを取り戻す。

「ハッ！何をうるたえている！！これだけの攻撃、たとえ防御されたとしてもダメージは免れない！そこで、私の高周波ブレードによる一撃を加えればどんな者も倒せる！！わかつたら気を引き締める！私の合図と共に一斉攻撃だ！！」

「……………りよ、了解！！」「……………」

そして、すぐにザンクルスの声が高周波ブレードとなった腕を振り下ろすと共に響き渡った。

「うてえええええッ！！！」

リリカルガイバー 37話 アットウ

アリサ、すずかは目の前で起こった出来事に啞然と見ていた。

それは、巨人の後を追う部屋を出てしばらくしてから起きた。

巨人は、まるで何処かへと導くかのように先導する。

だが、歩幅が違ったためどうしても遅れてしまうアリサとすずか。

それを彼は、立ち止まり2人が追いつくのを待っていた。

そして、それが8回目を迎えた時、アリサがとうとう痺れを切らした。

「……………」

「ねえ！さっきから迷い無く進んでるけどこっちで本当にあってるの？」

「ア、アリサちゃん……………」

誘拐され暴行されかけた恐怖を乗り越えたのか、または忘れようとしているのか、はたまた自分たちを助けてくれた巨人と共にいることからの安心感からかアリサにいつものような強気な態度が出てくる。

あの部屋を出てすぐの時とは大違いだった。

すずかは、そんなアリサに安堵するものもうちよつと状況を見ようよつと思うのだった。

「ッ！」

「な、何よ……………」

アリサの言葉のためか急に立ち止まり振り返る巨人。

腰が若干引き気味だが強がるアリサ。

だが、巨人が反応を示したのは、彼女にへではなかった。

巨人が彼女たちを急ぎ跨ぐと4条の閃光が3人を襲う。

「「きやつ！？」」

「ッ」

「やったか！？」

「俺たちのレーザーは、厚さ30センチのコンクリート壁を1秒で貫通する威力だ。いくら隔壁をブチ破る力を持ってても防御する暇が無ければ……………」

「でもアイツ……………こっちに反応していたよな？」

「……………」

「がはっは、心配するな！生きていたら俺様が直々に止めを刺してやる」

閃光の照射元。

そこには、片膝を地面に立て両肩の膨らみの中に普段隠されている生体熱線砲を露わにしアリサたち諸共巨人を攻撃した2体のヴァモアとそれを指揮していたガルバランの3人がいた。

ヴァモアたちは報告を聞いて不安そうだが、ガルバランは自身の力を熟知しているため楽観的だった。

あれなら、例え防御が間に合っても負傷ぐらいはしているはず。そうすれば、グレゴールを超える筋力増幅率を誇る自分の力と体内で生成される液体窒素を使えば倒せるっと。

「さああつてもう一度コントロールメタルを抉ってやるか」

ガルバランが巨人たちのいた場所に歩きながらそんなことを言った。

どうやら彼は、巨人の額にある金属球とブリッジからの報告を聞いて正体を推測できたようだ。

だが、そんなガルバランの両側を光が通り過ぎる。

「お、お前はッお、おいもう一度だ！」

「……………」

「おい！！もう一度生体レーザー……………へっ？……………」

ガルバランがその光を辿ると自分の進行方向に巨人とその後ろに隠れている無傷のアリサたちを見た。

それを見るとすぐにヴァモアたちに再攻撃を指示するが返事が無い。

不審に思いもう一度指示を口にしながら振り返るとヴァモアたちが頭を失い倒れている。

そして、さっきの光が彼らをそうしたのだと気づく。

そこでふと光が通っていった場所、自らの両側を見るとそこにあつて当たり前の物つまり肘から下が消えていた。

「ぎゃああ俺の、俺の腕がアアアッ」

ガルバランは、腕を振り回し喚き散らす。

巨人は遠距離攻撃の出来るヴァモアを先に潰したただけなのだが、ちょうどガルバランの腕がその射線にあつたための偶然の産物だった。

「か、壁が解けてる……」

「私たちが庇って……ッあんた大丈夫なの!？」

「……」

巨人は、問題ないと首を振る。

現にヴァモアたちのレーザーの直撃を受け止めてもビクともして
いない。

それでも心配そうに2人がしているのは、レーザーの威力が
すずかの言つたように目に見えているからだろう。

「クソクソツよくもツよくもやりやがったなアアアア!」

「きゃッ」

「あ、あいつがあんなになつても……」

「ッ」

ガルバランは、痛みを堪え怒りに任せて突撃を開始した。

巨人は、アリサとすずかを後ろに下がらせ右拳を握り締める。

だが、その様子を見たガルバランもただ闇雲に突っ込んでくるだけのバカでは無い。

「
「!?」
」

ガルバランは、走りながら巨人に水鉄砲のように口から大量の液体窒素を吹きかけた。

結果、液体窒素の当たった巨人は、凍りついてしまい動きが止まってしまう。

「砕け散れ!!」

ガルバランは更に加速する。

だが、彼の思惑通りにならなかった。

確かに、巨人は凍ったもののそれは体の芯まででは無かったからだ。

つまり、このままガルバランが突撃しても砕ける事も無く、そしてそれを許す相手でも無いという事だ。

「ッ」

「なあ!？」

「ッ」

「.....」

巨人が体を少し強く動かすだけで表面を凍結させていた氷が砕ける。

そして、そのまま彼はまだ拳が届く距離にいたっていないのにガルバランへと拳を振るった。

それから起きた光景を巨人の後ろから見ていたアリサとすずかは、

そして、着地したら2人は、それぞれ巨人に抗議していたが彼が何か反応を示す前に大声が響いた。

その後、彼らはすさまじい音と光に包まれるもののそれだけだった。

「な、何これ？」

「光の膜なのかな？」

「……………」

巨人の各所にある球体が強く輝き彼女たちをバリアーで守っているからだ。

そして、ザンクルスたちの攻撃は2分もの間続けられたが、アリサとすずかにはもつと長い時間のように感じただろう。

「お、終わった？」

「……………見たいね」

「ッ　ッ」

「「きや!?!」」

周りがもくもくと立ち上がる煙に包まれているものの音も光もそしてバリアーも消えたそう思った矢先、巨人の額から空へとレーザーが数発放たれさらにアリサとすずかは酷い耳鳴りを襲う。

「何なのよこの耳鳴りは!?!」

「あ、アリサちゃん……………ま、前を見て……………」

「どうしたのよ、すず……………か」

アリサが、すずかの声に従い前を見るとさつき落ちてきたときに見たときにはあった倉庫群が消え遠くにビルが見えるだけ後は何も無かった。

いや、よく見ると20メートルほど先に長細い何かが2つ落ちて
いる。

「な、何が起きたの？」

「わかんないよお」

アリサたちには、何が起きたかわからなかったがすぐに別のこと
を考えなければいけなくなった。

遠くからどんだん近づいてくる甲高い複数のサイレンの音が聞こ
えてきたのだ。

「この音って消防車やパトカーだよ！」

「やばッこの状況どう説明すればいいのよ。それにこいつのことも・

・・・」

「あ、どうしようアリサちゃん」

「私に聞かれても・・・とにかくここを離れましょ！」

「うんってえ？」

「ちよ、今遊んでる暇ないのよおおッ」

「またあああああ！？」

「・・・」

巨人は、再び2人を抱えると再び空へと飛び何処かへと向かう。
2人の悲鳴を響かせて。

つづく

メザマシ

巨人とアリサたち3人が飛び去って数分もしないうちに真っ先に甲高いサイレンの音を響かせ消防車が到着した。

だが、そこに広がっている光景を見て隊員たちは、呆然とするしかなかった。

「何だコレは……まるでオカルトじゃないか」

彼の目には、まさに常軌を逸した光景にだった。

本来あるはずの倉庫群の大部分がきれいに消え、端の方では一部切り取られたようになっていいる倉庫もある。

また、海の方に目を向ければまず目に入るのが海に沈むUFO?と思しき残骸と元は倉庫群の海側の通路だった場所にまるで爆撃を受けたようにも見える跡とその周辺に散乱している大量の砲丸、そして……

「隊長！これを見てください！！」

「どうしたッ生存者か!？」

「違います。でも、関係者の遺留品だと思えます」

「何？おいおいコレ、剣じゃないか」

「そうですけどコレ、『手』にも見えませんか？」

「……見えなくも無いな」

消防隊員の1人に隊長が見せられたのは、きれいに更地にされた場所に唯一残されていた棒状の物、ザンクルスの高周波ブレードだった。

巨人の攻撃を同周波数で振動していたため、主は分子の塵になったが高周波ブレードだけは破壊されなかったのだった。

だが、たった3人に対して過剰とも言えるほどの攻撃はその後2分間続く。

「……………攻撃止め！」

そして、頃合を見てザンクルスが中止命令を出し、ピタッと攻撃が止む。

だが、粉塵がまだ彼らの姿を隠し先の攻撃がどれほどの効果を及ぼしているのかも分からない。

また、ザンクルスが止めを刺すためにも姿を目視しなければそれも叶わず粉塵が薄れ姿が少しでも見えるのを待つことになった。

「……………歯痒いな、あちらからもこちらの正確な位置っ!？」

その時、粉塵の中からその上空で旋回していた飛行型たちがレーザーで正確に撃ち落された。

ザンクルスがその事に驚きながらもすぐに攻撃再開を指示しようとした時、聞きなれた音が聞こえた。

「この」

その音は、彼の武器である高周波ブレードが振動している音に似ていた。

だが、その音を耳にし認識したのが最後の思考だった。

なぜなら、その時にはすでに彼とその部下たちの体は、破壊されたからだった。

唯一、原形を保っていたのは、攻撃方法が違うものの振動を使うという共通点のある高周波ブレードである。

しかし、その主であるザンクルスの体は破壊され分子の塵にされてしまっていてはそれも何の意味も無かった。

12月21日 9時53分

アリサとすずかを抱えて数十秒で巨人は高度を下げある場所で彼女たちを下ろした。

「ちよつとここって……」

「……」

「私の家だよ、ここ……」

「何でアンタがここを知ってるの……は？」

「どうしたの、アリ……きゃあああああ!？」

そうここは、月村家の庭だった。

その事に疑問を感じ巨人を見るが、そこで目にしたモノにアリサは思考が停止、そんな彼女に疑問を感じずかも振り返ると悲鳴を上げる。

理由は、至極簡単なものだ。

そこに知らないでも誰かに似ているような青年がさっきまでいた巨人の代わりに全裸で立っていたからだ。

「あわわわわわ」

「……っちょ、アンタ誰よっていつか何で裸!？」

「……」

すずかは目の前の光景に両手で目を隠しているものの混乱し、アリサはショックから立ち直ると彼に問いたさすが返事は無い。

なぜなら意識が無い相手に何を言っても反応するはずが無いからだった。

そして、そんな状態で長く立っていられるはずもなく青年が、2

人にぐらつと倒れてこんで来た。

その動きがアリサには、格好もそうだが襲ってきたように思えたのだろう。

先のマルカルトと重なりあの時の恐怖がぶり返し悲鳴が上げる。すずかも彼女の悲鳴に指と指の間からそくつと覗くと倒れこんでくる青年を目にしたが反応できず二人そろって彼に押し倒された。

「い、いやああああー!!」

「え? きゃああああ!」

「.....」

「いや、放して!」

「落ちついて、アリサちゃん。ん、どいてください!」

「.....」

アリサはパニックで青年の体の下でじたばたし、すずかも両手で押しのけようとするが彼女たちのその小さな体では彼の体を持ち上げることは叶わない。

そんな時、すずかの耳に聞きなれた、そして3時間弱ぶりの声が聞こえた。

「すずかお嬢様!」

「すずか!」

「ファリン、ノエル、お姉ちゃん!」

「ッ! やりなさい、ノエル!」

「はい!! お嬢様から離れなさい、この悪漢!」

そして、ノエルが青年を投げ飛ばしたのだった。

12月21日 17時42分

「・・・・・・・・」

月村邸の一室、そこにすずかとアリサを押し倒したストリートキ
ンいや青年が寝かされている。

そのベットの隣には、すずかとアリサがイスに座り彼が目を覚ま
すのを待っていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・

・・
つ

もう待てない!!」

「え？アリサちゃん？」

「いい加減起きろこのスカタン!!!」

「ちよ」

「ぐぎよっ!?!」

アリサは突然立ち上がりジャンプし、すずかが止める暇も無くベ
ットに眠る彼の腹に全体重を乗せて肘を叩き込んだ。

当然、受けた本人は、カエルが潰されたような声を上げ腹を押さ
え悶絶する。

「アリサちゃん!いくらなんでも寝てる相手にそれは」

「いいのよ、別にこいつは怪我や病気で寝てるわけじゃなくてただ
気を失ってただけなんだから」

「大丈夫？」

「ゲホッゲホッあ、ありがとう、すずかちゃん」

すずかは、青年の背中を心配そうに擦っていると少しよくなったのか彼がそうお礼を言った。

「私の名前……」

「すずかの名前をッあの話本当みたいね」

「？何言ってるのアリサちゃん？というか酷いじゃないかこの仕打ちは！俺何かした？！」

「一人称まで変わってるわ、こいつ」

「うん」

「しかも、まだ自分で気づいてないし」

「だから、何の……？声がいつもより低くないか？風邪でも引いたのか俺？ん？俺？……元に戻ってる……！！」

青年は、やっとアリサたちが言っていた自分の変化に疑問を感じ、ふと視界に入った鏡を覗くとそこにはいつもと違う、でもこちらに来てから見なくなって久しい元の高校生の体に戻った深町晶がそこに写っていた。

「晶君……」

「晶……でいいのよね、あんた」

「えっと分かるの俺のこと、アリサちゃんとすずかちゃん」

「ええ、話はアンタが目を覚ますまでの6時間の間に忍さんやなのはの所の人たちに聞いたわ。まあ、信じられなかったけどね」

「うん……でも、ノエルがDNA検査したら晶君のと完全に一致したって言ってたし、さっきも私の名前を言い当ててたから」

「そっか……ってアレから！12月9日からどのくら

い経ってるの！？2人の姿から・・・半年ぐらい」

「なにぼけた事言ってるの？今日は12月21日よ？あんた休んでる間に日にちも数えられなくなったの？」

「21日・・・12日間か、俺がやられてから・・・そういえばなのはちゃんやフェイトちゃんはどうしたの？」

晶は、アリサの答えにそれほど時間が経っていないという事に安堵するがなのはたちの姿が無い事に疑問を感じ質問する。

すると、アリサは土郎たちから聞いたなのはたちの今の近況を話した。

「あの2人なら、今管理局とかいうところで何かを探すのを手伝ってるみたいよ」

「・・・それはまずいな。たぶんなのはちゃんは俺のことで少なからず責任とか感じてるだろうからシグナムさんたちにどう当たるか・・・」

アリサたちに土郎たちは実際に何を探しているのかまで話さなかったようだが晶には彼女の言葉で大体状況を把握したのはがどういう心境でいるのか少しは予想できた。

「・・・ねえ、2人とも外の様子が何かおかしいよ!？」

今まで会話に参加していなかったすずかが窓の外を指差しながら慌てて告げた。

つづく

カイホウ

リリカルガイバー 39話 カイホウ

12月21日 9時47分

「どうなんだよ、シヤマル！」

「慌てないで、ヴィータちゃん。今数えてるから……475・
・476……478……」

シヤマルは、ヴィータに急かされながらも正確に、そして出来る限りすばやく数えていく。

その様子をシグナムとザフィーラは、休みながら見ている。

4人は、昨日から一睡もせず蒐集に励みつい先ほどこの場所に集合した。

そのため、直接的な戦闘能力を持たないシヤマル以外は、砂や埃で汚れ騎士服にも損傷が見られる。

「……589……590……591ツうん、規定数を満たしてる。それにあと1、5にページぐらい余裕あるからあの仮面の人達も文句無い筈」

「よっしゃー！！あとちよつとではやてに会える！さっさとあいつらに連絡しようぜ、シグナム」

「ダメだ。あせる気持ちは私にも痛いほど分かるが、今は休め」

「何言ってるんだ！もうすぐなんだぜ！！」

「だからこそだ。奴らが何を言い出すか予想できんだ、万全の体調で望まねば」

「そんなもん気合と根性で「主を悲しませたいのか？」ッ」

今まで黙っていたザフィーラがヴィータを諭すように口を挿んだ。

「確かに、無茶をすればどうにかなるかもしれん……。だが、それで怪我や最悪、我らの内誰かが死ぬような事があつたら主がどう思うか考えてみる」

「……………」

「それにシグナムは左腕を失い、我等は深町を手に掛けた。腕に関しては隠しようもないが『主を救う際にザンクルスとか言っていた敵にやられた』と言えば悲しまれるだろうがそれ以外言いようが無いから仕方が無いだろう……。だが、深町に関して主に知られぬわけにもいかぬ、もし知れば主は……………」

ザフィーラはそこで言葉を切る。

3人にもはやてがどう思うかは想像に容易いことだ。

自分を救うために4人が友達を殺した、なんて事を知ればはやては自責の念と悲しみで彼らが好きな笑っている彼女を見れなくなるからだった。

「…………幸いといつてはなんだが、我等は主を連れてあの街から姿を消す。深町のことを知っている者は居ない地で隠れ住めば主が知ることは無い」

「そうだ……。つたな。管理局に居場所を知られた以上、この件が終わればあの街には二度と訪れることは無いだろうな」

「ああ」

「そうでしたね」

ザフィーラに言われてその事を思い出す3人。

その脳裏には、海鳴市で出会った人々が過ぎった。

シグナムには、非常勤講師をしていた剣道場の教え子や師範代たち。

「グイータは、ゲートボール仲間の老人会の”じいいちゃん”と”ばあちゃん”たち。」

「シヤマルは、井戸端会議をする近所の主婦たちや買い物先でよく会う桃子やグレイシアなどの友人たち。」

「そして、最後に4人共通のフェイト、なのは、晶のことが過ぎっていった。」

同日 17時03分

「それではお父様行って参ります」

「うむ。くれぐれも気をつけてな」

「はい」

シグナムたちから連絡が入ったリーゼたちは、その姿をシグナムたちに味方したのはたちを邪魔をしていた仮面の戦士に変え、バスローブを羽織ったはやてを担いで海鳴市へと次元転送していった。

17時27分 海鳴市 ビル屋上

「リーゼたちは、先にこの場所に到着していたシグナムたちと向かい合うように屋上へと降り立った。」

「「「「はやて！／主！／はやてちゃん！」「」」」」

「さあ、確認する。闇の書を見せる」

「何故主がこの場にいる？」

「何、お前達も久しぶりに主の顔を見ればモチベーションが上がり

これからやる事にも気合が入るだろうと我々からのサプライズだ。
さあ見せる」

「……………わかった」

シグナムは、リーゼたちの言い分に納得したものの何故か嫌な予感がしてならなかった。

だが、それを振り払い言われたとおりに夜天の書を渡す。

「……………518……………519……………520……………

521……………522……………確かに規定ページを超えている」

「ならさつさと次に何をすればいいか言えよ！そしたらさつさとそれを済ませてきてやる！！」

「鉄槌の騎士か。そんなに主が恋しいか？」

「うるせえッさつさと言え！！」

「そう慌てるな、お前たちにしてもらうのは簡単なことだ……………
……………何もしくないくていい」

「何だそん……………ってどういうこ……………」

シグナムたちは、ここに来るまでどんな難解なことを命令されるのかと思っていた。

それにここまで手の込んだ方法をしてきて何もないだなんてとても信じられない。

だから、程度の差はあれ4人ともリーゼたちの言葉に驚くと共に警戒する。

しかし、リーゼたちの言葉を聞いて出来た数瞬の思考の間が決定的な隙となってしまうた。

「え？」

「うう……………」

「ぐう……………」

「な……」

リーゼロッテは、フープバインドを同時発動させ4人を捕まえた。その時4人は、なす術も無く抵抗する事もできなかった。

「これはどういうことだ!」

「……言っただろ?お前たちは何もしていい。後は我々がやる」

担いでいたはやてをシグナムたちの前に降ろすロッテ。

するとリーゼたちは、自らに魔法を掛けその姿をフェイトとなのはへと変身させる。

バリアジャケットの配色が違つところもあるが外見や声は、彼女たちそのものだった。

そして、フェイトに変身したロッテはその姿ではやての頬を叩いて目を覚まさせる。

「……うえ……なんやのいったい?」

「目が覚めた?はやて」

「え?フェイトちゃん?どうしてここにおるんや?」

「は、はやて」

はやては、目を覚まし目の前にいたフェイト(偽)が何故自分たちの旅行先にいるか分からなかった。

だが、ヴィータの苦しそうな声を聞きそちらを向くと拘束されている4人の姿を目にした。

「ヴィータ!?それにみんなも!?!どういうこと、これ!?!そ、そうやあの怪人たちどうしたんや!?!」

「……」

「答えて!!」

「黙つて。晶を殺したはやてたちに話すことなんて無いよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？晶君を殺・・・・・・・・し・・・・た？」
「や、やめろおおおお!!」

シグナムは、身動きできないながらももがき叫んだ。

だが、無常にもフェイト（偽）の口から彼女たちがはやてに隠しておこうとしていた事実が明かされた。

「そつだよ。なのはを助けた晶をそこにいるシグナムが首を刎ねてシヤマルがコントロールメタルを奪つて晶は、ガイバーに食われたんだ」

「そ、そんな嘘や。きよ、今日は4月一日じゃないんやから嘘ついたらあかんよ？」

「嘘じゃないよ。ほらシグナムを見て。左腕がないでしょ？アレはね、晶からコントロールメタルを奪つた後暴走したガイバーに腕を食われたからなんだよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・嘘やよね、シグナム・・・・・・・・みんな」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

縋るようにシグナムたちを見るはやてに彼女たちは目を逸らし何も言えなかった。

「だから、これは復讐だよ？私たちから晶君を奪つたはやてちゃんへの」

「な、なのはちゃん？」

「さ、フェイトちゃん」

「うん」

アリアが化けたなのはがフェイト（偽）にそう言つと彼女は、闇

スレチガイ

「結界内の映像は出せそう？」

「やってみます……今回はジャミングが無いようです。

正面スクリーンに出します」

「……すでに誰かが戦闘中？」

リンディの言うようにすでに戦闘が行われていた。

だが、当初の予想とは異なりそれを行っていたのはシグナムたちと別である事を知るアースラ側。

「あの魔力光2つは仮面の男たちね。でも後1つは？」

「対象にズームします」

今まで離れて戦闘を全体から眺められる映像だったのがアレックスの操作で唯一正体の分からなかった魔力光の主を映し出した。

彼女は、銀の長髪、背に黒い翼を持ち体の彼方此方に赤いラインが描かれていた。

「ライブラリーに照合……なッ!？」

「ランディーどうしたの？」

「は、はい。照合結果で彼女の正体がわかりました」

「それで？」

「はい、第一級搜索指定遺失物ロストロギア『闇の書』です。どうやら完成してしまっただようです」

「!? 確かなの？」

「はい」

「でも、『闇の書』の主は八神はやてさんのはずなのに……」

リンディは、なのはたちから見せてもらった写真の中のはやてを思い出す。

だが、今スクリーン内で動いているのは、年齢が合わず尚且つその面影も無かった。

『融合事故』

その単語が彼女の脳裏に浮かぶ。

だが、その時スクリーン内にまだ転送していない彼女たちの姿が割り込んできた。

「なのはさんにフェイトさん！？いえ違うわね、バリアジャケットの配色が微妙に違うもの、何より魔力光が仮面の男たちのものだわ・・・そうなると変身しているのね」

「・・・艦長どうしますか？もう少し様子を見てから彼女たちを送りましょうか」

「・・・いえ、このまま見ても事態がよくなることは無いわ。すぐになのはさんたちを転送をして！ただし、クロノは時間を少し空けて」

「わかりました」

そして、ブリッジの転送装置の前に呼ばれたなのはとフェイト、クロノは、リンディから状況を聞き指示を受けた。

「なのはさんたち。『闇の書』を倒す必要はないから回避と防御に重点を置いてクロノが仮面の2人を捕らえて状況を正確に把握できるまで時間を稼ぎをお願い。その後は各自の判断に任せます」

「・・・あのシグナムさんたちは、どうしたんですか？」

「彼女たちは、確認されていないわ。あの『闇の書』がはやてさんの体なら守護騎士達^が守ろうとするはずなのに攻撃を受けていても姿を見せないところから仮面の男たちか、何らかの形で倒されたと

見ていいと思うわ」

「そんなツじゃあ」

「晶への手掛かりが……」

「なのはさん、フェイトさん……」

「だが、あの男たちを捕まえれば何か分かるかもしれない」

「クロノ君/クロノ？」

「こっちは僕に任せて君たちは闇の書を抑えてくれ……くれぐれも墮とされないように」

「うん」

そして、なのはとフェイトは、『闇の書』が展開した結界内に転送された。

リリカルガイバー 40話 スレチガイ

「……もうそろそろね」

「ああ」

リーゼたちは、『闇の書』の繰り出す魔法を交わしながらそんな会話をしていた。

そして、それは彼女たちの予想通りとなった。

「デイベインバスター……」

「……噂をすれば影ね」

「ああ、フェイズ3に移行しよう」

「ええ」

闇の書を狙ったその桃色の砲撃魔法を見てリーゼたちは、その砲撃元へと移動を開始した。

一方、その砲撃を受けた闇の書はというと……

「新手か……高町なのはとフェイト・テストロッサが2組いるな……まあいい2組とも墮とせば」

なのはのデイベインバスターを難なく防御して、そんなことを呟く。

『Diabolic emission』

「全ては主の願いのために」

闇の書が右手を天に向けるとその手に拳大の黒い塊が現れる。

それは、すぐに何十倍もの大きさに膨れ上がり黒い雷のようなものが放電されている。

その様子は、彼女に向かっていているのはたちからも確認できた。さらに驚いたのは、そんな彼女たちに向かってくるもう1つの自分たちだった。

437

「あとはよろしくお願いします」

「がんばれ、本物さん！」

「ええ!?!」

「あれがリンディ提督が言ってた私たちの偽者……」

リーゼたちは、すれ違いざまにそんなこと言い去っていく。

だが、そのあとすぐに闇の書の魔法は完成しそんな暇はすぐに無くなった。

「デアボリック・エミッション　闇に染まれ」

闇の書が放った空間攻撃は、なのはとフェイト、リーゼたちにも

牙を剥くが双方とも防御してダメージは無い。

だが、リーゼたちはそれを利用し姿を隠し、出遅れたなのはたちは、闇の書の前に残され否応無く彼女との戦闘を引き継ぐ形になってしまった。

12月21日 17時41分 アースラ

「なのはさんたちの偽者の位置は追えてる？」

「はい、現地に跳んだクロノ執務官に座標を送っておきました」

「結構。あとはなのはさんたちがどれだけ持ちこたえてくれるかね」

リンディは、難しい顔でそう呟いた。

「でしたら、今からでも武装局員を送ってはどうですか？」

「ダメよ。こう言うては何だけど彼らの力じゃあ足手まといに成りかねないもの」

実際、なのはたちの力と武装局員たちの力では差が結構あり、経験が豊富ながら力はなのはたちに一步及ばない彼らを現地に送ることを断念していた。

なのでリンディは、それ以外の事後処理で彼らに働いてもらうつもりだった。

同日 17時42分 月村邸

「黒い光の周りをピンクと金色の光が飛び回ってる……」

「まさか!？」

「きゃっ」

「レディの前なんだからソレ……どうにかしなさいよ!!!」

「え？・・・あッごめん」

晶がベットから飛び出すとすずかの悲鳴とアリサの怒鳴り声に彼に向けられた。

初め何のことかわからなかったが、やけに下がスースーすると思つたら何も履いていないことに気づき慌てて布団の中に戻る。

「え、あれ？でも、土郎さんたちが来てたんなら二人の内どっちかが着せてくれたんじゃない？」

「晶・・・さん？今まで通りでいいよ、すずかちゃん」じゃあ晶君のDNA鑑定が終わったのがつい20分ぐらい前のことでソレまでは正体不明の・・・」

「変質者兼誘拐犯として忍さんたちが扱っていたのよ。私たちの話を聞いてガイバーに似てるって気づいたから鑑定を試みたら晶だつて分かつて扱いが変わったのよ」

「あの・・・それまではじゃあいつたい・・・」

「簀巻きにされて床に転がされてたわ。なのはのお父さん達もそれから服を買いに出かけたからアンタはその・・・裸だったのよ」

「ああ・・・だから体の節々が妙に痛いのか」

「ごめんなさいごめんなさい！助けてくれたのにッ」

「ああ、いいよ。全裸だったのがって助けた？俺が？何から？」

「え・・・覚えてないの？怪人に誘拐された私たちを助けてくれたんだよ？ガイバーって力を使つて」

この時、彼女たちと晶との間に少し認識の違いがあった。

ガイバーを実際に見たことの無い彼女たちがあの巨人の姿をガイバーだと勘違いしている点だった。

ガイバーで自衛モードでそんなことが出来るのか？と不審に思いつながらもすずかたちに答えようとした。

「怪人って今はその話をしてる場合じゃなかった！」

「きゃ」

「だっから・・・下を隠せこのバカ！！」

「ご、ごめん」

再度ベットから飛び出してしまった晶。

その後、顔を赤くしたさすが持ってきたバスローブを羽織やつと動くベットから動けるようになった。

「そ、それで、家の中に誰か他の人いた？」

「うんうん、誰もいなかったよ。どうなってるのこれ？」

「すでに結界も張られてるってことか・・・でも、だったらどうして、ずずかちゃんたちや殖装してない俺まで・・・」

「1人でブツブツ言ってるんで説明しなさいよ」

「うん。今俺たちがいるのは結界の中、だと思っただ。結界っていうのは俺も魔法が使えるわけじゃないから詳しくは無いけど術者が許可した者と、結界内を視認・結界内に進入する魔法を持つ者以外には結界内で起こっていること」

認識や内部への進入も出来ないようにして魔法戦や訓練が周囲に被害を与えたり目撃されたりしないようするものなんだけど・・・
2人は魔法使える？」

「使えるわけ無いでしょ？今日まで知らなかったんだから」

「うん」

「だよ。っという事は術者に俺と2人も許可されたって事だけど、なのはちゃんたちが許可するわけもないし・・・着いてきて」

「何処行くのよ？」

「たぶん、この結界内で今一番安全な所・・・だと思っ」

「何よその妙な間は？」

「いや実際に行ってみないと分からないから」

そうして、晶が連れて行ったのは、月村邸の玄関の外だった。

「安全な所ってここなの？」

「ただの玄関「ガイバー」ッ！」「え？」

晶は、外に出てすずかたちから離れてガイバーを呼んだ。

すずかたちは、晶の声を聞き彼のいる方を向くとそこにはガイバー？の姿を目にした。

だが、その姿は、彼女たちが想像していたものとは違っていた。

「行くよ。二人とも」

「え？あの晶君・・・だよね？」

「しっかり掴まって」

「ちよつとアンタその姿~~~~~ッ」

すずかたちがその事を聞こうとするが晶は、それを聞かず二人を抱えて全速で走り出した。

つづく

トウチャク

「……やっぱアンタ、私たちを助けたあいつだわ」
「え？何か言った？」

アリサは、晶が下ろしたマンションの一室の前で気持ち悪そうに
眩く。

「すずかも車酔いにあつたような感じになっていた。
有無を言わずにここまで連れて来た晶にアリサは、月村邸で感
じた『もしかして助けてくれたのは晶ではないのでは？』という疑
念を取り消した。」

「なんでもないわ。それより、何でここが、フェイトの家が一番安
全なの所なのよ!？」

「グレイシアさんは元魔導士だから対魔法防御には余念がないから
だよ」

そう言つて晶は、ドアをノックした。

「グレイシアさん、俺です。深町晶です。アリサちゃんたちを匿っ
てください!」

そして、晶の声に伝えてくれたのか、テストロッサ家のドアがゆ
っくりとだが警戒するように開いていった。

リリカルガイバー 41話 トウチャク

なのはとフェイト、そして闇の書の戦闘場所から程よく離れていてその様を眺める事の出来るビルの屋上。

そこで仮面の戦士たちに変身していたリーゼたちは、魔法陣から伸びた魔力によって編まれた縄で拘束されその発動者に正体を曝していた。

「……ストラグルバインド。あまり使い道のない魔法だけど、拘束しつつ変身魔法などの強化魔法を強制的に解除できるからね」

「このっ……クロノ！」

「こんな魔法教えてないのに……」

「1人でも精進しろ。その教えを守っていた成果だ……アリア、ロツテ、君たちを連行する」

クロノは、そう宣告すると2人を連れて転移した。

テストロツサ家。

そのリビングでは、アリサ、すずか、グレイシアの3人がコタツを囲んで話をしていた。

「そう……あなたたちは誘拐されてそんなことになっていたの」

「はい」

「……」

グレイシアは、2人に今日起こったことを聞いてなぜまだ囚われのままの晶が2人を連れてここに訪れたのか納得した。

そんな彼女にすずかは、しっかりの返事をしたがやはりまだ思い出すには早すぎたのか返事が出来ないアリサ。

「……でもおかしいわ。あれだけの再生能力を見ているんでし

ようからコントロールメタルと強殖細胞との接触を危険視するはずなのに。じゃあ不慮の事故か何かで接触してしまった？・・・考えられないわね。私だったら同スペースでの実験や調査、保管はしない。当然彼らも・・・仮にしたとしても完全に密閉できる頑丈な容器に入れて保管するはずだし・・・でも、もつと気になるのは現れたタイミングと姿ね。まるで2人を助けるために再生して現れたような感じだし、何故その時だけガイバー？ではなく、巨人の姿だったのか・・・本人に聞いてみれば答えはすぐに出るんじゃないけど、その時のこと何も覚えていないんじゃないや聞いても無駄だし・・・

「あの~~~~」

「あらっイヤだわ。研究者だった頃の癖でつい、思考に没頭しちゃって・・・ごめんなさいね？」

「あ、いえ。それで何か分かったんですか？」

自らの考察と疑問、その答えを出すことに夢中になっていたグレイシアは、アリサの声で我に返って2人に謝罪した。

だが、呟いていたことには、アリサたちも気になっていたことなのでグレイシアの結論を聞いてみた。

「いいえ。本来なら本人に聞けば答えはすぐに出るんじゃないけど、その時のこと何も覚えていないんじゃないや聞いても無駄だし・・・答えは今だ闇の中ね」

「そうですか」

「ごめんなさいね。偉そうに考察してたのに」

「あ、いえ・・・ところでおばさんはさっきから何をしてるんですか？」

「ああこれ？」

申し訳なさそうにするグレイシアにアリサは、話題を変えようと

ふと目にしたものの、ここに着く前からグレイシアが何の用意をしているのかを聞いた。

「これはね、フェイトたちの様子を見ようとしているのよ。すでにサーチャーも送ってあるからこのアンテナからのコードをこっちの変換機に経由してからテレビに繋ぐつとほら、映ったわよ」

「あ、2人が映ってます」

「テストもしてない物だったからちゃんと起動してよかったわ」

アリサの言葉にテレビの画面を見て、安堵するグレイシア。

そこには、闇の書版が放ったスターライトブレイカーを防ぎきった2人の様子が映されている。

「・・・フェイトちゃん、あんなボディースーツみたいな格好で恥ずかしくないのかな？」

「あのすずか？こんな戦闘を見て始めて出ることばがそれなの・・・」

「アリサちゃんだったらフェイトちゃんと同じ格好で人前に出れるの？」

「・・・ごめん私が間違ってたわ。あとでフェイトとはゆっくり話をしましょ」

「うん」

すずかにそう言われてフェイトと同じ格好をして人前に出て空を飛び回る自分を想像してアリサは先の言葉を取り消した。

そこに、会話に参加せず台所に入っていたグレイシアが人数分の飲み物と茶菓子を持って戻ってきた。

「2人ともお茶が入ったわよ。これでも飲みながら3人を待ちましょ」

「おばさん、フェイトもあそこで戦ってるんですよ。暢気にお茶なんて「危ない2人とも、下だよ!」」

アリサが落ち着いているグレイシアに食って掛かろうとしたとき、画面を見ていたさすがが声を上げる。

慌てて2人がテレビに目を向けると地面から生えてきた触手に絡み捕られたのはとフェイトの姿だった。

「ほらピンチじゃないですか。これでもお茶を飲みながら見ているって言うんですか?おばさんも魔導士っていうのなんですから助けに行ってください」

「・・・無理よ。私は、もう魔法を使わないって誓ったのよ。少しでも長くフェイトと一緒にいるために」

「?どういう意味ですか?」

グレイシアは何も答えなかったが、不意に心配げに画面を見ていた表情が安堵に変わってアリサに言った。

「大丈夫、彼が到着したわ。きっとフェイトとなのはちゃんを守ってくれるわ」

画面の中では触手を高周波ソードで切断して2人を受け止めるガイバー?、深町晶の姿が映されていた。

数分前、アリサとすずかをグレイシアに預けるとすぐにマンションを飛び出してなのはたちの下に急ぐ晶の姿があった。

「グレイシアさんに説明してこなかったから、今頃2人から話を聞いている頃かな」

そう呟いている晶は、飛ばずに彼女たちのいる所を走って向かっていった。

本来なら一直線に向かいたいのを我慢して道すがらに向かっているのは、二人が戦っている相手、闇の書に気づかれずに接近するためだ。

だが、そんな彼も闇の書がなのはたちに向かって放った広域攻撃魔法の特徴が付与されたスターライトブレイカーを受けていた。

「グウ威力が拡散されてたおかげで何とかなっただけど今の攻撃・・・スターライトブレイカーなのか？でもなのはちゃんのものとは違った・・・どういうことだ？」

晶は、両腕で頭部を守り出来るだけ体を丸め近くの建物の壁を背にして拡散して襲ってきたスターライトブレイカーをやり過ごした。そのおかげでコントロールメタルや重力制御金属球は無傷だが、装甲のあちらこちらは焼け爛れている。

「相手も今の魔法も分からない事が多いけど早く2人の所へ！」

それでも晶は、スターライトブレイカーが放たれる直前にピンクと金色の魔力光、なのはとフェイトが降りてきた場所へと急ぐ。

「あとは、この角を左に曲がって3つ目の信号を右に曲がれば一直線だ」

約一年で培った土地勘をフル活用して頭の中の地図から目的地までの最短ルートを辿っていく晶。

そして、最後の角を曲がって2人の姿を捉えた晶が見たのは、触手に囚われた2人の姿だった。

「ッ急げ！」

晶の一步一步の踏み込みでアスファルトは砕け曲がり角で減速していた彼を加速させていく。

そして、高周波ソードを伸張させなのはとフェイトを捕らえている触手をすれ違いざまに切断、すぐさまターンし落ちてくる2人をその両手で抱きとめた。

「きゃっ!?!」

「2人とも怪我してない？」

「え?.....しよ.....う君？」

「うそ.....私たちまだ晶を助けてないんだよ?ここにいるはずないよ」

「でも.....」

2人は、晶が本物なのかどうか判断できなかった。

コントロールメタルだけの状態で自力で脱出できるとは、考えられないからだ。

だが、所々その装甲が爛れているものの顔や無事なところは、よく知っているガイバー?のもの。

2人が幻覚か何かなのかと思えてもしょうがないと思った晶は、助け舟を出した。

「幽霊とか幻じゃないよ2人とも。俺もどうして再生できたのか詳しくは分からないけど間違いなく俺だよ。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「ほんとに?」

「うん」

「夢じゃないよね?」

「現実だよ」

「晶君！／＼！」

「俺を助けたそうとがんばってくれてありがとね、2人とも」

なのはたちは、晶の首に抱きつき状況を一時忘れて泣いた。

つづく

トウチャク（後書き）

あけましておめでとつごないます。
今年もよろしくお願いします。

オチテ

「氷結の杖『デュランダラル』……これをどう使うかは、君に任せる」

クロノは、本局内通路を急ぎながら先ほどグレームとの会話を思い出しポケットの中の待機状態のカード型のデュランダルを握り締めた。

「手が足りない。だが、これから闇の書に通用する魔導師を手配しても……ツ彼らがいた!!」

クロノは、来た道を引き返しある場所へと急いだ。

様々な次元世界の情報が集まり、今『彼ら』が闇の書のことを調べている無限書庫へと。

「ユーノとアルフツ手を貸してくれ!!」

リリカルガイバー 42話 オチテ

「さ、2人ともそろそろ……」

「……ん」

晶は、2人の背中をポンポンと軽く叩き促し彼女たちを下ろす。

彼は、顔を上の闇の書に向け2人に尋ねた。

「……それで彼女と何があったの？2人が戦ってるのを見て急いでここに来たから状況が分からないんだけど」

「……あのね、あの人は闇の書さんの」

「リンディ提督の話じゃ、融合事故、闇の書がはやての体を操ってるって」

「……つまり完成して暴走してるって事？」

「うん、私たちはその時現場にいなかったんだけど」

「私となのはに化けた仮面の男たちがはやてたちに何かしたみたいで」

「仮面の男？そいつらがシグナムさんたちを裏で操ってたってこと？」

「そこまでは分からないけど……」

晶は、なのはとフェイトから状況を聞き終えしばし考えた後、空に、闇の書へと声を発した。

「……夜天の書つでいいのかな？いくつか聞きたい事があるんだけど……しゃべれるよね？」

「お前が始めてだ。そう私を呼んでくれたのは」

「それで「ああ少しなら構わない。今私はとても気分がいい」……

「じゃあ、今はやてちゃんはどういう状態？」

「今主は夢を見ている。愛する者たちを奪ったこの現実を悪しき夢だと願って」

「……シグナムさんたちはどこに？」

「騎士達も私の中で眠っている」

「なるほど……最後にありがとう」

「何？」

「なのはちゃんたちと再会したとき、途中で邪魔をしないでくれて」

「おかしなやつだ……ただ、お前が主や騎士達の記憶にある深

町晶が照らし合わせていただけなのに」

「それでもだよ」

「……では、私からも1つ聞きたい……大人しくお前も私の中に来ないか？」

「……………どういうこと？」

「……………主は、お前も大切な1人だと思っている。そんなお前を傷つける忍びない」

「……………だから、アリサちゃんたちは結界内に囚われたのか」

「え？」

「アリサたちもこの中にいるの？」

なのはたちは、晶の口から出た名に驚き、心配した。

何せ、今までスターライトブレイカーやデアボリック・エミツシヨンといった広域魔法が放たれそれに巻き込まれた可能性を考えただからだ。

「大丈夫。2人は、グレイシアさんと一緒だから安全だよ」

「そっか、母さんと」

「にゃあ、よかったよ」

なのはとフェイトは、晶の言葉に安堵する。

「それで返答は？」

「その前に聞きたいんだけど、その大切な人の中になのはちゃんとフェイトちゃんが入ってるの？」

「……………」

晶の問いに夜天の書は、少し間を空けてから口を開いた。

「主には穏やかな夢の内に永久の眠りを。騎士たちを奪った者たちには永久の闇を与える」

「違うよ！私たちがヴィータちゃんたちを傷つけたりしてないよ！」

「シグナムたちと私たちは」

「真実など関係ない。主は、お前たちがやったと思っている。ならば、私はただ主の願いを叶えるのみ」

「そんな!？」

「本当に、本当にそんな願いを叶えてはやってちゃんが喜ぶの?」

「……………」

夜天の書は、なのはの問いに閉口する。

だが、彼女がこの問いに答える機会は大地が揺れ地面を突き破り空へと吹き上がる炎と共に失われた。

「早いな、もう崩壊が始まったか……………私に残された時間ももう少ない。私が私であるうちに主の願いを叶えたい……………さあ、返答を深町晶」

「俺は、え?」

「晶/晶君」

晶が答えようとしたとき、彼の腕を引く2つの温もりを彼は感じた。視線を下に向けるとこちらを不安げに見上げるのはとフェイトの姿が映る。

晶は、それを見てフツと少し笑ってから、彼女たちの頭に手を置き答えた。

「安心して2人とともに……………申し訳ないけどそれできない。俺は、元の世界に戻ってやらなければならないことがあるし、この2人を守らなければならぬから。あなたこそはやってちゃんを解放して武装を解いて欲しい」

「そうか……………ならば、力づくになることを許して欲しい」

【Blutiger Dolch】

「……………!？」

「刃^も以て、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー」

夜天の書が、前へと手を翳すと晶たちは赤い短剣に囲まれそれらが晶たちに襲い掛かり爆煙が辺りを覆う。

「……外したか」

「大丈夫、なのは」

「うん……あれ、晶君は？」

なのはとフェイトは、難を逃れたがそこに晶の姿はない。

その時、爆煙を突き破り夜天の書へと突き進む者が飛び出し肉薄する。

「いた！」

「え、でもあれって!？」

なのはは、晶の姿を見て安堵するが、フェイトは彼のその状態に気づく。

晶は、その体にブラッディダガーが突き刺さったまま、つまりあの攻撃を避けられなかったということだった。

そして、2人が何かを言う前に夜天の書へと晶は、拳を放つ。

【Panzer Schild】

「無茶をする。ブラッディダガーを受けてそのまま突っ込んでくるとは」

「俺は、フェイトちゃんたちみたいに空を早く動けないからね。こうでもして意表を付かないとあなたに近づけないと思ったゴフツんだよ」

「だが、こちらとしては好都合だツ!？」

「これなら避けるしかないでしょ?」

晶の拳をパンツァーシルトで受け止めている夜天の書がそう言う。次の動作を始めようとしたとき、それを阻むように彼は左腕を振るった。

それを彼女は、慌てて後方に下がる事で回避したがパンツァーシルトは、引き裂かれていた。

「……高周波ソード……魔法殺しの剣か。厄介だな」

「魔法殺し……そう言われたのは初めてだよ。でも、これなら例「だが、それをお前が本当に振るえればの話」なに？」

晶が、さらに高周波ソードを織り交ぜて攻撃しようと考えたとき、それを遮るように夜天の書が口を挿んだ。

「その刃は、私の防御を簡単に引き裂き私の体を傷つける。だが、それは同時に主の体をも引き裂くという事。心優しきお前にそれが本当に出来るのか？」

「くっ」

【Schwarze Wirkung】

夜天の書の指摘に晶は、思わず動きを止めてしまった。

それを時間のない彼女が見逃すはずもなく、今度は彼女から拳を何度も振るう。

それらを晶は、ただ両手で防御するしかないが、シュヴァルツェ・ヴィルクングの効果で強化されたその一撃一撃のダメージは小さくとも確実にダメージを蓄積させていった。

一方で、なのはたちはというと、格闘戦のため援護する事も加わる事も出来ず歯がゆい思いをしていた。

そして、2人が見ている前で夜天の書の拳が晶の防御をすり抜け彼の顎を打ち抜いた。

「ああ!!」

「晶!!」

【Absorption】

「ぐう」

うめき声を上げる晶は、彼の背後に現れた魔法陣に接触し、その体を光の粒へと変貌させていった。

そんな彼に夜天の書は、穏やかな声でこう告げた。

「主たちと共に穏やかな、よき夢を」

つづく

ユメウッツ前編

side ウッツ

晶が墮とされるほんの少し前のことだった。

なのはとフェイトは、共にまた見ていることしか出来ない自分に歯がゆい思いをしていた。

だが、そんな彼女たちに声を掛ける者たちがいた。

【I have a method（手段はあります）
レイジングハート？】

【Call me”Exelion mode”】
「わかってるの？失敗したら壊れちゃうんだよ！」

【Call me”Zamber form”】
「バルディッシュまで……」

【Call me・Call me・my master・
/sir】

2機の声になのはとフェイトは、閉口する。

そして、自然と二人の手と手が触れ合い顔を見合わせ頷きあうと手を強く握り合い口を開いた。

「壊れちゃったら嫌だよ、レイジングハート」

「バルディッシュも」

【All right, my master / Yes,
sir】

「エクセリオンモード」

「ザンバーフォーム」

「「ドライブッ!!」」

意を決してグレイシアとの約束を破り、その言葉を口にした。だが、それに対して2機が返したのは了承ではなかった。

【【ビーーーーーッ】】

「え!？」

「どうしたの、バルディッシュ!？」

『このメッセージを聞いてるって事は、私との約束を
母さん?』

警告音と共の流れ始めたグレイシアの声。

それが、今の状況を説明してくれた。

『 破ったという事ね・・・前にも言ったけど、フルドライブはデバイスだけでなくあなたたちの体にどんな影響が出るかわからないの。だから私は、2機に封印を施してこのメッセージを録音しているわ』

「そんなこれじゃあ、助けに行けないよ!!」

『 私には、あなたたちがどんな状況で覚悟を持って指示したのか分からないけど、この先の未来でこれによって障害をもたらすかもしれないと思つたら、とてもじゃないけど何もせずに渡すことが出来なかつたの、ごめんなさい。その代わりと言つてはなんだけど、あなたたちに助言を残します。あなたたちは1人じゃないわ。1人でダメなら2人。2人でダメなら3人。3人で・・・こんな風に周りの人に助けを求めなさい。そうすれば、きっと活路が見出せるわ。だから、あなたたちが元気な姿で私の前に帰ってきてくれることを祈ります』

「・・・・・・・・」

メッセージはそこで終わっていた。

【Sorry, master】
【・・・・・・・・・・】

謝るレイジングハートと言葉にはしていないが申し訳なさそうなバルディッシュ。

だが、彼女らをなのはたちは、責めなかった。

「気にしないでレイジングハート。きっと私たちが間違ってたんだよ」

「そうだよ、バルディッシュ。母さんの言うとおりなのはと私、別々に晶を援護しようと思ったのがそもそも間違ってたんだよ」

「うん。2人で協力すれば、このままでも晶君を援護できる」

「私が晶からあの駄々っ子を引き離して」

「私が砲撃する。そうすればよかったんだよ」

だが、そう2人が悟った時には、すでに手遅れだった。

空で晶が光の粒に変換され消えていったのがちょうどその頃だったからである。

それを見てしまった、なのはとフェイト。

やっと再会出来た晶が、また目の前で消えてしまったことは相当なショックだったのだろう。

行動を起こすまでにしばし時間を有した。

「・・・・・・・・・・バルディッシュ、アレを。対シグナム用に考えてたのを」

【Yes, sir. Barrier jacket, Soniform.】

「なのは、前衛は私が。チャンスがあったらどんどん撃って」

「うん」

「それと、リンディ提督に」

「わかってるよ」

【Acceler Shooter】

「行ってフェイトちゃん！シュートッ！！」

「ありがとう、なのは」

なのはは、フェイトが接近しやすくするためにアクセルシューターを放ち援護を行う。

フェイトも、その意を汲みアクセルシューターが夜天の書を牽制している間に近接戦の間合いに飛び込んでいった。

そして、彼女を見送ったなのはも自らの役目に就く。

【Buster Mode】

『リンディさん、リンディさん！こちらなのはです。救援をお願いします』

なのはは、レイジングハートをバスターモードにしながら念話を送る。

だが、帰って来た返事は彼女が望んだものとは少し違った。

『……ごめんなさい、なのはさん。今、市街地の消火やら何やらで人手を出払ってるの』

『じゃあ、私たちだけで？』

『いいえ、もうすぐあの子が帰ってくるからもう少しだけ2人で踏ん張って』

『……わかりました。もう少しだけがんばってみます』

そう返事をしてなのはは、念話を切り上空で今も戦っているフェイトと夜天の書の動きに集中した。

side ヨメ

ここは、とある病室。

そのベットには、点滴に繋がれ両手と首にギブスを頭には包帯を巻かれた1人の少年が眠っていた。

その傍らには、車椅子に乗り両足をギブスに固定されている彼よりも幼い少女が、彼のその手を握っていた。

「はよ、起きて兄ちゃん」

「・・・・・・・・」

「私は、兄ちゃんのおかげで無事や。この足も3ヶ月もすれば元に戻る。でも、兄ちゃんが起きてくれんと私ッ」

少女が少年に語りかけるが返事はなく、彼女も途中で泣き始めてしまう。

眠っている少年の名は、深町晶。

小学5年生。

そして、少女の名は八神はやて、4歳。

横断歩道を晶と一緒に渡っていた彼女は、信号無視をした車に引かれそうになった所を晶に助けられ足を骨折しただけですんだ。

だが、彼が代わりに車に引かれ重傷を負い、事故から1ヶ月近く経った今も意識は戻っていない。

そして、彼女が彼を兄と呼ぶ理由は・・・・・・・・

「やっぱりここか、はやてちゃん」

「はやてちゃん」

「はやて……」
「父ちゃん、シャマル姉、シグ姉」

病室に新たに現れた人々。

1人は、深町史雄、晶の父でありはやての義理の兄。

その隣にいるのは、深町シャマル、旧姓八神。

八神家の長女であり、晶の義理の母。

その後ろには、八神家の次女、八神シグナム。

彼女たちは、はやての実の姉たちで、史雄はシャマルの夫、つまりはやての義理の兄になるわけだが早くに両親が他界した八神姉妹と晶たちは同居していた。

そうしたことから、はやては年が近い義理の甥である晶を兄と、史雄を父と呼ぶようになった。

ちなみに、彼女たちの家には、ザフィーラという大型犬が飼われている。

「さ、ヴィータちゃん。お兄ちゃんにご挨拶して」
「あう~~~~」

そう言っただけでシャマルは、腕に抱えた娘、ヴィータを晶に近づける。まだ幼いヴィータは、母が言っていることが分かっているのか分からないのかそれは分からないが無邪気に返事をし近づけられた彼の頬をぺちぺちと叩く。

「……………」
「え？手が動いた？」
「まさか晶!？」

今まではやてが話しかけても反応のなかった晶の手が、はやての手を弱く握り返したのだ。

その事に気づいたはやてが口にすると、皆一様に驚く。
そして、彼らに見守られる中、静かにその目を晶は開いた。

「……………こは……………」

「兄ちゃん、寝坊のしすぎや、アホ」

ナースコールやら何やらで周りが慌てて動き始める中、はやてだけは彼にそう涙を流しながら言った。

つづく

ユメウツツ前編（後書き）

今回は、短めですみません。

あと、sideユメは、当然夜天の書の中での出来事です。

ユメウツツ 中編(前書き)

今回のSideユメは晶の視点で書いています。

ユメウッツ 中編

side ウッツ

【Divine Buster Extension】
「いつけええ!!!」

それと同時にフェイトは、その速度を生かしてダイバインバスターの射線軸から逃れる。

しかし、普通なら必中のタイミングで放ったにも関わらず夜天の書の意志には中らなかつた。

『ごめんね、フェイトちゃんまた外しちゃった』

『気にしないでなのは……それより、あとのぐらいカートリッジある？私は今バルディッシュに装填してある分の内2発もうちやっただからあと4発で手持ちが尽きちゃう』

『私は今最後のマガジンに交換してたところ』

『………次が最後のチャンスだと思っただけからお願いなのは』
『うん』

戦闘を継続しながらフェイトとなのはは、互いの状態を念話で伝え合う。

何故先ほどからなのはの砲撃が掠りもしないのか？

それは、夜天の書の意思が持つある魔法が原因だった。

フェイトが以前蒐集されたため彼女の高速機動魔法を夜天の書の意味も使用できるからだった。

そして、フェイトもその事に責任を感じたのか少し悩んでからなのはに言った。

「……なのは、あいつの動きを直接私が止めるからその時撃つて」

「え！？でも、フェイトちゃんも巻き込んだじゃうよ！！」

「大丈夫、彼女を盾にして耐えてみせるよ」

「でも！」

「わかつてるでしょ、なのは？彼女が私の魔法を使える以上今ままじゃ何度やっても結果は変わらないよ。なら少し危険でもやるしかないんだよ」

「………こんな時」

「え？」

「こんな時、いつもなら晶君がどうにかしていくれてたね」

「………そうだね。でも、その晶とはやてを助けるためにも応援が来るまで2人でがんばらなきゃ」

ふとなのはの口から出た内容。

2人はその事から今までいかに晶に助けられてきたか再認識した。

「………なのは、そろそろこっちに集中するけど、その時が『待った！彼女を止めるのは僕たちに任せて！』この声って」

「そうそう、あたしたちに任せなよ、フェイト」

「新手かッ」

念話に割り込んだ2人の声。

それと同時に2本のチェインバインドが左右から発生し夜天の書の意味の拘束に成功した。

「ユーノ君とアルフさん」

「来てくれたんだ」

「後は任せたよクロノ！！」

「………了解だ」

いつのまにか夜天の書の意思の上空に現れたクロノは、長年使用してきたデバイス「S2U」を構え、彼の切り札の1つである中規模範囲攻撃魔法を行使する。

『ユーノ、2人への説明を頼む』

「ステインガーブレイド・エクスキュージョンシフトッ」

夜天の書の意思に魔力刃が大量に襲い掛かった。

『2人とも、時間がないから質問とかなしですぐに動いて。晶とはやてを助けるためだから』

『うん』

『なのは、今すぐデイベインバスターのチャージを始めて。クロノの魔法が終わると同時に彼女を砲撃するんだ』

『うん』

『フェイトは、僕の所に来て新しいカートリッジを受け取って欲しい。なのはにも届けて』

『わかった』

『そして、彼女にダメージを与えたら2人で晶とはやてに呼びかけるんだ。ダメージによって晶たちを捕らえてる魔力が弱まってる内に』

そして、なのはとフェイトは、ユーノの言つとおり動き、晶達へ念話を送った。

『晶、はやて』

『晶君、はやてちゃん』

『 私たちの声を聞いて!』!』

side ユメ

あの事故からもう5年の月日が流れた。

目を覚ました当初、俺はリアルすぎる夢によって混乱し周りに迷惑を掛けてしまった。

父さんには死んだはずだと、はやてたちには家族ではなく友人だと、幼馴染の哲郎さんと瑞紀にはなぜこの世界にいるのかと。

でも、それはもう過去の話。

俺は今、その夢から立ち直りつい先日、地元の公立高校に入学できた。

これも俺の妄言にめげずに支えてくれた周りのみんなのおかげだ。

「おはよう、はやて、ヴィータ、ジグナムさん、シャマルさん、父さん」

俺は、居間の障子を開け中にいる家族に挨拶をした。

みんな口々に返事を返してくれる。

父さんとシャマルさんは、何時までも新婚気分という訳ではないが息子からの鼻屑目で見えておしどり夫婦という感じだ。

シグナムさんは、スポーツ推薦で大学に進学、今も剣道に打ち込んでいる。

ヴィータは、生意気に育ち、俺のことをバカ兄貴だとか呼ぶようになりよく怒鳴られてしまう。

ヴィータも先日私立小学校に入学したが・・・こんな苛烈な性格で友達が出来るのか心配だ。

そして、はやては両足も完治し今は普通に生活している。

シヤマルさんに家事を習ったりして家の台所を守っている。

ただ、はやくもヴィータ同様俺より出来が良くて同じ私立小学校に進学している。

妹たちより出来の悪い俺は、やはり凹む。

「行って来るな、ザフィーラ！」

「家を頼んだで、ザフィーラ」

「行って来るな」

「ウォン！」

でも、登校するのはいつも一緒だ。

我が家の番犬ザフィーラに声を掛け、はやくとヴィータを通学バスの停留所まで送り途中から同じ高校に進学した哲郎さんたちと登校するのが俺の毎日の日課だ。

『晶君／晶……』

「え？」

今誰かに呼ばれたような……

「どうしたんだ、晶？」

「忘れ物でもしたの？」

だが、振り返った先には何もなくて心配して声を掛けてくれる哲郎さんたちに何でもないと答えて先を急いだ。

これが、異変の始まりだった。

それからというもの、事あるごとに空耳が聞こえるようになり、夢の中でもその事ばかりだ。

しかもユメの中では何故か、5年前俺を苦しめたあのリアルすぎる夢に出て来るはやくと同じぐらいの女の子2人の姿と声だった。

訳も分からず心のどこかでその事にひどく焦りを覚えてしまう。

だから、以前お世話になった心療内科の病院で見てもらったが異

常はなく、とりあえず夜ぐっすり眠れるように睡眠薬を処方してもらった。

でも、それを飲んでも回数こそ減ったもののそのユメを見なくなるといふことは無かった。

「……………おはよう」

「おはよう、兄ちゃん……………そのようすやと昨日も見たんか？」

「ああ、一体何なんだろうな」

このユメを見るようになって夢に関して調べてみたが、これといった収穫はなかった。

心の現われだとか、記憶の整理という話もあったが、記憶なら何故5年もたつてから？と思うし、心の現われならどういふことなのか？ということになる。

そこではやてにその事を打ち明けてみたら。

「何や兄ちゃん、私ぐらいの歳の子が趣味なんか……………もしかして、私狙われとる!？」

「なあ!？違う、俺はノーマルだ。それに俺が好きなのは瑞紀あ……………」

「何や、やっぱりそうなんか?だったら早よ、告白すればええやんか」

なんて、はやてに恋愛に関してのアドバイスを貰ってしまうしまつ。

俺は、一体どうしたんだろう。

そして、ユメを見るようになって1年近く俺は高2に、はやては小4、ヴィータも小2になった。

その頃には俺もはやてのアドバイスに従い、瑞紀に勇気を振り絞って告白したが玉砕。

瑞樹は、生徒会長の巻島顎人さんに想いを寄せてたんだ。

彼は、俺から見てもすごい人で瑞紀が惚れるのも仕方が無いと諦められた。

そして、その頃だったんだ。

更なる変化が、ユメが現実に来てきたのだ。

『晶君/晶……』

はあ……またか……

「な?!」

俺は、その声にいつも何故か振り向いてしまい何も無い事に呆れてしまう。

そう今日もまたいつものように聞こえいつものように何も無い事を半ば知りながらも振り返ってしまった。

だが、今回はいつもと違った。

そこには、ユメの中でいつも見る女の子たち、一人は白い服を着た茶髪の子、もう一人は黒いレオタードのような服を着た金髪の子たちがその手に武器のような杖を持ちそこにいた。

「て、哲郎さん、あの子達!」

「ん?あの子たち?何言ってるんだ晶、誰もいないじゃないか」

「え?何言ってるんですか哲郎さん、あの子たちですよ!今もそこに」

「………晶、白昼夢でも見たんじゃないのか?」

俺は慌てて一緒に下校していた哲郎さんと呼んだが彼には見えていなかった。

俺には見えるのに哲郎さんには見えない。

どうなってるんだよ、コレ!??

「……兄ちゃん、どうしたんや道の真ん中で頭抱えて」

「は、はやて」

「あ、はやてちゃん、聞いてくれよ。晶の奴があそこに誰かいるって言うんだ。いくら俺がSF研の部長でもオカルトは専門外だよ」
「……」

はやては、あの子たちが居る場所をしばらく睨みつけていると俺の前にやってきて俺の頭に抱きついたんだ。

「兄ちゃん、アレは悪い幻や。直視したらアカンよ」

「はやて……」

そのままの状態でしばらく、はやての鼓動の音を聞いていると、彼女がパツと俺の頭を話し言ったんだ。

「……ほら、もう大丈夫や。見てみい、なあくんおらんやろ？」

「……本当だ」

「兄ちゃんは、私が守ったる。また変なもん見たら私に言ってな」

はやては、そう言って俺に笑いかけた。

つづく

ユメウツツ後編(前書き)

(晶)とあるところは、晶の視点です。

ユメウツツ後編

リリカルガイバー 45話 ユメウツツ 後編

side ユメ(晶)

あれから数日が過ぎた。

はやてのおかげでその後、幾度も現れた”彼女たち”は追い払われ俺の悩みも解消された……かに見えた。

「な、なあはやて、心配してくれるのは嬉しいんだけど、さすがにこの年で一緒に寝るのはどうかと思うんだが……」

「何言うとるん、兄ちゃん。昨日もその前もそう言って一人で寝たら悪夢見て寝不足だったやないか」

「悪夢って”彼女たち”は、そこまで悪いものじゃ」

「実害でとるんやから、悪夢でいいんやんか」

実際、寝不足なったり、周りから不審がられたりしたが”彼女たち”

のことを何故か嫌う事が出来なかった。

「うわッ!？」

突然の揺れに俺は、近くの壁に手をついて踏ん張った。

「………治まった………かな?にしても最近多いな、地震。はやてたちにもう一度地震が来たときの対処法を教えとかないと」

俺は、まだ揺れている電線や揺れに驚き飛び立った鳥たちを見上げながらふと思ったことを口にした。

「それにしても、こんなに頻繁に来るなんてでかい地震が来なけりやいいけど……」

side ウツツ

『クロノ、彼女の様子が……』

『ああ、妙だ。単純に消耗しているならいいが、もし……』

フェイトとなのはは、気づかずに夜天の書の意味との戦闘に没頭しているが、距離を置いてバインドのタイミングを計っているアルフトユーノや戦闘経験が最も多いクロノは彼女が息切れをしていることに気づいた。

クロノたちの懸念は、すぐに形となって起こった。

それは、夜天の書の意味が自身の周囲に無数のフォトンスフィアを生成し、発射しようとした時だった。

「フォトンランサージェノサイあっ」

「何？」

「どうしたの？」

「なのは、フェイト下がるんだ！」

「ほら早く！」

「ツヤっぱり！デュランダル！！」

発射直前にフォトンスフィアが消え、スレイプニールが砕け夜天の書の意味は墜落していく。

その様子になのはとフェイトは訳がわからなかったが、他の3人はこれから何が起こるか分かりすぐに動き出した。

ユーノは2人に下がるように言い、アルフは事態を呑み込めずおらず動かない2人を急かす。

そして、クロノは「S2U」を待機状態に戻し、「氷結の杖デュランダル」を起動させた。

「申し訳ありません……………主」

一方、墜落していく夜天の書の意味は涙を流しながらはやてに詫びる。

そんな彼女の周囲には、スレイプニールの羽が集まり彼女の姿を覆い隠していき黒い球体となり徐々に大きく膨らんでいきながら海へと落ちた。

その様子は、海中に在っても分かりすぐに海面の外にも出て来る。

「悠久なる凍土」

それを見たクロノは、すぐに詠唱を始める。

一方でユーノは、集まってきたなのはたちに話をしていた。

「2人とも、今ならダメージ無しでも念話が届くはずだからはやてと晶にお別れを言って」

「お別れ？何言ってるのユーノ君？」

「それにクロノは、何をしようとしてる？」

「凍てつく棺のうちに」

「……………もう僕たちにできることは終わったんだよ。今から晶たちごと夜天の書を凍結封印するんだ」

「封印！？どうしてなの！」

「夜天の書は暴走の前段階に入ったんだ。あと数分で暴走してこの世界を破壊し始める。そうしたら出来ることはアルカンシエルを使うしかないんだ。その威力、2人はリンディさんから聞いてるよね

？」

「……」

「永遠の眠りを与えよ」

「でも、今封印する事で2人を助ける方法を探す時間が出来る。もしかしたら僕達が生きてる間に見つけられないかもしれないけど、必ず在るはずなんだ。現に夜天の書を今みたいな物にしてしまった張本人の事は、分かったんだ」

「……その人って誰？」

「今から400年前の夜天の書の主、ハミルカル・バルカスって魔導師だよ」

「凍てつけ！エターナルコフィン！！」

なのはたちが話してる間にクロノの魔法が完成し海ごと夜天の書を凍らせる。

ユーノたちもその事に気づいたが、まだ念話が届くので話を続けた。

「彼は”神秘なる力”を探すために夜天の書を改造したみただけど、それが何を指しているのか分からなかったよ……これが今まで僕が調べて分かった事。でも、これも無限書庫のデータのほんの一部でしかないし、今後役に立つロストログアが見つかるかもしれない。だから、今は諦めてお別れを言って、それぐらいの時間なら移送まであるから」

「……」

ユーノの言葉に2人は、しばし無言で凍結された黒い卵のような夜天の書を見つめ念話を送り始めた。

side ユメ

晶は、今日SF研が休みの哲郎と一緒に下校している時の事だった。

「・・・また、地震だ」

「最近多いですよね」

「ああ・・・どうしたんだ、晶？裏山の方を見て」

「・・・え、ええちよつと気になるものがあつたので」

「・・・もしかして、またか？だったら早く帰ってはやてちゃんの近くにいたほうが・・・」

「そう・・・ですね」

「ほら、早く行くぞ」

「・・・はい」

哲郎が急かし後ろ髪を引かれながらも晶は、歩き出す。

実際、哲郎が懸念したように晶の目には、裏山への道に立ついつもの少女たちの姿が映っていた。

しかも、いつもと少し様子が違った。

『ごめんね、晶君』

『晶、結局私たち何も出来なかった・・・』

少女たちは、悲しげに訴えてくる。

そのいつもと違う様子と言葉に何故か胸がざわつき気づくと来た道を引き返していた。

「・・・ごめんなさい、哲郎さん！」

「お、おい晶！？そっちは裏山だぞ！！・・・クソ、まずい事になった！！！」

哲郎が引き止めるのも聞かず晶は、裏山へと飛び込んでいく。彼がうるたえるのにも訳があった。

この裏山は、通称「迷いの山」。

何故かこの山に踏み込むと方向感覚が狂い必ず迷ってしまう。

また、富士の樹海のように磁石も役に立たず、毎年自殺者が幾人も訪れる場所だからだった。

晶もその事をこの街で育ったため良く知っていた。

ごめんはやて、兄ちゃん約束破っちゃった

晶は、そう思いながらも戻ろうとしようとしなかった。

はやてとの約束。

子供の時一度だけ、好奇心に負けて長いロープを持ってこの山を探検しようとした時、隠れて着いてきたはやてに泣きながら止められてその時、もう二度とこの山には入らないと約束していた。

だが、今回は、好奇心ではなく胸に宿った焦燥によって少女たちを追いかけていた。

『でも、必ず助けるから』

『私たちがおばあちゃんになっても必ず』

「クソ、何なんだよ一体！」

追いかけても追いかけても、少女たちには届かず悲しげな声だけが聞こえてくる。

そして、木々の間を抜けると小さな沼がポツンとある開けた場所に出た。

すでに晶には、何処をどう走ったのか分からず完全に迷っていたが今は気にならない。

なぜなら、少女たちの姿が消え、代わりにここにはいけない存在が池の前にいるのを見たからだった。

「……兄ちゃん、この山にもう入らんって約束したやないか」
「はやて、なんでここに」

「そないなことどうでもええ、さ、帰ろ」

はやては、有無を言わず晶の腕を取り迷いなく歩き出そうとする。

だが、晶には、どうしても納得が出来ない事があった。
掴まれた手を振り払いはやてから池の方へと距離を取る。

「なんで、はやてが俺より先にこの場所にいるんだよ！哲郎さんが連絡してもおかしいだろ！？」

「アカンそっち行ったら！」

「なんでだよ、こっちはただの池があるだ「見たらアカン！！！」
……け？」

晶がはやての制止を聞かず沼の水面に目を向けるとそこには、思うもしなかったものが映っていた。

「……なんでこの姿が映ってるんだよ？」

「……」

「これってガイバーだろ」

水面に映っていたのは、いつも洗面所で見ると自身の顔ではなく夢に出てきたガイバーの顔だった。

思わず自身の顔を触り確認するがいつもと変わらない。
だが、水面に映る顔やそれを触る手はガイバーのもの。

でも、自身の感じる感触や目に映る手は普段の物、その矛盾に混乱した。

「さ、兄ちゃん気がすんだやろ？帰ろ」

「何言ってるんだよ！？はやても、見てるだろこの水面を！！」

「……やっぱ、これ見られたら誤魔化せんか」

「はやて、何か知ってるんだな、このことを」

「……」

「はやて！」

「……この世界はな兄ちゃんいや晶君。私の「家族との幸せな生活」と晶君の「昔の様な平凡な日常に帰りたい」って想いが混ざり合って結果の世界や。そして、この池はそれでも現実でやらないアカン事があるって晶君の想いが作り出した特異点なんや」

はやては、口を紡ぐが晶の剣幕に観念して話し始めた。

つづく

ユメウツツ後編（後書き）

3月いっぱいまで契約が切れ、4月から職探しを始める事になりました。

次は、どんな職種にしよう？
間違いを修正しました。

セツトク

リリカルガイバー 46話 セツトク

「俺たちの思いが生んだ世界……でも、どうやって俺の故郷の街や人を？」

「そんな簡単や。晶君の記憶からちよちよいつとな。でも、徹底再現した現実となんら変わらん分身や、私と晶君以外な」

「……だつたら……だつたら、なんで2人はいないんだ？」

「2人？……ああ、アリサちゃんとす「違う!!」……」

「惚けるなよ……なんてなのはちゃんとフェイトちゃん、それに2人に関連する人たちはいないんだ？」

「……」

晶の問へのはやての沈黙。

彼は嫌な予感がした。

ここは、思いが生み出した世界。

なら、ここに存在を許されなかつたつということは……

「……そんな当たり前やろ？みんなを消した2人を誰がこの世界にいさせる訳ないやん」

「それは誤解だ！2人は「うるさい!!」その場におらんかつた晶君に何がわかるんや!？」……」

そう言われては、何も言い返すことが出来ず閉口してしまつ晶。

だが、沼の水面に思いもしないモノが映し出されていることに気づく。

「ッこれは……」

「ちょうどええ。見てみい2人がシグナムたちを殺すところを」

はやての激昂。

それに呼応してか特異点たる沼の水面には、その時のはやての記憶が映し出された。

そして、その記憶を晶は、食い入るように見ていた。

「……………」

「どうや？これが現実。私の家族は、2人に殺されたんや！」

「……………」

「何言ってるんや！どう見たって2人やないか！？」

「よく見なよ、はやて。この2人のバリアジャケット細部の配色が違う」

晶の指摘の通りだった。

リーゼたちが変身した本物との見た目での唯一の違い、もし魔力光も出ていれば確定だったが、はやては納得しなかった。

「そんな簡単に変えられる。なんで、晶君はあの2人を庇うんや！？」

「2人を信じてるからっというか、本人たちからこの2人が仮面を着けた男たちだって聞いたし」

「仮面の男たち？そんな私知らん！2人が嘘ついとるだけや」

「はあ……そもそも、2人が復讐なんて言い出すのがおかしいんだよ。なのはちゃんたちは俺が再生に必要な条件を知っているから、そのコントロールメタルの場所を知っていただろうシグナムさんたちを殺すつてのは変だ」

「そんなん、私が目覚ます前に聞きだしたのかも知れへんやんか」

「それにはやて、4人が死んだっという前提が間違ってるんだよ」

「な、何言ってるんや、晶君も見たやろ！？2人を庇う為にそない

な嘘言うなんて酷いやないか」

突然、晶の口から出た事実。

それにはやては、慌てふためく。

「嘘じゃないよ。表ではやての体を使ってる夜天の書の意味、彼女が言ったんだ『騎士達も私の中で眠っている』ってね」

「じゃ、じゃあほんとなんか？4人が生きてる言うんは？」

「おそらくね。そして、彼女たちを起こせるのはたぶん夜天の書の主たるはやてだけだよ……まあ、はやてが信じてくれないとそもそも始まらないけど」

「……信じていいんか？いざ、現実に帰って嘘でしたなんて言われたら私、独りになつてまう」

はやては、長く悩んでからそう口にする。

だが、そんな独白を晶は一笑した。

「独り？可笑しなこというなよ、はやて。なのはちゃんたち、友達がいるだろ？」

「可笑しい！きつと、なのはちゃんたちも怒つとる、許してくれへんよ……」

「だったら、ちゃんと頭下げて謝らないとな。兄ちゃんも一緒に謝つてやるよ」

「え？兄ちゃん？」

晶の言葉に含まれていた可笑しな単語。

はやてには、どういふことかわからなかった。

「おいおい、もう主観でだけど5年もはやての兄やつてたんだぞ？」

「私の家族になつてくれるんか、晶君？」

「『君』じゃないだろ、はやて？」

「あ、ははは、そうやね、兄ちゃんッ」

はやては、涙を滲ませ晶をそう呼んだ。

すると、彼女はその場へたり込んでしまった。

「あ、あれ？うれしすぎて足に力は要らんようになってしまったんかな？立てへん」

「俺が連れてつてやるから安心しろ」

「うん・・・え？兄ちゃん、いつのまにガイバーになったん？」

「ん？ああ本当だ。でもまあ、元々この世界に来る前は殖装してたから気にする事でもないか」

「あ・・・」

「ん？どうした、はやて？」

「いやな・・・これお姫様抱っこや思うて」

「もしかして、おんぶの方がよかったか？」

「ん、別にそうやないんや。ただ、シグナムにはやってもろうたことあつたけど、男の人にしてもらうたんは初めてや思つただけや」

そう言うとはやては、晶の首に両手を回した。

一方、彼も彼女がすっかりと手を回したのを確認してからゆっくりと立ち上がり、辺りを見渡した。

「さて、どうやってここから出ればいいんだ？はやてはわかるか？」

「わからん」

「そっか・・・だったら、この沼に試しに飛「待ちなさい、2人とも」？」

晶がそう口にした時、彼らを呼び止める声があった。

「お父ちゃん／父さん」

「ここを出て行くのだから？その前に晶、お前に会わせたい人がいる、着いてきなさい」

史雄は、そういうと2人の返事を待たず、歩き出した。

「どうするん、兄ちゃん？お父ちゃん、行ってまうよ？」

「……行ってみよう、はやて」

晶は、少し迷って沼の水面を見てから史雄のあとを追い始めた。そして、すぐに何処に向かっているかわかった。

何せ、史雄が行く方向は、晶の高校しかないからだった。

だから、すぐに校門に辿り着き、校舎の中へと足を踏み入れ階段を上り始めた。

「なあ、お父ちゃん。みんなに何か伝える事ない？」

「そうだな、シグナムとザフィーラには家族を頼むっと。ヴィータにはたまには素直になりなさい、誰に対してかは、はやてならわかるだろ？」

「うん、ちゃんと伝えるよ、それでシヤマルには？」

「う、うむ……」

史雄は、頬を指でかき照れながら言った。

「こんな中年太りしたおじさんと結婚してくれてありがとう、愛しているっと言っておいてくれ、シヤマルに」

「うん、しっかりとみんなに伝えるよ、お父ちゃん」

「ん、頼んだよ、はやて」

史雄は、階段を降り晶の腕の中のはやての頭を撫でた。すると、それまで無言だった晶が口を開いた。

「父さん、ごめん。俺、父さんを・・・」

「あのことが気にするな・・・と言っても無理だな」

「当たり前だろ！！俺は、この手で父さんを」

「あれは、どうしようもなかった事だ。私は自分の体の自由が無く、お前もその所為で意識を失っていた。私たちの力ではどうしようもない事だったんだ。私は、お前を恨んではないが、お前に辛い思いをさせてしまったことには悔やまれる」

「父さん」

「さあ、着いたぞ」

そういうと、史雄は屋上の扉の前に立ち、道を2人に譲った。

晶とはやてが、横を通り扉に手を掛けたとき、史雄の声が聞こえた。

「晶、はやて、現実には辛い事も多いだろう。時に逃げてもいい。だが、逃げたならその後もう一度立ち向かうんだ。周りの人が2人を支えてくれる。2人が幸せになれることを微力ながら祈っているよ」

「お父ちゃん／父さん」

だが、振り返ったときには、そこに史雄の姿は無かった。

晶は、史雄の最後の言葉をかみ締め言った。

「さ、行こう、はやて。一度逃げたんだ。今度は立ち向かう番だ」

「うん」

そうして、2人は扉をくぐり、屋上へと出た。

そこで目にしたのは、屋上の中央にオブジェのように置かれた巨

大な物体と晶にとって忘れられない人物の1人が待っていた。

「やあ、深町君、久しぶりだね」

「お、小田桐さん！」

「誰、兄ちゃん？」

「あ、ああ、クロノスに誘拐されて協力を強要されながらも反抗を志し、俺たちを助けてくれた恩人だよ」

「そうなんか、はじめまして私、八神はやて言います、こっちに居る晶兄の妹です」

「私は、小田桐佳雄という。はじめましてお嬢さん」

2人が挨拶をしているのを見ながら晶は、はやてに言えなかった事があった。

小田桐がすでに故人でありどうして死んだのかその事を言い出せなかった。

つづく

セック(後書き)

地震、皆さんは無事でしたでしょうか？

幸い私は、せいぜい地震発生時の揺れで車酔いのような状態になっただけでした。

カクセイ（前書き）

土日は、法事やら何やらでパソコンに触る時間がありませんでした。そこで急遽、今日投稿しました。申し訳ありません。

カクセイ

リリカルガイバー 47話 カクセイ

「さて、君たちは急いでいるし挨拶はここまでにして、本題にはいる。君たちにここに来てもらったのは、コレを晶君に渡すというよりは知らせると言った方が正確か」

「コレって、その大きな蛹のような物ですか？」

「ええ？兄ちゃん、私には卵に見えるで」

「ほう・・・君にはやはりそう感じるかね。何せコレは、晶君の蛹でもあるのだから」

「ふえ？兄ちゃんって虫やったんか？」

「いや、俺人間・・・のつもりだけど」

はやての言葉に晶は、反論したが途中でガイバーの力で今の自分が人間であるという事に自信がもてなくなった。

彼女も晶の傷ついた様子に慌てて弁解する。

「あ、いや・・・ただの冗談や無いか、本気にせんというて」

「・・・コホン、コレの呼び方は後ではやて君よく話し合ってから決めるといい」

「はい/そうですね」「」

小田桐の提案に2人は同意し、彼もこれで続きの話が出来る様になつた。

「では・・・正直に言おうコレの中身については、私にも正確にはわからない。だが、これだけは言える。晶君が求めていた”力”だ””力”」

「そう、君が瀬川君たちを護るために欲したものだよ」
「コレが、俺の……はやて、ちよつとごめん」
「うん」

はやてを地面に下ろした晶は、蛹に近づき自然と手を伸ばしその外殻に触れた。

その時、蛹が胎動し晶を中へと引き込んでいく。

「う、うわッ!？」

「兄ちゃん!？」

晶は、それになす術も無く取り込まれ蛹が閉じてしまう。

未だには下半身が言う事を利かないはやてもそれを見ていることしか出来なかった。

そして、近くに居た小田桐にはやては腕を使い這いより掴みかかった。

「どついうことや、小田桐さん!？兄ちゃんに何をしたんや!!」
「安心したまえ、ただ彼は在るべき場所に戻っただけだよ。力を得るために」

「それって……」

「晶君がこちらの、もちろん現実の方の世界に来る前、彼は深手を負ってね、こちらに来た時はあの中で再生していたんだよ。本来なら完全に再生するまであの中に居るはずだったんだが、近くにあったジュエルシード……あれが暴走して蛹を取り込もうとしたのさ。まあ、逆にコントロールメタルの制御下に入ってしまったてね、晶君の願いを叶える手助けをする事になった。力を求める一方ではやて君が言っていた様に「昔の様な平凡な日常に帰りたい」という願いも彼にはあった。それをジュエルシードが叶えたんだよ」

「それって、兄ちゃんが私らと同一年ぐらいだった事と関係あるん

「ああ、さつきも言ったように深手を負い再生中の彼を本来の姿で外に出すことは出来なかった。そこで彼の記憶の中から幼い頃の姿を呼び出しその姿にして外に出し、蛹はガイバー同様、異空間内で成長することになった。そして、今は彼とのフィッシングをしているところだ。それが終われば出て来る。さて………」

「?どうしたんですか」

小田桐は、話が一段落するとはやてに視線を合わせるため屈んでいた体を立たせた。

「何、私の役目は終わった。もう行くよ」

「あ、あの!さつきはすみませんでした。何も知らなかったから私………」

「いいさ、驚くのも無理はない……それより晶君に伝えて貰えるかな?『後は頼む』と」

「?はい、わかりましたけどどういことですか?」

「………」

小田桐は、はやての質問に答えず歩を進めたが途中で振り返った。

「そうそう、言い忘れていたが君の足が動かなくなったのは、君が現実に帰ろうと思ったからだよ。この世界では想いが姿を形作るからね、君は本来の状態に戻ったんだ。あと、ここからの出口だがあの沼で間違いない……それでは今度こそお別れだ」

小田桐は、そう言うとはやてが止める暇も無くその場で姿が掻き消えた。

そして、数分、はやては1人で晶が出て来るのを待つことになりその時がやって来た。

蛹が開き中から人影が出てきたのだ。

「……………」

「……………兄ちゃん？えらい大つきくて、ゴツゴツしとるけど」

「ああ……………本当だ、随分姿が変わったな」

晶は、はやてに言われ自分の手や肩、足など、見える範囲で確認する。

その姿は、アリサたちを救出した巨人そのものだった。

「え〜と……………心配かけたかな？」

「当たり前やろ！？その所為で小田桐さんに迷惑掛けてしもつた」

「ごめん、ごめん、俺もああるとは思わなかったもんで……………ところでその小田桐さんは？」

「えっと、消えてしもつた。私の足が突然ここで動かなくなった事やあの沼が出口だつて教えてくれて」

「そう……………」

「それと兄ちゃんに伝言があるんや『後は頼む』やて。どういっつゝとなんやろね？」

「……………そっか」

晶は、その言葉を神妙な顔で受け取る。

だが、やはり事情を知らないはやてには何のことなのかかわからず彼がどうしてそんな顔をしているのかが気になった。

「なあ、兄ちゃん何で「はやて、急いで戻ろう。出口も教えてもらったんだし」っ、っん」

晶は、はやてを再び抱える屋上を飛び立ち沼の上で一度静止した。

「はやて、一応息を止めておいて」

「うんスウーハアースウーッ」

「行くよ?」

「(コク)」

そして、2人は沼へ潜っていき、世界は終焉^{ユメ}を迎えた。

黒に包まれた何処かそこに車椅子に座り眠るはやてとその彼女を見守る夜天の書の意思の姿があった。

「.....」

「主、安らかな眠りを。悲しい現実をすべて夢へ、幸せな夢を見てください」

「.....プツハアーッ
ハアハア.....空気が美味しい!!」

「主?」

「ってここ何処や、兄ちゃん!?!.....兄ちゃん?」

はやてが突然飛び起き、深呼吸を繰り返す様に夜天の書の意味は困惑気味だった。

また、はやても沼に入った後、目を覚ましたらこの良くわからない場所にいた。

しかも、一緒に出たはずの晶の姿が無く、きよろきよろと彼を探す。

「深町晶は、ここにはいません」

「あ、あんた、ちょうどええ、私らを現実に帰して」

「無理です。すでに私は肉体の制御権を失い、夜天の書も暴走の段階に入りました。私に出来るのはこうして主の眠りを見守る事ともう一度主を優しい夢へと誘う事だけ。さあ、心安らかに目を閉じ

てください」

「いやや」

「何故です？主は望まれたはずです。悲しい現実を無かった事にしたいと」

「ああ、そうや。そう思うて一度は逃げたんや。でも、お父ちゃんに言われたんや、逃げた後、もう一度立ち向かえつて。それに、私の家族を助けなあかん、そのためには現実に帰らなあかんや」

「家族……騎士達ですか？」

「そうや、それに兄ちゃんとおんたも私の家族」

「私も……ですが私は」

「いゝや、あんたもや。主の言う事はちゃんと聞かなあかんよ？」

「主……」

はやてが、そう言つて夜天の書の意味の頬に触れると白銀の魔方阵が現れこの場所を照らす。

「いつまでも、あんたや夜天の書の意味いうんは変や。かといつて周りが言つみたいに闇の書や呪の書なんて持つての他や。名前を上げる。夜天の主の名において汝に新たな名を贈る、今からあんたは祝福の風、リインフォースや！」

「リイン……フォース……私の名前」

リインフォースが、自分の新たな名を涙を流しながら呟くと魔方阵は一層強く輝き、闇を打ち払った。

そして、今まで見えなかったものが見えた。

それは、巨人、深町晶だった。

彼が現れたのは、闇が晴れ彼とはやてがいた場所とを遮るものが無くなつたおかげだった。

「はやて！」

「兄ちゃん!? 何処行つとつたんや!」

「それはこっちのセリフだ、気づいたら腕の中から居なくなつて、辺りは真つ暗で、ヘッドセンサーにも何の反応も無くて焦つたんだぞ!」

「めんごめんご、そうそう晶兄、改めて紹介するな。この子はリインフォース、兄ちゃんの……姉? 妹? どつちやろ?」

「いや、俺に聞かれても……」

はやての疑問に聞かれた晶は答えを持ち合わせておらず、困っていると当事者から助け舟が出た。

「……私の外見年齢は10代後半に設定されていますが」「そうなんか。だったら、姉でええよね?」

「……好きにしなよ」

「さあ、大事な事も決まったことやし、今度はここを出なな……どうすればええ? リインフォースわかる?」

「現在、外では自動防御プログラムの暴走の準備段階のため、強固な外殻を構成しています。さらにクロノ・ハラウンによって凍結封印されています」

「じゃあ、無理つてこと?」

「いえ、封印されている現在なら単純にその外殻と凍結部を破壊できれば外へと出られるはず、ただ問題も……」

「それつてなんやの?」

「外殻と凍結部の同時破壊にはガイバーのメガスマッシャーがいいのですが、外殻の再生速度が早く脱出は困難かと」

「そんなに早いんか?」

「はい、それに再生中に触れると外殻に取り込まれ兼ねません」

「……任せる、俺が何とかする。ようは、通れるサイズの穴を維持すればいいんだろ?」

「はい」

「何とかできるんか？」

「出きるから言ってるんだ。兄ちゃんを信じろ」

「うん」

晶は、はやての頭を撫でながらそう言った。

「ところで、リインフォース。スマツシャーでないと破れないのか？」

「いえ、それに相当する火力が他にあるのでしたらそれでも……ですが、データ上のガイバーの武装では……」

「問題ない。さっそく、この力を試すときが来た、それだけだ。リインフォースははやてを連れて外に出る事をだけを考えるんだ、何があっても」

「……はい」

晶の含むような物言いにリインフォースは、何かを感じ取り神妙に頷く。

そして、それぞれが最適なポジションに移動する。

「はあくあく、まさかはやてが『晶兄、特撮ヒーローみたく技名を叫んで』なんて言ってくるなんてな……」

晶は、呆れながらもまあいいかと思っていた。

「……やるか」

晶は、両手の5指を迎え合わせたまま前へと突き出し左足を一歩下げ、腰部と新たに追加された2基の重力制御球を起動させチャージを始める。

「プレッシャーカノン」

そして、最大までチャージした力を両5指の間から開放した。

「ギガマキシマムッ！！！」

その力は、外殻と凍結部を粉碎し現実の空への道を作り出した。

つづく

ヒカリサスセカイ（前書き）

はやての晶の呼び方を兄ちゃんに変更しました。
それに伴い他の所でも修正しておきます。
また、晶のシグナムの呼び方は姉さんです

ヒカリサスセカイ

リリカルガイバー 48話 ヒカリサスセカイ

開かれた空への道。

そこに向かって飛ぶ晶たちだったが、その道を驚異的な再生速度で外殻の穴が軽自動車のタイヤぐらいになった時、リインフォースは制動をかけ速度を緩めてしまった。

「間に合わない……」

「リイン……」

再びリインフォースとその腕の中にいるはやても諦め始めた。その間にも穴は、塞がっていきどんどん小さくなっていく。だが、まだ諦めていない者がいた。

「別の方法をかん「まだだッ」深町晶……」

「ッ!!!」

「アカンって兄ちゃん！無茶せんといてッ」

晶は、速度を緩めることなく彼女らを追い越し外殻に突進する勢いだっただ。

はやての言葉を見殺した無謀とも言える突撃。

しかし、それは無謀でも無茶でもなく勝算のあるものだった。

「ぎぎぎりぎりセーフ」

「……」

晶の言葉通り間に合っていた。
閉じかけた穴に両手を掛ける事に成功していたのだ。
そして、彼は両腕に力を入れる。

「ん……ぐぐぐぐツ!!」

「ア……アホッ、兄ちゃんのアホ!何しとんねんツ」

「そうです。そんなことをしていれば外殻に……ツ」

「大丈夫ツ大丈夫。この程度でどうにかなるような体じゃないかッ
らああア!!」

2人の言う通りだった。

晶の腕は、触れている所から外殻組織に飲まれていつている。
しかし、彼はそれを何でもないという態度で力を入れ続けた。

晶の腕力と外殻の強度。

その2つが拮抗し、彼の唸り声が響いていた。

だが、その拮抗も長くは続かなかった。

……ブチッ

「うおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」
ブチッブチブチブチブチッ

組織結合が千切れていく音と共に裂け目が広がっていく。

さらに晶は、足をそこに掛け全身を使って引き裂いていった。

「あああああああああああああああッ 行けリインフォース、

光差す世界へ!」

「ッ」

晶の合図と共にリインフォースは、飛び立った。

彼もそれを見送るとすぐに両手両足に絡み付いてきている外殻組織を力尽くでブチブチと引き千切り外へと出ようとした。

だが、引き千切った端から再生し繋がり増殖し、四肢に絡みつく太い縄のようになり晶の捕らえる。

「ッこうなつたらッ!」

「やああッ!」

晶が、ヘッドビームで絡みつく外殻組織を焼き払おうと思った時、気合の声と共に現れた金色の閃光、フェイトが外殻組織を切り裂いた。

だが、それでも再生し再び彼を、そして彼女を捕らえようとするの、
薫を伸ばす。

「なのはッ」

「シュート!」

晶たちを捕らえようとした薫を焼き払うなのはのディバインバスター!。

その隙に、2人は薫の薫の届かない場所まで退避した。

そして、そこになのはもやってきた。

「なのは、ありがとう。何も言っていないのに合わせてくれて」

「夜天の書の意味さんと戦ってる時、いっぱいやったことだったからフェイトちゃんがどうしたいか何となくわかったの……ところで」

「晶……だよね?」

フェイトもなのはも確信を持ってないでいるため質問。

晶は、どうしてそんなことを聞くのか一瞬困惑したがすぐに今の

自分を思い出し答えた。

「うん、そうだよ」

「ホッよかったあ・・・でも、その姿は？」

「2人みたいに新しい力を手に入れたんだ。名前は・・・そうだな、ギガンティック。そうガイバー・ギガンティックってこれからは呼ぶことにするよ」

「へえ～～～、ギガンティックってなんか強そうだね」

「うん」

「あ、そうそう、2人ともありがとう。助けてくれて」

「にはははは」

「～～～～ツ」

晶が2人の頭を撫でるとなのははくすぐったそうに笑い、フェイトは頬を朱に染め照れていた。

「そういえばはやては・・・ああ、なるほど。姉さんたちを起こしてたのか」

晶は、2人を撫で続けながら辺りを見渡すとリインフォースに抱かれたまま魔法陣を展開しその周囲を再構成されたシグナムたちが取り囲んでいた。

一方、クロノとユーノ、アルフは、防御プログラムの再封印に当たっていた。

晶が開けた大穴から凍結部にひびが広がっていき、封印の意味を成していなかったからだ。

だから、クロノは、無理を押ししてあの魔法をもう一度使い封印しようとする。

「エターナルコフィン！！」

クツ」

「クロノ!?」

「おっと・・・全く無茶するね。魔力がすっからかんじゃないか」

クロノは、エターナルコフィンを発動させると急激な魔力の枯渇によって飛行を維持できなくなり墜落しそうになった。

そこをアルフが救いあげたのだ。

だが、クロノがそんな状態になってまで為そうとした封印が失敗していることにまだ気づいていなかった。

騎士甲冑を纏いリインフォースとユニゾンしたはやてに再構成されたヴィータは、彼女の名を呼びながら泣きついていた。

はやては、そんなヴィータを優しく受け止めている。

そして、そんな2人を見守るシグナムたちの目にも涙があつた。

特にシャマルは、嗚咽を漏らし泣き崩れそうなのをシグナムに支えられていた。

なぜなら、彼女たちにもあのユメの世界の記憶があり、再構成の際ははやてが史雄の遺言を伝えたからだつた。

「.....」

「兄ちゃん。無事でよかつたわ。なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな。私たちがいろいろ迷惑掛けて.....」

「うんうん」

「平気」

はやてたちの下に移動して見守っていた晶たちに、はやてはヴィータをあやしなから謝罪する。

また、晶の元にはシャマルが泣きついていた。

「晶君ッ文雄さんがッ文雄さんがッ!!」

「……………義母さん」

晶は、ユメの中でも照れもあり滅多に口にする事の無かった『義母さん』と呼びシヤマルを受け止める。

しばし彼の胸で泣いていた彼女もだんだん落ち着いてきたのか、涙を拭きながら顔を上げた。

「……………ごめんなさい、晶君。君も悲しいのに私……………」

「いいんだよ。俺はもう乗り越えたから」

「そっか……………」

一方、ユメの中での生活を知らないのはとフェイトは困惑していた。

晶はシグナムたちを家族として接し、彼女達もそれが当たり前のようにしているからだ。

だが、今のシグナムたちの様子からその事を聞く気にはなれず、後で聞こうと2人は思った。

「ハアーハアー……………水を差して……………悪いが次元管理局……………執務官クロノ・ハラウオン……………だ」

アルフに支えられながらやってきたクロノ。

彼が、用件を言おうと息を整えていると防衛プログラムに動きがあった。

凍結部が砕け、黒い外殻も割れ中から防衛プログラムが実体化した怪物、夜天の書の闇が現れる。

「ば、ばかな……………確かに僕が再封印したはずッ」

「行くか」

「晶君？」

それを見た晶は、シャマル達から1人離れる。

「俺がアレを抑えてる内にどうにかする方法を考えて」
「待てッ」

シグナムの制止を聞かず、晶は闇に向かっていく。
そして、小手調べにヘッドビームを放った。

「　　ッ・・・弾かれた？ッ!？」
「ggU1:~!!」

闇は、言語化できない声を発し辺りから生えている触手から晶に向かって砲撃を開始する。
慌てて回避していく。

「先走るなッ」
「鋼の軛ッ」
「こんつのおアホ兄貴!!」

シグナムの接続剣が、ザフィーラの拘束条が、ヴィータの鉄球が触手を破壊した。

そして、3人が晶の所に集まってきた。

「全く、私の制止を無視するとは」
「奴は物理、魔力の複合4層式バリアで護られているのだ」
「だってのに1人でかつこっつけやがって!!」
「す、すみません」

3人の迫力に晶は、思わず敬語になってしまう。

「我らは家族だ。もっと頼れ、晶」

「……………うむ」

「そうそう」

「……………ごめん。改めてアレを相手にするのに協力してくれない？」

「」「」
「」

晶は、もう一度謝ってから協力を3人に頼んだ。

つづく

イジ

リリカルガイバー 49話 イジ

シグナムたち3人の攻撃で、海面から生えていた触手が砕かれ攻撃手段を失っている防御プログラム。

その間に晶たち4人は、作戦会議を終えていた。

『まず第一層は 』

『はいはいッあたしがやる!』

『ではヴィータ、お前に一番手を任せる』

『ああ、とっておきのをぶち込んでやるよ!』

『いくぞ、グラーフアイゼンッ』

【Gigantform】

『轟天爆碎!』

ヴィータが掛け声と共に振り上げたグラーフアイゼンは、振り上げきった時にはその姿をギガントの名に恥じない巨大なハンマーへと変貌していた。

『いくぜ、あたしのとっておきいッ・・・ギガントオシユラアアア
ツクー!!』

ヴィータは、自身の何百倍もありそうなハンマーを渾身の力を込めて振り下ろす。

そして、見事一層目の物理バリアをその圧倒的な質量を持って粉砕してみた。

「へへへ、どうだあたしのとっておきはッ」

「は、はは豪快ですごい一撃だな、ヴィータ」

「そつだろつそつだろつ」

自身の成果を晶に自慢するヴィータに彼は乾いた声で返した。

彼女もそんな彼の反応に「満悦だ」。

「・・・そら次は兄貴の番だろ？がつつんとやってやれ」

「あ、ああ」

ヴィータに諭され動き出す晶の両肘には、2メートル半ほどに伸ばされた高周波ソードがあった。

そして、彼の脳裏には先ほどの会議での会話が甦る。

『2層4層は晶、お前がやれ』

『は？いや普通、魔力の層は魔導師じゃなくて騎士の姉さんたちの方が適任じゃ』

『何を言っている。お前こそが適任だろつが・・・』

シグナムに呆れ顔で言われた事。

今晶は、それを成す。

「ッ」

急降下と共にバリアに接触させた右の刀身。

接触と同時にバリアは左右に裂けていき、ある程度引き裂くと右腕を振り切る。

その時には、近接用の触手が晶に襲い掛かるが、捉えられる前に再び彼は返す刃の左の高周波ソードで上昇しながら同様のことをやってみせる。

そして、彼が防御プログラムから離れたときには、大きな×印にバリアが破られていた。

だが、元の場所に戻った晶を待ち受けていたのは、ダメ出しだった。

「なんだよ、そんな図体してるんだからもっとド派手なのかと思ったら案外地味だな」

「じゃあどんなの期待してたんだよ、ヴィータは？」

「ん？そうだな・・・いつそスマツシャーでも撃ってみたらどうだよ？」

「はあ！？ダメツそれは絶対ダメ！」

「・・・何そんなに必死になんてるんだよ？」

「強化されたスマツシャーなんて海面方向に撃ったらどうなるか想像してみ」

「・・・！！！」

「わかったみたいだな」

ヴィータの表情から晶が何故拒否していたのか気づいたようだった。

一方、2人がそんな会話をしていた頃、シグナムとザフィーラはつとつと。

『3層目は私が担当するが、その頃には触手も再生しているはず。』

その時は

「そういう時のために我がいる」

「ggghjjあjwれおいあッ」

「砲撃なんぞ撃たせるものか！！」

再生した砲門を使おうとする前に待機していたザフィーラが再び鋼の輓で薙ぎ払った。

そして、彼より上空には、シグナムがいた。

「弟たちの前で情けない姿は見せられんぞ、レヴァンティン」

【B o g e n f o r m】

レヴァンティンの柄に鞘が合体し刃、連接剣に続くレヴァンティンの第3の姿、弓へと姿を見せる。

続けて弓の上部と下部で同時に二発ロードし番える魔力の矢が生成され、限界まで引き絞り狙いを定めるシグナム。

「翔けよ、隼！」

シグナムの掛け声と共に放たれた矢は、音速を超え3層目のバリアに到達、命中し爆炎と衝撃波が発生しバリアを破壊した。

そして、シメの晶へと目を向けた彼女が見たのは、想像していなかったものだった。

「何をするつもりなんだ、あいつは」

少し前、ヴィータに地味だと言われ考えさせられた晶は、彼女のギガントシュラクをヒントに準備を始めた。

ギガンティックの不可能ではないとわかっていても、実際にできるのかわからなかったがやはり妹からのダメ出しで火が着いたようだった。

「よぉ〜ッく見てろよ、ヴィータ。お前が納得するようなものを見せてやる！！」

「おっ」

晶はひたすら伸ばし続けた。

ただ愚直にそれだけに集中して。

「お、おいもう良いんじゃないか？」

「もっとだ・・・もっと伸びろオオオ!!!」

ヴィータが止めるのも聞かずただただ集中した結果、馬鹿げた物が出来上がった。

「いくぞッ」

片腕だけでは支えきれず両手で構えたソレと共に海面へと防御プログラムへと急降下していく。

防御プログラムの全長に匹敵する長さにまで伸びた右腕の高周波ソードと共に。

「真向」

「ッがjをいあ:hjj!？」

「唐竹割りいいいいいい!!!」

「『『『『『『『』』』』』』』」

絶叫を上げながらバリアごと文字通り縦に真っ二つにされる防御プログラムと海中へとダイブしたギガンテック。

その光景を啞然とこの場とアースラ、テスタロツサ家で見ている全員が言葉を無くしていた。

そして、ヴィータの下に晶が海水を滴らせ今だにメジャーの用に巻き戻している最中の高周波ソードと共に戻ってきた。

「どうだったヴィータ？これなら納得したたる？」

「……………」

「お〜い」

「……………」
「……………おい、ヴィータん」

晶は、反応の無いヴィータに以前冗談で言っただけで彼女が嫌がった呼び方で呼んでみた。

すると効果があったのかヴィータは、顔を真っ赤にして噛み付いてきた。

「だ、だ、だ、誰がヴィータなんだ！2度とその呼び方をするなって言っただろうがー！」

「いやあ、全然反応してくれないから聞こえてないのかと。それでどうだったさっきのアレは？」

「ああ、十分だよ。十分すぎるぐらいだ」

晶は、ヴィータのその言葉と表情にマスクの下でしてやったりという表情をした。

「っと、ほらヴィータ、ポーっとしてないで攻撃する。姉さん達もー！」

晶は、こうしている間にも折角切り裂いた箇所が修復されている事に気づき3人に声を掛ける。

その声でやっと皆が動き出し、シグナムはシュランゲバイセン・アングリフを用い全体を攻撃し、ザフィーラは側面及び触手を攻撃、ヴィータと晶は切断面をシュワルベフリーゲンとヘッドビームで攻撃して時間を稼いでいた。

その時、晶はあることに気づきシグナムに念話を繋いだ。

『姉さん、こいつの上のほうに人型の部分があるんだけど見える？』

『ああ。だがそれがどうかしたか？』

『あれって弱点じゃないかな？他の所と違うし』
『そんな見え透いた所があるわけ無いだろ？』
『だったらあたしが確かめてやんよ』
『ヴィータ、聞いてたのか』
『さつきからチクチクチク攻撃してばかりだったからな一発ぶち込んでくるぜツ』

念話に割り込んできたヴィータは、シグナムが何か言う前に動き出し晶の見つけた女性の人型に向かっていく。

そして、グラーファイゼンを彼女の頭に向かって振り下ろす。

「jggkあ；；s！」

【Flammeschlag】

「どうだ、効いたかな？」

「がjsーッ」

「ちい効いてねえッ」

フランメシユラークによって人型は、激しく炎上する。

だが、彼女は燃えながらも捕まえようとヴィータに手を伸ばす。

何とかその手から逃れたヴィータだったが、彼女を捕らえようとしているのは2本ではなかった。

「なあ！？」

「l；；かfj」

「クツソ放しやがれ！！」

ヴィータの周囲からも幾つもの触手が伸び彼女を捕らえてしまう。

「ヴィータ、全方位防御だ」

「……なるほどッ」

【Panzerhinderis】

飛び出して行ったヴィータを追ってきていた晶がその光景を見て声を上げると、彼女も彼が何を言いたいかわかりその指示に従った。すると、展開されたパンツァーヒンダネスによってヴィータを捕らえていた触手が切り離される。

だが、触手もただやられるだけではなく今度はパンツァーヒンダネスごと巻きついていき触手の繭を形成してしまった。

「クソコレじゃあさつきと対し「全力防御！！！！」ッ」

外の光景はわからなかったが、その晶の声と長年の培ってきた勘によって防御に集中するヴィータ。

そして、すぐにすさまじい音と衝撃が彼女を襲い繭が破壊された彼女のパンツァーヒンダネスにも亀裂が入った。

つづく

イジ（後書き）

ギガスマツシヤーを海面に向かって放つ。

それについてヴィータが何を想像したかは、震災から一ヶ月しか経っていないので配慮して文にはしませんでした。

なので皆さんでスマツシヤーによって海鳴市がどうなるか想像してみてください。

ササヤキ

リリカルガイバー 50話 ササヤキ

「さつき俺に先走るなって言った本人が先走ってどうするんだッ」

晶は、そうぼやきながらヴィータを追っていた。

しかし、爆音が彼の耳に入る。

そして、炎に包まれた人型だったが、その状態で尚ヴィータを捕らえようと動きを見せる。

それに対し離れようとした彼女だったが、周囲から生えてきた触手がそんな彼女を絡めとった。

「全方位防御だ！」

晶は、ヴィータにバリアでその触手を切り放せつと言う意味で叫ぶ。

彼女もそれを察し張ったが、焼け石に水の様なものだった。

なぜなら、バリアごとさ触手が絡み付いていき繭のようなものになっちゃったからだ。

「おいおい、あれじゃあ自力での脱出は無理じゃないか。でも、ギガンティックの武装じゃ強力すぎてバリアが持つか・・・アレなら大丈夫か？」

晶は、自身の武装で今の状況で使えそうなものは無いかと考えていると1つどうにか出来そうなものを思いついた。

そして、すぐに行動に移す。

右の拳を振り上げ自身ごとヴィータへと向かっていく。

そして、念のために彼女へと防御に集中するように呼びかけ、その拳を、Gナツクルを彼女から少し離れた防御プログラムの体表に叩き込んだ。

「ハアツ!!」

その光景を見たのはやシグナムといったこの場にいた者達は、その姿を後に小型の隕石が落ちたみたいだったと語る。

まさにそれにふさわしいほどの威力を秘めていた。

激しい衝突音と衝撃が周囲を襲いヴィータを捕らえていた触手は、すべて吹き飛ばす。

さらに、有り余ったエネルギーは彼女の全力のパンツァーヒンダネスに亀裂を作るほどだった。

「……………もうちょっと加減した方がよかったかな?」

晶は、その亀裂を見てそう洩らした。

「これで加減してたのかよ!?!」

ヴィータは、晶の呟きを聞いて驚愕する。

自身の全力のパンツァーヒンダネスに亀裂を作ったからなどという事ではない。

逆によくその程度で済んだと自分を褒めてもいいくらいだ。

なぜなら、晶を中心に防御プログラムの体表は大きく窪み、所謂クレーターが出来ておりヴィータはその内側にいたからだった。

「まあねっと、ここから離れるぞヴィータ」

「お、おう」

クレーターがぼこぼここと再生して塞がり始めたことに気づき2人は、その場を離れ始める。

その時、晶にはユーノから念話が届く。

『晶、作戦が決まったよ』

魔導師ではない晶以外は、シャマルの通常の念話によって内容が伝えられた。

その内容は大きく分けて5段階。

フェイズ1、防御プログラム周囲の砲撃用触手の除去。

フェイズ2、敵総体積を出来る限り削る。

フェイズ3、砲撃魔法でコアを露出。

フェイズ4、強制転送魔法でコアをアースラの前に転送。

フェイズ5、アルカンシエルでコアを蒸発。

その内容を伝えられた晶とヴィータは、共に同じ場所へ向かう。

フェイズ1は引き続きファイラが、フェイズ4はシャマルとユーノとアルフの3人が担当する事になった。

また、軌道上ではすでにアルカンシエルのチャージは開始している。

晶たちが担当するのは”フェイズ2、総体積を削る”だった。

そして、辿り着いた待機位置、前後に2手に分かれ防御プログラムを挿む。

すでにフェイズ1は終わっておりすぐに作業を開始する。

「いくぞ、ヴィータ」

「おうッグラーフアイゼン!!」

【G i g a n t f o r m】

「轟天爆砕!」

ヴィータが彼女最大の一撃が放たれる頃、晶も自身の攻撃を始め

ようとしていた。

「周りへの影響が最低限で、敵を大部分を破壊する武装ッ」

晶は特に何か特別な事しているわけではない。

ただ、口部を防御プログラムに向けただけ。

それで十分だった。

晶の意思に従い、口部装甲の一部が展開し普段から露出している分と合わせて4つの金属球がその力を解放する。

そのタイミングは、ヴィータと晶が互いに併せあい同時に放たれた。

「ギガントシユラアアアクッ!!」

「ッ!!」 『ギガソニックバスター』

片や超巨大なハンマーによる殴打による圧殺。

片や対象の固有共鳴周波数と同調する振動波による破壊によって体の半分近くが魔力の塵へと変わる。

この2つの力によって防御プログラムの全体が破壊される。

そして、フェイス3に移行する。

そこにはすではやて、なのは、フェイト、シグナムの4人が砲撃、もしくはそれに匹敵する火力の魔法を準備されていた。

「響け終焉の笛」

「スターライト」

「プラズマ」

「翔けよ」

「『『『ラグナロクノブレイカーノスマッシュャーノ隼!!!』』』」

4人による同時攻撃。

これによって、防御プログラムの体は崩壊していく。

そして、フェイス4。

まず、シャマルが動いた。

彼女は、旅の鏡の前に陣取り集中している。

「本体コア……露出……捕まえ……つた!!」

『だめダ』

「長距離転送」

『コノぼでいデハだめダ』

「目標、軌道上」

「『転送!!!!!!』」

『モットキョウジンなボでい ヲツケンさクカイし ケンさクーケン
さク』

3人の協力によってアースラの前に転送されていく。

その声に気づくことなく。

『 ケンサクカンリョウ。コウほ1、データブソクのタメキヤツ
か。コウほ2、データブソくだガプロとタイぷのでータでセイのウ
ハオチルガコウセイカのう。コウセイをカいし』

転送中に本体コアが変異していく事に気づかずアースラでも発
射体勢が行われていた。

「目標転送されながら生体部品を遅々と再生中」

「アルカンシエル、バレル展開」

リンディの下に様々な報告がされ、彼女も指示を出していく。
そして、転送が完了されたのを確認したリンディは、アルカンシ

エルの最終安全装置を解除する。

「アルカンシエル 発射!!」

放たれるアルカンシエル。

だが、着弾することはなかった。

「目標、転移?!」

「何処だ探せ!」

「アルカンシエルの再チャージを開始しまキャアツ」

エイミイがチャージを始めようとしたときアースラは被弾した。

「どうしたの!?!」

「バレル破損、アルカンシエル使用不能!!」

「ツ艦の下方に反応!モニターに出します」

モニターに映し出されたのは、人に近い姿をした何かだった。

「何なのアレ?」

「生身のまま宇宙空間で活動可能な?ランディあれが防御プログラムなの?」

「.....」

「ランディ?」

「あ.....あ.....あ.....お、仰せのままに、閣下」

声無きささやきに聞いたランディは、うめき声を上げながらそ
う呟くと立ち上がった。

その口元からは、涎が垂れとても正気とは思えない様子だった。

「どうしたの、ランディ!?」

「きゃああ!!」

「エイミィ!?」

悲鳴を聞いたランディが目にしたのは、エイミィを襲っているアレックスの姿だった。

彼の様子もランディと同様だ。

ランディは、とりあえず手近にあった愛用のコップを彼に投げつけこちらに気を向けさせた。

「がつ・・・あゝあゝあゝ」

「今のうちよ、エイミィ!」

「は、はい」

「正気のみんなは、協力して彼らを取り押さえて!!」

「了解」

「こら、大人しくしろ!」

「どうしたんだ、お前ら!!」

ランディたち以外の男性クルーが2人を取り押さえようと組み付くが物凄い力で抵抗していく。

だが、人数がどんどん増えていきとうとう2人は床に押し倒される。

しかし、ランディたちの抵抗は終わっていなかった。

「あゝ・・・あゝあゝあゝあゝッ」

2人は強く呻き声を上げると上に乗っていたクルーたちを跳ね飛ばし、その姿が異形の姿に変身した彼らが露わになる。

その姿を見たクルーの誰かだこつ洩らした。

「ぞ、獣化兵!？」

つづく

つづく

ササヤキ(後書き)

依然言っていた、ギガンティックにふさわしい相手がついに動き出しました。

サイリン(前書き)

最期のところを改変しました。

サイリン

晶やなのはたちは、防御プログラムがどうなったか気になりアースラとの回線を開いているクロノの周りに集まっていた。

だが、彼らが目と耳にしたのは、獣化兵がブリッジを破壊する光景とそれに伴う破壊音と爆音、そして悲鳴。

そして、そんな彼らの心情を表す一言をなのはが口にした。

「ど、どこから現れたの？」

「……………」

それに対する答えをシグナムたちは持つてはいなかった。

だが、晶だけはある可能性に行き着いていた。

（あれはアースラのクルーだ、竹代町や父さんの時みたいに。だとしたら……………）

晶は意を決してなのはたちには今まで言わなかった獣化兵の性質を口にしようとした時、それは起こった。

「……………みんなッ!？」

「きゃあああああああ」

身体に掛かる今だかつて感じたことの無いほどの重圧。

なのはたちの飛行魔法では抗えないほどのその力に海へと落ちていく。

それぞれのデバイスたちも主を守るため体勢を立て直そうとしているが墜落の瞬間を遅らせるだけだった。

しかも、地面へ、圧力に負けて円柱状に海底までの海水が消えた

場所へと落ちていく。

だが、彼らの努力も無駄ではなかった。

「レイジングハートたちが頑張ってくれたおかげでなんとか追いつけた、サンキュー」

【Only here】

墜落していく中で唯一、自由に動けた晶がギガンティックの能力の1つバリアーでなのはたちごと自身を包んで海底へ軟着陸した。

幸い全員が一箇所に集まっていたため、誰も漏れることなくバリアー内に収まっている。

「ねえ晶、何が起きたの今？ 私たち、飛行魔法を解いてなかったんだよ」

「今はバリアーで防御してるけど、半径80メートルぐらいの範囲で重力異常が起こってるんだ、その影響でみんな地面に引き摺り下ろされたんだよ」

「重力異常！？ そんなの自然に起こるものなの？」

「そんな分けないよ、だから何者かの力が働いてるはず」

「・・・晶、僕をここから出してくれ。アースラに行きたいんだ」
「だめだクロノ。どんどん重力異常が酷くなってるし今バリアーを解いたら俺はまだ耐えられるだろうけど、お前も含めた他のみんなが周りみたいに重力で潰されて下手をすると死ぬぞ」

晶が言うように周りの岩礁や海底は、ひび割れ崩れ始めている。

また急に海水が消え取り残された魚貝類たちは、すでに圧死していた。

その光景を見て皆、息を飲む。

「とは言うが、このままではジリ貧だぞ、晶」

「どうにかならないかな晶君？クロノ君、リンディさんやエイミィさんたちが心配なんだよ」

「フン、まだ潰れていなかったか」

それは、空から悠然とした動きで降りてきた。

声からして性別は男だろう。

だが、それは異常だった。

この重力下で平然としている事もそうだが、その姿はまるで

「あ、悪魔や」

「何だこの威圧感は」

はやてたちはその姿に驚き、シグナムたちはそれが放つ威圧感に
圧倒された。

だが、1人だけ別の反応を見せる者がいた、晶である。

「この技まさかとは思った……………だが、やはり
お前か！リヒャルト・ギューオー！！」

リリカルガイバー 51話 サイリン

晶の怒気を含んだ叫びが木霊した。

「しよ、晶君？」

なのはは、戸惑っていた。

普段、あまり怒ることの無い晶がこれほど怒りを露わにしているのは、以前操られていたグレイシアが様々な姿で保存していたフェ

イトの姉たち（アリシアのクローンたち）を見たとき以来だったからだ。

「リヒャルト・ギューオー？それは、このボディーのモデルとなった固体の名だ。まあそう呼びたければ好きにするがいい」

「なに？」

「兄ちゃん、あれ防御プログラムやってリインフォースが言うところよ」

「防御プログラム？・・・ああそうか取り込まれた時に、俺の記憶も蒐集されてて、そこからあの姿を」

「私を前に随分と余裕だな、虫ケラ共！！！」

防御プログラム（以降ギューオー）の全身のグラビティ・ポイントが輝きを増し、それに比例するように周りの重力も強くなっている。

「くっ・・・なのはちゃん」

「な、なに晶君？」

「デイベインシューターを一発でいいから撃てない？ここからアイツの額の結晶へ」

「え、あの」

「ギューオーが、基になってるならあそこが変わらず弱点のはずなんだ。そうすれば倒せずとも集中が途切れてこの重力異常も収まる」

「う、うんやってみる」

デイベインシューターではなくアクセルシューターなのだが、晶の様子からあまり余裕がないと感じあえて間違いを指摘せずに残りの魔力を掻き集めバリアーの外にデイベインスフィアを1つ生成し始める。

一方で、晶は他のみんなにも声を掛ける。

「重力異常が止んだらみんなはフェイトちゃんの家に向かって、あそこを守って欲しい。魔法に対しては強くても物理的には普通のマンシオンだから」

「何を言ってるんだ、晶。あれほどの相手にお前1人で「姉さんたち、もう手持ちのカートリッジないでしょ？」……」

「フェイトちゃん達もリインフォースとの戦いで消耗してるし、姉さんたち同様にさっきの砲撃で使い切ったはず」

「……」

「だったら私は、まだまだ余裕「病み上がりの上始めて魔法を使つたお前は無茶するな」でもでも」

「……こう言っちゃんだけど、はっきり言っただけの戦いではみんな足手まといだよ」

「そういう兄貴は、どうなんだよ？」

「俺？俺は、まだまだエネルギーに余裕がある」

「そうかよ、勝手にしろバカ兄貴」

晶の言うとおり皆、先ほどの攻撃でカートリッジをすべて使い切っていた。

はやても彼の言うようにそれほど余裕はなく実際には、気を抜いたら倒れそうなのだ。

だから、皆納得はできなかったが何も言い返せなかった。

「準備できたよ、晶君」

「じゃあやっちゃって、あとは今言ったようにお願い」

「教えて晶、アイツなんなの？」

「12神将中最強と云われる【重力使い】だよ、フェイトちゃん」

「12神将！？じゃあ、あれが獣神将^{ソアラロード}」

晶の答えを聞いてユーノは呻く。

一方、フェイトはもう1つ聞きたいことがあった。

「……もう1つ聞かせて、晶はどうしてあいつと戦いたいの」「あいつは俺が超えないといけない壁だから……それとクロノ、リンディさんたちを助けに行くんだろ？ だったら、アースラに現れた獣化兵の内、肩の瘤があるやつは筋力は大した事ないけど持っていないけどあれが開いてる時には生体レーザーを撃ってくるから気を付けて。もう一体はごめん見たこと無い」「晶、すまない助かる」

クロノは、晶の情報に感謝する。

「じゃあお願い、なのはちゃん」

「うん。アクセルシューター、シューツト!!」

「チィ!!」

普段より遅いものの十分な速度で飛翔する魔力弾がギョオー、を襲う。

そして、晶の予想通り、彼は額の結晶を守りに動き、重力異常も収まった。

「みんな、あつちの3人をよろしく」

「これが終わったらちゃんと謝罪と説明をしてもらいますからね」

「了解」

別れ際、シャマルは、全員の声を代弁するかのように晶にその声を掛けた。

彼もそれに答え、ギョオー、の元に飛び立つ。

そして、なのはたちもグレイシアたちの元に向かった。

一方、重力加速+プラズマジェットで加速し突進する晶。

「ギョオー!!!」

「小賢しいは小僧!」

【Blitz Rush】

「なっ!? ツ!!!」

だが、Gナツクルがあたる寸前、ギョオー'の姿を見失う。
そして、晶の体の中を何かが通り抜けていった。

つづく

サイリン（後書き）

今回は難産でした。

書き終わったのは、日付が変わる前でしたが投稿は日付が変わって
ました、すみません。

クトウ

リリカルガイバー 52話クトウ

所謂、第6感というのだろう。

ギューオー'を見失つてすぐに晶は、背筋を這い上がってくる悪寒を感じ考える前に身体が動いていた。

「ぐおおッ!　こんつのおお!!」

「フン」

身体を捻っていたおかげでコントロールメタルには掠りもしなかったが、代わりに左肩と左腕の一部が切り取られた晶は、その苦痛に耐えながら振り向きざまに斬撃が来た方向に反撃のヘッドビームを放つ。

しかし、それをギューオー'は、微かに身体を屈ませるだけでやり過ぎし更なる攻撃を放った。

「グラビティ・フリット重力指弾プラス」

【Blitz Rush】

「ぐううう!?!」

加速魔法により常時よりもスピードの乗った重力の弾丸たちは、頭部や肩、胸部装甲などの比較的身体の上部に位置する所ばかりを狙った物ばかり。

それらに対し晶は、バリアーを張ることも出来ず次々に命中していった。

「ハアハア」

「うまく凌いだか」

しかし晶は、咄嗟にコントロールメタルを右腕で庇いダメージを受けたものの致命傷は負うことはなかった。

「今の攻撃といい、先の攻撃……お前……コントロールメタルを」

「当然だろう？ ガイバーを仕留めるにはそこを破壊するのが一番だ。貴様はそれ」

【Sonic Move】

「 を実践しただろう？ 」

「ッ!!」

超高速移動により一気に間合いを積み晶に息が掛かりそうなほど接近したギューは、右手に用意していた重力波を切断波として放つのではなく貫き手としてコントロールメタルに繰り出した。

「ま、間に合った」

「……これも凌ぐかつ」

「があっ」

「 忌々しい。だが…… 」

必殺と思われた貫き手を晶は、咄嗟に頭を左に逸らす事で凌ぐ。だが、その代償は左の側頭部の膨らみ（ヘッドセンサーの辺り）を大きく抉られた。

さらに脳の損傷も避けられたもののギューの攻撃は続き、今度はその抉られ傷口へとハイキックが決まり弾き飛ばされる晶。

しかも、ギューは、何かに気づいた様子で蹴り飛ばした晶を追う。

一方、蹴り飛ばされた晶は、海鳴市内のビルの中階に窓や壁を突

き破り室内の机やOA機器などをクッション代わりにしていた。

「……クツソ、いつの間にか市内じゃないか。これじゃあはやて
たちを不評覚悟で遠ざけた意味ないじゃないか」

晶は、自身の上に積み重なっていた瓦礫を右腕でどかしながら室内を見てそう毒づく。

だが、一息入れる暇をギユオ・は与えてくれない。
残っている右のヘッドセンサーが局地的な高重力を感知した。

「ッこの反応、まさか!？」

グラビティ・クラッシュャー
「崩地破碎!!!」

ギユオ・の声が聞こえたときにはすでに脱出不能だった。

すかさず晶は、バリアーを展開する。

だが、彼を襲うのは重力だけではなかった。

「ビルの瓦礫がッ」

そう高重力によって地面だけではなく、ビルそのものも崩壊を始め
晶のいる階より上階のコンクリートの重量が数倍にもなって彼を
苦しめる。

しかもバリアーの出力は、海上で使用したときより低下していた。

「クツ左側のバリアーが軋む!」

左肩と左腕のE・Aは、エネルギー・アンブ最初の切断波で損傷し機能が停止して
いるからだ。

そして、晶はその姿をビルの崩壊に呑み込まれていった。

その光景を先ほどまでであったビルの屋上部分で見ていた者がいた、

ギューオー’である。

「今度こそ仕留めたか？如何に奴でも、実質数十トンの重量に飲まれッ！？まだ生きていたかッならば直接、この手で！！！」

【Sonic Move】

瓦礫が起こす粉塵の中、輝く球体、ガイバー・ギガンティックを見つけたギューオー’は、瞬間高速移動魔法を使用して接近、右腕を突き出す。

「バリアブレイクッ！！！」

そして、バリア生成に割り込みをかける魔力を付加することでそのバリアに干渉・破壊する魔法をガイバー・ギガンティックの左側からバリアーに叩き込む。

一時の均衡の後、バリアーは崩壊する。

だが、ギューオー’は、そのバリアーが他より弱っていると知っていたわけではなく、ある事を狙っての位置取りだった。

「死ねッガイバー！！！」

【Blitz Rush】

「ッ！！！」

加速魔法を左腕にかける事でさっきの時よりも早い貫き手がコントロールメタルを襲う。

しかし、ただやられるだけの晶では無かった。

「なッ！？腕で防いだなんて」

「やっとそっちのスピードに目が慣れた」

「そんなこと織り込み済みだッ！！！」

晶は、右手の平を貫かせギュー'の貫き手を防ぐ。

だが、その事を予想していたギュー'は、今一度右手で貫き手を絶対に避ける事も出来ないと言いつつ自信を持って放つ。

なぜなら、晶の左腕が最初の切断波で左肘を切り取られてたぶら下がっているだけという事を先ほどから右腕でしか防御しようと思わず、左側頭部へとハイキックの時さえも左腕を使わなかったことからギュー'は、蹴り飛ばしたときに気づいたからだ。

「……………」

「……………」

「なぜだ。何故左腕が動く！？ガイバーの再生力でもまだ無理なはずだ！！！」

そう、動かないはずだった左腕が動き、ギュー'の右腕を掴んでいた。

「ああ、ついさっき動くようになったんだよ、惜しかったな。それにお前は勘違いしてるんだよ。ここにいるのは、ガイバーじゃない。ガイバー・ギガンティックだってことを。そして、ここからは俺のターンだッ！！！」

「ゲエエエエ！？」

「スピードじゃあお前に負けるけどこうして捕まえてしまえば」

「ギイ！？お、おのれえええええ！！！」

晶は、今までの仕返しだというようにギュー'の腹に膝蹴りを叩き込み、動くようになったばかりの左手に力を籠め彼の右腕を握りつぶす。

ギュー'は、雄たけびを上げながら額のクリスタルに魔力を収束させ、それを放つ。

「させない」

「ガッ!!」

「そして、逃がさない」

アッパーをギューオー、の顎に叩き込み頭を上に向けさせその攻撃を回避する。

また、その反動で離れそうになる彼を晶は、今だ貫かれたままの右手の指にも力を籠め逃がさない。

「これで、お前を超えたぞギュー!!!」

「ギヤアアアアアアアア」

そして、晶は、ギューオー、の額のクリスタルに全力で拳を叩き込んだ。

テストロッサ家

「やったー!!!」

「晶君が勝った!」

「晶、すごい」

ギューオー、を倒した光景を見ていたなのはたちは、口々に晶を称賛する。

その一方、ぐったりとして動かないギューオー、を見て別のことを思う少女がいた。

はやてである。

「ごめんな、おやすみな」

だが、事態はまだ終息していなかった。

「ぎ……さ……ま”ああああa a A A A A ! ! ! !」
「ッ! ?」

ぐつたりとしていたギューオー’ が動き出し、切断波で晶の左足から上へぎつくりと引き裂いた。

しかもその拍子に晶は、右手を離してしまう。

「ユkdジャアライkdfjガ；！ッ！！！」

【f h a l k i o d a】

再生したばかりでまだ本調子ではなかった左腕だったため、本来よりもパンチ力が劣っていた事が災いしギューオー’ の防御プログラムの核を完全に破壊する事ができなかったのだ。

そして、言葉になっていない声を上げるギューオー’ の様子から怒り狂っていることだけは読み取れた。

だからこそ、その行動は、予期せぬ出来事だった。

デバイスの音声も壊れているのか何を言っているのかわからず何の魔法が発動したのかわからない。

そして、ギューオー’ はその場から逃げるかのように何処かへと転移したのだ。

「いったい何処に?!」

晶も慌てて辺りを見渡し、ヘッドセンサーでも探す。

また、念話でグレイシアにも訪ねたりもした。

そして、雲よりも上空から高魔力反応を感知した。

その時には、地上からでもその輝きを星々が集って大きく輝いていく光景が目に来た。

UJU

クトウ（後書き）

次でいよいよギョオー'との戦いが終わります。
結構長引いちゃいました。

にしても、投稿しようとしたらネットがなぜか繋がりませんでした、
なぜだ。

シュウケツ

「j f か l ひう s m r (奴に絶望を与えてやる) ! ! 」

ギューオー' は、ズキズキと痛む額のコアを左手で押さえながら魔力が残留している箇所を巡り魔力を掻き集めていった。

本来ならすぐに身を隠しコアが修復が終わるまで数十年から数百年眠りに着くべきなのだが、それでは彼の気が収まらなかった。

そして、巡り終わると彼はチャージまで時間が稼げる高度に転移し全身のグラビティ・ポイントを射出した。

「 l ; k じゃ ; ; j ふあ s l k 、 あ j k d f h (輪となり、連なり、抑え捉えろ) 」

魔方陣を展開しながら、呪文のように唱えるとグラビティ・ポイントが4つの重力リングとなり、縦一列に並び砲身を形成する。

その一番後ろのリングの中央には海鳴市を覆っている境界の維持に廻っていた魔力もこれにつき込んだ自身の魔力と集めた残留魔力を重力波に変換した塊、そして先頭の重力リングの輪の中に捉えているのは海鳴市。

互い違いに4つのリングが逆方向に回転し輝き、時間が経つにつれその回転速度と輝きが増していった。

そして、回転速度、輝き共に臨界に達したとき、ギューオー' は頭上で両手を組み合い握り合った。

しかし、間の悪いタイミングでシグナムたちの邪魔が入り両腕を消失チャージが一時中断したが、その間のダメージも発射に影響の無い程度に今は修復済み。

「 l ; あ j d グラビティ 」

そして、今度こそ邪魔も入らず拳に残ったグラビティ・ポイントが起動させ両手を砲弾（重力波の塊）に叩き込む。

「ブラスト dk あふえ d!!!」

ギューオー、の怒りを乗せ、晶に避けられぬ絶望を与えるためソレは光の奔流となり重力波リングを1つ潜ることに収束し海鳴市に撃ち出された。

リリカルガイバー 53話 シュウケツ

少し前のテストロッサ家

ここからでも、街の異変が察知していた。

「まずいわね、結界が解除されてるわ」
「じゃあ、突然周りが騒がしくなったのもそのせいなんだ」

グレイシアとアリサの言葉がその異変を表している。

ギューオー、が結界の維持を破棄してわずかの間にパトカーや消防車の音が聞こえてくるようになっていた。

結界が消えたことで、今回の一件でこの街が被った被害が一般の人々にもわかるようになってしまったからだ。

例えば、突然道路に空いた穴に走行中の自動車が落ちたり、避けようとしてブレーキを踏んで玉突き事故が発生したり、一瞬の間にビルが1つ丸々瓦礫の山になりそのことに誰も気づいていなく中で仕事をしていた人々など突然屋外の瓦礫の上に放り出されていて呆然としている。

または、空に浮かぶ晶やアースラから派遣されていた局員たちを見てフライングヒューマノイドだと騒ぐ人もいれば、空高くに浮かぶギョオー' が集めた魔力の塊をUFOだとして撮影している人たちもいた。

「シヤマルさん、この辺りで一番高いビルの高さに合わせて結界を張れないかしら？その分横に広げて」

「や、やってみます」

「母さん、何か方法でもあるの？」

「いいえ私には無いわ。あなたたちには無いのフェイト？」

「え……」

フェイトは、突然の母の問いかけに答えることは出来ない。

グレイシアは、そんな様子を見て状況を改めて口にする。

「フェイトはもちろんなのはさんの砲撃魔法でも届かない高度に相手がいてこちらはその射程内。転移魔法を使って距離を積めてもそのタイムラグの間に発射されそう。そして、あの魔力の塊、概算でスターライトブレイカー20発分はありそうね」

「……………」「……………」「……………」

改めて聞くと絶望的な状況だという事がよくわかり、グレイシア以外誰もが諦めかけようとしている。

「……………逃げましょう。今からでも私たちだけなら」

「でもお父さんたちがッ」

「私も、お姉ちゃんやファリンたちを置いて行くなんて」

「私も鯨島達を置いてはいけない」

シヤマルが呟いた消極的な意見。

それになのは、すずか、アリサは、賛成できない。

フェイトやはやては、安全な所やここに家族がいるので反対する理由がでてこない。

「……あなたたち諦めるのが早いわよ？」

「何言ってるの母さん！？母さんが言い出したことだよ！！」

「あらひどい、私は確かにどうしようもない状況だといったけど諦めていないわよ？だって………彼がまだ諦めてないもの」「え」

グレイシアが指差したのは、スクリーンに映る満身創痍の晶の姿。彼は、何処かの屋上に降り、コンクリート壁に背中を預け胸部装甲を展開していた。

「私たち親子は彼にあの時救われたんだもの、彼がまだ諦めてないならって思わない？」

「うん」

「……そうだよね！いつも晶君、一生懸命私を守ってくれてたもん」

「そういえば私達も獣化兵たちから助けられたわね」

「うん」

「ヘタレの兄貴が頑張ってるんだから、あたしもうじうじしてられないか」

「家族のわたしが兄ちゃんを信じてやらんとな」

「シヤマル、このカートリッジ私が使わせてもらう。それと旅の鏡を防御プログラムの下に繋げてくれ」

「はい！！」

シグナムの要請にシヤマルは、力強く返事をしシュツルムファル

ケンの構えをする彼女の前に開く。

「出口は、相手の23度上、距離は約150メートル、風向きは北北西です」

「了解」

シグナムは、シャマルから伝えられる情報と自身の目で旅の鏡に映るギューオー、へと照準を合わせる。

「翔けよ、はや「待つてシグナム!!!」「ぶさ!?!」

【Sturmfalken】

シャマルの唐突の制止。

だが、止められずにシグナムは玄と矢を指から離してしまった。

「おかげで照準が!?!」

「それがあの瞬間風向きが向かい風が変わってたんですしかも、すごい風速で」

「なッ!?!」

シグナムは、慌ててスクリーン内のギューオー、を確認すると両腕を失っている光景が映っていた。

実際に彼女が狙ったのは、ギューオー、の額のコア。

これで仕留めるつもりだったが、突然の風向きの変更とシャマルの声によって狙った場所より拳二つ分上に逸れた。

だが、偶然にもその瞬間ギューオー、の両腕が上がりそれを消失させていた。

偶然だったものの、時間を稼ぐ事が出来た。

海鳴市 某ビルの屋上。

右胸部装甲は通常のように手で展開させているが、左胸部装甲はギューオー' が晶から逃げる際に放った切断波でその筋繊維を切られ展開できなかつたため右腕で繋がっている繊維ごと引き千切りレンズ体を露出させている晶。

彼は、壁に背を預け胸のレンズ体をギューオー' に向けながら口走る。

「間に合え!!」

晶の目には、今にも光が振ってきそうなほど輝くギューオー' の砲弾を捉えていた。

だが、彼にはチャージが間に合うか以外にも懸念している事があった。

「持ってくれよ、ギガンティック!」

E・Aの約半数を失い、3基の内、左胸のグラビティ・コントローラーが左脚と左肩、左胸部装甲の筋繊維と共にダメージを負っており出力が安定しない。

だから、晶は屋上に降りグラビティ・コントローラーの負担を最小にしようとし残りのエネルギーもすべてスマッシュャーに廻すつもりだった。

「E・Aフルドライブ!!」

残りのE・Aを励起させ、全力起動させていく。

そして、ギューオー' がグラビティブラストを放ったわずか0.1秒後にチャージを終えた。

「ギガああ！スマツシャー！！！！」

晶の雄叫びと共に放たれたスマツシャー。

最大出力ではないもののその出力は、グラビティブラストに匹敵している。

しかし、凌駕していなかった。

「ぐっうっうっう！！！！」

徐々に押し戻されるスマツシャー。

それと共に、晶にも負荷が掛かり当然背を預けているコンクリートにも輝が入っていく。

彼は、呻きながらも諦めようとはしていなかった。

託された願いや元の世界に戻るためにここで終われるか、家族や友人たちを守ってみせる。

そうした晶の想いに応えるモノがいた。

ギガンティックに融合していたジュエルシールドだ。

ギガンティックのデュアルコントロールメタルの制御下にあるジュエルシールドの機能の中、願望を叶えるというところは作用し今必要なものを呼び寄せた。

「くっこんな時、何が？」

晶はそう予想するが実際には、回転する飛行物体だった。

それは、彼の近くまでくると回転を止め彼の左脚のあった場所に移動した。

「お、俺の脚？何で勝手に……いや今はそんなことどうだっていい、これなら……！」

傷口同士が触れ合うと癒着が始まり瞬く間に表面上は繋がる。

まだ、内側は修復中だが、今はこれで十分だった。

太もものE・Aは両断され機能してないが脛脛のE・Aは無傷。

新たに加わったE・Aによってわずかの差で出力負けしていたスマツシャーはその差を覆す。

「うおおおおおおおおおお!!!」

グラビティブラストを呑み込み押し返し、地上から宇宙へ向けて光の柱が駆け登った。

そして、スマツシャーが途切れ、ギガンティックが強制解除されガイバー?の姿(左腕は無いが)に戻り、屋上に大の字に寝転び叫んだ。

「俺の勝ちだあああああ!!!」

つづく

シュウケツ（後書き）

これにて晶とギューオー'との戦いは終わり。
ギューオー'が出てきますが、（実際にはもう少し、

A' S編もまもなく終わりです。

シンセイ

ギガスマツシャーの光から離れていくものがあつた。

所々に棘のような物があつたり窪みがあり丸くひび割れたクリスタルが付いているモノ、ギユオー' だつた。

「あkl;sjdふあ（まさか土壇場で巻き返されるとは）」

ギユオー' はギガスマツシャーに呑まれる寸前、首から下を失つたものの危機一髪、助かつた。

「かj+dじゃ・がlfk（とにかくどこかに身を潜めなければ）」

光の柱からどんどん離れ、海鳴市から遠ざかっていくギユオー'。彼はこれから休眠に入り、コアと魔力、肉体の順に再生するつもりだ。

そんな時だ、彼を一陣の風が吹き上げたのは。

「」

ギユオー' は、動きを止める。

いや、思考そのものが停止していた、下から吹き上げた風に不審を感じる前に。

なぜなら、彼は、防御プログラムのコアはその機能を完全に停止していたからだ。

そして、その存在の構成が解^{ほど}け、元の魔力に戻っていく。そんなギユオー' を見送る者がいた。

「全くあいつは詰めが甘い。私が気づかなかつたら、後々へ禍根を遺す所だったぞ」

シグナムだ。

今彼女は、抜刀していたレヴァンティンを鞘に収めている。

ギユオー'を倒したことをモニターの前で喜ぶなのはたちを尻目に、シグナムはギガスマツシャーの奔流から離れていく小さな影を見つける。

そこで、静かに部屋の外にシャマルを呼び出し予想進路へと自身を転送させ、急襲した。

つまりギユオー'が風だと思ったのは、下から斬り抜けていった彼女だったのだ。

もともとひび割れていたコアをさらに真つ二つにすることで致命的なダメージを与えギユオー'に止めを刺した。

「……だが、お蔭で私は将としての務めを果たせた」

シグナムは、ギユオー'の全てが魔力へと変わるのを見届けると静かに海鳴市へ、彼女の家族が待つ場所へと飛び立って行った。

リリカルガイバー 54話 シンセイ

12月22日 5時53分

ギユオー'が魔力へと還元してから一夜明け、アースラが受けた損害が明らかとなっていた。

「死者3名、重軽傷者146名です。月村家とバニシング家の人た

ちの口利きで危険な者は地上の医療施設に移送しました」

「そう………今までの『闇の書』関連の事件から考えるとそれだけの人的被害で解決できてよかったと喜ぶべきかしら？」

リンディは、荒れ果てたブリッジの艦長席でアースラの被害状況を聞くと苦笑しながらそう呟き、徹夜で疲れた目を揉み解す。

表には出さず艦長として部下の死を受けとめる彼女だが、やはり内心では心を痛めているのだろう。

そんなリンディの心情を察して、声を掛けるエイミィ。

「艦長………」

「ごめんなさい、今のは不謹慎だったわ、忘れてちょうだい」

「コホン……それでは続きまして、アースラの現時点の状況ですが………」

「そんなに悪いの？」

「はい。アレックスとランディがブリッジで暴れたことで操舵と通信機能はほぼ全滅、復旧は難しいとのこと。また2人以外にも獣化したクルーにより各セクションにも被害があり、主機関の出力は通常時の31%、補助は大破です」

「……ほんとよくないわね」

そう言いつつリンディは、いつもより砂糖を少ない（それでも十分多い）お茶に口を着け顔を顰める。

「ですが、幸いな事にステルス機能は現在も正常に稼働中、この世界に私たちの存在を知られてはいません」

「そうよかったわ……所で彼らの様子は？」

「……現在も武装局員たちが交代でバインド維持、拘束しています」

「話せそう？」

「いえ……今も理性を取り戻した様子も無く、少しでも拘束が緩めば再び暴れ始めるとのことです」

「時間が経てば戻るかもって思ったけど、晶君が言ってたように彼らを戻すことは私たちには無理なのね」

先ほどから話題に上がっている彼らは、元アースラのスタッフたちである。

彼らもまたアレックスとランディのようにギューオー'の思念波によつて理性を失い、目に付いたモノを破壊する様に操られていた。

「ユーノ君たちのお蔭であの人たちをうまく拘束できましたね、艦長」
「ええ」

アースラの救援に来たユーノ達は、ザフィーラとアルフが獣化した人々を牽制しユーノが晶から得た情報を基にうまくバインドしていったのである。

筋力増幅型は念入りに、熱線砲装備型は生体レーザーの発射口を開けないようにバインドし、クロノも逃げ遅れたクルーを誘導し3人の邪魔にならないように苦心していた。

そして、彼らの働きによりアースラは危機から脱した。

「そっいえば、今クロノは……」

「あ、はい、クロノくいくろの執務官は月村邸でヴォルケンリッターの監視を、10時ごろに事情聴取を行う予定です」

同日 14時13分

全てを終えた晶たちはとりあえず月村邸に身を寄せていた。

「いちんにゃ」

ユサユサ

「ん……………」

「起きて…………はよ起きて兄ちゃん」

「んあ…………はやて？ごめん俺すげー疲れてるんだ、もう少し「起きてツツ！」「はい……………」

はやてに強く言われ渋々、布団から出る晶。

そんな彼に彼女は、ひどく不安そうな顔をして尋ねた。

「兄ちゃん、リンやなのはちゃんたち何処行っただか聞いてらん？」

「？皆出かけてるのか？あいにく俺は殖装が解けてからの記憶が無
いんだ、きつと気絶したんだな」

晶は、生えてまだ十数時間しか経っていない左手を握ったり開いたりしながら答える。

「気になるんだったら、クロノやノエルさんたちに聞けば「もう聞いた」「

「クロノ君も皆と出かけたってノエルさんが言うとした、でも行き先は知らんって」

「…………だったら、皆が帰ってくるのを待ったら？俺たち一応病みあがりだし」

「それじゃ遅いんや！なんか胸の辺りがモヤモヤしてすごく嫌な感じがするんや。今動かんときつと後悔する」

「…………わかっただよ、俺も探すの手伝うよ。はやては防寒対策をしっかりしてきな、雪が降ってるみたいだから」

そうして一時別れたが1分もしない間に慌ててはやてが戻ってきた。

「兄ちゃん！結界や、結界が今張られた！！」

それを聞くと晶は、ベランダに飛び出し手摺に足を掛け宙へと身体を投げ出しギガンティックに殖装しはやてに腕を伸ばす。

「はやて、こっちへ」

「うん」

「しっかり掴まってるよ？」

まだチャージが終わっていないものはやてを抱えて飛ぶくらいのエネルギーはあるため難なく飛び立ち、結界に向かっていく。

そして、車でも20分は掛かる海沿いの公園に2人は5分ほどで到着し結界の中心に降り立った。

「主はやて、晶……来てしまったのですね」

辿り着いた2人が見たのはリンフォースの魔法陣に接続された悲しそうなのはとフェイトの魔法陣に、リンフォースを見送るように佇むシグナムたちやユーノ、アルフ、すずか、アリサそして少し離れた所で全体を監視するクロノの姿だった。

それを見たはやては、まだ着地していない晶の腕から飛び出しリンフォースに受け止められる。

「これ、どういうことやリン！？」

「……あまり危険なことは為さらないでください、皆が心配します」

「そんなん今はええ！質問に答えて！！」

観念したリインフォースは、はやてになのはたちにしたように自らの破壊を説明した。

「 ですので、これがあなたを護る最も優れた方法なのです」
「 ……ずっと悲しい思いしてきて……やっとなんか救われたんやないか……何とかならん!? ねえッ」

「 ……」
「 ユーノ君!」

「 ……」

「 シグナム!」

「 ……」

「 クロノ君!」

「 ……」

はやてはわらにも無難なように視線を向けるが皆、答えることが出来ない。

「 兄ちゃん! ジュエルシードって願いを叶えてくれるんやろ? どうにかして!」

「 …… やってみよう」

「 ほんま!」

「 ああ、でもうまく出来るかなんてわからない、いや何も出来ないかもしれない、それでもいいか?」

「 うん」

「 っと言っただけで少し付き合ってくれるか、リインフォース?」

「 だが…」

「 別に今すぐ防御プログラムが復活するわけではないんだろ?」

「 ああ」

「 マスターとしての命令や、兄ちゃんに協力してリインフォース!

「！！」
「……わかりました、主はやて。ですが1つ条件があります、もしこれでもどうにも出来なかった場合、私を逝かせてください」
「どうする、はやて？」
「……わかった、そんな時は笑ってリインを送つたる。だから、全力で兄ちゃんに協力するんや、手え貫いたらアカンよ！」
「はい、我が主」

こうして、儀式は中断された。

「それで、私は何をすればいい？」
「……ジュエルシードはギガンティックと1つになってるっだったよね、はやて」
「うん、小田桐さんそう言っとった」
「だったら……ここに触って」

そう言つて晶は、片膝を着けデュアルコントロールメタルをリインフォースの前に差し出す。

「ああ、コレでいいのか？」
「うん、そして強く願つてそうだな……『生きたい』って」
「わかった、主との約束だ、全力で願おう」

そう言つてリインフォースは、目を瞑り言葉通り願い始める。
そして、晶もまた彼女の願いを叶えるようにコントロールメタルに働きかけた。

「……本当にあんな事でどうにかなるのか？」
「大丈夫、きつと兄ちゃんなら」

はじめははやての願望だった。

だが、それはすぐに希望へと変わった。

なぜなら、晶の後ろにギガンティックの蛹が現れ二人を飲み込んだからだ。

はやては、以前にも見ていたのだ。

あの中から出てきた晶が新しい力を手にして戻ってきたことを。

だから、周りは慌てているけど彼女だけは落ち着いていた。

そして、蛹が開き二人は戻ってきた。

「……………」

「……………どうなったの、晶君？」

「うまくいった……よな、リインフォース」

「はい……………主ははやて、これをお受け取りください」

「……………これは？」

「夜天の書の本体です。私は、夜天の書から切り離されました」

「えっと……………」

「つまり私は生き続けられるということです」

「やつつつつたー……………！！ほんまありがと、兄ちゃん」

「いや……………まあ……うん」

「？なんか歯切れ悪いよ、晶」

「それに何でギガンティックの殖装解いてガイバーに戻る必要があるの、晶君？」

「それは……………」

「私が説明します」

「リインフォース？」

「私は夜天の書から切り離されギガンティックの管理人格になったのです。今のこの身はギガンティックの写し身です。本体は異空間に戻りチャージをしています。それに伴いリインフォース、この名を主にお返しします」

「え！？何言つてんの？その名前は」

「この名は、何れ生まれる新たな管理人格、私の妹にお与えください。祝福の風は常に主の傍らに在るべきです」

「だったら、ラインのことこれからなんて呼べばいいん？」

「それは彼が考えてくれます・・・ですよ、晶？」

「え、俺？」

「当たり前です、私をこんな体にしたんです、責任を取ってください
い」

「いや、その言い方なんか違う」

「兄ちゃん、責任とつてな」

「わかつたよ、じゃあ・・・・・・・・・・・・・・・・チエルシー
つてどう？」

「チエルシー・・・・ですか」

「それに何か由来でもあるのか、晶？」

「いや、コレと言ったものは無いよ、姉さん。ただ、パツと頭に浮かんだんだけど、もしかして気に入らなかつた？」

「いえ、私は今コレよりチエルシーです。常にあなたと共にあり、助け、見守ります、晶。幾久しく」

それは、神聖な新たな宣誓だった。

つづく

シンセイ（後書き）

リインフォースが助かった方法はご都合主義ということをお願いします。

リリカルガイバーを書き始めた当初からの設定で彼女をギガンティックの管理人格とする予定でした。

また、今回のタイトルのシンセイは、神聖と新生という二重の意味です。

スズ その1

はやてを抱えたリイいやチエルシーをシグナムたちが囲み皆で喜びを分かち合っていた。

その輪から一歩下がリ晶は、彼女たちを温かく見守っている。

「(クイクイ)」

「?何アリサちゃん、難しい顔して?」

「ねえ晶、ず〜と気になってたけど、どうしてはやてやヴィータを呼び捨てにしてシグナムさんを『姉さん』って呼んでるのよ?」

「あれ、姉さんたちに聞かなかつたの?」

「チエルシーさんの事で聞ける雰囲気じゃなくなつたわよ、ねえすずか」

「うん、教えて晶君。夜天の書の中で何があつたの?」

「ああ、それは「私らが家族やからや」はやて」

「「「家族?」」」

アリサやすずかに答えようとした晶の声に被らせ、シグナムたちを引き連れチエルシーに抱えられたはやてが答えた。

その言葉にアリサとすずかやはての後を着いてきたのはとフエイトも声を揃える。

そして、はやては、あの夜天の書の中での出来事を話した。

「へえー」

「そんなことがあつたんだ」

「「「「「「「「「「「ずるい」」」」」」」」」」」」」

「え、何がずるいんなのはちゃん、フエイトちゃん?」

「はやてだけさらに晶と親しくなつたみたいでずるいよ!」

「そつだよお・・・あつねえねえ晶君、私のこと、これから『なのは』って呼んで『ちゃん』はなしだよ?」

「いや、別にいいけど、そこって拘る事なの、なのはちゃん、フェイトちゃん?」

「(フン)」

「いや、そつぽ向かないですよ・・・え〜となのは、フェイト」

「何、晶君」「何かな、晶?」

「はあ〜〜〜」

こうして、晶はなのはたちへの呼び方に些細な変更を余儀なくされた。

また、この時、アリサが便乗し自身とすずかもそつ呼ぶようにさせた。

リリカルガイバー 55話 スズ その1

12月24日 高町家

「忙しい中時間を作って貰って申し訳ありません」

そう言つて晶は、この場に集まった面々に頭を下げた。

集まったのは、今回の件に関わった者達、高町、テストロッサ、八神、月村家は全員、アースラからもユーノ、アルフ、クロノ、リンディ、最後にアリサである。

「ですが、話を始める前に少し時間をください・・・なのは、フェイト、はやて」

「?」「?」

「はやてを真ん中に並んでそのソファに座ってくれよ？」

「……いいよ／＼ん／ええよ」

「そしたら、レイジングハートたちをチェルシーにちょっと貸してもらえるかな？」

「ねえ、晶君、今から何かやるの？」

「ん……まあ俺から3人へのクリスマスプレゼントって所……かな」

「ああ、つまり目を閉じてる間にプレゼントを私らの前に用意するゆうことやな」

「はは、バレたか」

「……晶、どうしたの？」

「いや、何がかな？」

「何か辛そうだよ？」

「……プレゼント用意するのに無理したから、疲れてるだけだよ」

確かに目の下に少し隈ができているものの、それとは別に何かの葛藤の色が声や表情からも見て取れ、晶が何かを隠していると言っ事を3人は感じ取る。

だが、彼がそう言っている以上、今は何も答えてくれない。

そう判断した彼女たちは、晶を信用し追求をしないことにした。

「私たちに出来ることなら協力するよ」

「悩みがあるなら話してね」

「その内、話してな」

「ははは、バレバレか……わかった後で俺が何を悩んでるか話すよ。チェルシー3人に今からしてもらおうことの説明を頼む」

「はい。では、今からあなた方には、精神世界で協力して私が操作する敵を倒してもらいます。また、レイジングハートとバルディッシュのプロテクトは解除、フルドライブが使用できるようになって

います。主はやても以前私とユニゾンした状態での戦闘が可能です。なお、注意事項ですが精神世界でも現実の同じようにダメージを感じるので留意してください」

「プロテクトが解除されてるってことはそれだけ強敵ってこと？」

「でも3人一緒だったら楽勝や」

「うん！私たちなら大丈夫！！」

「あとは、『あちら』で説明します。では、準備のために彼女たちを私に」

レイジンハートとバルディッシュを受け取り何かのデータを送るとすぐに彼女たちに返し、次にはやての首に掛けられた待機状態の夜天の書に触れるチエルシー。

「では、目を閉じリラックスしてください 『アクセス』」

「……」

「メリークリスマス、なのは、フェイト、はやて」

3人の薄れゆく意識の中間こえた晶の声は、やはり辛そうなものだった。

そして、数分後高町家の3人の悲鳴が響いた。

side なのは

それから10日後、私たちが目を覚ますとそれだけの時間が過ぎていて、いろいろな事が起きたとお父さんたちが教えてくれました。はやてちゃんを援助してくれていたおじさんが『病氣』で亡くなってその遺産をはやてちゃんが相続する事になってたんです。

魔力が回復したクロノ君が救援を呼んできてアースラや地上の病院に入院してたスタッフの人たちもミッドチルダに移送されてたんです。

そして、ガイバーとギガンティックがロストロギア認定される事を事前に察知した晶君とチエルシーさんが私たちに迷惑を掛けないように海鳴市から出て行ったこと。

2人は、私たち3人へ置手紙を残していました。

まず、私たちに怖い思いをさせた事への謝罪とあの戦い意味、最後に晶君の『お願い』が書かれていました。

『才能があるからって道を狭めないで。自分のなりたいものになつて』

もし、あの精神世界での戦いをする前の私だったら、迷い無く魔導師になることを選んだと思うの。

でも、今はあの時の恐怖を思い出すと身体が震えて、管理局所属の魔導師なることを躊躇してしまいます。

フェイトちゃんやはやてちゃんも同じ様子だったの。

晶君は、きつと以前の私たちが魔導師になりたいと考えていたことを知ってあの恐怖を姿を消す前に教えたんです。

だから、ずっとあの時晶君は葛藤してて辛そうにしてたことに気づいたの。

そして、私たちが進級する頃、晶君たちから小包が届きました。

これが届く2日前に太平洋上で局地的な次元震が観測されたと、あとで晶君たちを負っていた管理局の人たちが教えてくれました。

きつとそれが、晶君たちが元の世界に戻った証。

小包の中の手紙にも『コレを送った後、元の世界に戻る』って書いてあったから。

そして、あれから6年。

あと2年である時の晶君と同じ歳になります。

でも、私はまだ、自分の将来をどうするか決まっています。

はやてちゃんはシグナムさんたちと一緒に居るために管理局入り、フェイトちゃんも自分と同じような生まれのエリオ君を弟として引

き取るために執務官の資格を取って管理局で働いています。

2人はどうにかあの時の恐怖を乗り越えたようですが、私にはまだ無理です。

だから、フェイトちゃんたちがミッドチルダに次元転移していくのをいつも無事に帰ってくるように祈りながら2人を見送ります。

そして、今も2人が転移して消えた空を見上げてる。

「ねえ、晶君。あなたはまだ戦ってるの？」
リeeeeeeee

私の眩きは、ビル風の中に消えていきます。

でも、それに答えるように風で揺れて私の髪を束ねてるリボンに着けた鈴が、6年前に晶君から手紙と一緒に届いた鈴（同じ物をフェイトちゃんは私と同じようにリボンに、はやてちゃんはブレスレットに付けています）が前と変わらずきれいな音を聞かせてくれました。

s i d e o u t

もう1つの地球

大西洋上空、ここで2つの強大な力を持つ存在が幾度もぶつかり合っていた。

すでに2人は、これまでの戦闘で肉体に多大なダメージを負い、エネルギーも残り少なく後一度全力の攻撃が出来る程度になっていた。

その事に本人達も気づいて、互いに一度距離を置き最後の攻撃のためのチャージを開始した。

そして、ほぼ同時に2人は残りのエネルギー全てを解き放った。

「フカマチシヨウツ!!!!!!」

「アルカンフェルツ!!!!!!」

2人は、閃光の中に姿を消した。

つづく

スズ その1（後書き）

久しぶりになのはの視点で書きました、変じゃないといいんですが。あと、次回は省いたのはたちが気絶した後のことを書きます。

スズ その2

リリカルガイバー 56話 スズ その2

大切な家族が、友人が目の前で悲鳴を上げて失神する光景を見て取るべき行動は大きく二つ幾つからに分けることができるだろう。

一つ目は

「「なのは!?!」」

「フェイトオオオオ!?!」

「「はやてちゃん/はやて!?!」」

「「どうしたの!?!」」

彼女たちを心配し桃子と美由希にグレイシア、シャマルやヴイータ、アリサとすずかが駆け寄ること。

特にグレイシアは、一度娘のアリシアを失っているため酷く錯乱している。

二つ目は

「晶齒ア食いしばれッ!」

ガシャン

「お前、なのはに何しやがった!?!」

「いくら家族でも許容できないことがあるッ」

「ッ!?!晶ッどきなさい!?!」

彼女たちをそうさせた者を締め上げる事。

アルフが晶殴り飛ばされ家具を散らかし、床に倒れた彼を恭也が胸倉を掴み無理矢理立たせそのまま揺さぶり、シグナムがチェルシ

「に今にも斬りかかりそうな雰囲気です声を荒げた。
この時チエルシーはあることに気づき、シグナムの追求を交わし
恭也を晶から奪い取り3人から彼を護るように動いた。

三つ目

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

晶が3人に危害を加えたことにクロノとユーノは、信じられ
ず棒立ちになっている。

四つ目

「・・・・・・・・・・」

内心ではクロノたちと同様に驚きながらも静観しことの成り
行きを観察する、リンディ。

そして、最後に

「そこまでだ」
「離せ親父！」
「邪魔すんじゃないよ！」
「・・・・・・・・・・」

努めて冷静に事態を把握しようとする事。

2人を取り囲み追求を続けようとする恭也たちの行動を目にし、
逆に少し冷静さを取り戻す者。

それによって士郎は、晶の異変をいち早く気づきもつとも恭也の

肩に手を置いたのだ。

「彼の様子をよく見る　　死にそうだぞ」

「あ……え？」

「お、おい」

「シャマル、治癒魔法を！！」

「は、はいッ！！」

晶の口から血を流し首が変な方を向き、床は血の海になっている。怒気に駆られたアルフが無意識に魔力で強化した拳で晶を殴ったときに、顎を砕き首に重大なダメージを与え吹っ飛ばされたところにあった食器棚のガラスや食器の欠片で背中がズタズタにされた後、恭也が首を酷く揺す振った為であった。

幸い、首は完全には折れていなかったため息があり、背中の破片も取り除き治癒魔法の一命を取り留めた。

そして、今は晶の頭を自身の膝の上に乗せたチエルシーが彼の意識が戻るまで代わりに説明を始める。

これも予め『自身が何らの原因で説明を始められないときは頼む』と彼から頼まれていたことのようなのだ。

「主たちには、あちら側でアルカンフェルと戦ってもらいました。制限時間10分。勝利条件は彼のバリアーを破る事。敗北条件は墜とされる事。そして彼の行動はバリアーを常に展開しバリアーに当たった攻撃を跳ね返すだけです」

「だけですって、だったらなのはたちはどうして悲鳴を上げて失神してるんだ？」

「簡単な話です。主は私とユニゾンした状態での『ラグナロク』、フェイト・テストロツサはザンバーフォームでの彼女の新砲撃魔法『プラズマザンバーレイカー』、高町なのはもエクセリオンモードで『スターライトブレイカー』を同時に放ち、跳ね返され自分た

ちの全力の魔法によって墜ちたのです。参考までにその威力は先日彼女たち3人と剣の騎士で放ったモノを凌駕していました」

「……………」

先日の光景を見ていた者たちには信じられないことだった。

その中でも取り分け、なのはたちの力と才能をよく理解しているクロノには信じがたいことだったようだ。

「ありえない……それだけのモノでも破れないなんて……」
「……………ではこの記録を見てください、クロノ・ハラウオン」

チエルシーは、そう言う腕を伸ばし電源を入れたテレビの入力端子に指を当てる。

すると、画面に晶があちらの地球で最後に見た光景が流れた。

「これは、晶がアルカンフェルに破れたときの光景です。消耗していたとはいえガイバー？、巻島顎人と共にメガスマツシャーを放ちそれをそのまま反転反射されました。そして、こちらを見てください」

チエルシーはそう言って映像を切り替える。

それは空一面を覆ってもまだ余りある大きさの隕石が最接近時から碎かれるまでの光景だった。

「……………」

「数万年前、降臨者^{ウリクス}が地球上で暮らす全ての生物を根絶やしにするために送り込んだ小惑星並みの隕石、コレを砕いたのがアルカンフェルです……クロノ・ハラウオンコレを見てもまだありえないといえますか？たかだか、メガスマツシャークラスの砲撃魔法を3つ同時に防いだ事を」

「……1つ教えてくれ、晶はこの光景を知っているのか？」
「当然です。元々これは晶が以前見た遺跡宇宙船の記憶の一部ですから」

「晶はこんな力を持った相手に勝つつもりなのか……」
「……反論はないようですね。続けます主たちがそれぞれの砲撃魔法に吞まれた時、3人にはあるモノを体験してもらいました……先ほど見てもらった晶がメガスマツシャーに吞まれて死ぬまでの恐怖を」

「ちよつと待て！！そんなことをしたらなのはたちの精神が!？」

「ええ、そのまま体験させれば精神が死んでしまいますので、レイジングハートたちにも協力してもらいフィルターをかけ死なないようにしました。つまり、絶対安心な死を体験してもらったわけです」
「……だから、3人はシヨックで」

「はい」

「じゃあ、何故そんなことを急になのはさんたちに体験させないければいけないのかしら？」

「それをあなたが言いますか、リンディ・ハラウオン。原因の1つにはあなたたちが関わっているというのに」

「え？」

「本当に気づいていないのか、それとも惚けているのか……まあ良いでしょう。理由は2つ。1つ目は確か明日でしたよね？管理局に救援を呼びにクロノ・ハラウオンが次元転移するのは」

「ああ」

「それによつてガイバーとギガンティックの存在が管理局に認知され、ロストロギアと認定されるのが目に見えているからです。そうなれば、保護という名の強制連行が行われるからです」

「強制連行とは酷い言われようね」

「そうでしょうか？私はそうは思いません。お忘れかもしれませんが私の中には、闇の書と呼ばれていた時の記憶と今回蒐集された人々の記憶があります。そこか「チェルシー、代わるよ」はい」

晶がチエルシーの膝から身体を起こし彼女を止めた。

そして、彼が目を覚ましたの見てアルフと恭也が彼に頭を下げた。

「晶、すまん」

「ごめんよ」

「ああ、いいですよ。殴られるのは覚悟でやっただけですから。ただ、魔力で強化されるとは想定外でしたけど」

「あう」

「まあ、次　がないのが一番ですが　は気を付けてください」

「わかったよ」

「さてリンディさん、チエルシーの言い方はアレでしたけど、認識としては間違っていないと俺も思いますよ？ギガンティックの力、個人で持つには巨大すぎますから俺たちが拒否すれば力尽くになりかねませんよ？」

「.....」

「俺たちは地球を、もう1つの理由に関係するんですけど離れるわけにはいかないの」

「じゃあ、その2つ目というのは？」

「ええお話しますけど、その前にユーノ今までありがとな、無限書庫で俺がこちら側の地球に戻る方法を探してもらって」

「え、じゃあ！」

「ああ、チエルシーがその可能性を覚えてくれたよ。次元震によってこちらとこちらの地球を隔てる境界線を曖昧にして転移できるって。これが2つ目の理由。次元震を起こせるジュエルシードはギガンティックの中にすでにあるし、転移もチエルシーがサポートすればギガンティックでも可能らしい。今は成功確率を上げるためにシユミレートしてもらってる。それが終わりしだい俺たちはアチラに跳ぶつもりです。そのため、地球から離れるつもりもないので明日には管理局からの逃亡生活が始まるんですが、気がかりなのがな

はたちなんですよね」

「どういうことだ？」

「さっき、チエルシーが言ったように彼女の中には蒐集された人のことが知識として残っています。それを使って予想されたのはたちの最も確率の高い数年後の未来が魔導師になるでした。そうなれば次元犯罪者やロストロギアの回収といった荒事にも関わる事になつてしまふ。俺はそうなつて欲しくはありませんがそれを3人に強制することもしたいくない。だから、俺は今回の強攻策にできました」

「それが、死への恐怖というわけか」

「ええ、死の恐怖はそう簡単に払拭できませんから、このまま魔導師になるのを諦めるか、大人になるまでにもつと考える時間をつと思ひまして」

「つまり、あの戦闘は始めから勝負が決まっていたというわけか」
「それでもありませんよ」
「どういうことだ？」

「確かに勝つことは無理ですが、やり方しだいでは負けることも無かつたんです」

「……あ、もしかして」

「すずか、何かわかつたの？」

「え、あの」

「良いから言ってみなさいよ、私は全然わかんないんだから」

「う、うん。あのね、アリサちゃん制限時間10分だったよね？でも、その時間を越えたら負けだなんて言つてなかつたよ」

「あ」

「正解だよ、すずか。あの戦いにはもう一つ意味があつて、自分たちが束になつても敵わない敵と対したとき、負けないようにしたらどうすれば言いかつても教えたかつたんだ。俺としてどちらに転がつてもよかつたんよ。もしこちらの方になつているのなら、死ぬ事と同じくらいありえる可能性に至る確率が減るからね」

「その可能性つてなんなのよ」

「……あまり、女性がいる場で言いたくないし、アリサも」

思い出したくないだろうし「良いから言いなさいよ」……………
・この前遭遇したたる？相手は特殊な性癖だったけど」
「　　ッ！……！」

そういわれてアリサの脳裏に甦ったのは、獣化兵に攫われた時のことだった。

つまり……………

「敗退したそれも見目麗しい女性が、敵に捕まれば想像は容易いでしょ？」

そう言っ後、いくつもの質疑応答をして晶たちの話は終わった。そして、次の日の朝、早朝、なのはたちへの謝罪とメッセージをしたためた置手紙を残し晶とチエルシーは海鳴市から姿を消した。

つづく

スズ その2（後書き）

晶がなのはたちの将来の姿を見目麗しいといったのはチエルシーが予想した未来の姿を見たからです。

スズ その3

リリカルガイバー 57話 スズ その3

民宿「海神」わたつみ

日本某所にあり、現在晶とチエルシーの潜伏先である。

「バニングス家にはアリサへの『大願成就』の御守で、月村家にはすずかへの『大願成就』の御守と忍さんへの『安産祈願』と『子孫繁栄』の御守つと」

5つの小さなダンボールの前で晶は荷造りをしていた。

「晶、『S2U』へのインストール終わりました」

「ああ、じゃあ終わったヤツから閉じてってくれ。俺は続けるから」
「はい」

「え」と次は高町家で、『商売繁盛』の御札となのはへの『安全祈願』の御札と白兔の絵柄の鈴で、テストロツサ家には『無病息災』の御札とフェイトへの『安全祈願』の御守と黒兔の絵柄の鈴、八神家は『家内安全』の御札とはやての『安全祈願』の御守と狸の絵柄の鈴に『S2U』を入れて、姉さんにクロノへ渡してくれって一筆も入れてあるし・・・よしこれで全部だな」

「晶、忘れてますよ!」

「え、ああ!!そうだった。はやての所にカメラ3つと・・・
今度こそ終わったな」

インスタントカメラの中には今までの逃走経路であり、数ヶ月前にはやてたちが最後の思い出にと5人で出かけ結果的に夜天の書を完成させるきっかけになった家族旅行、その時の場所を晶とチエル

シーはその家族旅行に『遅れて参加した』ような気分で巡っていた。逃走資金は、晶の貯金の残高8,351円を元手にチエルシーがマンガ喫茶のネット回線で自身とダイレクトに接続してマネーローダリングと株取引で瞬く間に稼いだものだった。

また、数ヶ月前にクロノから借り受けた彼のデバイス『S2U』の中には、アチラの地球で晶が遭遇、戦闘した獣化兵との記録とそれをチエルシーが解析した戦闘能力が入っており、例えば、グレゴールは常人の約1.5倍の筋力を有する、ヴァモアの生体レーザーは厚さ30センチのコンクリート壁を1秒で貫通するなどである。

これは、今後コチラの獣化兵たちと管理局が対立する事が予想でき、現にアースラで獣化したランディとアレックスの自室やブリッジの通信記録からスパイの証拠が出てきたと『S2U』を受け取る時に聞いた。戦闘も表面化することやシグナムたちがそれに駆り出される可能性から友人や家族の安全のために残してやれる置き土産であるが、新システムの構築やそのシュミレートに時間がかかり後回しになっていた物であった。

「晶荷物の引取りが来ました」

「ああ、先にクール便の方を運び出してもらってくれ」

チエルシーの知らせを聞き、慌てて小包に封をし伝票を貼り付ける。

また、彼女に先に運んでもらうように言った荷物は各家分あり、中身はこの辺りの特産物詰め合わせである。

そして、慌しい荷造りが終わり翌日、お世話になった民宿の人に挨拶をし現在、ギガンティックに殖装し太平洋上にいた。

しかし、そこにチエルシーの姿は無いが彼女は今、はやてとユニゾンしていた様にギガンティックの中におり晶のサポートに回っている。

『ジュエルシード活性化スタート、重力衝角及び重力スタビライザ
ー展開、次元震の範囲指定　　成功、次元断層の発生を確認、虚
数空間発生を確認、異次元間転移システム　励起、座標入力・・・
・終了、現在エラー無し　　晶準備が整いました。後はあなた
の想い次第です』

小規模次元震でも範囲を限定する事で次元断層を発生させ虚数空
間への穴を開け割り出したアチラの地球の座標と晶の想い（イメー
ジや意思）によって転移する。

それが、デュアルコントロールメタルの中に残っていた遺跡宇宙
船の機能の一つ空間転移とこの世界の次元転移の技術や魔法を参考
にチエルシーが新たに編み出した『異次元転移システム』の全容で
あった。

そして、その全ての準備が整い以前から考えていたことを彼女に
打ち明けようと口を開く。

「ありがとう、チエルシー・・・あとはお『アホですか、晶？』は
？」

『今、私はあなたにガイバーとギガンティックを通して一つとなっ
ています。ですからあなたが「チエルシーははやてたちといるべき
だ」とか「チエルシーを俺たちの戦いに巻き込むわけにはいかない」
とかくだらない事考えているのはお見通しです』

「なっ・・・下らない事『下らないですよ？何せ私はあなたと生
死を共にする覚悟である時あなたを受け入れたんです・・・それ
ともあの時の私の誓約を忘れたのですか？』いや、『常にあなたと
共にあり、助け、見守ります』だろ？」

『違います』

「え！？・・・いやこれで合ってるぞ、うん間違いない」

晶は、もう一度よくあの時の事を思い出し確認するように口の中

でくり返したが間違ってる所がない。

『い・い・え。最後に「幾久しく」が抜けています』

「いや、別にそれぐらいは『いいえ、あれも大事な部分です。永遠を誓うという意味ですから』スミマセン」

『ところで独りで戻れる気で見たいですが、確率どのくらいか判っていて言っているのですか？』

「そんなこと言ってくるってことは1割ぐらい？」

『甘いですね。ええ大甘です。一滴の水にコップいっぱい蜂蜜に同量の砂糖を混ぜたぐらいにです』

「甘すぎ！リンディさんでもそれは無理だろ」

『そうでしょうか？あの人なら、いける気がしますけど・・・それはとにかく答えは1/無限です』

「は？」

『独りでアチラの地球に、あなたが来た地球に辿り着ける確率です』
「どうして、そんな途方も無く低いんだよ・・・」

『平行世界の地球は晶の故郷だけではないでしょう？他にも似たような歴史を辿ったモノや全く異なる・・・例えば私たちのことが物語として存在する地球なんてものも在るかも知れませんが、そもそも地球がないという世界も在るでしょう。他にも異世界もあるため可能性は無限、その中からたった一つの地球を探すわけですよ？当然です』

「・・・・・・・・・・」

『つまり晶がしようとしている事は右も左もわからないような場所から誰にも尋ねず自力で現在地と目的地を記した世界地図と動かないコンパスだけでその場所に向かうというもので、システムに入力した座標とあなたの想いが世界地図とコンパスに相当し、そのコンパスを動かす事が出来るのは私だけです』

「どうしてもチェルシーは必要だったことか」

『晶が私の代わりをやるうとすれば、想いが薄れコンパス自体が無』

「かなりかねません」

「………スマンツ本当に自分勝手だけど手を貸してくれ、チエルシー！」

今にも土下座しそうな勢いで謝り頼み込む晶。

彼と繋がっているチエルシーには何の隔たりも誤解も無くその想いが伝わる。

『元々、そのつもりです』

「ありがとう！お前のことは俺が死んでも護る！！」

『……別にあなたのためだけに言っているわけではありません。これは私のためでもあるんです。私の本体でもあるデュアルコントロールメタルを護る自己防衛のため、主や騎士達を悲しませないように生きたあなたを連れ戻すため、そして私を救ってくれたあなたへの恩返しでもあるのです。死なれては困りますので私も晶を護ってあげます』

照れが混じったチエルシーの言葉。

その想いを受け取った晶も照れたものの、元の鞘に収まり誓いも新たに旅立ちのときは来た。

「じゃあ、お互いが護りあうって事で改めてよろしく、チエルシー」

『ええ、死なせてはあげませんよ、晶』

「『ジャンプ』」

こうして2人は、無限の彼方へと旅立った。

つづく

スズ その3（後書き）

本当は、この話でA's編を終わるつもりでしたが、書いていたら長くなってしまいました。
次話で終われるかな？

スズ その4

リリカルガイバー 58話スズ その4

アチラ側の東京。

その上空では、先ほどまで空中戦が行われていた。

”固体進化”を繰り返す究極の戦闘生物バトルリッチャーアプトムと彼への復讐のため全てを捨てて彼を”狩る”力を手に入れたゼクトールいやネオゼクトール。

両者の戦いは、終始アプトムが押され彼の最後の手段”融合捕食”さえも通用せずついに墜とされた。

さらに、瀬川兄妹がその戦いを晶たちと勘違いしアプトム墜落現場に現れ事態は混乱する。

そして、彼らの終焉へのカウントダウンが始まった。

「何故貴様らが！？いや、そんなことはいい！早くここから離れろ、奴が来る前に！！」

「奴？」

ズシヤッ

「瀬川哲郎……か？ほう生きていたのか」

「ゼクトールなのか？」

「さっさと逃げる！！」

「黙っているドブネズミ」

「ぎゃッ」

「アプトム！？」

「うううう」

「お前、俺たちを」

「違っつお前たちはヤツへの、深町晶への導。ヤツが生きていればお前たちの所に必ず戻ってくる、だから俺は……」

「お前……」

「フン」

「ぐぎゃッ」

「ならば、貴様が悔しがる様を見せてみる、ドブネズミ!!」

ゼクトールはさらにアプトムヘレーザーを撃ち込みさらに深手を
負わせると両肩の装甲を展開、その内に装填された生体ミサイルを
撃ち出す。

その標的は哲郎達だった。

先のアプトムの独白を聞き彼が最も苦しむ方法に気づき、そのた
めにゼクトールはピンポイントで哲郎達を狙うために敢えて生体ミ
サイルを使う。

「やめるおおおおおおお!!」

「!!」

「きゃあああ!!」

「晶オーーーーーッ!!」

目論見通りアプトムは傷つき消耗した身体に鞭を打ち幾ばくかの
生体ミサイルを迎撃に成功したものの焼け石に水状態。

結果、彼の悲痛な叫びがゼクトールの耳を心地よく響かせる。

そして、当事者たちは迫り来るミサイルに息を呑む者、生命の危
機に悲鳴を上げる者、想い人を呼ぶ者、それぞれがそれぞれの反応
を見せる。

この場に逃れえぬ死を回避する力を持つ者はいない、そう”この
場には”。

「?????」

ドズウウウン

「何っ!?!」

「助かった……のか？」
「……これ……もしかして」

突如、ソレは空を裂き重苦しい音と共にこの世界に戻ってきた。
そして生体ミサイルは、軌道上に偶然現れたソレに衝突し全機撃墜。

だが、衝突された方は多少焦げはしたもののビクともしていなかった。

少し前、異次元空間内。

アチラ側の地球を旅立った晶とチエルシーは、蛹に護られ進んでいた。

『間ザザく目ザザ地に到着します』

「どうしたチエルシー？声が聞こえづらいぞ」

『おそ』 ツー！』 晶、瀬川瑞紀と思われるザザを感知しザザた』

「ッそこに出てくれ！」

『ザかザザ』

耳障りなノイズが時間が経つにつれ酷くなっていく。

すでに何を言っているのか判らないがチエルシーを信じる晶。

そして、異次元空間から出ると同時に大きな衝撃が二度受け、蛹から出た晶が見たのは姿が記憶と多少変化したゼクトール。

「ガイバー……なのか？これが」

「で、でかい！？」

「……晶？晶なんですよ！」

「あ、ああ、瑞紀久しぶり」

晶は、返事をする者の内心かなり動揺していた。

何故なら瑞紀たちがアプトムと一緒にいることとさっきからチェルシーの応答が無いからだ。

というものの、存在を感じるから消えたわけでは無い様だが異次元空間内での不調と何か関係があるのだろうかどうすればいいのか晶には判らない。

だが、2つだけ判る事があった。

1つは戻ってきたこと。

もう1つは……

「皆下がって、状況がさっぱりだけどとりあえずゼクトールを倒すから」

「大きく出たなガイバー？。だが、図体がでかくなるうがお前にこれは防ぎきれまい！」

「ゼクトールのヤツ、俺ごとこいつらを」
「ッ」

ゼクトールは肩や全身の装甲を展開、生体ミサイルと腹部以外のレーザーを一斉射する。

その最中に晶が動くのを見たが気にも留めなかった。

そして、爆煙と砂埃で彼らの姿を覆い隠す。

「コレだけの数の生体ミサイルとレーザー、お前が耐えられても虫の息のドブネズミと瀬川哲郎達は耐えられまい！さらにッ！」

カッ

「ダーゼルブの能力だッ 例えお前が身を挺しても超高熱線が貫ッ！」
「？」

ゼクトールが高々と演説して見せる中、煙の中でチカッと輝くのを見ると思わず身体が動いていたものの、その光 ギガンティック

のヘッドビーム が彼の右肩を少し抉り翹をも傷つけ体勢を崩す。そこに空かさず何かが高速度で彼へと高周波ソードが襲い掛かる。

「チイツ！こなったら！！！」

「逃がさん！！」

「ッ寄るな！！」

「グウウ」

高周波ソードを巻き戻しながら飛び出し拳を握り締め接近を試みる晶だったが、距離を取り最終兵器を放つ時間を稼ぎたいゼクトールは先ほどの超高熱線とエレゲン譲りの200万ボルトの電撃を周囲には放つ。

そこに晶は、バリアーも張らずに突っ込んだ。

「お・・・おおおおお！！」

「なっ！！？」

「残りのエネルギー全部持って行け！！！」

「！？」

異次元転移にエネルギーの多くを消費し、残り僅かだったエネルギーを全てGナックルに込めゼクトールを文字通り粉碎し、ギガンティックが強制解除されガイバー？に戻りゆっくりと降りていった。

応答しないチエルシーのことが胸に去来するが、今は戻ってきたことを喜ぼうと地面に着地した自身に抱きついてきた瑞紀を見て思う晶だった。

その後数ヶ月、様々な事が起き、ガイバー？巻島顎人と速水利明の合流とアプトムとの和解、村上の生存と敵対、そして巻島の裏切り。

その間チエルシーは眠り続け真相もわからなかったが、巻島の手

よりギガンティックを取り戻した時に彼女が目覚め語られ

「予想以上の負荷によって機能停止していたようですが、晶の強い意思に触れて再起動しました」

という事らしい。

また、眠っている間に巻島に使われていたことに酷く憤慨し晶がチエルシーに許されるのに長い時を有したという。

S I D E ミ ッ ド チ ル ダ ？ ？ ？

獣化兵たちを操り、晶を狙った3人が集まっていた。

「うむ厄介な事になった。折角ガシユタルに命じてグレアムらに全てを着せて口封じもかねて自害に見せかけて処分したものを」

「確かに、他の工作員に命じて監視カメラの映像もそう差し替えたの」

「ほっほっほっまあ過ぎたことはどうしようもない。これからのことを考えんと」

老人が一声かけると他の2人はそれ以上の不毛な会話をやめる。

「どうも、この3人の中でこの老人が最も権力ちからを持っているようだった。」

「では？」

「うむ、計画を前倒しにするしかないの。全く厄介なものを残してくれたものよ、深町晶は」

「ええ、これのせいで我々の重要機密の一部が明るみ出てしまいました」

「どうやら晶が置き土産として残したものが議題に上がっているようだ。」

「それに獣化兵の存在も、闇の書が化けたというアチラ側の獣神将ソアロードの所為でアースラ内に紛れ込ませたスパイと手駒を一気に失い」

「管理局内での工作も難しくなりますな。といっても、DNA検査では調整されているかされていないかの判断は難しいのですがね」

「事実、アースラの生き残りのメンバーのDNAを基準に検査を行っても、他者との誤差に収まり獣化兵は見つけることはできないが、それでは管理局も安心しないと考えほんの一部正体を見破られたように見せ掛け脱走させるといふ茶番を演じさせた。」

「では計画は前倒ししかないの。組織を表に、管理局体制へのレジスタンスとしてこれから活動させる」

「ええ、それしかないでしょう。幸いFプラントは稼働を開始していますしね」

「うむ。では決議を取る『組織をこれより管理局へ積極的武力行使を行うレジスタンスとして動かす』反対の者はおるかの？」

「……」

「……無いようじゃな。議会を閉廷する」

A'S 編終

つづく

スズ その4（後書き）

ガイバーの新刊が先日出ましたね。

「もしかして、降臨者たちに地球の存命が気づかれた？」とアポロンが見上げた星空や言葉から思っていました。

また、巻島の様子の変化も気になるところです。

なんとというか野心が消えたように私は感じました。

何せ「この地球まじの未来を頼む」って言ってましたから。

航法制御球から新事実にでも気づいたのでしょうか？

今後楽しみでなりません。

まあ、おそらくまた新刊は一年後ぐらいでしょうけど……
あと次回は、外伝を書きます。

外伝（前書き）

今回はFate／stay nightのネタバレが多少含まれます、ご了承ください。

外伝

リリカルガイバー 外伝

晶とチエルシーが旅立った翌年。

10月31日 月村邸でのハロウィンパーティーのことだった。

「トリック オア トリーツト!!」

「……」

「なんやなんや、なのはちゃんたちノリ悪いわぁ」

「何か我らはおかしいのか？」

「何処も……おかしくないですよ」

「んんんアレじゃねえの、シヤマル以外はお化けの格好じゃないっていう」

「むう、確かに化生の類ではないな我らの格好は」

「何言うとるん？立派なお化けの格好やで？」

「嘘お!？」

「シヤマル以外、みんな違うよ」

「(コクコク)」

「あ~~~~~……あなたに今年のデザイン任すんじゃないなかつたわ」

一ヶ月前、喫茶「翠屋」。

なのはたちは、学校帰りにここで良くお茶をしていた。

「　　つと言うわけで今年もやるわよ、ハロウィンパーティー」

「今年は私が場所を提供するんだよね？」

「そうよ、すずか。それで私が衣装を」

「私とフェイトちゃんはお菓子やケーキとかを準備すればいいん

だね」

「……アリサちゃんアリサちゃん、相談なんやけど衣装のデザイン私に任せてんか？」

「え、でも私が主催者だし」

「去年は家族旅行で参加出来なかったからな、その分楽しみたいんや」

「……じゃあ任せるわ。あ、ちなみにこれが去年の写真よ、参考にして」

「ほいほい……へえー兄ちゃんはジャックランタンの格好やったんか。あ、なのはちゃんは狼の着ぐるみ来て着て狼男ならぬ狼少女や。ってフェイトちゃんこれなんなんや？」

「え、あのその……母さんがこれがいいって」

フェイトは、その時のことを恥ずかしそうに言う。

写真の中の彼女は、髪をポニーテールにし浴衣を着て狐の尻尾と耳を着けていた。

「あの時のフェイトちゃんかわいかったよね」

「そうそう、恥ずかしそうにしたのがまた」

「今思えば、あの時気のせいかと思っただけど耳や尻尾が動いてたのよね、やっぱり魔法？」

「あれは……母さんが悪乗りしてミッドの技術を組み込んで私の感情に反応して動くようにしてたの」

「にしし、ええアイディアが浮かんだわ」

「そうなの？」

「えー!？」

「どうしたのよ？良いアイディア浮かんだんでしょ？」

「そ、そうや、うん、皆にぴったりの衣装が浮かんだんよ、楽しみにしついで」

そうしてはやてがバニシング家の人にデザイン画を渡しアリサが内容を知らぬ間に物が完成し、当日衣装に袖を通して初めて事態に気づき冒頭に戻る。

「あの時、焦ってたのってコレのせいだったのね・・・ハア~~~~
あの時気づいてればこんな事にならなかったのに」

「何言うてんの！？コレもれっきとしたハロウインの衣装や！」

「ねえ、はやてちゃんコレってただのコスプレ「ちゃう！」」

「ええか、確かにフェイト「呼んだ？」「ちゃうよフェイトちゃん。」

これはな去年、夜天の書の中でみんな一緒に暮らしとった時に兄ちゃんが隠し持とったゲームの名前や。フルネームで Fate / stay night 言うんや」

「晶君が？」

「へえ~~~~アイツが・・・面白そうねどんな内容だったのよ？」

はやては内容を詳しく話していく。

7人の魔術師が7騎のサーヴァントを召喚し殺し合いをする聖杯戦争。

その7人の内の一人に選ばれた衛宮士郎。彼が最優のサーヴァント、セイバーと契約した事で聖杯戦争に巻き込まれていく様子を語る。

そして最後に18禁である事を付け加えた。

「なのはなのは18禁って何？」

「え？すずかちゃん知ってる？」

「うんうん私も・・・アリサちゃんは？」

「あ、ア、アイツなんて物やってたのよ！？っていうかはやても、そんなゲームやるんじゃないわよ！！」

「確かに大人な内容のシーンもあってドキドキしたけどそれ以外は中々ええ作品やったよ。あ、ちなみにな、見つけたゲームを兄ちゃ

んの机の上に乗せといたら帰って来た兄ちゃんがそれ見て悲鳴を上げとったわ」

そう言っただけでカラカラと笑うはやて。

「うっわ、えげつないわね、アンタ。そういえば、アイツの世界じやまだパソコンも一般庶民には普及されてなかったんじゃないの？」

「ああ、それはたぶん蒐集した誰かがやったたんじゃないの？それをあの世界で兄ちゃんが興味持って手に入れたってことかな」（クイクイ）「ん？どうしたんやフェイトちゃん？」

「18禁って何？」

「ああ、それはなゴニョゴニョゴニョ」

「~~~~~ツ!？」

はやてが耳打ちするとフェイトは真っ赤になってしまった。

その様子に心配したなのはたちも彼女の口から真相を聞き、真っ赤になる。

「それで、私たちは何のクラスなの？」

「まず、シグナムはセイバー、アーサー王、騎士王って呼ばれとる英雄や。このゲームやと『アルトリア』っていう少女が性別を偽ってたんやけどな」

「ほう、騎士王ですか」

青いドレスのような服の上から胸当てや手甲などの鎧を見に纏い、三つ編みにした髪を頭の後ろで一纏めにしているシグナムが感心しながら自らの姿を顧みる。

「次にザフィーラは姿がそっくりやったからアーチャー、錬鉄の英

雄エイミヤシロウや」

「・・・・・・・・・・」

赤い外套を身に纏い、耳と尻尾を隠しているザフィーラは黙して腕を組んでいる。

「あたしはあたしは？」

「グイータはな、第5次聖杯戦争で召喚された中で最強いうても過言でないバーサーカー、ヘラクレスや」

「最強か。じゃあこの格好も我慢しなきゃな」

ボロの腰布と上着を身に纏っているグイータはそう言う。

「シヤマルはキャスター。裏切りの魔女メディアやけど・・・シヤマルやおつちよこちよいの魔女やな」

「ひどいです、はやてちゃん!!」

ローブを身に纏い、所謂魔女の格好をしているシヤマルはすねてしまった。

「すずかちゃんも真・アサシン。ハサン・ザツバーハや。本当はもつとおどろおどろしいんやけど、すずかちゃん様にかわえくさせてもろつた」

「ありがと」

すずかは黒い外套を身に纏い、骸骨の仮面（かなり可愛らしいデザイン）を着けている。

「あの、私バリアジャケットとあんまり変わってないような」

「ああ、そりゃあしゃあないわフェイトちゃん。ランサーは7騎中

最速のサーヴァント。真名はクー・フリーン。光の皇子や。この中で最速のフェイトちゃんにはぴったりやる?」

「……………どうせならいつもと違う格好がしたかったな」

髪を頭の後ろで結ったフェイトは青いボディースーツの様な鎧を身に纏っている。

「そんで我は第4次聖杯戦争に召喚されて以降受肉してたアーチャー、英雄王ギルガメッシュや!」

はやては黄金色の鎧を身に纏い、髪を逆立てて偉そうに宣言する。

「で、私は?」

「アリサちゃんはププツな、ししよーや」

「は?」

「主人公がバット・デットエンドした時にでるお助けコーナー『タイガー道場』に登じよププツうするギャグ担当『チエストーツ』バアビロオオン」

アリサは道着を身に纏い……………トラのストラップを着けた竹刀ではやてを殴った。

この時、近くで見えていたなのはたちは言う、アリサの背後にかわいくデフォルメされた吼えるトラが見えた。

「な、何するんや、せつかく似「あ?」嘘です!本当の衣装は、別に用意してます!!」

「そう……………でも、それも変なのだったらワカッテルワヨネ?」

「はい!」

アリサは、はやてに念を押ししてからサイド着替えに行った。

「……いちち、ちょっとしたお茶目やのにアリサちゃんひどいわあ」

「ねえねえ、はやく私は何の格好なの？コレけっこうはずかしいの」

髪を下ろし、露出の高い服ボテヤコンのような服と両目を眼帯（細かな穴が開いており着けていても視界が確保されている）で覆っているのはが尋ねる。

「ああ、なのはちゃんはな、ライダーや。ギリシャ神話で登場するゴルゴン3姉妹の末妹、メデューサや。イヤーこれほどなのはちゃんにぴったりのはないと思うわ」

「どうして？」

「そりゃーなのはちゃんといえは、見敵必殺ならぬ見敵必砲撃やらな。『自己封印・暗黒神殿』で封じた『石化の魔眼』から『騎兵の手綱』ヘルレフオンに繋げる流れが、なのはちゃんのバインドからスター・ライト・ブレイカーにそっくりやった……」

「どうしたんやなのはちゃん？」

「……ヒューッ」「」

沈黙するなのは。

それをかつてなのはの砲撃を受けたことのあるフェイトとヴィータ、純粹に怖がってるすが身を寄せ合い悲鳴を上げた。

そして、失言に気づき逃げ出そうとするはやく。

だが、ナノハニマワリコマレタ。

「はやくちゃん……」

「な、なんや？」

「ちょっとあつちでO・H・A・N・A・S・H・Iしよつか？」

「あ……あああ……！……」

こうして悪（いたずら少女）は滅んだ。
ちなみに戻ってきたアリサの衣装はアサシン、佐々木小次郎の物
であった。

おわり

外伝（後書き）

コレにて外伝終了です。次回からは。いよいよStrikerS編の予定ですが、新しい仕事が始まります。

その会社は4勤2休なのでコレまでの様子2週間後の土日のどちらかというわけにはいなくなります。

なので次回の更新は、9月23日を予定していますがその翌週の28、29になるかもしれません。

楽しみにしてください。方々には真に申し訳ございません。

新たなステージへ その1

リリカルガイバー 59話 新たなステージへ

地球

「本当に行くのか、晶？お前が犠牲になる必要なんて」
「いえ、いいんです哲郎さん。俺は”コッチ”に居ない方が良いでしょうから」

「晶・・・お前」

「あと麻生さん、あの件よろしくお願いします」

「本当にいいんだな？」

「ええ、でなければ俺が消える意味がありません」

「・・・わかった、達者でな」

「晶、お前を殺すのは俺だ」

「・・・」

「な！？アプトムお前まだそんなことをッ」

「黙っている、瀬川哲郎・・・だから、俺が殺しに行くまで勝手に死ぬな！後から俺も自己進化して必ずお前を追う。いいな！！」

「わかった、アプトム。それまでは」

「ああ、それまでは俺がこの世界を守ってやる。トレーニング代わりに」

晶は、”蛹”の前で仲間達との別れを済ませていた。

ドライな麻生や物騒な激励をするアプトムなんて例外も居たが、皆別れを惜んでいる。

だが、そこに瑞希の姿はなかった。

そして、彼女が現れるのを待たず晶とチエルシーは仲間達に見送られ”コチラ”を去っていった。

「……行っちゃった」

「さくさくして帰って、クソみたいな記事を書くとするか。『ガイバ―死亡』っていう」

「センパイ、俺も手伝います」

「当たり前だ！」

「麻生さん！」

「あ？」

「よろしく……よろしくお願いします」

「……」

麻生は、深々と頭を下げ血を吐くかのようにその言葉を紡ぐ哲郎に背を向け手をひらひらと振って返すのだった。

その後、様々な雑誌やネットである記事が投稿され話題を呼んだ。

「『ガイバ―？・深町晶、非殖装時に暴漢たちに襲われ犯人共々爆死。動機は怨恨か!?』つか……」

サングラスを着けた男が書店に並べられた雑誌を手にする。

「『先週木曜午前9時ごろ公園を買い物中の深町晶氏は、様々な国籍の複数の男女に組み付かれた後、彼らが所持していた複数の手榴弾により犯人諸共に爆死した。犯人たちは、一様に恨み言を洩らしていたと目撃者が証言。また、遺留品から彼らの身元を照会した所、皆クロノス統治時代にガイバーとクロノスの戦いに巻き込まれ縁者を失った事が判明。そのことから当時『異星人が送り込んだクリ―チャー』として発表、後にその正体をクロノスに暴露された深町氏への復讐と捜査当局は見ている』つか「んっんん!」?」

「ちよっとお客さん、じっくり読みたいなら買っていただかないと」

「ああ、すまん。じゃあ、コレをお貰おう」

「まいど」

男は、店員の注意に素直に従い代金を支払い、その雑誌を持って出て行った。

「2%の嘘と98%の真実……麻生のヤツ、うまくデッチ挙げたな」

男は道すがらそう呟き、もう用は済んだというように近くのゴミ箱に雑誌を放り捨てる。

その顔には、大きな傷があった。

新暦0071年 ミッドチルダ 臨海第8空港

現在その建物は、火災が起き崩落の危機に陥っている。
外部では、必死の消化及び救助活動が行われているものの、その手は彼女たちにはまだ届いてなかった。

「これではらくは持つと思います」

「ありがとう、でもあなたは？」

「私はスバ、妹を探しに行かないといけませんから」

「あつ待って!!」

少女は、女性たちの制止を聞かず走り出した。

一方、その当のスバルはというと……

「お父さん……お姉ちヒツ!？」

「……見られちまったか」

「か、怪物!!」

逸れた姉たちを求め、彷徨っていた彼女は、別のモノと遭遇してしまった。

その名は超獣化兵、ミノドリウスとその部下の獣化兵たち。

「俺はコレの輸送があるから先に行くが、お前らはソレを処分してからおつて来い」

「……………」

「ひう……た、助けて、お父さん！お姉ちゃん！！」
ボコッ

ミノドリウスの命令に無言で動き出す獣化兵たちは、スバルが逃げられないように囲む。

彼女の声に答えてくれる者は見当たらずその命も風前の灯となっていた。

だが、天はスバルを見捨てなかった。

ここからは、晶の聞き取る言語でお送りします。

今から少し前の地下数百メートルの出来事である。

そこに、彼等が漂着した。

「くっなんだここは？真暗で指一本動かせない！？その上圧力が強い……………もしかして、地中なのか？次元震に巻き込まれて座標がずれたけどえらい場所に出たな。まあ、マグマや太陽の中よりはましか」

晶は、ヘッドセンサーから辺りの様子を計測して現在位置を予想し、とりあえず身動きが取れるようにギガンティックを除装しガイバー？となる。

「チエルシー・・・チエルシー」

『・・・』

「やっぱり休眠状態か・・・一体今回はどれくらい眠っていることになるのやら」

『・・・』

「・・・とりあえず、この狭苦しい場所からでるか」

晶は、グラビティ・コントローラーを起動させ上に向かって掘り進んでいく。

そして、地上まで数十メートルという所で上の異常事態に気づいた。

「地中温度が上昇してきてる？・・・ッ上は火事か。それにこの反応は獣化兵！？」

ヘッドセンサーによって齎された情報からそう判断して、意識を戦闘へと移行する。

そして、晶は獣化兵が襲おうとしている普通の人とは違う反応のスバルの前に生えて来た。

少なくともスバルにはそう見えた。

「あk、あk l f m ; i ! ?」

「」

「もう一体！！」

「ッ」

晶は、まずスバルに一番近くに居た獣化兵を地面から出てきながら高周波ソードで両断。

振り向き様にヘッドビームで頭を焼き貫く。

「……………」

「大丈夫だった？」

「kじゃfぱkn」

「俺は、あいつらの仲間じゃないし、君を殺すつもりもないよ？」

「dk!！」

「参ったな、言葉が判らない。こんな時チエルシーが居てくれたら」

「じゃf:i、あjk:f!！」

今は眠っているパートナーならどうにか翻訳してくれるのになと思
いながらも、晶はなんとか意思を伝えようとするがスバルの様子か
らそれが伝わった様子がなく途方にくれる。

一方、スバルは怪物を瞬殺した別の怪物ガイバーに恐怖し、彼の意識が自
分から離れたことに気づき徐々に距離をおいて行く。

本来なら時間をかけて、誤解を解くべきなのだろうが、辺りの状
況がそれをするしてくれなかった。

スバルは、近くで起きた爆発の衝撃で軽く吹き飛ばされる。

また晶もその爆発音で彼女が自分から逃げようとして、先の爆発
で吹き飛ばされた事に気づいた。

そして、その爆発が最後の引き金だったのかエントランスにあっ
た大きな女神像がちょうどスバルが倒れている方に倒れ始めた。

「かfsl;jjツ!！」

「危ない!！」

スバルはその場に頭を抱え蹲ってしまいが、晶はそんな彼女を救

う事に間一髪成功した。

「……………？kあfッ」

「大丈夫だよ」

「……………」

「とりあえずここから脱出しようか」

「……………」

大きな音と共に女神像は倒れたが、痛みは一向に訪れず不思議に思ったスバルは顔を上げるとそこには晶の顔があつたためか暴れたもののさっきまで自分が居た場所に横たわる女神像と晶を交互に見た後、大人しくなった。

「どうやら、彼に敵意がないことにやっと気づいてくれたようだった。」

つづく

新たなステージへ その1（後書き）

前話のあとがきで投稿日を変えろといいましたが、面接時では4勤2休という話だったのですが、配属された先が5勤2休の場所だったので今まで通り投稿できるようになったので前回のあとがきでの変更を誠に勝手ながら撤回させていただきます。

新たなステージへ その2 (前書き)

久々の3連休という事で油断して、投稿が一日ずれてしまいました、すみません!!!

新たなステージへ その2

リリカルガイバー 第60話 新たなステージへ その2

ミノドリウスは、あるロストロギア死守を組織から命じられていた。

そのために、超獣化兵である彼と新型のヘルゼルグ3体、筋力増幅型2体、生体熱線砲装備型4体とかなりの戦力が派遣される。

だが、ミノドリウス以外はブロイズ（グレゴールの改良型で筋力増幅値は1.3倍と低いものの俊敏性が高く、防御力も銃弾を弾く程の高さをもつ）とグリーンメルス（両肩と両脇、合わせて六つのバイオプラスターを装備）、ヘルゼルグ1体以外は襲撃者に撃破され、その時の余波で臨海第8空港は火災に見舞われた。

たったの2人の襲撃者だったがその能力による奇襲で瞬く間に戦力を削られ、ミノドリウスは現場での防衛は火災と襲撃者たちにより困難と判断し撤退、その道中にスバルに見られその処分をヘルゼルグとブロイズに任せる。

そして、ロストロギアを移送中のミノドリウスたちは……

「にゅふふ、沈みな」

「う、うわああああ!？」

「グリーンメルスッ」

「ISランブルデトネイター」

「チィッ!！」

少女の声と共にグリーンメルスは、床に沈む。

その境目はなく、まるで始めからそうであったかのように床に頭頂部と腕を出した状態で腕がしばらくもがいていたがやがて動かなくなり、分解酵素による分解が始まる。

また、ミノドリウスも部下の心配をするほど余裕がなかった。

彼の目の前で金属のナイフを投げってくる隻眼の幼女。

彼女は、そのナイフをどういう原理か爆発させ攻撃してくる。

その攻撃を肩をリアクティブ・アーマーとして使用する事でミノドリウスは防げるものの油断すればその爆撃をまともに受けてしま
う。

「次は、お前の番だね」

「離せ！」

「うきやあ」

その隙を突いて地面から身体を生やしてミノドリウスの足にしがみ付いた少女は、グリーンメルスのように床の中に引き込もうとする。だが、彼のその見た目どおりのパワーに逆に床から引き抜かれ蹴り飛ばされる。

「無事か、セイン？」

「うう、どうにか無事だよチンク姉」

「全く、ヤツは超獣化兵なんだぞ？他の獣化兵のように簡単にはいかないとわかってたはずだろう？」

「うう」

何故か、セインと呼ばれた少女は自身より小さい幼女を「チンク姉」と呼びその彼女から苦言を言われ瓦礫の上で呻く。

『

「・・・了解だ、ウーノ。セイン！」

「了解！ISディーブダイバー」

「フン、また同じ手か。だが、いつまでもお前たちに構ってはおられんのだ！！」

ウーノと呼ばれ通信相手から何らかの情報もしくは指示を出された2人は動き出す。

だが、ミノダリウスもそう何度もいいようにされているはずもなく、チンクに肩を突き出し突進する。

それに対して、チンクはナイフを投げつけ爆破するが目晦ましにしかならなかった。

「ッ」

「ちいうまく避けたか」

「ぐううう」

ミノドリウスの体当たりは肩に随時充填される液体爆薬によってダイナマイト20本分に相当する威力を発揮する。

よって例え避けたとしてもその余波と破壊された壁の瓦礫によってチンクは、ダメージを負う。

「オ………」

「？」

「オーバーデトネーション!!」

「ぬおおおお!?!」

「今だ!」

「頂き!」

傷つきながらどうにか隙を作ったチンクによってミノダリウスは、セインに床の中に引きずり込まれ姿を消した。

そして、セインは床の中から彼が持っていた箱を手に出してきた。

「大丈夫、チンク姉」

「姉を甘く見るな。この程度でどうにかならるほどやわじゃない。」

「ヤツは？」

「地下20メートルぐらいに放置してきたから、大丈夫」

「そうか。お前はコレをドクターの所へ。私はこの場に現れたガイバーと接触する」

そう言っつてチンクは歩き出した。

sideスバル（の見聞きした）

スバルは、今晶に抱えられ時には壁を破り空港内を移動していた。意思の疎通が出来ないため彼女には、彼が何処に向かっているのか判らないが独りでいるより彼の近くにいる方が安全だということだけはわかるので差して抵抗もせずされるままに移動していた。

「カエター？」

「え・・・あの」

「。fjgg・・・」

「ごめんなさい、何言ってるかわからないです」

晶が心配する様子で話しかけるものそれが伝わらずスバルは困惑する。

そんな様子に彼が落胆したように感じるものの彼女にはどうする事できず、ただ伝わらない言葉で謝る事しかできなかつた。

そんな時だつた。

かなり近い所から大きな爆発音が聞こえ彼女は身をすくませてしませながら、晶から険しい気配を感じたのは。

「・・・」

「な、何？どうしたの？」

「jkはあ」

「え？」

「k1、ギガンティック!!!」

晶は、立ち止まりスバルを下ろし少し離れると虚空に向かって叫ぶ。

この時、初めて彼が口にした単語をしっかりと聞き取れた。

すると、彼の背後に大きな卵のようなものが現れ、その中から現れた何かに包まれ巨人となった彼の姿をスバルは目にした。

そして、彼女は理解した。

これと呼んだということ。

「.....ッ」

「え？うそ.....」

晶が、壁を見つめすごい音が聞こえたと思ったたらその壁が大きく丸く砂塵のよう崩れてく。

しかも、それは直線状の壁、全てに起こり火さえも消し飛ばしスバルの目に欠方ぶりの外を見せていた。

そして、晶は彼女の背を優しくその大きな手で押す。

「え？行けってこと」

「.....」

「あ、ありがと!!!」

スバルは、晶に手を振りながら走り出す。

彼も小さく振り替えしながら彼女を見送った。

スバルが外に出るのを確認すると晶は、さっきの爆発音が2度あった場所へと急いだ。

「あの反応は、超獣化兵だよな。でも、それと戦ってたのはいつた
いあの子と同じ反応だった」

晶はさっき得たヘッドセンサーの情報から超獣化兵を打ち倒した、
反応が気になっていた。

それは、スバルと同じ普通の人とは違う反応が2つで、それが妙
に気になる。

その反応の人たちと戦う可能性も捨てきれない以上、スバルを連
れて行く訳にも行かず彼女が安全に逃げられる脱出路を作り出す必
要があった。

そのため、すばやくかつ射線上に影響の少なくある程度制御の利
く『ギガ・ソニックバスター』を使用したのだ。

そして、先の爆発音が発生し、まるで晶を待っているかのように
反応があるその場に辿り着いた。

「俺を待ってる?・・・まさかね」

「いや、私はお前を待っていた」

「え・・・女の子?」

「ムッ」

晶に声を掛けてきたのはこの場には似合わないスバルより小さな
女の子であることとこちらに来て初めて日本語で話しかけられたこ
とに驚きを隠せないが、少女は彼が『小さな子』だという反応を見
せたことにコンプレックスを刺激されムスツとするが気を取り直し
て話し始めた。

「私は戦闘機人？5 チンク。そちらはガイバー？深町晶で間違いないか？」

「戦闘・・・機人？」

「どうなんだ？」

「あ、ああそうだけど、こっちも質問がいくつかあるけどとりあえず・・・この場にいた超獣化兵を倒したのは君？」

「いや、私と妹だの2人でだ」
「・・・」

予想は出来た事だが改めてチンクの容姿を見て改めて本人の口から言われるとやはり驚きを隠せない。

だが、のんびりとこの場で話しているわけには行かなかった。

「か d ; わ d d ! ? 」

「・・・魔導師が突入してきたか」

「あれ？・・・この声聞き覚えが」

「深町晶！私に聞きたい事が他にもあるのだろうか？だったら、ついて来い。ドクターがお前と話がしたいそうだ」

「ドクター？」

「。 sd じゃ」

「つべこべ言っていないで来るんだ。今、私たちが管理局に遭遇するのはまずい」

そう言って渋る晶を連れドクターと姉妹たちが待つアジトへと帰還するチンクだった。

そのすぐ後、要救助者を探し再突入した管理局の魔導師、フェイト・テストロツサがその場に辿り着く。

2人はタツチの差で6年ぶりの再会を逃すのだった。

つづく

セインの喋りが上手く書けませんでした。

あと、新型のヘルゼルグのことは、次話で以前のものとどう違うか書く予定です。

新たなステージへ その3

火災が鎮火しつつある現場の指揮車に駆け寄る少女がいた、スバルである。

「お父さん、お姉ちゃん!!」

「スバル!?!」

父、ゲンヤの近くでまだ見つからなかったスバルの安否を気にしていたギンガは、駆け寄ってくる彼女を安堵の笑みを浮かべ受け止めた。

「もうバカッ私たちがどれだけ心配したのかわかってるの!!!」

「ご、ごめんなさい・・・」

「・・・いいじゃねえか、ギンガ。こうして無事にまた会えたんだからよ、今はそれを喜ぼうぜ」

気を利かせ指揮の代行を申し出た副官のお蔭でゲンヤも少しの間、娘の無事を気兼ねなく喜べた。

そんな彼の言葉を聞いたギンガも今まで気丈にも堪えていただろう涙を流した。

リリカルガイバー 61話 新たなステージへ その3

「・・・それでスバルは今まで何処に居たんだ?救出されたっ

て報告がなかった所を見ると1人で避難出来たのか、えらいじゃねえか」

「……………」

「どうしたの、スバル？寒いの？」

「……………」

「八神一等陸尉が消火のために冰雪系の魔法を使ったからな、その影響か」

「ち……………」

「……？」

「違うのー!!」

「……？」

「わ、私は独りじゃ何も出来なかったの。ただ、泣きながらお姉ちゃんやお父さんを呼ぶばかりでそしたらッ」

「顔が真っ青よ、スバル！」

「怪物に見つかってこ、ころ、殺されそうにっ」

「大丈夫よ、ここにはスバルを傷つけようとする怪物なんていないわ、例えいても私やお父さんが守ってあげる」

スバルは、獣化兵に遭遇したときの恐怖を思い出したようで取り乱すが、ギンガが抱きしめそう囁くことでどうにかしゃべれるようになり続きを話し始めた。

「ありがと、お姉ちゃん……………それでね、もうダメって思った時、地面から生えてきたヒーローが助けてくれたの」

「じ、地面から生えてきた？」

「うん、竹の子みたいにこうズボツと生えてきて瞬く間に怪物たちを倒したんだ！」

スバルは憧れの人の事を話すように目をキラキラさせて話す。だが、ギンガにはその登場の仕方にやや困惑気味だった。

「それで、そのヒーローはどうしたんだ、スバル？俺からも娘を助けてもらった礼を言いたいんだが」

「あ……言葉が通じなかったからお互い何言ってるか分からなかったけど、悪い人じゃないってのはわかったから途中までは一緒だったんだ」

「ふむ、言葉が通じないか次元漂流者の可能性があるな」

「ちよつとお父さん！」

「あ、ああすまん、職業柄ついな。スバル続けてくれ」

「……それで私を守りながら脱出をしてただけど、近くから爆音を聞いたらあの人は雰囲気が変わって変身したの」

「変身？」

「うん、何かを呼んだみたいに叫んでたよ、『ギガンティック』って言ったのは聞き取れたよ」

「『ギガンティック』？」

「お父さん？」

「どっかで聞いた事があるんだが何処だったかな？」

「そうなの？だったら思い出したら教えてね！」

「ああ、分かったよスバル。それでその後は？」

「あ、うん、会った時よりも大きくなってまるで巨人でね、こう壁を睨みつけたら甲高い音が聞こえて外までの壁に穴が開いてそこから私を逃がしてくれたの。あの人は、そのままそこに残ったみたいだけ」

「それで？」

「あとは、そこから一番人がいるところに向かって走ってここに辿り着いたんだ」

「……」

「お父さん？」

「ギンガ、スバルをつれて今日は家で休め」

「う、うん」

「スバル」

「？」

「その穴の場所覚えてるか？」

「うん」

「だったら、明後日ぐらいにもう一度そこで今話したことを話して貰いてえんだが・・・出来るか？」

「うん」

「よしえらいぞ、スバル」

ゲンヤは、スバルの頭を乱暴に撫でた。

0071年 5月1日 臨海第8空港跡

スバル、ギンガ、ゲンヤ、はやて、フェイト、リインフォース？の計6人がその穴の場所に集まっていた。

「あ、あのテストロッサ執務官！」

「この前の子だね、妹さんが見つかったよかったね」

「はい、その節はありがとうございました。おかげで妹と無事再会できました」

ギンガが、恩人のフェイトにお礼を言っているシーンもあった。

「ナカジマ三佐、何故私達もこの場に呼ばれたのでしょうか？」

「八神一等陸尉とテストロッサ執務官は、獣化兵について詳しいと聞いたんでな、スバルの話に出てくる怪物がヤツらなのか現場と目撃証言を聞いて判断してもらいてえんだ」

「なるほど、了解しました」

そして、現場をその日辿ったように歩きながらスバルが説明をし

ていき、最後に晶が開けた穴の前で説明を終わえた。

「……………」

「どうしたんですか、はやてちゃん？」

「……兄ちゃんや」

「うん、間違いないよ、晶だよきつと……ねえ、そのヒーローってこんな姿じゃなかった？バルディッシュ」

【Yes, sir】

フェイトの指示にバルディッシュは、晶の、ガイバー？とギガンティックの姿を空中投影した。

「そう、この人だよ。間違いないです！」

「……そっか、晶が帰ってきたんだ」

「そうになると、この穴をどうやって開けたか簡単やな」

「うん、ソニックバスターだね。それだったら、壁の断面がこんなきれいなのも分かるし、この娘が聞いた甲高い音も説明がつく」

「それに、最初の現れ方もグラビティ・コントローラーで説明ができるわ」

「はやてちゃん、はやてちゃん！2人だけで納得しないで欲しいです。リインにも教えてください！！」

「ああ、そっかリインには、兄ちゃんの事写真でしか見せたことなかったもんな」

そして、はやては、晶の事を簡単に話していった。

「じゃあ、じゃあ私のお姉さんも帰ってきたってことですね！2人会うの楽しみです！！」

と、話を聞いたリインは喜ぶが、フェイトは残念そうだった。

「どうしたんや、フエイトちゃん？」

「・・・ちようどそのぐらいに私、この近くを要救助者がいないか探して通たんた、もう少し早く通れば晶と再会できたのに・・・」

「まあ、そう残念がらんでも兄ちゃんは間違いなくこのミッドチルダに今おるいうんがわかつたんや、今はそれが分かつただけでよしとしよ」

「うん」

2人は、そう言っているが蚊帳の外のゲンヤたちにはいまいち理解できなかつた。

なぜなら・・・

「あのよ・・・水を差すようで悪りけど、その深町晶つてのあの火災の中に残つてしかも救助されたつて報告もそんな3mぐらいの巨人が脱出したつて報告も受けてないぜ」

「そのことやったら殖装解いてしまえば普通の人やからな、兄ちゃんは目だたへんし、何よりあの程度の火事で兄ちゃんがどうにかなるなんてありえんわ」

「うん、だからきつとどこかに晶はいる」

2人は、自信満々にそう答えた。

後日、スバルの記憶を本人と保護者のゲンヤの了解を得て、その時の記憶を調査しガイバー？、深町晶はこの一件の重要参考人として搜索される事となる。

つづく

新たなステージへ その3（後書き）

ぎりぎりセーフです。

何とか、今日中に投稿できました。

それと、申し訳ありませんが新型ヘルゼルグの説明はまた後日へと延期します。

対談

臨海第8空港を密かに脱出したチンクたちは、下水を歩いていた。

「それで、チンクちゃん、何処に向かっているのかな？」

「ちゃん付けは、やめてもらいたい。チンクでいい」

「うん・・・じゃあ、チンクまだ、掛かるのかな？目的地まで」

「あと10分ほど歩けばつく」

「そこにドクターが？」

「いや、こちらから話したいと言ったが、用心のために直接お前とドクターを会わせる訳には行かない」

「・・・それで？」

「セーフハウスにある通信機ごしでの対話になる。ドクターは研究所に連れてくるように言ったのだが私の独断で変更した。気分を害してすまない」

「・・・そうでもないよ、チンクはそのドクターが大切だからそうしたんだろ？」

「・・・私たち姉妹はドクターに生み出されたからな・・・」

「・・・」

そう言ったチンクは、親を心配するただの少女だった。

少なくとも晶にはそう見えた。

「・・・」

「?どうして、急に殖装を解いたんだ？」

「いや、これまでは今一信用できなくて殖装したままだったけど、今のチンクを見てたら大丈夫かなって思ったから」

「・・・ふん、甘いやつだな」

「はは、”あっち”でもよく言われたよ」

そして、程なくしてセーフハウスである、マンションの一室に着いた。

リリカルガイバー 62話 対談

空中投影されたスクリーンごしに晶は、ドクターなる人物と対面していた。

「やあ、君に会えて光栄だよ、ガイバー？ 深町晶君。私はジェイル・スカリエッティ。職業は科学者兼広域次元犯罪者だよ」

「……………」

「あれ？ おかしいな、大抵、職業に何らかの反応があるのに」

「あのドクター……………」

「ああ、チンク。任務ご苦労だったね。体は大丈夫かな？」

「はい、損傷はありますが、自己修復で問題ないレベルです」

「そうかい、そうかい、でもあとで私のところに来なさい診察するから。それで何かあったのかい？」

「あ、はい。ドクターの事でしたら、道すがら話してしまったので、そのお」

「ああ、そういうことか。なら仕方ない」

スカリエッティは、晶の反応が想定より悪い事に納得する。

「それで、深町君、チンクが何処まで話したか判らないが君から何か聞きたいことはないかい？」

「なら、あなたにとって彼女たちはどういう存在ですか？」

「ふむ……………」

より私が抗おうとしている者たちが何をしているかその目で確かめてから返事をしてくれ。それまで、その部屋を自由に使ってもらって構わないよ』

スカリエッツィはそう提案した。

外出に制限や外部との連絡は禁止されているものの、ミッドチルダに来たばかりの晶には屋根のある住処が得られ幸先のいい第一歩だった。

そして、チンクの検査や準備などのため、4日が瞬く間に過ぎ、2人は次元空港を使って堂々と次元世界を渡り3日の旅路を経てここに辿り着いた。

「……本当にここまで何のお咎めもなく来られた」

「当たり前だ。ド、ドクトルの造った物に不良品はない」

考え深げに呟く晶に、思わずドクターと呼びかけたのをどうにか別のモノにして抑えたチンクが言う。

彼女はここはすでに敵地であるため、僅かな油断も迂闊な情報を洩らさないように注意している。

ことはチンクだけに留まらず、姉妹たちやドクターにも迷惑が掛かるとあれば彼女も慎重にならざる終えない。

「……それでこれはどこまで効果があるの？」

「お前の場合はセットアップをした後にはそれほど効果は発揮させられないと、ドクトルは言っていたよ」

晶への言い回しがおかしいのにはここが敵地だという事もあるが、彼が示した腕輪にも原因があった。

その腕輪の名は『ペルソナ』。

スカリエッツィが暗躍するために？2ドゥーエのISを参考に開

発した変装装置である。

これにより、外見に別の姿を投影しある程度の検査機器にも誤認させ、2人はこの場にいる。

そして、今の会話で『セットアップ』、『殖装』となり、ガイバーになっても効果が持続するのかという確認だった。

「つまり？」

「色を変えるぐらいで留めておくという事だ。変えすぎると矛盾が発生してそこから気づかれかねないからということらしい。私も能力制限をかけている」

「そっか……まあ、色が変わるならまだ良いか」

「……それは”幼馴染たち”への配慮か？」

「まあね、あの子たちにも危害が行く可能性があるから。でも、色が変わられるならその心配も少ないかな」

ここで言う『幼馴染たち』とはもちろんのはたちである。

そして、色とは装甲の色。

ガイバーの性能は殖装者によって変わり、装甲色もそれに含まれる。

このことは、なのはたちやリンディたちにも話しているので大丈夫だろうと昴は考えた。

そして、目の前の研究所を外部から遮断し、突入の時が来た。

「ガイバー!!!」

「ほう、黒か」

「うん、他のガイバーで一番印象深いから」

チンクの言うように姿はガイバー？だが、装甲色は黒となっていた。

「先にも言ったが、私にはお前と違って制限がかけられている。戦闘力はあまり期待するな」

「大丈夫」

チンクは、質量兵器であるただの金属製のナイフとショットガンを見せながら言ったが、晶は事も無げに言った。

「君は、ヴァーゴは俺が守るよ」

晶は、チンクのことをヴァーゴと呼んだがこれは暗躍時に使う準備期間の4日間に他の姉妹たちと考えたコードネームだった。

つづく

対談（後書き）

すっっっんません!!

また、ヘルゼルグのこと書けませんでした。

何時になるかまだ未定ですが、必ず出します。

既知との遭遇 前編

中央管制室、現在ここはこの施設始まって以来の騒ぎになっていた。

「外部との連絡が取れません！」

「出入口は、全てロックされています！」

「侵入者、自動防衛網を突破！」

「~~~~~ッ」

それらの報告を受け、この施設の所長 ニコル・タケウチはメイノンモニター内で今まさに質量兵器である、銃座の数々と傀儡兵たちを破壊し進んでいく侵入者たちを苦々しく睨みつける。

「奴らの素性はまだわからんのか!!！」

「目下、ライブラリーに照合していますが一致する者がいません！」

「ですが………」

「侵入者、警備班と接触！」

「ですが何だ!!！」

「一致はしませんでしたが、類似者がヒットしています」

「……それでいい、とりあえず見せる!!！」

「はい!!！」

そして、ニコルの前に映しだされたのは、6年前ロストログリア指定にされたが自身の世界に戻ったとされていた、ガイバー? 「深町晶」だった。

その資料を目にした彼の耳には、警備班が突破され第2自動迎撃網に突入したと報告が入ってくる。

「……人間ロストログアめ……ッ待てよ、おい”M37”と”M38”は出せるか？」

「は？」

「どうなんだ！？」

「は、はい、出せます。ですが、アレらはまだ未完成で敵味方の識別が……」

「自爆装置は取り付けてあるのだから？ だったら構わん出せ、現状アレ對抗出来るのは”M”だけだ」

「ですが……」

「それに、あれが深町晶だとするなら、上へ良い報告が出る、やれ」

「……私はどうなっても知りませんよ」

命令された男は、そう言ってシステムを立ち上げ始めた。

リリカルガイバー 63話 既知との遭遇 前編

通常締め出されるはずの晶たちは、逆に悠々と施設内に侵入できた。

おかげで、侵入路を造る必要もなく、正面から堂々と入っていった。

「……こんな堂々と侵入してよかつたのかな？」

「何処か問題あるか？ 現在この施設は外部と遮断され、我々はここを破壊に来た。我々の痕跡さえ残さなければ何処から侵入しよう」と

問題ではないだろ」

「いや、そうッ」

晶は、前方での動きを察知し迎撃に出る。

それはチンクも同じだ。

銃座を晶がヘッドビームで破壊する。

その一方で銃撃を彼女の固有武装、シエルコートで防ぎながら床から出てくる途中の傀儡兵へチンクがすばやく近づき頭部にシヨットガンを押し当てゼロ距離から発射、傀儡兵を破壊する。

このシヨットガン、スカリエッティの手が加えられ距離次第では傀儡兵のバリアを突破できるようだ。

だが、威力を重視した代わり連射は利かず、後から後へと現れる傀儡兵たちに徐々に対処が間に合わなくなってくる。

だが、その頃には全ての銃座の破壊が終わった晶も傀儡兵の迎撃に加わり難なく突破していく。

即席ながら、高い経験を持つチンクとの連携がうまく機能しているようだった。

そして、先に進みながらチンクが尋ねた。

「それで、さっき何を言おうとしたのだ？」

「え？ああ、『そうだけど、態々、相手に見つかるように行かなければもつとらしくに目的を達成できたんじゃないの？』って言おうとしたんだよ」

「だが、そうするとお前がこの連中の実態を見れないだろ？現に禁止されている質量兵器をこの奴等は普通に使っているのを見られたらだろが」

「・・・・・・・・」

チンクの言ったことは、全て事実であったため何も言い返せない晶。

「しかし、お前も本当に甘いな、自分たちを殺そうとする相手を昏倒させるだけで済ませるとは」

「……まだ、君らが言ってるような事を管理局が行ってるなんて分からないだろ？君らが偽の情報を与えてる可能性だってあるじゃないか」

「だったら、自分の目で確かめればいいさ、ここで何の研究が行われているか」

そう言ったチンクは歩を進め、晶もそれに続く。

それから3つ目の迎撃部隊と応戦していたときの事だった。

チンクはそう言って、自動ドアの前に立つ。

だが、開くよりも早く晶に突き飛ばされた。

「撃てッ撃って撃って撃ちまくれ！！あと少し時間を稼げばいいんだ！！」

「」

「ぎゃあ！？」

「ぐえ！」

部隊長の指示も空しく小銃程度では、ガイバーやシエルコートを突破することはできずどんどん戦線を引かざるおえなかった。

そして、ある部屋の前まで彼等が引いた時、轟音と共に横合いから彼らにピンクの奔流が襲った。

「」

「」

「なっ！？」

「奴ら、これを待っていたのか！？」

まだ抵抗を続けていた迎撃部隊はその一撃が止んだときには、全員跡形も無く消えていた。

そして、その奔流によって出来た穴から現れたのは、2つ人影だった。

一人は槍型のストレージデバイスを、もう一人は大剣型のストレージデバイスを持っていた。

2人に共通していることは、顔を大きなバイザーに覆われ顔を確認できず、ボディースーツの様なバリアジャケットから見て取れる女性的な膨らみや身体のラインから女性と判断できた。

だが、晶は別のことに驚愕した。

「なのはとフェイトなのか？」

「……………」

彼女らの足元に発言したミッド式の魔法陣や先の砲撃魔法の魔力光は、紛れも無く6年前に分かれた少女たちのものだったからだ。

晶の言葉には、答えずそれぞれが自身の得物を構える。

そして、槍型の、なのはと思われる女性（以降なのは？）がスフィアから誘導制御型の射撃魔法を放つと同時にフェイトと思われる女性（以降フェイト？）が斬り込んで来る。

「ッ」

「目を閉じるー!!」

「」

「こっちだ!」

チンクの声と共に辺りは、閃光に包まれた。

そして、晶は小さな手に引かれて何処かへと連れられて行く。

「閃光弾が役に立ったな。おい、もう目は大丈夫か？」

「あ、ああ、ありがとチじゃなくてヴァーゴ。それより、あの2人
つて!!」

「あれがこの施設での研究成果だ。彼女たちは、プロジェクトFに
よって生み出された人造魔導師をベースに改良を施されたMシリ
ズだ」
マリオネット

「マリオネット・・・つまり操り人形・・・」

「ああ、培養中に脳を弄り、感情、理性をそぎ落とし、与えられた
命令を遂行できる知能だけを与えられた魔導師を生み出す、それが
この施設の行っていることだ」

「でも、何であの子たちを!？」

「簡単なことだ。オリジナルたちは高い魔力資質を持っていたのだ
ろう? ならそれをベースに造れば当然、命令に忠実に逆らう事もな
く、魔力資質も高い優秀な魔導師が誕生する。それに、装甲色が違
うとはいえお前以外で過去事例の無いガイバーから、本人の偽装な
いし関係者ではないかと疑われたのではないか？」

晶が逃げながらチンクから話を聞いている最中もその後ろから、
目が回復し追撃してくるなのは? たち。

狭い通路の所為で彼らに追いつくことは出来ないが、オリジナル
のフェイトのフォトンランサーやディバインバスターに似た魔法を
放ってくる。

だが、フォトンランサーはシエルコートで、ディバインバスター
は曲がり角を頻繁に曲がる事で狙いを外させていった。

どちらも、その性質や威力をよく知る晶によってその力を発揮し
ていなかった。

つづく

既知との遭遇 前編（後書き）

この研究施設でゾアノイド戦があると思いましたが？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7431j/>

リリカルガイバー

2011年11月20日20時23分発行